



TITLE:

# シナ=チベット系諸言語の文法現象 1: 名詞句の構造

AUTHOR(S):

---

CITATION:

シナ=チベット系諸言語の文法現象1: 名詞句の構造. 2016: 1-184

ISSUE DATE:

2016-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/245177>

RIGHT:

# シナ＝チベット系諸言語の文法現象 1

## 名詞句の構造

Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 1  
The Structure of Noun Phrases

池田 巧 編  
IKEDA Takumi (ed.)

## はじめに

本論集は、チベット＝ビルマ系言語を中心に周辺諸語にも視野を広げ、各言語の名詞句について類型構造を記述分析した 11 の論考を収録している。名詞句を構成する文法構造の諸特徴と、言語間の異同を明らかにすることを目標として研究会を開催し、専門的な視点から分析と討論を重ねた。その成果を専門の異なる関連分野の研究者にも参照していただけるよう、日本語でわかりやすい叙述をするという方針のもとに編集したものである。

アジアの諸言語における名詞句の構造を明らかにした先行研究には、東南アジア諸言語研究会（編）『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』（慶應義塾大学言語文化研究所、2006 年）がある。東南アジア大陸部の 6 言語：ベトナム語、クメール語、タイ語、ラオ語、ビルマ語、ロンウォー語を対象とした記述分析を収録しており、この分野の基本文献として知られている。研究を進めるにあたっては、同書を随時参照するとともに、執筆者の澤田英夫さんにロンウォー語について、また岡野賢二さんにはビルマ口語について、同書での論考をもとに研究報告を行っていただいた。加えて同書の巻頭で名詞句の記述の指針として示された澤田英夫「名詞句構成要素の分類」を本論集にも再録し、読者の参照の便宜に供することとした。著者の澤田さんおよび東南アジア諸言語研究会の代表者である三上直光教授には記して謝意を表したい。

本論集に収める各論考について議論を行った研究会は、京都大学人文科学研究所（以下人文）の共同研究班「漢語と周辺諸語の類型構造論」（平成 23 年度～24 年度、班長：池田巧）による研究活動の一環として開催された。この研究会は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下 AA 研）の共同研究プロジェクト「チベット＝ビルマ系言語からみた文法現象の再構築 (1)：格の体系とその周辺」（平成 19 年度～20 年度、主査：澤田英夫）および「チベット＝ビルマ系言語からみた文法現象の再構築 (2)：文の特徴付けと下位分類」（平成 21 年度～22 年度、主査：澤田英夫）を継承したものである。

人文に拠点を移してからは、「TB+（プラス）研究会」と称して研究対象をやや拡張し、チベット＝ビルマ諸語を中心としながらも、周辺のシナ＝チベット系の諸言語にも範囲を広げて比較対照を行った。分析にあたっては、AA 研の共同研究プロジェクトの精神を引継ぎ、類型構造の表面的な整理や類似の指摘に止まることなく、個別言語の内部構造の多様なメカニズムを深く観察して精密に記述することを目指した。研究会は今後もテーマごとに古代漢語から現代諸方言を含むシナ＝チベット系諸言語の類型構造の分析を進め、表層の多様性と動態、基層の痕跡と継承、構造とメカニズム、その歴史的発展の方向性などを掘り下げて行きたいと考えている。

AA研の共同研究プロジェクトの成果は、澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2010 年 3 月）および澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2013 年 3 月）として刊行されている。本論集も同シリーズの第 3 冊目として編集したが，研究対象の範囲を拡張したことにともない，シリーズの書名を本冊より『シナ＝チベット系諸言語の文法現象』と改め，ミャオ＝ヤオ系のショオ語についての論考も収録した。

なお中西裕樹さんの論考「ショオ語の所有者表現」は，研究会での報告の後，さきに刊行された東方學研究論集刊行会（編）『東方學研究論集』日英文分冊，臨川書店，2014 年．164-180 頁に掲載したものを，本研究会における成果の集成という観点から，著者本人の承諾を得て少し体裁を改めたうえで本書にも再録したものである。

\*本論集は，京都大学人文科学研究所共同研究班「漢語と周辺諸語の類型構造論」（平成 23 年度～ 24 年度，班長：池田巧）および科学研究費補助金：基盤研究 (A) 23242019「羌系諸語の歴史と西夏語の位置づけに関する実証的研究」（平成 23 年度～ 27 年度，代表者：池田巧）の成果報告の一部である。



## 目 次

はじめに.....	i
目次.....	iii
名詞句構成要素の分類.....	澤田 英夫 1
アムド・チベット語の名詞句構造.....	海老原志穂 3
カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における 名詞句の構造.....	鈴木 博之 15
ダバ語の名詞句と修飾構造.....	白井 聡子 27
ムニャ語の名詞句.....	池田 巧 37
西夏語の名詞句構造について.....	荒川慎太郎 57
チノ語悠楽方言の名詞句構造とその周辺.....	林 範彦 73
ポー・カレン語の名詞句.....	加藤 昌彦 95
メチェ語の名詞句構造の概要.....	桐生 和幸 113
セケ語の名詞句構造と名詞化.....	本田伊早夫 131
キナウル語の名詞句構造と修飾構造.....	高橋 慶治 155
ショオ語の所有者表現.....	中西 裕樹 171
執筆者一覧.....	185

# 名詞句構成要素の分類

澤田 英夫

本書に含まれる各論文では、主名詞の前後に置かれ主名詞とともに名詞句を形成する要素を、次の6つに分類する。

## グループ1：複数表現

名詞句の表す対象が複数であることを表示する形態素。この形態素を伴う主要部名詞を持つ名詞句は、複数個体を指示する。具体的な数量には言及しない。

## グループ2：量化表現

1. 名詞句の表す対象の具体的な数量を特定する数詞を含む表現：日本語の「1つの」「2つの」「約200の」「何十もの」などに当たるもの。
2. 名詞句の表す対象の、数量の範囲（多少、全体の中の割合など）を表す表現：「多くの」「わずかな」「全ての」「ほとんどの」「いくつかの」などに当たるもの。

本論集では、1.として日本語の「1冊の」「2冊の」および疑問の「何冊の？」に、2.として「ある」「全ての」「ほとんどの」「数冊の」「わずかな」「たくさんの」に対応する各言語の形式を取り扱う。

## グループ3：所有者表現

典型的には、名詞句の表す対象の持ち主を表す表現。（名詞句の主名詞が動詞から派生した出来事名詞である場合はその出来事の主体を表すが、本書では割愛。）

1. 人称の区別を担うもの：日本語の「私（たち）の」「あなた（たち）の」「彼（女）（ら）の」および「誰の」「誰かの」などに当たるもの。
2. 固有名を含むもの：日本語の「××先生の」「ウー＝マウンマウンの」などに当たるもの。
3. 特定の名詞句を含むもの：日本語の「彼の弟の」「あの先生の」などに当たるもの。
4. 特定性の低い名詞句を含むもの：日本語の「バンコク市民の」などに当たるもの。

名詞（句）と、主名詞に対する関係を表示する、いわゆる「属格」の形態素の組み合わせによって作られることが多い。

本論集では、日本語の「私の」「あなたの」「彼の」「彼女の」「母の」「その金持ちの」などに対応する各言語の形式を取り扱う。

#### グループ 4：指示表現

名詞句の表す対象の、話し手・聞き手に対する位置関係や遠近の度合を表したり、聞き手に選択肢の中からの選択を求めたりする表現：日本語の「こ（れら）の」「そ（れら）の」「あ（れら）の」；「どの」「どちらの」に当たるもの。

具体物を指示する「直示的」用法と、文脈中に現れた名詞句を指示する「照応的」用法がある。

本論集では、日本語の「こ（れら）の」「そ（れら）の」「あ（れら）の」「どの」「誰の」などに対応する各言語の形式を取り扱う。

#### グループ 5：名詞的修飾表現

主名詞を修飾する表現のうち、名詞句そのもの、あるいは、名詞句＋主名詞に対する関係を表示する形態素の組み合わせからなるもの。

#### グループ 6：動詞的修飾表現

主名詞を修飾する表現のうち、動詞そのもの、あるいは、動詞（句）＋主名詞に対する関係を表示する形態素の組み合わせからなるもの。後者の典型例は「名詞修飾節」である。

修飾表現のどれがグループ 5 に属し、どれがグループ 6 に属するかは、言語依存的なものである。日本語の例を挙げる。

**グループ 5：**「外国の」「ラオ語の」「言語学の」「子供向けの」「ベトナム人の」「医者  
者の」（「医者である」という意味において）「ぼろぼろの」「金持ちの」

**グループ 6：**日本語の「分厚い」「大きい」「高価な」「古い」「難しい」「背の高い」「古い」「親しい」「親切的な」「良い」「悪い」「昨日買った」「父がくれた」「机の上にある」「まだ読んでいない」「昨日会った」「一緒に住んでいる」「しばらく会っていない」などに当たるもの。

本論集では、グループ 5 の例として、日本語の「外国の」「××語の」（言語名）「言語学の」「子供向けの」（以上、主名詞が無生物「本」の場合）；「××人の」（民族・国家名）「医者」（＝医者である）（以上、主名詞が有生物「友人」の場合）などに対応する各言語の形式を取り扱う。

また、グループ 6 の例としては、「分厚い」「大きい」「高価な」「古い」「ぼろぼろの」「難しい」「昨日買った」「父がくれた」「机の上にある」「まだ読んでいない」（主名詞が「本」の場合）；「背の高い」「古い」「裕福な」「親しい」「親切的な」「良い」「悪い」「昨日会った」「一緒に住んでいる」「しばらく会っていない」（主名詞が「友人」の場合）などに対応する各言語の形式を取り扱う。

# アムド・チベット語の名詞句構造\*

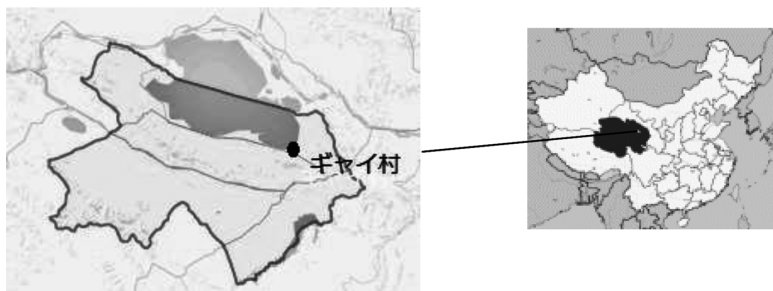
海老原 志穂

## はじめに

本稿では、アムド・チベット語の名詞句の構造の概略を述べる。§1 では、まずアムド・チベット語の話されている地域や話者人口、本稿で扱うデータの詳細を述べ、典型的な特徴をまとめる。§2 では品詞分類の概略を示し、名詞の定義について触れる。§3 では本題である、名詞句の内部構造について述べ、§4 でまとめと考察を行う。

## 1. アムド・チベット語の概要

アムド・チベット語は、中国の青海省（玉樹チベット族自治州を除く）、甘粛省の南部と北部、四川省北部で話されるチベット系の言語である。話者数はデータによって異なり、80 万人から 113 万人程度と推定されている。アムド・チベット語は地域による方言の差異以外に、牧畜民、農民、半農半牧民という生業による方言差も見られる。本稿で扱うデータは、主に、青海省海南チベット族自治州共和県ギャイ村（青海湖南部の牧畜民の村、地図 1 を参照）のコンサルタントの発話をもとにしている。一部、共和県ヨンロン村（海南チベット族自治州の州庁・共和県の県庁所在地であるチャプチャ鎮に近い村）のデータも参考にしている<sup>1</sup>。



地図 1 青海省（右）と共和県のギャイ村（左）

\* アムド・チベット語のコンサルタントであるギャイ・ジャブ氏（青海師範大学教授）には、海老原（2010）の執筆にご協力いただき、さらに、2013 年 12 月に行った名詞句に関する聞き取り調査におつきあいいただいた。ヨンロン村出身のコンサルタントであるロチ・ギャンツォ氏にも海老原（2008）の執筆にあたって全面的にご協力いただいた。忍耐強く筆者の質問に答えてくださった両氏にはこの場をかりてお礼を述べたい。

<sup>1</sup> 海老原（2008）の記述をもとにしている。

アムド・チベット語の類型特徴についても触れておく。音韻的には無声調で、子音連続が多いことを特徴とする。語順は他動詞文は AOV，自動詞文は SV を基本語順とする。形容詞による名詞修飾は，NA 語順をとる。格体系は，能格・絶対格型で，能格の分裂現象はみられない。

## 2. アムド・チベット語の名詞とその他の品詞

アムド・チベット語の自立語は名詞類（名詞，代名詞，形容詞，数詞），の他，動詞，副詞，感嘆詞に分類することができる。名詞類はいずれも格標示をとり，動詞の項やコピュラ動詞の補語になることができる。形容詞の多くは，状態動詞に接辞付加するか，重複するかして形成される（例えば， $t\phi o^h\eta$ 「小さい」という状態動詞に対応する形容詞は， $t\phi o^h\eta + t\phi o^h\eta$  と  $t\phi o^h\eta - \eta a$  である）。

## 3. 名詞句の構造

アムド・チベット語の名詞句構造に関する先行研究には，青海省天峻県で話されるテムチェン方言の文法書である Haller（2004: 61–62）の記述がある。この研究では，名詞句を並列句，同格句，拡張句に分類し，比較的単純な例を提示しており，本稿で扱おうとしている名詞節による修飾の構造や，修飾要素の順番については詳しくはふれていない。

ギャイ方言のデータによると，アムド・チベット語の主名詞は前後から各名詞修飾要素の修飾を受け，主名詞（HN）と各名詞修飾要素の相対的な位置関係は以下の図 1 のように示すことができる。格助詞は名詞句の一番最後に現れる。AC は名詞修飾節，PRON は代名詞，N は修飾要素となる名詞を表す。ADJ は形容詞，NUM は数詞，DEM は指示詞，INDF は不定マーカ，CM は格標示を表す。指示詞と不定マーカは共起不可能であるため，同じスロットにあると考えられる。ちなみに，これらの要素が全て現れた名詞句は見つかっていない。特に AC はどちらかの位置でしか現れないようである。

AC	PRON	N	HN	ADJ	NUM	AC	DEM INDF	CM
----	------	---	----	-----	-----	----	-------------	----

図 1 アムド・チベット語の名詞句構造

以下の 3.1. から 3.6. では各名詞修飾要素について説明を行い，3.7. では名詞修飾要素の語順と意味の違いについて述べる。

### 3.1. 名詞、代名詞による修飾

名詞、代名詞が修飾要素となる場合は、いずれも必ず主名詞の前に置かれる。名詞、代名詞ともに属格形をとる。名詞と代名詞が同じ主名詞の修飾要素となる場合には、「代名詞 名詞」の語順となる（例は (5)）。

- (1)     $\eta\theta$                       wola  
          1SG.GEN          チベット服  
          私のチベット服
- (2)    wojək=kə                      ts<sup>h</sup>əkmdzol  
          チベット文字 =GEN          辞書  
          チベット語の辞書
- (3)     $\eta\theta$                       wənək=kə wola  
          1SG.GEN          妻 =GEN          チベット服  
          うちの妻のチベット服
- (4)    hta=ta          ŋontɕ<sup>h</sup>at=zək=ne          wəl=e  
          馬 =TOP          以前 =INDF=ABL          出る .PF=CONJ  
          [nɔ̌kkwa=kə    hkaŋlak=kə    k<sup>h</sup>ama]    rɛ.  
          牧畜民 =GEN          手足 =GEN          代わり          COP  
          馬は以前から牧畜民の手足の代わりです
- (5)    k<sup>h</sup>ərgə                      t<sup>h</sup>ojot<sup>h</sup>a=kə          hlaŋk<sup>h</sup>or  
          3SG.GEN          トヨタ =GEN          車  
          彼のトヨタの車

### 3.2. 形容詞による修飾

形容詞は通常は名詞を後ろから修飾する。

- (6)    ɸsən    tɕ<sup>h</sup>oŋŋa  
          兄弟    小さい  
          年下の兄弟

複数の形容詞が同じ名詞を修飾する場合、それらの形容詞間には特に順番の制限はないそうである<sup>2</sup>。ただし、名詞に近い位置に置かれる形容詞ほど、意味的に

<sup>2</sup> ヨンロン村の話者の発話では、形容詞が複数現れる場合、形容詞の語順は、(i) のように、その形容詞の意味的なカテゴリーによって決まっている。

(i) 主名詞（色）（大きさ）（その他の様態）

強調されるのだという。

(7) 生きている小さい鹿

- a     $\zeta a$      $t\zeta^h o\eta t\zeta^h o\eta$      $s^h o n b o = z\acute{o}k$   
       鹿    小さい        生きている =INDF  
       (「小さい」が意味的に強調されている)
- b     $\zeta a$      $s^h o n b o$          $t\zeta^h o\eta t\zeta^h o\eta = z\acute{o}k$   
       鹿    生きている    小さい =INDF  
       (「生きている」が意味的に強調されている)

(8) 白くて小さいきれいな花

- a     $metok$      $karo$      $t\zeta^h o\eta t\zeta^h o\eta$      $jokkwa$   
       花        白い    小さい        きれい  
       (「白い」が意味的に強調されている)
- b     $metok$      $t\zeta^h o\eta t\zeta^h o\eta$      $karo$      $jokkwa$   
       花        小さい        白い        きれい  
       (「小さい」が意味的に強調されている)
- c     $metok$      $jokkwa$      $t\zeta^h o\eta t\zeta^h o\eta$      $karo$   
       花        きれい    小さい        白い  
       (「きれい」が意味的に強調されている)

### 3.3. 数詞

数詞は主名詞の後ろに置かれる。数詞は、数詞の語幹だけの形と名詞化接辞をつけた形がある。名詞化接辞をつけた形で主名詞を修飾するとその数が集合全体の数であることを明示する意味をもち、数詞の語幹だけで修飾するとそれを明示しない。

- (9) a     $hta$      $hs\acute{o}m$   
       馬    3  
       3頭の馬
- b     $hta$      $hs\acute{o}m-bo$   
       馬    3-NMLZ  
       3頭の馬 (3頭が全体の数であることを明示)

- (10) a   hta   naknak   h̥i   ta   dzək=ko=no  
           馬   黒い       2   今   走る=AUX=NMLZ  
           今走っている2頭の黒い馬

- b   hta   naknak   h̥i-ka       ta   dzək=ko=no  
           馬   黒い       2-NMLZ       今   走る=AUX=NMLZ  
           今走っている2頭の黒い馬（2頭が全体の数であることを明示）

助数詞的に用いられる名詞や度量衡の単位が数詞の前の位置に現れることがある（例は(11)）。

- (11) [ɲasʰe   nəməkɔŋ   goŋmo=o   m̥an   ɲakʰa   hsəm]   blaŋ=taŋ.  
       早朝       昼               夜=DAT   薬       種類   3       取る.PF=AUX  
       早朝，昼，晩の3種類の薬をもらいました

### 3.4. 指示詞，不定を表すマーカーによる修飾

指示詞（近称 *ndə*，中称 *tə*，遠称 *ka*）と不定を表すマーカー（=*zək*）はともに名詞の後ろに現れる。形容詞が名詞を修飾している場合は，これらは形容詞の後ろに現れる。指示詞と不定を表すマーカーは共起しない。

- (12) ɕatʰo       tə  
       帽子       それ  
       その帽子

- (13) koŋɣə   hmaro   ka  
       服       赤い       あれ  
       あの赤い服

- (14) ɕa   tsʰonbo=zək  
       肉   太った=INDF  
       脂ののった肉

### 3.5. 名詞節による修飾

アムド・チベット語には関係節専用のマーカーはない。節で主名詞を修飾するには，名詞節を主名詞に後置または前置させる。名詞節は名詞化助詞によって形成される。その名詞化助詞は表1に示す4種類がある。名詞化助詞のうち，=*no*，=*nu*のみは動詞の未完了形（IPF）と完了形（PF）のいずれにも後続できる。その他の名詞化助詞は未完了形のみにも後続する。各名詞化助詞の絶対格形と属格形



を表 1 に示す。

名詞化助詞	意味
IPF/PF=no (ABS), =nu (GEN)	～する / したこと, ～する / した者, ～する / した物
IPF-jo/-co (ABS), -ju/-cu (GEN)	～すること
IPF-hcakko (ABS), -hcakku (GEN)	～する道具, ～する手段
IPF-s <sup>h</sup> a, -s <sup>h</sup> o (ABS), -s <sup>h</sup> u (GEN)	～する場所

表 1 名詞化助詞

名詞修飾節としては, =no が最も広く使われる。=no 節が名詞修飾となる時は, 主名詞に前置される場合と後置される場合の両方がある。=no 節がそれほど長くない場合は, 一般的に, 「名詞修飾節 主名詞」の語順が好まれる。=no 節が前置される場合には, =no の属格形である =nu という形で現れることもある。属格を用いるほうがより規範的とされるが, 自然発話では絶対格で現れることのほうが多いようである。

(15) 名詞修飾の =no 節と主名詞の位置

- a. [V=no/=nu] 主名詞
- b. 主名詞 [V=no]

(16) お茶を飲む人

- a. [tɕa nt<sup>h</sup>oŋ = nu / = no] mnə  
茶 飲む =NMLZ.GEN/=NMLZ.ABS 人
- b. mnə [tɕa nt<sup>h</sup>oŋ = no]  
人 茶 飲む =NMLZ

その他の 3 種類の名詞化節は主名詞に前置される語順のみで, 後置されない。

- (17) [ç<sup>h</sup>ək<sup>h</sup>a = a njo-hcakku p<sup>h</sup>eo]  
 キュカ =DAT 行く .IPF-NMLZ.GEN チケット .Ch.  
 ni = e zak jol = a?  
 買う .PF=CONJ 置く .PF いる / ある =SFP  
 キュカに行く切符は買っておきましたか？

- (18) [hlokkhət ptsoŋ-s<sup>h</sup>u ts<sup>h</sup>oŋk<sup>h</sup>aŋ] ə-jo?  
 コード 売る -NMLZ.GEN 店 Q- いる / ある  
 コードを売っているお店はありますか？

- (19) k<sup>h</sup>ərgɛ hter-ju gormo  
 3SG.DAT 与える .IPF-NMLZ.GEN お金  
 彼にあげるお金

### 3.5.1. 名詞化助詞 =no

表 1 に提示した名詞化助詞のうち、名詞修飾に最もよく使われる =no の機能を説明する。その他の名詞化助詞と同様、=no も単独で名詞節をつくる。=no は動詞の未完了形、完了形に後続して「～する / したこと、～する / した者、～する / した物」という意味の名詞節をつくる。例 (20)–(22) のように、主名詞がなくても文中で名詞項として出現可能である。

- (20) [go=no] ə-jo?  
 必要である =NMLZ Q- いる / ある  
 要る人はいますか？

- (21) [ŋɛ xetɕ<sup>h</sup>a ɕən=no] k<sup>h</sup>ərgɛ rɛ.  
 1SG.ERG 本 与える .PF=NMLZ 3SG COP  
 私が本をあげる / あげた人は彼だ

- (22) amdo=o joŋ=no t<sup>h</sup>ok+t<sup>h</sup>oŋwo jən=na?  
 アムド=DAT 来る =NMLZ 初めて COP=SFP  
 アムドに来たのは初めてですか？

=no が動詞の未完了形に後続するか、完了形に後続するかで動作の主体を表すのか、対象を表すのかが異なる場合がある。

- (23) sa=no  
 食べる .IPF=NMLZ  
 食べる人、食べた人

- (24) se=no  
 食べる .PF=NMLZ  
 食べる物、食べた物

以下では、=no を用いた名詞修飾節を内の関係と外の関係から考察する。

### 3.5.2. =no 節による内の関係の名詞修飾節

名詞修飾節は、被修飾名詞が、修飾節の中の述語に対して主語、補語などにあたるような格関係をもつか否かという点で2つに分けることができる。被修飾名詞が修飾節の中の述語に対して格関係をもつものを「内の関係」という。アムド・チベット語では、Keenan & Comrie (1977) の名詞句階層「主語>直接目的語>間接目的語>斜格目的語>所有格句>比較の対象」における、「比較の対象」以外では、名詞節による修飾が可能である。

#### 【主語】

- (25) k<sup>h</sup>ərgɛ      xɛtɕ<sup>h</sup>a      hter = nu      mɲə  
 3SG.DAT      本      与える .IPF=NMLZ.GEN      人  
 彼に本をあげる / あげた人

#### 【直接目的語】

- (26) k<sup>h</sup>ərgɛ      htɕar = nu      mɲə  
 3SG.ERG      叩く =NMLZ.GEN      人  
 彼が叩く / 叩いた人

#### 【間接目的語】

- (27) ŋɛ      xɛtɕ<sup>h</sup>a      ɕən = nu      mɲə  
 1SG.ERG      本      与える .PF=NMLZ.GEN      人  
 私が本をあげる / あげた人

#### 【斜格目的語】

- (28) ɕat<sup>h</sup>o      ptsoŋ-s<sup>h</sup>u      ts<sup>h</sup>oŋk<sup>h</sup>aŋ  
 帽子      売る -NMLZ.GEN      店  
 帽子を売るお店

#### 【所有格句】

- (29) hoŋwo      tɕ<sup>h</sup>e = nu      mɲə  
 体      大きい =NMLZ.GEN      人  
 体の大きい人

### 3.5.3. =no 節による外の関係の名詞修飾節

被修飾名詞と修飾節の中の述語との間に格関係がないものを「外の関係」という。内容補充修飾節による修飾や付随名詞修飾節による修飾の例がみられた。

- (30) [ak<sup>hə</sup>      ʎas<sup>hə</sup>a = a      njo-ju      rjəmts<sup>hə</sup>an]  
 おじさん      ラサ=DAT      行く .IPF=NMLZ.GEN      理由  
 ŋe      ko = wa.  
 1SG.ERG      聞く=AUX  
 おじさんがラサに行く理由を私は聞いた

- (31) hlappa      tɕe-ʂa      njo = nu      xetɕ<sup>hə</sup>a  
 脳      もっと - よい      行く .IPF=NMLZ.GEN      本  
 頭がよくなる本

- (32) [ɕa      ʂek = nu      [ima]      ɕəm = gə.  
 肉      焼く=NMLZ.GEN      におい      おいしい=AUX  
 肉を焼くにおいがおいしそう

- (33) ts<sup>hə</sup>o      mə-nbət = nu      sama  
 肥満      NEG- 出る .IPF=NMLZ.GEN      食べ物  
 太らない食べ物

### 3.6. 格助詞, 副助詞

格助詞や副助詞は名詞句の一番外側に現れる。

- (34) [m̥anba      ʒan = zək=ka]      ɕtan = ne,      m̥an      blaŋ = ne.  
 医者      他=INDF=DAT      見せる .PF=CONJ      薬      取る .PF=AUX  
 他の医者に見せて薬をもらいました

### 3.7. 修飾要素の順番と意味の違い

主名詞の前における修飾要素は、名詞節, 代名詞, 名詞がある。この3つの要素の語順は、「名詞節 代名詞 名詞」のみが許容される。

- (35) ŋe      k<sup>hə</sup>ahtsaŋ      hkor = nu      k<sup>hə</sup>ərgə  
 1SG.ERG      昨日      運転する=NMLZ.GEN      3SG.GEN  
 t<sup>hə</sup>ojot<sup>hə</sup>a = kə      hlaŋŋk<sup>hə</sup>or  
 トヨタ=GEN      車  
 私が昨日運転した彼のトヨタの車

- (36) tɕoktse tʰok=na jo=nu kʰərgə  
 机 上=LOC ある=NMLZ.GEN 3SG.GEN  
 ŋanŋak=kə xetɕʰa  
 詩=GEN 本

机の上にある彼の詩の本（「詩の」が意味的に強調されている）

ちなみに、これらの例の中の名詞節を主名詞に後置させることも可能であるが、その場合は意味が異なるという。

- (37) kʰərgə ŋanŋak=kə xetɕʰa  
 3SG.GEN 詩=GEN 本  
 tɕoktse tʰok=na jo=no  
 机 上=LOC ある NMLZ.GEN

机の上にある彼の詩の本（「机の上にある」が意味的に強調されている）

#### 4. まとめと考察

本稿では、アムド・チベット語における名詞句の基本的な構造が図2のようになることを示した。このうち、名詞修飾節（AC）は、主名詞の前に置かれる場合と後ろに置かれる場合があるが、置かれる場所により、意味が異なることも示した。

AC.GEN/ABS	PRON.GEN	N.GEN	HN	ADJ	NUM	AC	DEM INDF	CM
------------	----------	-------	----	-----	-----	----	-------------	----

図2 アムド・チベット語の名詞句構造（図1に追記した）

ただし、ヨンロン村の話者の発話では、一般的ではないようだが、「指示詞（DEM）主名詞（HN）」、「形容詞（ADJ）主名詞（HN）」の語順もみられた。

主要部内在型（白井 1999）の名詞句については本文では触れてこなかったが、これまでの調査ではアムド・チベット語にはみつかっていない。

## 略号

–	Affix boundary	DEM	Demonstrative
=	Clitic boundary	ERG	Ergative
+	Compound boundary	GEN	Genitive
1	First person	INDF	Indefinite marker
2	Second person	IPF	Imperfective
3	Third person	LOC	Locative
ABL	Ablative	NEG	Negative
ABS	Absolutive	NMLZ	Nominalizer
AC	Adnominal clause	PF	Perfective
ADJ	Adjective	PL	Plural
AUX	Auxiliary verb	Q	Question
Ch	Chinese	SFP	Sentence-final particle
CONJ	Conjunction	SG	Singular
COP	Copula	TOP	Topicalizer
DAT	Dative		

## 参考文献

- 海老原志穂. 2008. 「青海省共和県のチベット語アムド方言」 東京大学大学院人文社会系研究科, 博士論文.
- 海老原志穂. 2010. 『アムド・チベット語の発音と会話』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Haller, Felix. 2004. *Dialekt und Erzählungen von Themchen: Sprachwissenschaftliche Beschreibung eines Nomadendialektes aus Nord-Amdo*. Bonn, VGH Wissenschaftsverlag.
- Keenan, Edward L. & Bernard Comrie. 1977. Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 8. pp. 63–99.
- 白井聡子. 1999. 「現代チベット語の名詞修飾構造」『言語研究』Vol. 116. pp. 59–95.



# カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における 名詞句の構造

鈴木 博之

## 丹巴県のカムチベット語

カムチベット語は、チベット語分布地域の東部を占める地域で話される言語で、下位方言区分が多岐にわたり、方言差異の大きい言語として知られる<sup>1</sup>。その方言の多様性は、川西走廊諸語と呼ばれる非チベット語の分布地域と重なる部分もあって、複雑な様相を呈している。

四川省甘孜 [dKar-mdzes]<sup>2</sup> 藏族自治州東部の丹巴 [Rong-brag]<sup>3</sup> 県は、チベットの伝統的地域区分では「ギャロン [rGyal-rong]」に含まれる地域で、四土ギャロン語、ゲシツァ語、カムチベット語、アムドチベット語、そして漢語（西南官話四川方言の土地の変種）が話される。このうち本稿で扱うカムチベット語は県南東部で話され、またカムチベット語の中で独立した下位区分を形成する方言である（Suzuki 2008, 2009: 17）。当地では「二十四村<sup>4</sup>話（二十四村方言）」という名称で通っている。徐君（2001）によると、章谷 [Rong-brag] 鎮、中路 [sPro-s nang] 郷、水子 [Rwa-tso] 郷、岳扎郷、梭坡 [Sog-pho] 郷、格宗 [dGu-rdzong] 郷などで話されており<sup>5</sup>、話者数は30000人弱である。二十四村方言は大渡河 [rGyal-mo rNgul-chu] を基準として東西の下位方言に分けられる<sup>6</sup>。このカムチベット語分布地域は、言語分布の観点から見て、東側に四土ギャロン語、北側及び西側にゲシツァ語、南側にグイチョン語それぞれの分布地域と接しており、チベット語方言としては孤立した言語島を形成しているように見える。

本稿で扱う言語資料<sup>7</sup>は梭坡郷で話される Sogpho 方言で、漢語の質問文を口頭で翻訳した形式と自然発話に現れる形式の2種類である。音表記は付録2の音体系に記述されるものによる。

<sup>1</sup> カムチベット語の方言分類の全体像は、Suzuki (2009: 17) が川西民族走廊（四川省および雲南省）の範囲内の見解を提示している。その後数々の修正を加えたが、丹巴県の方言についての見解は今なお有効である。

<sup>2</sup> チベットの地名など固有名詞で語源が分かっているものには、[ ] 内にチベット文語形式（藏文）を添える。

<sup>3</sup> 正式名称は *Rong-mi Brag-go* である。

<sup>4</sup> この名称は、明清時代に行われた土司制度の行政区分で24か村で通用していたということに基づいて名づけられたという。

<sup>5</sup> 次頁の2枚の地図を参照。

<sup>6</sup> 二十四村方言のうち、筆者は章谷鎮、中路郷、梭坡郷、格宗郷の各方言を調査した。各方言の対照研究に鈴木 (2007) と Suzuki (2008) がある。

<sup>7</sup> 筆者の調査協力者は肖松英さん（女性）で、梭坡郷莫洛 [Bo-lo] 村の出身である。





図 1 中国西南部における梭坡郷の位置



図 2 丹巴県中心部における Rongbrag 方言群の分布

\* 2 枚の地図は Geocoding (<http://ktgis.net/gcode/index.php>) を用いて作成した。

語順は動詞（句）が文末にくるのを基本とする。発話によってはそうでない場合もある。また、名詞句内の修飾構造は修飾語が被修飾語に後置されるのを基本とするが、特定の接辞を用いて前置される場合も認められる。この場合、修飾句は主部内在型という形をとりうることもある。

## 1. 名詞句の構成要素

ここでは名詞句の構成要素とその形態論について記述する。  
名詞句を構成する要素には、次のようなものがあげられる。

- |        |              |
|--------|--------------|
| 1. 名詞  | 5. 数詞 / 数量表現 |
| 2. 代名詞 | 6. 形容詞       |
| 3. 指示詞 | 7. 名詞化接辞     |
| 4. 類別詞 | 8. 格標識       |

以上のうち、名詞、代名詞、名詞化接辞を伴う名詞句が一般的に中心語になることができる。これらの要素について、形態論的特徴と名詞句内での役割をそれぞれ見ていく。

### 1.1. 名詞

名詞を形態的に定義することは困難である。以下のような形態が認められる。

- 1 音節語  
`nā 「天」, `mi 「火」, `sʰo 「土」, ʔgu 「頭」, mə 「人」, ʔpʰaʔ 「ぶた」
- 2 音節語（2 音節語幹または複合語）  
ʔtsʰa ɕ 「温泉」, ʔluʔ pʰō 「体」, ʔtɕʰuʰ ʰpu 「あごひげ」, ʔdzɯ mə 「腸」, ʔpo ma 「チベット人」, ʔrə mō 「うさぎ」
- 2 音節語（1 音節語幹＋接尾辞）  
`ni mo 「太陽」, ʰkeʔ po 「腰」, ʔpʰaʔ mo 「母ぶた」
- 2 音節語（接頭辞＋1 音節語幹）  
ʔa mji 「祖父」, ʔa ʰko 「兄」, ʔa zō 「母方のおじ」
- 3 音節以上の語  
ʔa ʰpo ʔo ma 「しわ」, ʔa tʰa tʰa 「蜘蛛」, ʔoʔ ma tse 「蟻」

名詞は名詞句の中心語を構成し、文や節においてさまざまな格標示を受けることによって文中の役割を果たすものを名詞句にとらえ、主部になることができるものといえる。

## 1.2. 代名詞

代名詞は人称代名詞と指示代名詞に分かれる。疑問詞のうち、代名詞と同じふるまいをするものも含まれる。

人称代名詞の単数については、格標識が後続するときに音形式が変化する。また、1, 2 人称能格の場合は格標識 /gə/ は用いず、1 音節形式となる。整理すると以下ようになる（鈴木 2010）。

格	格標識	1 人称	2 人称	3 人称
絶対格	無標	ʼŋə / ʼŋo	ʼtʰaʔ / ʼtʰaʔ	ʼti:
属格	ce	ʼŋ ce	ʼtʰiʔ ce / ʼtʰiʔ ce	ʼtə ce
能格	gə	ʼŋeʔ	ʼtʰeʔ	ʼtə gə
その他	lə (/ de / nə / sʰo)	ʼŋə lə	ʼtʰa lə	ʼtə lə

表 1 人称代名詞単数の格変化

代名詞が中心語になる場合、格標識を除く他の要素は同一の名詞句内に現れない。

## 1.3. 指示詞

指示詞には /nə/（近称）と /ti:/（遠称）が認められる。

指示詞は中心語の前後に現れ、単独では名詞句を構成できない。/nə/ は中心語に先行することが多く、（遠称）は逆に中心語に後続することが多い。文法的に語順が決まっているわけではないようである。

## 1.4. 類別詞

類別詞は度量衡の単位を表すものがほとんどである。単独では名詞句を構成できない。

## 1.5. 数詞 / 数量表現

数詞はすべての基数、および特定の数量表現が含まれる。

## 1.6. 形容詞

形容詞も名詞と同じく、形態的に定義することは困難である。以下のような形態が認められる。

### 1. 1 音節語

ʼtʰa 「大きい」、ʼtʰi 「小さい」、ʼtʰu 「高い」、ʼtʰü 「短い」、ʼne 「よい」

### 2. 2 音節語（2 音節語幹または重複）

ʼta ʰceʔ 「中間の」、ʼko ʰko 「丸い」、ʼsʰəʔ ʰsʰəʔ 「平たい」、ʼkʰa tsʰi 「からい」

## 3. 2 音節語（1 音節語幹＋接尾辞）

ˈtō bo 「からの」、ˈma pu 「赤い」、ˈŋã bu 「緑の」、ˈsʰa po 「新しい」

## 4. 3 音節以上の語

ˈŋã bu ˈnã bu 「青い」、ˈdaʔ gu ro wo 「急ぎの」、ˈtɕʰeʔ pə ˈka su 「まあまあの」  
名詞句に現れる形容詞は修飾用法で用いられる。詳細は3節の修飾構造を参照。

## 1.7. 名詞化接辞

名詞化接辞は動詞または形容詞に付加されることによって、名詞と同様の統語機能が与えられる。よって、名詞句の中心語になれる。ただしそのふるまいは名詞とは異なる。一方で修飾語にもなることができる。この点の詳細は2節の名詞句の内部構造を参照。

頻繁に見出される名詞化標識には /ma, mwə/, /zu/, /sʰo/ がある。/ma, mwə/ は基本的に「人」「事物」「道具」を表し、/zu/ は「事物」を表し、/sʰo/ は「道具」「場所」を表す。形容詞の名詞化は「事物」を表す場合は接尾辞 /re: mə/ を、「人」を表す場合は接尾辞 /mə/ 用いる。

名詞化前	名詞化後
ˈnã 「読む」	ˈnã-ma 「読む人」
ˈso 「食べる」	ˈso-zu 「食べもの」
ˈse ˈso 「ごはんを食べる」	ˈse ˈso-sʰo 「箸」
ˈtɕʰɿ ˈtʰō 「水をくむ」	ˈtɕʰɿ tʰō-sʰo 「井戸」
ˈka: pu 「白い」	ˈka: pu-re: mə 「白いもの」
ˈtɕa: 「大きい」	ˈtɕa:-mə 「大きい人」

表2 主要名詞化接辞一覧

動詞の名詞化について、判断動詞と存在動詞は名詞化しえない<sup>8</sup>。動詞語幹に TAM 標識が付加された状態では名詞化接辞が後続できない。

## 1.8. 格標識

名詞句は基本的に文の構造に従って格標示が行われる。格体系と格標識の形態に基づく一覧は以下ようになる（鈴木 2010）。

音声形態をもたない格に絶対格 (ABS) と場所、時間などを示す場合の位格 (Loc) がある。後者については語釈に反映されないが、理論的には位格におかれていると理解できる。格標識は名詞句の文中での役割を反映するものであるから、厳密には名詞句を構成する要素であるとはいえない<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 形容詞用の名詞化接辞 /re: mə/ の第1要素は藏文 *red* と関連するかもしれないが、Sogpho 方言では *red* は判断動詞として用いられない。鈴木（2013）参照。

<sup>9</sup> それゆえ、格標識を伴う句を「格句」と呼ぶなどの観点もある。

形式	SAP 標示	非 SAP 標示
ce		属格
gə / ɣə	能格	具格
lə / la / lo	与格	位格, 与格
de		奪格
nə / nɔ̃		内格
s <sup>h</sup> o		所格
無標 (φ)	絶対格	

表 3 格標識一覧

呼びかけなどの場合、名詞だけで成立する 1 語文が認められる。呼格は文法上の格標識に含まれず、また音形式を伴う格標示は行われないため、便宜的に絶対格で現れていると解釈するが、語釈に反映されない。

### 1.9. そのほか

主題標識 /da/ は厳密には名詞句の内部構成要素ではないが、各名詞句の格標示に後続する位置に置かれる。このため、名詞句と密接にかかわっているといえる。

## 2. 名詞句の内部構造

ここでは、名詞が中心語の場合と名詞化標識を伴う句が中心語の場合に分けて記述する。代名詞が中心語の場合は名詞化標識を伴う句と同様のふるまいを見せる。

### 2.1. 名詞が中心語の場合

名詞が中心語である場合の名詞句内部の要素の配列は次のようになる。

(指示詞)-(修飾句)-名詞-(形容詞)-(数量詞)-(数詞)-(指示詞)-格標識

最も単純な名詞句は、音形として名詞のみからなり、絶対格もしくは位格に置かれている（音形なしの格）場合である。以下、/p<sup>h</sup>aʔ/「ぶた」を中心語とする例をあげる。

(1) a ʔp<sup>h</sup>aʔ-φ  
ぶた -ABS  
ぶた

b ʔp<sup>h</sup>aʔ ʔnə-φ  
ぶた これ -ABS  
このぶた

c ʔti: ʔp<sup>h</sup>aʔ-φ  
あれ ぶた -ABS  
あのぶた

d ʔp<sup>h</sup>aʔ ʔ<sup>φ</sup>tɕw-φ  
ぶた 10-ABS  
10 匹のぶた

e ˈpʰaʔ ˈka: pu ˈdə ʒi-φ  
 ぶた 白い 1 (QTF)-ABS  
 1 匹の白いぶた

## 2.2. 名詞化標識を伴う句が中心語の場合

名詞化標識を伴う句が中心語である場合の名詞句の構造は、以下のように単純である。

名詞化標識つき名詞句 - 格標識

このうち、名詞化標識つき名詞句の内部については動詞句の構成に準じ、名詞化標識は動詞語幹に直接後続する。名詞化標識を用いて名詞化された句は、それ自体名詞と同様に機能するとき、名詞と同様に格標識による標示が求められる。

(2) ˈtɕɔ̃-ʒu-φ ˈjoʔ loʔ  
 着る -NML-ABS EXV  
 着るものがあります。

(3) ˈse-φ -də ˈso-ʒu-φ ˈji̯ ɳɔ̃  
 ごはん -ABS-TOP 食べる -NML-ABS CPV  
 ごはんとは食べるものです。

(4) ˈka ˈpu-ˈre: mə-φ -də ˈmjɛ̃ xwa ˈɳɔ̃  
 白い -NML-ABS-TOP 綿花 CPV  
 白いのは綿花です。

名詞化接辞は行為者 (A) を含む動詞句を名詞化することができない (2.1 参照)。そのため、行為者 (A) が能格で現れている場合は、行為者は名詞化対象の動詞句に含まれていないと解釈する。

(5) ˈtɕə lo-ɣə ˈtɕə wə-φ ˈzi̯-ʒu-φ ˈji̯ ɳɔ̃  
 猫 -ERG ねずみ -ABS 捕まえる -NML-ABS CPV  
 a. 猫とはねずみを捕まえるもの [動物] です。  
 b. ねずみを捕まえるのは猫が [やること] です。

### 3. 修飾構造

修飾構造については、一般の修飾表現と所有表現に分けて記述する。

#### 3.1. 修飾表現

形容詞によって修飾句を形成する場合は、被修飾名詞（句）に形容詞が後続する形で現れる。また、文脈が明示的である場合は被修飾名詞（句）は省略可能である。

- (6)    ʼtõ-ce       luʔ p<sup>h</sup>õ    <sup>h</sup>ka pu-de    ʼnã bu-φ-γə    \_nõ  
          パンダ -GEN   体           白い -ABL       黒い -ABS-TOP       少ない  
          パンダの体は白より黒の方が少ないです。

この例では、形容詞「黒い」の被修飾名詞句は「パンダの体」であるが、それが音形式として現れていないと解釈する。

疑問詞「どんな」が名詞を修飾する場合、疑問詞は前置される。

- (7)    ʼtɕ<sup>h</sup>aʔ    ʰtɕi    lu-φ    ʃi  
          2.ABS    何           年 -ABS       CPV  
          あなたは（干支は）何年ですか？

名詞化接辞によって修飾句を形成する場合は、被修飾名詞（句）を外部から修飾せず、主部内在型の構造をとる。この場合の名詞化には特別の接辞 /ŋwo/ が用いられ、これ以外の用法をもたないことから、形容詞化接辞とも呼べるだろう。この接辞を用いて動詞句を名詞化する場合、動詞句の構造にもまた変更が加わり、名詞化対象の句の行為者 (A) は能格ではなく属格で現れる。

- (8)    ʼŋeʔ    ʼtə-ce    ʃi yi-φ    ʼtə-ŋwo-φ    ʼŋo ʃ<sup>h</sup>i:  
          1.ERG    3-GEN    字 -ABS       書く -NML-ABS       識別できる  
          私は彼の書いた字を識別できます。

この例では、動詞 /ʼŋo ʃ<sup>h</sup>i:/「識別できる」の行為者 (A) が /ʼŋeʔ/「私」、被動者 (P) が /ʃi yi/「字」を文の基本構造とし、P に /ʼtə-gə ʼtə/「彼が書く」という要素を接辞 /-ŋwo/ によって「形容詞化」して埋め込んでいるといえる。

ただし非修飾対象の名詞（句）に修飾句を後置する例もある。名詞化の用例は非常に少ない。それが Sogpho 方言を特徴づける要素であるのかもしれないが、調査が不十分であるということは否めない。

### 3.2. 所有表現

所有表現は属格を用いて表現する。所有者に属格を配し，所有物に前置して表す。所有以外にも所属，属性などの関係を表す場合にも同様の構造が用いられる。

- (9)    ʼŋ ce    `ja:  
          1.GEN   ヤク  
          私のヤク

- (10)   ʰta sʰi-ce    ʼtʰõ cwo  
          PSN-GEN       クラスメート  
          タシのクラスメート

- (11)   ʼtu-ce        ʼsʰa ŋã  
          小麦 -GEN   種  
          小麦の種

### 略号

語釈に用いる略号は以下のようなものである。ただし，形態素の意味がよく分かっていないものには語形をそのまま提示している。

1 .....	1 人称	EXV .....	存在動詞
2 .....	2 人称	GEN .....	属格
3 .....	3 人称	NML .....	名詞化標識
ABS .....	絶対格	PSN .....	人名
CPV .....	判断動詞	QTF .....	量詞
ERG .....	能格	TOP .....	主題標識

また，複数の略号が1つの語形に重なるとき，. で区切って示す（たとえば 1.ERG など）。



## 付録：Sogpho 方言の音体系

概要を以下に示す。詳細は鈴木（2005）を参照。

### 声調

声調は語単位でかかる。

ˊ：高平      ˋ：上昇      ˆ：上昇下降  
 ˋ：低平      ˋ：下降

### 母音

以下の各母音につき、長 / 短，鼻母音 / 非鼻母音の対立がある。

ɿ i                      ʊ u  
          e                      ɵ ə                      o  
          ɛ                      ɔ  
          a                      ɑ

### 子音

子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧を示す。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t̪ <sup>h</sup>	c <sup>h</sup>	k <sup>h</sup>	
	無気	p	t	t̪	c	k	ʔ
	有声	b	d	d̪	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>		tɕ <sup>h</sup>		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>	ʃ <sup>h</sup>	ç <sup>h</sup>	x <sup>h</sup>	
	無気	ɸ	s	ʃ	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʝ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

子音連続のパターンとして、主だったものに前鼻音，前気音，初頭両唇閉鎖音などがある。

## 参考文献

- 鈴木博之. 2005. 「チベット語丹巴・梭坡 [Sogpho] 方言の音声分析」『ニダバ』第 34 号. 96–104.
- . 2007. 「カムチベット語方言の多様性から見る丹巴県チベット語の方言特徴」『人文知の新たな総合に向けて』第 5 回報告書下巻. 231–249.
- . 2010. 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）の格体系」澤田英夫編『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』95–108, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- . 2013. 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における文の下位分類」澤田英夫編『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』139–150, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Suzuki, Hiroyuki. 2008. *Historical position of Danba Tibetan among Khams Tibetan dialects*, paper presented at the Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan (Taipei) [in: *Pre-workshop Proceedings* 419–439].
- . 2009. “Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography – a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan –”. In: Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet – New Perspective towards Historical Methodology* (No. 16102001) Report Vol. 3, 15–34, National Museum of Ethnology.
- . 2011. “Dialectal particularities of Sogpho Tibetan – An introduction to the “Twenty-four villages’ patois” –”. In Mark Turin & Bettina Zeisler (eds.) *Himalayan Languages and Linguistics: Studies in Phonology, Semantics, Morphology and Syntax*, 55–73, Brill.
- 徐君. 2001. 〈梭坡藏族田野考察報告〉郎維偉・艾建主編《大渡河上游丹巴藏族民間文化考察報告》27–59, 成都：四川省民族研究所.

## 付記

筆者による Sogpho 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- ・平成 16–20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（S）「チベット文化圏における言語基層の解明」（研究代表者：長野泰彦，課題番号 16102001）
- ・平成 19–21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- ・平成 21–22 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦，課題番号 21251007）
- ・平成 25–26 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（B）「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」（研究代表者：鈴木博之，課題番号 25770167）



# ダバ語の名詞句と修飾構造

白井 聡子

## 0. はじめに

本稿では、ダバ語（中国四川省：チアン語支）の名詞句構造を記述する。まず、第0節でダバ語の概要および基本構造を概説する。第1節では、名詞句の構造を述べる。第2節では、名詞修飾構造について、形容詞句による修飾、節による修飾、名詞による修飾の3つに分けて述べる。第3節でまとめる。

### 0.1. ダバ語について

ダバ語は、中国四川省西部、カンゼ・チベット族自治州（甘孜藏族自治州）の道孚県南部から雅江県北部にかけての地域で話されている（地図1）。話者数についての統計はないが、Huang (1990), Gong (2007) などの記述から、約8000人と推定される。言語系統としてはシナ＝チベット語族チベット＝ビルマ語派チアン語支に属すると考えられる。大きく北部方言群と南部方言に分かれる。

本稿で記述対象とするのは、北部方言群に属するメト方言である。仲尼郷麻中村で話される方言で、村の人口は約260人である。



地図1 ダバ語の話される地域

### 0.2. ダバ語の基本構造

ダバ語の基本構成素順はSOVで、3項動詞の場合は、S IO DO Vとなる。後置

詞型である。接辞については接頭辞と接尾辞の両方があるが、接頭辞は種類が限られている。

文法関係は名詞に後置される格助詞によって表示される。格表示パターンは主格対格型で、主格はゼロ表示である。主な格助詞としては、=wu (対与格: ACC), =ji (受益格: BEN), =la (与位格: DAT), =kʌtʌ (具格: INS), =nʌ (共格: COM), =ntsha (比格: COMP), =rʌ (属格: GEN) などがある (白井 2010)。

述語の構造は、名詞述語型と動詞述語型に大きく分かれる (白井 2013)。名詞述語文には、コピュラないし文末小辞が用いられる。動詞述語文では、助動詞が動詞に後置されうる。動詞語幹には、方向接頭辞、否定接頭辞、アスペクト接尾辞などが付加されうる。

他の多くのチベット=ビルマ系言語と同様、ダバ語にも文末助詞 (SFP) がある。主なものとして、=re (陳述), =a/=ra (疑問), =me/=me (真偽疑問), =sa (驚嘆), =te (伝聞), =pa (推量), =mo (確認), =ɣʌ (申し出) などがある。

### 0.3. 先行研究

ダバ語の名詞句を中心的に扱った先行研究はない。名詞修飾節については、拙著 (Shirai 2013b) に記述がある。文法構造に関する先行研究としては、次のようなものがある。Huang (1990, 1991) は、北部方言群の一つであるダト方言の文法概説である。Gong (2007) は、南部方言の文法書である。また、メト方言の文法を扱った一連の拙著 (Shirai 2006a, 2006b, 2010, 2013a など) がある。

## 1. 名詞句の構造

名詞句は、動詞の項になることができ、また、格助詞の前に立つことができる。

名詞句内部においては、名詞を修飾する形容詞は原則として主要部名詞の後に置かれ (N A), 限定詞は前置される (Det N)。数詞と類別詞がこの順で名詞句末尾に置かれる (N Num Ncl)。さらに、名詞句の末尾に、属格標識と同じ助詞 rʌ が置かれることがある。この rʌ は、あとの名詞を修飾するのではなく、名詞句がそこで終わることを示す。すなわち、名詞句の内部構造は (1) のようになる。

- (1) 指示詞 主要部名詞 (形容詞) 数詞 類別詞 助詞 rʌ [+格表示]

具体的な例を (2), (3) に挙げる。(2) では、主要部名詞 tɔŋdɔ3 「コップ」の前に指示詞が、後ろに数詞、類別詞、助詞 =rʌ がそれぞれ現れる。この名詞句 (ɲoro1 tɔŋdɔ3 sei=tɕu=rʌ1 「あの三つのコップ」) がコピュラ文の主語になっていることから、類別詞 =tɕu の後に現れる助詞 =rʌ が属格ではなく名詞句の末尾を表示

していることが確認できる。コピュラ文は主語に主格名詞句（ゼロ表示）を取るからである。(3)は形容詞を含む名詞句の例で、主要部名詞 *khembo3* 「かばん」の前に指示詞が、後に形容詞と類別詞が、それぞれ現れている。このように数詞を伴わずに類別詞が用いられると、数量が一であることを表す。

- (2) *ɲoro1 tɔndɔ3 sei = tɕɤ = rɒ1 ɲje = rɒ3 wa3.*  
 あれ コップ 三 =NCL=GEN 1PL=GEN COP<sub>1</sub>  
 あの三つのコップは、私たちのだ (指示詞 名詞 形容詞 助詞 *rɒ*)

- (3) *ɲoro1 khembo3 tɕitɕi = jil*  
 あれ かばん 大きい .RDP=NCL  
 あの (一つの) 大きいかばん (指示詞 名詞 形容詞 類別詞)

## 2. 修飾構造

### 2.1. 形容詞句による修飾

前節で述べたとおり、名詞を修飾する形容詞は、主要部名詞の後に置かれる。このような名詞句内の形容詞は、副詞による拡張を受けて形容詞句になることが可能である。(4)では、主要部名詞 *ndɔ3* の後に、副詞を含む形容詞句 *maɥhimba3 hɕuɥɕu3* 「非常に良い」が置かれ、その後に類別詞が付加されている。

- (4) *ɲore = la1 ndɔ3 maɥhimba3 hɕuɥɕu3 = tɕɤ3 to-po-a1 re3.*  
 3PL=DAT 馬 非常に よい .RDP=NCL NTL- ある -B.PFV SFP  
 彼らは、非常によい馬を一頭持っていた。

なお、ダバ語の形容詞には、重複形と非重複形（単純形）があり、名詞句内に現れうるのは重複形式のみである。形容詞の重複は名詞化であり、形容詞重複形は(5)に示すように動詞の項になることもできる。一方、単純形は動詞接辞の付加が可能であるなど動詞的特徴を持つほか、比較文に用いられる (Shirai 2014)。

- (5) *ɲane3 no = wu3 hɕuɥɕu3 mɤ = ndu2.*  
 1DU 2SG=ACC よい .RDP 作る = できる  
 私たちはあなたにいいことをしてあげられますよ。

このことを踏まえて、再度、名詞を修飾する形容詞句の構造を考えると、次のようになる。(4)を例に取ると、副詞 *maɥhimba3* 「非常に」が形容詞 *hɕu3* 「よい」

を修飾し、その形容詞句 (ma<sup>h</sup>imba<sup>3</sup> fi<sup>u</sup>3) が重複によって名詞化された上で、名詞句内に置かれると考えるのが妥当である。すなわち、(1) の名詞句構造のうち「主要部名詞 (形容詞)」の部分は、(6) のように拡張可能である。

(6) 主要部名詞 [[ 形容詞句 ] 重複]

## 2.2. 節による修飾

この節では、名詞化された節による名詞修飾構造を扱う。このような名詞修飾節 (Adnominal Clause; AC) は、広義の関係節であると捉えることもできる。

AC を形成する名詞化標識は、節の末尾に付加される。AC は主要部名詞の前に置くことができるが、主要部名詞が明示的に現れない AC や、節の中に主要部名詞が現れる AC、つまり、主部内在型関係節に相当する形式も見られる。すなわち、ここで扱う名詞修飾構造は、次の 3 つのパターンに整理できる。

- (7) a. [[ 節 ] 名詞化標識] 主要部名詞  
 b. [[ 節 ] 名詞化標識]  
 c. [[ 主要部名詞を含む節 ] 名詞化標識]

### 2.2.1. 名詞修飾節を形成する接尾辞

生産的に AC を形成する名詞化標識として、いくつかの接尾辞がある。人および行為者を表す AC を作る -pi (例 (8), (14)), 物および対象を表す AC を作る -ma (例 (9), (10), (13)), 場所を表す AC を作る -hti (例 (11), (12)) などである。

これらの接尾辞によって形成される AC と主要部名詞の文法関係を、Keenan and Comrie (1977) の accessibility hierarchy に照らして整理すると、次のようになる。「関係節化」できるのは、主語 (8), 直接目的語 (9), 間接目的語 (10), 斜格目的語 (着点 (11), 場所 (12), 道具 (13), 随伴者 (14)) である。所有者および比較の対象を主部とする名詞修飾節は作れない。

- (8) ŋoro<sup>1</sup> peji<sup>3</sup>      hts<sup>Λ</sup>-pi<sup>3</sup>      fi<sup>ge</sup>fi<sup>ge</sup><sup>3</sup>      ŋoro<sup>1</sup> re<sup>3</sup>.  
 あれ    チベット文    教える -NMLZ    教師      3SG    COP<sub>4</sub>  
 チベット語を教えているあの先生は、彼だ。
- (9) tsheri   a-mə-ma<sup>Λ</sup>=ra<sup>3</sup>      lei<sup>3</sup>    ʈa<sup>çi</sup><sup>3</sup>    ki-ttsi=hce-a<sup>1</sup>.  
 PSN    DWN- 作る -NMLZ=GEN    包子    PN    INW- 食べる =PST-B.PFV  
 ツェリが作った包子は、タシが食べた。
- (10) ŋa<sup>1</sup> lei<sup>3</sup> t<sup>Λ</sup>-htsi-ma<sup>Λ</sup>=ra<sup>1</sup>      pa<sup>fi</sup>ʈa<sup>3</sup>    ŋoro<sup>1</sup> re<sup>3</sup>.  
 1SG   包子   NTL- 食べさせる -NMLZ=GEN    子供      3SG    COP<sub>4</sub>  
 私が包子をやった子供は、彼だ。

- (11)  $nje$   $\Delta$ -ji-hti2                      satsa3 seitha3  $re3$ .  
 1PL UP-行く -NMLZ    場所    PN                      COP<sub>4</sub>  
 私たちが行った場所は、セータだ。
- (12)  $nal$  hteime3  $m\theta$ -hti3                      satsa3    jala3pinguã= $k\Delta$ 1  $re3$ .  
 1SG 結婚                      作る -NMLZ    場所    ヤラ・ホテル=IN                      COP<sub>4</sub>  
 私たちが結婚式をした場所は、ヤラ・ホテルだ。
- (13)  $\eta$ oro1  $ve3$                        $ki$ -ttsi- $m\Delta$ = $r\Delta$ 1                       $nhazi3$   $koro1$   $re3$ .  
 3SG    ツァンパ粉    INW-食べる -NMLZ=GEN    匙                      これ                      COP<sub>4</sub>  
 彼がツァンパ粉を食べ（るのに使っ）た匙は、これだ。
- (14)  $nje1$   $fido1$  seitha3     $\Delta$ -ji-pi= $r\Delta$ 2                       $co3$      $\eta$ oro1  $re3$ .  
 1PL    一緒    PN                      UP-行く -NMLZ=GEN    友達    3SG                      COP<sub>4</sub>  
 私たちが一緒にセータに行った友達は、彼だ。

## 2.2.2. 主要部が明示的に現れない AC

主要部なしの AC もしばしば見られる。この背景には、前節で述べたように、名詞化接尾辞の機能が分かれているということがある。たとえば、(15)では、「包子を食べた」を意味する節が、人を表す接尾辞  $-pi$  によって名詞化されているため、主要部名詞（たとえば、 $swi1$ 「人」）がなくても、「包子を食べた人」を表すことができる。(16)は、(11)から主要部名詞  $satsa3$ 「場所」を削除した例である。このような主要部なしの AC では、名詞化標識（(15)では  $-pi$ 、(16)では  $-hti$ ）が形式上の主要部となっている。

- (15)  $lei3$   $ki$ -ttsi- $pi2$                        $\eta$ oro1  $re3$ .  
 包子 INW-食べる -NMLZ    3SG                      COP<sub>4</sub>  
 包子を食べた人は、彼だ。
- (16)  $nje1$   $\Delta$ -ji-hti2                      seitha3  $re3$ .  
 1PL UP-行く -NMLZ    PLN                      COP<sub>4</sub>  
 私たちが行った所は、セータだ。

次の例では、名詞語幹  $\eta\Delta$ 「日」が小辞化されて、AC の名詞化標識の位置に現れていると考えられる。前節の (8)～(14) の例では、いったん接尾辞によって名詞化された AC の後に主要部名詞が現れるが、(17)では接尾辞がなく、節が直接  $=\eta\Delta$  と結びついている。ただし、この類例は少なく、今後の検討が必要である。



- (17)  $\eta\text{orone}1$   $\text{hteime}3$   $\text{m}\theta=\eta\Lambda1$   $\text{a-fid}\theta\text{fid}\theta3$   $\text{hce-a}4$   $\text{re}3$ .  
 3DL 結婚 作る=日 DWN- 喧嘩 PST-RT  $\text{COP}_4$   
 彼らは、結婚式した日に喧嘩した。

### 2.2.3. 主部内在型名詞修飾節

ダパ語には、主部内在型名詞修飾節が見られる。これまでに見つかっている例を見る限り、意味上の主要部となるのは、名詞化された節内の動詞の直接目的語である。たとえば、(18)では、名詞化された節  $\eta\text{oro}1$   $\text{lei}3$   $\text{ki-ttsi}$  ( $-\text{m}\Lambda=\text{r}\Lambda$ )1「彼が包子を食べた（もの／こと）」が、主節の動詞  $\text{t}\Lambda\text{-htsi}1$ 「食べさせる」の目的語となっていることから、意味上の主要部が節内の名詞  $\text{lei}3$ 「包子」であることが分かる。(19)では、 $\eta\Lambda1$   $\text{ton}\text{d}\text{o}3$   $\text{a-t}\theta\text{ei}$  ( $-\text{m}\Lambda=\text{r}\Lambda$ )1「私がコップを壊した（もの／こと）」がコピュラ文の主語となっており、意味上の主要部は  $\text{ton}\text{d}\text{o}3$ 「コップ」である。これらの例では、主部内在型が主部外在型よりも好まれる。

- (18)  $\eta\text{oro}1$   $\text{lei}3$   $\text{ki-ttsi-m}\Lambda=\text{r}\Lambda1$   $\eta\Lambda1$   $\text{t}\Lambda\text{-htsi}1$   $\text{hji}3$ .  
 3SG 包子 INW- 食べる -NMLZ=GEN 1SG NTL- 食べさせる PST.1  
 彼が食べた包子は、私が与えたのだ。

- (19)  $\eta\Lambda1$   $\text{ton}\text{d}\text{o}3$   $\text{a-t}\theta\text{ei-m}\Lambda=\text{r}\Lambda1$   $\eta\text{oro}=\text{r}\Lambda1$   $\text{re}3$ .  
 1SG コップ DWN- 壊す -NMLZ=GEN 3SG=GEN  $\text{COP}_4$   
 私が壊したコップは、彼のだ。

### 2.3. 名詞による修飾と所有表現

ここでは、名詞修飾要素が名詞である場合について述べる。

修飾要素の名詞が主要部名詞の所有者ないし所属先である場合、その修飾要素の名詞に属格助詞  $=\text{r}\Lambda$  が付加され、主要部名詞がそれに後続する。これは、分離可能・不可能を問わない。(20), (21)に例を挙げる。

- (20)  $\text{no}=\text{r}\Lambda3$   $\eta\Lambda\eta\Lambda\text{pha}3$   $\text{fid}\Lambda\text{zi}=\text{m}\epsilon3$ .  
 2SG=GEN 姉妹 美しい=Q  
 あなたの妹は美人ですか。

- (21)  $\text{no}=\text{r}\Lambda3$   $\text{khembo}3$   $\text{l}\Lambda=\text{m}\epsilon2$ .  
 2SG=GEN かばん 重い=Q  
 あなたのカバンは重いですか。

名詞に属格助詞  $=\text{r}\Lambda$  が付加された句は、主要部名詞がなくても、所有物を表すことができる。例えば、(2)の  $\eta\text{je}=\text{r}\Lambda3$ 「私たちの（コップ）」や、(22)の「私

の（姉妹）」である。

- (22) koro3 neɤΛ=ne1 ɲa=rΛ3 rɛ3.  
 この 姉妹=TOP 1SG=GEN COP<sub>4</sub>  
 この人は私の姉だ。(lit. この姉妹は私のだ。)

一方、修飾要素の名詞が主要部名詞の素材、関連特性など属性を表す場合、属格助詞 =rΛ が用いられず、単に両方の名詞が並置される。(23) では、修飾要素 ɲΛ1 「金」と主要部名詞 ɲkhazi3 「スプーン」が並置され、素材を表す限定修飾構造となっている。(24) の fideɕi3 「チベット風のパン」と paɬΛ 「皮」も同様である。さらに、(24) の最初の部分では、修飾要素 tΛ3 「水」と主要部名詞 kolo3 「ティーポット」が並置され、ティーポットについて、水が入っているという状態を限定している。

- (23) htɕala=la3 ɲΛ1 ɲkhazi-tɕΛ3 po=t-ɛ3.  
 PN=DAT 金 スプーン-NCL ある=IMPF-B.NPFT  
 チャラ家には、金のスプーンが1つある。

- (24) tΛ3 kolo-pe=ntsha3 fideɕi3 paɬΛ=nɛ=jantɕhi1 ma-tɕa=rɛ3.  
 水 茶壺-NCL=COM チベット式パン 皮=二=しか NEG-ある=SFP  
 水の（入った）ポットが1つと、パンの皮2枚しかないのだ。

限定修飾を行わない、同格関係にある名詞も、限定修飾の名詞句 ((23), (24)) と同様に、単に並置される。(25) では, swɛpi1 「牛飼い, 牧童」と johpu1 「使用人」が同格関係にある。

- (25) tʉrɛ=la3 swɛpi1 johpu-ji1 to-po-a=rɛ1.  
 かれら=DAT 牛飼い 使用人-NCL NTL-ある-RT=SFP  
 彼らには、牛の世話をする使用人がいた。

以上のことから、名詞による修飾を含む名詞句の構造は、次のようにまとめられる。

- (26) 所有： 名詞 属格助詞 =rΛ 主要部名詞  
 限定／同格： 名詞 主要部名詞

### 3. まとめ

本稿では、ダバ語の名詞句と修飾構造について記述と分析を行った。ダバ語の名詞句は、次のような構造をしている。

指示詞 主要部名詞 数詞 類別詞 助詞  $r\Lambda$  [ +格表示 ]

このうち、「主要部名詞」の部分は、修飾要素ごとに、次のように拡張可能である。

形容詞による修飾：

主要部名詞 [ [形容詞句] 重複 ]

節による修飾：

- a. [ [節] 名詞化標識 ] 主要部名詞
- b. [ [節] 名詞化標識 ]
- c. [ [主要部名詞を含む節] 名詞化標識 ]

名詞による修飾：

所有： 名詞 属格助詞  $=r\Lambda$  主要部名詞  
 限定／同格： 名詞 主要部名詞

### 略号

1	first person	IN	inside	PN	proper name
2	second person	INW	inward directional	PST	past
3	third person	NCL	noun classifier	Q	interrogative
ACC	accusative-dative	NEG	negative	REDP	reduplication
B	pattern B	NMLZ	nominalizer	RT	remote time
COP	copula	NPFT	nonperfect	SFP	sentence-final particle
DAT	dative-locative	NTL	neutral directional	SG	singular
DL	dual	OUT	outward directional	TOP	topic
DWN	downward directional	PFV	perfective	UP	upward directional
GEN	genitive	PL	plural		

## 謝辞

本稿で用いたダバ語メト方言のデータは、いずれも筆者の現地調査で収集したものである。主たる協力者は、ネグェラモさん（女性、1945年生まれ）、その弟夫婦であるギェンツェさんとクックさん、親戚のタシチュンツさん、アギョさんらである。ここに記して深く感謝する。現地調査をはじめ、この研究は、次の研究助成によって可能となった：科学研究費補助金若手研究（B）「中国四川省西部の同系多言語社会における地域特徴解明のための言語学的調査研究」（平成23年度～26年度；課題番号：23720203）、科学研究費補助金基盤研究（A）「チベット語最古層の形成とその構造推移—データベース解析による辞書と歴史文法の編纂」（研究代表者：武内紹人；平成24年度～28年度；課題番号：24242015）。深く感謝申し上げる。

## 参考文献

- Gong, Qunhu [龔群虎]. 2007. 《扎壩語研究》（中国新發現語言研究叢書）. 北京：民族出版社.
- Huang, Bufan [黃布凡]. 1990. 〈扎壩語概況〉《中央民族學院學報》1990.4: 71–82.
- Huang, Budan [黃布凡]. 1991. 〈扎壩語〉戴慶廈, 黃布凡, 傅愛蘭, 仁增旺姆, 劉菊黃《藏緬語十五種》pp. 64–97. 北京：北京燕山出版社.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2006a. 「ダバ語メト方言」, 中山俊秀・江畑冬生（編）『文法を描く—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—I』pp. 119–148, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2006b. 「ダバ語における視点表示システムの研究」(A study of the “point-of-view” system in nDrapa). Kyoto University dissertation.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2010. 「ダバ語の格を表す形式」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象1：格とその周辺』pp. 287–310. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2013a. 「ダバ語における文の下位分類」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』pp. 391–421. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2013b. Mermaid construction in nDrapa. Tasaku Tsunoda (ed.) *Adnominal Clauses and the ‘Mermaid Construction’: Grammaticalization of Nouns* (NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01). pp. 341–370. Tachikawa: National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2014. Reduplication and nominalization in Tibeto-Burman. *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*. pp. 105–115. (<https://docs.google.com/file/d/0BZeLRjfEMUL-c3RQVjlnZWRRtM/edit>)

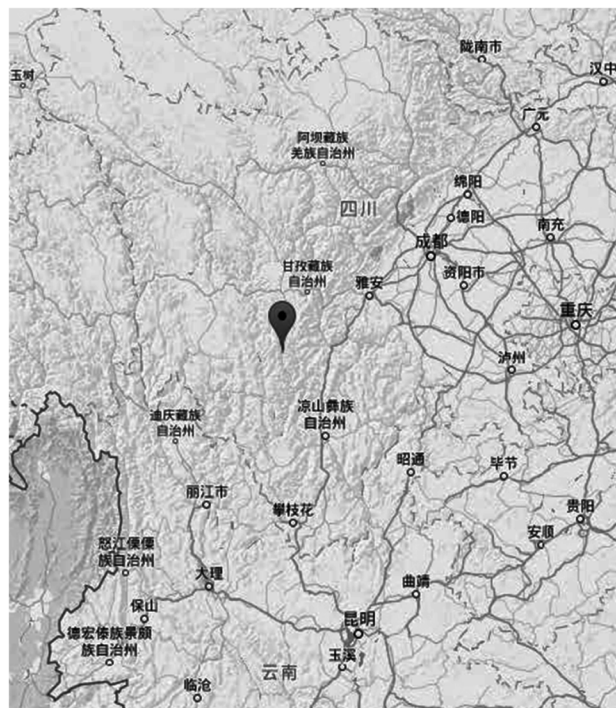


# ムニャ語の名詞句

池田 巧

## 0. ムニャ語の概要

ムニャ語 (Mu-nya language ; 木雅語 ; *Mi nyag skad*) は、中国四川省甘孜藏族自治州の康定県から九龍県にかけて居住するチベット人の一部が話していることばで、書記体系をもたない。話し手の人口は約 1 万人と推計されているけれども、実際には不明。話し手の族称はチベット族 (藏族 ; [pu<sup>33</sup>pa<sup>55</sup>] < Tib. *bod pa*) だが、他地域のチベット人と区別して自らを [mu<sup>33</sup>na<sup>55</sup> vu<sup>33</sup>] cf. Tib. *Mi nyag ba* と呼ぶ。この族称が歴史上の西夏を建国した主要民族名 *Mi nyag* と一致することから、その系統関係が注目されてきた。



バルーンは甘孜藏族自治州九龍県の湯古 (Thangmgo) 村を示す。  
ムニャ語は名峰ミニャコンガ (*Minyang gangs dkar*) の周囲で話されている。

若い世代では漢語の四川方言、中年以上の世代ではチベット語カム方言も話す人が多い。今日では漢語からの影響が圧倒的であるけれども、ムニャ語に定着している借用語のほとんどはチベット語からのものである。ムニャ語を話す人々の社会背景と研究史については、IKEDA (2007) に詳述した。文法の概要は黄布凡 (1985: 1991: 2007: 2009 [修訂版]) および池田巧 (2010/2013), 語彙データは TBL と ZMC を参照されたい。

## 1. 複数表現

ムニャ語の名詞には、人称・性・数などの文法範疇を反映した形態変化はない。個別のものとして認識し得る‘人’  $\text{mu}^{33}\text{ni}^{55}$ , 連続したものの一部である‘山’  $\text{mbo}^{55}$ , 個別化するには容器が必要な‘水’  $\text{tɕu}^{55}$  であれ、いずれも固定した語形である。これらの一般名詞に共通して用いられる複数形態素もない。この場合の複数形態素とは「名詞句の表す対象が複数であることを表示する形態素。この形態素を伴う主要部名詞を持つ名詞句は、複数個体を指示する。具体的な数量には言及しない」[SWD] ものを指す。

### 1.1. 一般名詞と数量表現

ムニャ語では、名詞にかかる数量表現は、名詞のあとに具体的な[数詞] + [量詞] あるいは[形容詞] を置いて示す。

ひとりの人	$\text{mu}^{33}\text{ni}^{55}$ 人	$\text{tɕ}^{33} = \text{zu}^{55}$ 1 = CLF
数人 (ひとりふたり)	$\text{mu}^{33}\text{ni}^{55}$ 人	$\text{tɕ}^{33} \text{ nu}^{55} = \text{zu}^{33}$ 1 2 = CLF
たくさんの人	$\text{mu}^{33}\text{ni}^{55}$ 人	$\text{ga}^{33}\text{j}^{55}$ 多い [形]
一群の人	$\text{mu}^{33}\text{ni}^{55}$ 人	$\text{tɕ}^{33} = \text{dɕ}^{55}$ 1 = CLF : 群
ひとつの山	$\text{mbo}^{55}$ 山	$\text{tɕ}^{33} = \text{lɔ}^{55} / \text{tɕ}^{33} = \text{za}^{55}$ 1 = CLF / 1 = CLF
連山 (一、二峰)	$\text{mbo}^{55}$ 山	$\text{tɕ}^{33} \text{ nu}^{55} = \text{za}^{55}$ 1 2 = CLF

山々	mbo <sup>55</sup>	ga <sup>33</sup> ji <sup>55</sup>	
	山	多い [形]	
一杯の水	tɕu <sup>55</sup>	te <sup>33</sup>	=p <sup>h</sup> o <sup>33</sup> la <sup>55</sup>
	水	1	=CLF : 碗
一滴の水	tɕu <sup>55</sup>	ʔe <sup>55</sup> mi <sup>55</sup>	te <sup>33</sup> =ndu <sup>55</sup>
	水	わずか	1 =CLF : 滴
少量の水	tɕu <sup>55</sup>	ni <sup>33</sup> ni <sup>55</sup>	te <sup>33</sup> =xe <sup>55</sup>
	水	少ない	1 =CLF
多量の水	tɕu <sup>55</sup>	ga <sup>33</sup> ji <sup>55</sup>	te <sup>33</sup> =su <sup>55</sup>
	水	多い	1 =CLF

/=p<sup>h</sup>o<sup>33</sup>la<sup>55</sup>/ は‘碗’という名詞が量詞に転用されたもの。英語の a cup of water あるいは中国語の‘一碗水’にあたる表現。‘一滴の水’のフレーズに見える /ʔe<sup>55</sup>mi<sup>55</sup>/ は‘わずか’の意の形態素。副詞の /ʔe<sup>33</sup>mi<sup>55</sup> te<sup>33</sup>ge<sup>55</sup>/ ‘ほとんど／スレスレで’という表現にも使われる。そのほかの量詞の由来は必ずしも明らかではない。‘少量の水’に見える量詞 /=xe<sup>55</sup>/ は‘ひと掴み’にも用いられる。‘多量の水’に見える量詞 /=su<sup>55</sup>/ は‘斗’‘尺’‘升’などに相当する（おおまかな）計量単位か。cf. /to<sup>55</sup>-su<sup>33</sup>/ ‘満たす’。

## 1.2. 代名詞の複数表現

ムニャ語の指示代名詞と第三人称代名詞は、主語に立つ場合や単独で発する場合を基本形とするなら、同じ語形であり、近称と遠称に空間を 2 分割して示す。第三人称代名詞は基本的に近称を用いるが、話し手から遠いところにいる「彼／彼女」について直示的に指示する場合には、遠称の語形を使うこともある。また文脈中に現れる「照応的」用法では近称を使うのが普通である。

[指示代名詞] (単数)	ʔe <sup>55</sup> tsu <sup>33</sup> (近称)	wo <sup>55</sup> tsu <sup>33</sup> (遠称)
	これ	あれ
[人称代名詞] (単数)	ʔe <sup>55</sup> tsu <sup>33</sup> (近称)	wo <sup>55</sup> tsu <sup>33</sup> (遠称)
	彼 / 彼女	(遠方の) 彼 / 彼女

ムニャ語には、代名詞に接続して複数を表す後置辞 /=nu<sup>55</sup>/ がある。この後置辞を取ることで、代名詞は名詞から独立した品詞として認定ができる。



私たち	$\eta u^{33} = nu^{55}$	
われわれ (包括形)	$je^{33} = nu^{55}$	
あなたがた	$na^{33} = nu^{55}$	
この / あの ひとたち	$\eta e^{55} = nu^{55}$ (近称)	$wo^{55} = nu^{55}$ (遠称)

〔双数〕を表すには、人称代名詞と複数後置辞の間に数詞由来の形態素 /ni<sup>55</sup>/ を挟む。

わたしたちふたり	$\eta u^{33} ni^{55} = nu^{33}$	
同 (包括形)	$je^{33} ni^{55} = nu^{33}$	
あなたたちふたり	$na^{33} ni^{55} = nu^{33}$	
彼 / 女ら ふたり	$\eta e^{33} tsi^{55} = nu^{33}$ (近称)	$wo^{33} tsi^{55} = nu^{33}$ (遠称)

第三人称双数のみ形態素 /ni<sup>55</sup>/ の音節初頭子音が消えて三人称代名詞と融合し、母音交替として現れる特別な語形となっていることが注目される。これはミニャ語の三人称代名詞が指示代名詞と同じ語形であることに起因する。

主格に立つ基本形の単数 / 複数では、第三人称代名詞の「この / あの ひとたち」と指示代名詞の「これ / あれら」に形態上の区別はない。

この / あの ひとたち	$\eta e^{55} = nu^{55}$ (近称)	$wo^{55} = nu^{55}$ (遠称)
--------------	------------------------------	--------------------------

これ / あれら	$\eta e^{55} = nu^{33}$ (近称)	$wo^{55} = nu^{33}$ (遠称)
----------	------------------------------	--------------------------

しかし双数では異なる語形が使われ両者は区別される。

彼 / 女らふたり	$\eta e^{33} tsi^{55} = nu^{33}$ (近称)	$wo^{33} tsi^{55} = nu^{33}$ (遠称)
-----------	---------------------------------------	-----------------------------------

これらふたつ	$\eta e^{55} tsu^{33}$	$te^{33} = ndze^{55}$ (近称)
これ	1	= 双

あれらふたつ	$wo^{55} tsu^{33}$	$te^{33} = ndze^{55}$ (遠称)
あれ	1	= 双

このほか、人にかかわる表現において複数を表す後置辞 / $=nu^{55}$ / が使われる場合がある。

ひとさま (複数)	$ndzo^{55} = nu^{33}$
別	= SFX:pl.

cf. 他人（単数）	ndzø <sup>55</sup>	muw <sup>33</sup> ni <sup>55</sup>
	別	人

この‘ひとさま’は、代名詞の複数接尾辞 /=nuw<sup>55</sup>/ が形態素として使われた複合語と考えられる。しかし複数の人を示す複合語やフレーズであっても複数を表す後置辞 /=nuw<sup>55</sup>/ は必須ではない。

人それぞれ	muw <sup>33</sup> ni <sup>55</sup>	me <sup>33</sup> me <sup>55</sup>
	人	おのおの

ひとりひとりの人	muw <sup>33</sup> ni <sup>55</sup>	te <sup>33</sup>	=zuw <sup>55</sup>	tɕ <sup>h</sup> u <sup>33</sup> mu <sup>55</sup>
	人	1	=CLF	それぞれ

ふたり	nuw <sup>33</sup>	=zuw <sup>55</sup>
	2	=CLF

## 2. 量化表現

ムニャ語は量詞（類別詞）が発達しており、種類も多い。名詞句を構成する量化表現において〔名詞〕と〔数詞＋量詞〕の語順は日本語の「一冊の本」；中国語の‘一本書’などとは異なり、ムニャ語では〔名詞〕←〔数詞＋量詞〕の構造をとる。

### 2.1. 具体的な数量を表す表現

「名詞句の表す対象の具体的な数量を特定する数詞を含む表現：日本語の「1冊の」「2冊の」「何冊の」などにあたる」〔SWD〕フレーズは、ムニャ語では以下のとおりである。

1 冊の本	ɣũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	te <sup>33</sup>	=pu <sup>33</sup> ti <sup>55</sup>
	本	1=CLF	: < Tib. <i>po ti</i> ‘帙’
2 冊の本	ɣũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	nuw <sup>33</sup>	=pu <sup>33</sup> ti <sup>55</sup>
	本	2	=CLF : < Tib. <i>po ti</i> ‘帙’
1 冊（個）のノート	tʂẽ <sup>33</sup> mbu <sup>55</sup>	te <sup>33</sup>	=lɔ <sup>55</sup> / te <sup>33</sup> =za <sup>55</sup>
	ノート	1	=CLF / 1 =CLF

2 冊 (個) のノート       $t\check{s}\tilde{e}^{33}mbu^{55} \quad t\check{e}^{33} = ndz\check{e}^{55}$   
                                  ノート                    1            = 双

ノートは、漢語‘帳簿’ *zhàngbù* からの借用語と考えられる。現在の書籍とノートはともに冊子形態であるが、量詞が異なる。これは、両面印刷の横長の紙を重ね、綴じずに紐で括って帙に収めた伝統的なチベット本と、長方形の紙の端を糸で綴じた中国の線装本の形態の違いが反映しているからである。書籍の量詞はチベット語の *po ti* ‘帙’ からの借用語で、ノートには‘個’にあたる汎用の量詞が使われている。面白いことに本の場合には  $nu^{33} = pu^{33}ti^{55}$  ‘2 冊’ で数詞に  $/nu^{33}/$  が使われるのに対し、ノートの場合には、 $*/nu^{33} = lo^{55}/$  ‘2 個’ とは言えず、 $/t\check{e}^{33} = ndz\check{e}^{55}/$  (直訳は‘1 対’だが、ペアに限らず‘ふたつ’の意) を使う。ムニャ語の数量表現においては  $*/nu^{33} = lo^{55}/$  ‘2 個’ が  $/t\check{e}^{33} = ndz\check{e}^{55}/$  ‘1 対 (ふたつ)’ に取って代わったという歴史的変化の傾向が認められるが、概数の場合には  $/nu^{33} = lo^{55}/$  という [数詞 + 量詞] の組合せも使われる。

数冊のノート       $t\check{s}\tilde{e}^{33}mbu^{55} \quad t\check{e}^{33} \quad nu^{55} = lo^{33} \sim \eta e^{33} \quad t\check{e}^{h}i^{55} = lo^{33}$   
                                  ノート                    1        2        = CLF        5        6        = CLF

「数冊のノート」の直訳は‘ノート 1, 2 冊’あるいは‘ノート 5, 6 冊’で、概数はふたつの数字を併記して表現する。なお数量を訊ねる疑問文は、訊ねたい数詞の箇所を疑問詞に置き換え、適切な量詞をつけて訊ねる。

- (1)  $na^{55} \quad t\check{s}\tilde{e}^{33}mbu^{55} \quad fia^{33}tsi^{55} [\sim \chi e^{33}ti^{55}]^1 = lo^{33} \quad ndza^{35} \quad \eta e^{33} ?$   
                                  あなた   ノート                    疑問: 何                    = CLF    ある        DEC  
                                  何冊のノートを持っていますか?

## 2.2. 数量の範囲を示す表現

具体的な数量を提示せずに「名詞句の表す対象の、数量の範囲 (多少, 全体の中の割合など) を表す表現: 「多くの」「わずかな」「すべての」「ほとんどの」「いくつかの」に当たるもの」[SWD] は、ムニャ語では [名詞] ← [形容詞]  $/=tsu^{33}/NMLZ$  の構造をとる。

すべての本 (各冊)       $y\check{u}^{55}ndu^{33} \quad me^{33}me^{55} = tsu^{33}$   
                                  本                    おのおの        = NMLZ

すべての本 (まとめて)       $y\check{u}^{55}ndu^{33} \quad t\check{e}^{h}u^{33}t\check{e}u^{55} = tsu^{33}$   
                                  本                    すべて            = NMLZ

<sup>1</sup> 疑問詞 ‘何’ は、湯古 (*Thangmo*) 方言では  $[fia^{33}tsi^{55}]$  生古 (*gSer'go*) 方言では  $[\chi e^{33}ti^{55}]$  と発音する。

ほとんどの本                       $\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33} \quad ge^{33}d\dot{z}\ddot{a}^{55} \quad = tsu^{33}$   
    本                      ほとんど                      = NMLZ

少しの本                               $\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33} \quad ni^{33}ni^{55} \quad = tsu^{33}$   
    本                      少ない                      = NMLZ

たくさんの本                         $\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33} \quad ga^{33}ji^{55} \quad = tsu^{33}$   
    本                      多い                      = NMLZ

(2)     $mu^{33}ni^{55} \quad ka^{33}ka^{55} \quad te^{33} \quad = zu^{55} = ji^{33} \quad \eta u^{55} = le^{33} \quad tu^{33} - tu^{55} \quad pi^{33}.$   
          人                      ある                      1                      = CLF = AGT                      私 = DAT                      DIR- 教える                      SFX: 未然  
          あるひとりの人が教えてくれます。

(3)     $\gamma e^{55}tsu^{33} \quad = ji^{55} \quad mo^{33}mo^{55} \quad so^{33} = l\emptyset^{55} \quad \dot{h}a^{33}-ndzu^{55} \quad r\Lambda^{33}.$   
          彼 / 女                      = AGT                      蒸餃子                      3                      = CLF                      DIR- 食べる                      DEC: 完了  
          彼 / 女は 3 つの蒸餃子を食べた。

### 3. 所有表現

次に所有表現を見ておきたい。1. 「私の本」のような人称ごとの単純な所有関係と、2. 「あの金持ちの服」のように特定化された名詞句を含む所有関係に分けて検討する。いずれの場合にもムニャ語では所有関係を表す助詞が、代名詞あるいは複数後置辞に融合する現象が見られることが特徴的である。

#### 3.1. 代名詞を使う単純な所有関係の表現

「人称の区別を担うもの: 日本語の「私 (たち) の」「あなた (たち) の」「彼 (女) (ら) の」および「誰の」「誰かの」などに当たるもの」[SWD] は、ムニャ語では [代名詞 = 属格助詞] → [名詞] の構造をとる。なお [代名詞 = 属格助詞] には、分析型と融合型がある。

	[分析型]	[融合型]
私の服	$\eta u^{55} = \gamma a^{33} \quad ts^h\ddot{e}^{33} \quad ngu^{55}$	$nga^{55} \quad ts^h\ddot{e}^{33} \quad ngu^{55}$
私の手	$\eta u^{55} = \gamma a^{33} \quad ri^{55}$	$nga^{55} \quad ri^{55}$
君の服	$na^{55} = \gamma a^{33} \quad ts^h\ddot{e}^{33} \quad ngu^{55}$	$na^{55} \quad ts^h\ddot{e}^{33} \quad ngu^{55}$

君の手	$na^{55} = ya^{33} ri^{55}$	$na^{55} ri^{55}$
彼 / 女の服	$?e^{55} tsu^{33} = ya^{33} ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$	$?e^{55} tsa^{55} ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$
彼 / 女の手	$?e^{55} tsu^{33} = ya^{33} ri^{55}$	$?e^{55} tsa^{53} ri^{55}$

### 3.2. 特定化された名詞句を含む所有関係

「特定のな名詞句を含むもの：日本語の「彼の弟の」「あの先生の」などに当たるもの」[SWD] は、ムニャ語では（[指示詞]）[[（代）名詞＝属格助詞] → 名詞＝属格助詞] → [名詞] の構造をとる。

私の母の服	$ngu^{55} = ya^{33} e^{33} me^{55}$	$= ya^{33} ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$ [分析型]
私 = GEN	母	= GEN 服
	$nga^{55} e^{33} ma^{53}$	$ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$ [融合型]
私 [GEN]	母 [GEN]	服

後者の「融合型」では、1 人称代名詞属格 ‘私の’  $/nga^{55} / < ngu^{55} = ya^{33}$  [GEN] のほかに、‘母の’  $/e^{33} ma^{53} / < e^{33} me^{55} = ya^{33}$  [GEN] にも属格助詞との融合が見られる。親族呼称は、使用状況が人称代名詞に近いからであろう。代名詞の複数後置辞  $/=nu^{33} /$  にも同様に属格助詞との融合型  $:/=na^{33} / < =nu^{33}$  [pl.]  $= ya^{33}$  [GEN] が<sup>3</sup>ある。

この金持ちたちの服	$?e^{55} tsu^{33} ngu^{55} ndzu^{33} mi^{33} = na^{33}$	$ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$
これ	金	ある
	人 = SFX [pl.+GEN]	服
この裕福な人たちの服	$?e^{55} tsu^{33} t\theta^{55} mee^{55} = na^{35}$	$ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$
これ	裕福	= SFX [pl.+GEN]
裕福な人	$mu^{33} ni^{55} t\theta^{55} mee^{55} = tsu^{33}$	(単数)
人	裕福	= NMLZ
裕福な人	$mu^{33} ni^{55} t\theta^{55} mee^{55} = nu^{33}$	(多数)
人	裕福	= SFX [pl.]

このように複数後置辞  $/=nu^{33} /$  は、 $/=tsu^{33} /$  と同様に、[名詞] ← [形容詞] の後に置かれて名詞句を作る働きをもつ。指示詞を含む名詞句の構造については、次節を参照。

## 4. 指示表現

指示表現は「名詞句の表す対象の、「話し手」の「聞き手」に対する位置関係や遠近の度合いを表したり，聞き手に選択肢の中から選択を求めたりする表現：日本語の「こ（れら）の」「あ（れら）の」；「どの」「どちらの」に当たるもの。具体物を指示する「直示的」用法と，文脈中に現れた名詞句を指示する「照応的」用法がある」[SWD]が，ムニャ語では[指示詞]→[名詞]の直接修飾構造をとり，指示詞の後には属格の助詞を介さない。

ムニャ語の[指示詞]は近称と遠称の2種類で，「照応的」用法には近称が使われる。指示詞は人称代名詞と同じ語形である。指示表現の「この本」と所有表現の「彼の本」とは，属格助詞/=ya<sup>33</sup>/の有無で区別される。

この本	ʔe <sup>55</sup> tsu <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	
cf. 彼 / 女の本	ʔe <sup>55</sup> tsu <sup>33</sup> = ya <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	[分析型]
	ʔe <sup>55</sup> tʂa <sup>55</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	[融合型]
あの本	wɔ <sup>55</sup> tsu <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	
cf. 彼 / 女の本	wɔ <sup>55</sup> tsu <sup>33</sup> = ya <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	[分析型]
	wɔ <sup>55</sup> tʂa <sup>55</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	[融合型]
どの本	χe <sup>55</sup> tsu <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	
cf. 誰の本	ɦa <sup>55</sup> nu <sup>33</sup> = ya <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	[分析型]
	ɦa <sup>55</sup> na <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	[融合型]
これらの本	ʔe <sup>55</sup> nu <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	
cf. 彼 / 女らの本	ʔe <sup>55</sup> nu <sup>33</sup> = ya <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	[分析型]
	ʔe <sup>55</sup> na <sup>33</sup> yũ <sup>55</sup> ndu <sup>33</sup>	[融合型]

あれらの本

wɔ̌<sup>55</sup>nu<sup>33</sup> γũ̃<sup>55</sup>ndu<sup>33</sup>

cf. 彼 / 女らの本

wɔ̌<sup>55</sup>nu<sup>33</sup> = ya<sup>33</sup> γũ̃<sup>55</sup>ndu<sup>33</sup>

[分析型]

wɔ̌<sup>55</sup>na<sup>33</sup>γũ̃<sup>55</sup>ndu<sup>33</sup>

[融合型]

このほか、「机の上の本」のように具体的な位置を示す表現も、属格助詞 / = ya<sup>33</sup> / を使って主名詞を修飾する。

机の上の本

tʂoo<sup>55</sup>tsi<sup>55</sup> = pu<sup>33</sup> = ya<sup>33</sup> γũ̃<sup>55</sup>ndu<sup>33</sup>

机 = 上 = GEN 本

/tʂoo<sup>55</sup>tsi<sup>55</sup>/ < Chn. zhuōzi 桌子

## 5. 名詞的修飾表現

名詞が修飾語となる表現は「主名詞を修飾する表現のうち、名詞（句）そのもの、あるいは [名詞（句）] + [主名詞に対する関係を表示する形態素] の組合せからなるもの」[SWD] で、ムニャ語では、名詞的修飾語は中心となる主名詞に前置されるが、臨時的な修飾関係や所有・所属関係では属格助詞 / = ya<sup>33</sup> / を必要とする。[名詞] → [名詞] あるいは [名詞] / = ya<sup>33</sup> / → [名詞] のような構造になる。たとえば、‘外国の本’にあたる表現には数種類があり、属格助詞 / = ya<sup>33</sup> / を必要とするもの、省略できるもの、使わないものがある。

外国の本

we<sup>33</sup>kwe<sup>53</sup> = ya<sup>33</sup> γũ̃<sup>55</sup>ndu<sup>33</sup>/we<sup>33</sup>kwe<sup>53</sup>/ < Chn. wàiguó 外国tɕ<sup>h</sup>i<sup>33</sup>dza<sup>53</sup> (= ya<sup>33</sup>) γũ̃<sup>55</sup>ndu<sup>33</sup>/tɕ<sup>h</sup>i<sup>33</sup>dza<sup>53</sup>/ < Tib. *phyi rgyal* ‘外国’jã<sup>33</sup>ru<sup>55</sup> γũ̃<sup>55</sup>ndu<sup>33</sup>/jã<sup>33</sup>ru<sup>55</sup>/ < Chn. yáng rén 洋人

修飾語と中心語の結びつきが固定的で熟語化している場合には、属格助詞 / = ya<sup>33</sup> / はつかない。

中国語の本	$\text{ka}^{55} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$	$/\text{ka}^{55}/$ ‘漢’
チベット語の本	$\text{pu}^{55} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$	$/\text{pu}^{55}/ < \text{Tib. } \textit{Bod}$ ‘チベット’
仏典；経典	$\text{tɕ}^{\text{h}}\text{ø}^{55} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$	$/\text{tɕ}^{\text{h}}\text{ø}^{55}/ < \text{Tib. } \textit{chos}$ ‘法’

「こどもの本」の場合には臨時の結びつきであり、熟語化していないので、属格助詞  $/=\text{ya}^{33}/$  が必要である。

こどもの本	$\text{za}^{33} = \text{na}^{35} \quad \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$
	$/=\text{na}^{33}/ < =\text{nu}^{33} [\text{pl.}] = \text{ya}^{33} [\text{GEN}]$

この表現は日本語の「こどもの本」と同様に‘こどもが見る本’つまり「児童書」と‘こどもの所有物である本’というふたつの解釈可能性がある。ムニャ語には、属格助詞  $/=\text{ya}^{33}/$  を省いて熟語化した「児童書」に相当するであろう  $*/\text{za}^{33} = \text{nu}^{55} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}/$  ‘？こどもたち本’あるいは  $*/\text{za}^{33} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}/$  ‘？こども本’といった表現はないという。ちなみに「こどもの読む本」は、次項で扱う動詞的修飾表現であるが、[名詞]  $= \text{ya}^{33} \rightarrow$  [名詞句:動詞=NMLZ]  $= \text{ya}^{33} \rightarrow$  [名詞] のように名詞的修飾表現を重ねた形となり、「ボクのこどもの本」と同じ構造: [名詞]  $= \text{ya}^{33} \rightarrow$  [名詞]  $= \text{ya}^{33} \rightarrow$  [名詞] である。

こどもの読む本	$\text{za}^{33} = \text{na}^{55}$ こども = SFX [pl.+GEN]	$\text{k}^{\text{h}}\text{i}^{33} - \text{zi}^{55} = \text{re}^{33} = \text{ya}^{33} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$ DIR- 学ぶ = NMLZ = GEN      本
ボクのこどもの本	$\text{nga}^{55}$ ボク [GEN] こども = GEN	$\text{za}^{33} = \text{ya}^{33} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$ 本

「チベット人の友人」(=チベット人である友人)「漢族の友人」(=漢族である友人)は、ムニャ語では属格助詞を用いない名詞が直接修飾する熟語化した表現である。

チベット人の友人 (友人本人がチベット人)	$\text{p}^{\text{h}}\text{u}^{33} \text{pe}^{55} \text{ɕe}^{33} \text{pu}^{55}$	$/\text{p}^{\text{h}}\text{u}^{33} \text{pe}^{55}/ < \text{Tib. } \textit{bod pa}$ ‘チベット人’
漢族の友人 (友人本人が漢人)	$\text{ka}^{55} \text{ɕe}^{33} \text{pu}^{55}$	

もし日本語のように修飾語の名詞に属格助詞  $/=\text{ya}^{33}/$  をつけると、意味が変わっ



てしまう。

cf. 漢族の友人                       $\text{ka}^{55} = \text{ya}^{33} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55}$       ‘漢族 [にとって] の友人’

日本語で「漢族の友人」というと、通常は友人が漢族であると理解されるが、ムニャ語の場合には属格助詞を使うと「漢族 [にとって] の友人」となり、その友人が何族なのかはわからない。この点は、漢語における‘漢族朋友’と‘漢族的朋友’の意味の違いの關係に平行する。「医者 of 友人」にも同じことが起こる。

医者 of 友人                       $\text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55}$       / $\text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55}$ / < Tib. *smān pa* ‘医者’  
(友人本人が医者)

cf. 医者 of 友人                       $\text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55} = \text{ya}^{33} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55}$   
(医者 [にとって] の友人)

面白いことにさらに「私の」という修飾語をつけると「医者 of 友人」は {医者} {友人} の形態素の語順が入れ替わる。これは {私の} → {友人} という形態素間の修飾関係を明確化して、{医者} と同格の扱いとしていると見ることも可能である。あるいは {医者} を形容詞扱いとして {友人} の後から修飾しているとも考えられなくはないが、もしそうなら名詞句の終端を示す NMLZ の / $\text{tsur}^{33}$ / が置かれる必要がある (次節参照) が、ここでは不要である。

私の医者 of 友人	$\eta u^{55} = \text{ya}^{33} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55} \text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55}$	[分析型]
(私の友人である医者)	私 = GEN      友人 ← 医者	
	$\text{nga}^{55} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55} \text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55}$	[融合型]
	私 [GEN]      友人 ← 医者	

## 6. 形容詞的修飾表現

形容詞が修飾語となる表現は、澤田 (2006) では名詞句を形成する要素のグループ項目として立てられていない。そもそも形容詞は、名詞を直接修飾する品詞として分類され、名詞句とは独立した形容詞句を構成する言語が少なくないことに加え、ビルマ系の諸語では形容詞と動詞に形態的な区別がないため、特に名詞句に「形容詞的修飾表現」を立てて論ずる必要がないことがその理由であろう。澤田も修飾表現のどれが名詞的修飾表現あるいは動詞的修飾表現に属するかは言語依存的なものであるとし、日本語の形容詞は動詞的修飾表現に属するものとして扱っている。

しかしチベット系の言語では、形容詞を独立の品詞として扱うべき形態的な理由があり、形容詞の修飾構造が名詞的修飾表現や動詞的修飾表現とは異なる場合も少なくない。ムニャ語においても「形容詞的修飾表現」を独立して扱うべき構造的特徴が認められる。ここで澤田の定義に倣って「形容詞的修飾表現」を規定するなら「主名詞を修飾する表現のうち、形容詞そのもの、あるいは[形容詞(句)] + [主名詞に対する関係を表示する形態素]の組合せからなるもの」ということになるだろう。

ムニャ語では、形容詞的修飾表現は、中心となる主名詞に後置され、その終端に NMLZ を置くことで名詞句となる。[名詞] ← [形容詞] = NMLZ がその基本構造である。具体的な数量を示す場合には NMLZ のかわりに [数詞 + 量詞] を置く。ムニャ語の NMLZ には、汎用の /*tsu*<sup>33</sup>/ のほかに特定用法のものが数種類ある。

厚い本	<i>γũ</i> <sup>55</sup> <i>ndu</i> <sup>33</sup> <i>ri</i> <sup>33</sup> <i>ri</i> <sup>55</sup> = <i>tsu</i> <sup>33</sup> 本 厚い = NMLZ
大きい本	<i>γũ</i> <sup>55</sup> <i>ndu</i> <sup>33</sup> <i>ki</i> <sup>33</sup> <i>ke</i> <sup>55</sup> = <i>tsu</i> <sup>33</sup> 本 大きい = NMLZ
古い本	<i>γũ</i> <sup>55</sup> <i>ndu</i> <sup>33</sup> <i>ni</i> <sup>33</sup> <i>mbe</i> <sup>55</sup> = <i>tsu</i> <sup>33</sup> 本 古い = NMLZ /ni <sup>33</sup> mbe <sup>55</sup> / < Tib. <i>rnying pa</i> ‘古い’
cf. 3冊の古い本	<i>γũ</i> <sup>55</sup> <i>ndu</i> <sup>33</sup> <i>ni</i> <sup>33</sup> <i>mbe</i> <sup>55</sup> <i>so</i> <sup>33</sup> = <i>pu</i> <sup>33</sup> <i>ti</i> <sup>55</sup> 本 古い 3 = CLF : < Tib. <i>po ti</i> ‘帙’
旧友	<i>ɕe</i> <sup>33</sup> <i>pu</i> <sup>55</sup> <i>ni</i> <sup>33</sup> <i>mbe</i> <sup>55</sup> = <i>tsu</i> <sup>33</sup> 友人 古い = NMLZ
親友	<i>ɕe</i> <sup>33</sup> <i>pu</i> <sup>55</sup> <i>ŋe</i> <sup>33</sup> <i>ŋe</i> <sup>55</sup> = <i>tsu</i> <sup>33</sup> 友人 よい = NMLZ
悪友	<i>ɕe</i> <sup>33</sup> <i>pu</i> <sup>55</sup> <i>q<sup>h</sup>Λ</i> <sup>33</sup> <i>q<sup>h</sup>Λ</i> <sup>55</sup> = <i>tsu</i> <sup>33</sup> 友人 悪い = NMLZ

以上は単純な形容詞が直接名詞を修飾している例であるが、たとえば「背の高い友人」のように修飾語に「背が高い」という形容詞句を含む場合は、次のようになる。ムニャ語の形容詞句は [名詞] + [形容詞] の主述構造なので、単純形

容詞のついた名詞句の場合と同じように、述語形容詞のあとには名詞句の終端を示す NMLZ を付す必要がある。

値段が高い本	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33} \leftarrow k\ddot{o}^{55}$	$ki^{33}ke^{55}$	$=tsu^{33}$
(本で値段が高いもの)	本	価格	大きい =NMLZ
	/k $\ddot{o}^{55}$ / < Tib. <i>gong</i> ‘価格’		

背の高い友人	$\epsilon e^{33}pu^{55} \leftarrow q^{h\circ}o^{33}pe^{55}$	$ki^{33}ke^{55}$	$=tsu^{33}$
(友人で背が高いの)	友人	身体	大きい =NMLZ

形容詞句を名詞化して属格助詞 /= $\gamma a^{33}$ / により「名詞的修飾表現」と同様に主名詞の前から修飾する構造もある。

背の高い友人	$[q^{h\circ}o^{33}pe^{55}$	$ki^{33}ke^{55}$	$=tsu^{33}]$	$=\gamma a^{33}$	$\rightarrow \epsilon e^{33}pu^{55}$
(背が高いの友人)	身体	大きい	=NMLZ	=GEN	友人

しかしこちらはやや不自然であり使われにくいという。この修飾構造の違いが両者の表現においてどのような意味上／用法上の差異を反映しているのかは不明。後考を俟ちたい。このほか「ほんとうに親切的な」のように、副詞がついた形容詞句に直接属格助詞 /= $\gamma a^{33}$ / を附して主名詞の前から修飾する場合もある。

親友	$\eta u^{55}maa^{53}$	$\eta u^{33}t\epsilon^{hi}i^{53}$	$=\gamma a^{33}$	$\epsilon e^{33}pu^{55}$
(ほんとうに親切的な友人)	ほんとうに	親切	=GEN	朋友

修飾語となる形容詞句の主語にあたる部分には、名詞以外にも NMLZ で名詞化した動詞句が現れることがある。たとえば「わかりやすい本」(＝理解することが容易な本) という場合の「理解すること」に相当する部分が、NMLZ で名詞化した動詞句になっている。

わかりやすい本	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$	$k^{h\circ}\emptyset^{33}-k\emptyset^{55}$	$=re^{33}$	$le^{55}$	$le^{33}le^{55}$	$=tsu^{33}$
	本	DIR- 理解	=NMLZ	容易		=NMLZ

わかりにくい本	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$	$k^{h\circ}\emptyset^{33}-k\emptyset^{55}$	$=re^{33}$	$ke^{33}ke^{55}$	$=tsu^{33}$
	本	DIR- 理解	=NMLZ	困難	=NMLZ

/= $re^{33}$ / は、動詞句を名詞化する NMLZ である。形容詞句を名詞化する NMLZ の /= $tsu^{33}$ / とは置き換えることはできない。

また「ぼろぼろの本」という表現は、ムニャ語では現在の状態を描写する適切な形容詞がないため、「爛れる」という動詞を使って表現せざるを得ない。この場合には、動詞に完了の SFX (NMLZ) がついた動詞句を、形容詞のように主名詞に後置して修飾構造を構成する。

ボロボロの本	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$	$ne^{33}-pe^{55}$	$=su^{33}$	$=tsu^{33}$
(=爛れた本)	本	DIR- 爛れ	=SFX: pft	=NMLZ

## 7. 動詞的修飾表現

動詞が修飾語となる表現は「主名詞を修飾する表現のうち、動詞そのもの、あるいは〔動詞 (句)〕 + 〔主名詞に対する関係を表示する形態素〕の組合せからなるもの」[SWD] で、ムニャ語では、動詞的修飾語は、中心となる主名詞に前置され、動詞句の終端に NMLZ を置いて名詞句化したあとに属格助詞  $/=ya^{33}/$  を附して、中心語となる主名詞を修飾する。つまり第 6 節で見た [名詞 (句)]  $/=ya^{33}/ \rightarrow$  [名詞] の構造に準じる。

昨日買った本	$jii^{33}sii^{55}$	$q^he^{33}-te^{55}$	$=su^{33}$	$=ya^{33}$	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$
昨日	DIR- 買う	=SFX: pft	=GEN	本	

「私のお父さんが私に買ってくれた本」のように、主述構造を伴った動詞句が修飾する場合には、完了を示す SFX が NMLZ の機能を担い、そのあとに属格助詞  $/=ya^{33}/$  がついて主名詞を修飾する。

私のお父さんが私に買ってくれた本

$nga^{55}$	$ve^{33}=ji^{55}$	$\eta u^{55}=le^{33}$	$t^he^{33}-k^he^{55}$	$=su^{33}$	$=ya^{33}$	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$
私 [GEN]	父 = AGT	私 = DAT	DIR- 与え	=SFX: pft	=GEN	本

まだ読んでいない本

[Thang mgo 方言]

$t\dot{c}u^{33}pa^{55}$	$no^{33}-dza^{55}$	$me^{55}=su^{33}$	$=ya^{33}$	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$
まだ	DIR- 読む	NEG =SFX	=GEN	本

[gSer 'go 方言]

$t\dot{c}u^{33}nu^{55}$	$no^{33}-da^{55}$	$me^{55}=su^{33}$	$=ya^{33}$	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$
まだ	DIR- 読む	NEG =SFX	=GEN	本

このほか動詞句の NMLZ には「～する人」を意味する形態素の / $\text{mi}^{33}$ / がある。

裕福な友人

- (a)  $[\text{dzu}^{55}/\eta\text{u}^{55}] \text{ndzu}^{33} = \text{mi}^{33} = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$   
 金                      ある =NMLZ: 人 =GEN      友人
- (b)  $\text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55} [\text{dzu}^{55}/\eta\text{u}^{55}] \text{ndzu}^{33} = \text{mi}^{33}$   
 友人                      金                      ある =NMLZ: 人
- (c)  $\text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55} \text{tøø}^{55}\text{mee}^{55} = \text{tsu}^{33}$   
 友人                      裕福な                      =NMLZ

(a) は動詞的修飾表現 (=動詞句を名詞化した名詞的修飾表現), (b) は動詞句の NMLZ による名詞化, (c) は形容詞的修飾表現で, いずれも友人そのひと自身が金持ちである, という意味の表現である。

(c) の主名詞を形容詞が後ろから修飾して名詞句の終端を NMLZ / $\text{tsu}^{33}$ / で示す形容詞的修飾表現を, 属格助詞 / $\text{ya}^{33}$ / を用いて主名詞を前から修飾する名詞的修飾表現にすると, 意味が変わってしまう (前述した第 5 節を参照)。

cf. 裕福な人の友人

$\text{tøø}^{55}\text{mee}^{55} = \text{tsu}^{33} = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$   
 裕福な                      =NMLZ=GEN      友人

このフレーズは「(ある裕福な人がいて, その) 裕福な人の友人」の意である。動詞完了を示す SFX は, 動詞句の終端として NMLZ の機能を担うこともできるので, NMLZ / $\text{tsu}^{33}$ / をさらに後置して名詞句であることを明確にすることもできるし, 省略してしまうことも可能。

昨日会った友人

$\text{jii}^{33}\text{si}^{55}\text{k}^{\text{h}}\text{ũ}^{33} - \text{ndi}^{55} = \text{su}^{33} (= \text{tsu}^{33}) = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$   
 昨日      DIR- 会う                      =SFX (=NMLZ)      =GEN 友人

一緒に住んでいる友人

$\text{da}^{33}\text{la}^{55}\text{ne}^{33} - \text{ndzu}^{55} = \text{su}^{33} (= \text{tsu}^{33}) = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$   
 一緒に      DIR- 住む                      =SFX (=NMLZ)      =GEN 友人

$\text{da}^{33}\text{la}^{55} \text{mbi}^{55} = \text{su}^{33} (= \text{tsu}^{33}) = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$   
 一緒に      住む                      =SFX (=NMLZ)      =GEN 友人

(ある) 久しく会っていなかった友人

[名動詞性修飾表現]

ka<sup>55</sup>baa<sup>53</sup> tɕu<sup>33</sup>tɕu<sup>55</sup>k<sup>h</sup>u<sup>33</sup>-mẽ<sup>55</sup>-ndi<sup>55</sup> = su<sup>33</sup>(=tsu<sup>33</sup>) = ya<sup>33</sup> ɕe<sup>33</sup>pu<sup>55</sup> (te<sup>33</sup>=lɔ<sup>55</sup>)  
 ずいぶん 久しい DIR- NEG- 会う = SFX:pft (=NMLZ) = GEN 友人 (1 = CLF)

[形容詞性修飾表現]

ɕe<sup>33</sup>pu<sup>55</sup> ka<sup>55</sup>baa<sup>53</sup> tɕu<sup>33</sup>tɕu<sup>55</sup> k<sup>h</sup>u<sup>33</sup>-mẽ<sup>55</sup>-ndi<sup>55</sup> = su<sup>33</sup>(=tsu<sup>33</sup>) (te<sup>33</sup>=lɔ<sup>55</sup>)  
 友人 ← ずいぶん 久しい DIR- NEG- 会う = SFX:pft (=NMLZ) (1 = CLF)

## 8. 結語

ムニャ語の名詞句における修飾構造は属格助詞 /=ya<sup>33</sup>/ を伴って主名詞に前置する名詞的修飾表現と、名詞句の終端を示す NMLZ /=tsu<sup>33</sup>/ を伴って主名詞に後置する形容詞的修飾表現の 2 種類に大別できる。動詞的修飾表現は動詞句の終端に NMLZ を附して名詞化したのち属格助詞 /=ya<sup>33</sup>/ を伴って主名詞に前置する。したがって構造的には名詞的修飾表現に組み込まれる。また、指示詞は（名詞的）修飾表現の外側に前置し、数量表現は（形容詞的）修飾表現の外側に後置される。以上をまとめると、ムニャ語の名詞句の構造は、次のように図式化できる。

[指示詞] {名動詞句 = ya<sup>33</sup>} → [主名詞] ← {形容詞句 (=tsu<sup>33</sup>)} [数詞+量詞]

これらの要素をできるだけ多く満たす複雑な修飾構造の名詞句を使った例文を以下に掲げる。

(4)

tsẽ<sup>33</sup>ŋgu<sup>55</sup> ni<sup>33</sup>ni<sup>55</sup> tu<sup>33</sup>-ŋgu<sup>55</sup> = mi<sup>33</sup> pə<sup>33</sup>ts<sup>h</sup>i<sup>55</sup> [te<sup>33</sup>nu<sup>55</sup> = zu<sup>33</sup> [te<sup>33</sup> = pu<sup>55</sup>]]  
 服 ← 赤い DIR- 着る = NMLZ: 人 小さい 1 2 = CLF [ 1 = CLF: some]  
 ʔ<sup>33</sup>k<sup>h</sup>Λ<sup>55</sup> mu<sup>33</sup>.  
 ここ いる

赤い服を着た何人かの小さいこどもがここにいる。

(5)

ʔe<sup>55</sup>tsu<sup>33</sup>tsẽ<sup>33</sup>ŋgu<sup>55</sup> ni<sup>33</sup>ni<sup>55</sup>tu<sup>33</sup>-ŋgu<sup>55</sup> = mi<sup>33</sup> = tsu<sup>33</sup> ŋu<sup>55</sup> = ya<sup>33</sup> ra<sup>55</sup> ni<sup>33</sup>.  
 これ 服 ← 赤い DIR- 着る = NMLZ: 人 = NMLZ 私 = GEN 妹 DEC  
 その赤い服を着たこどもは、ぼくの妹だ。

最後に。ムニャ語の名詞句構造のすべての要素を満たす例文として「あの赤い服を着た小さなこどもふたりはぼくの妹（たち）だ。」という文を記述したかったのだが、修飾構造を何度も繰り返して確認を重ねているうちに発話協力者が混乱してしまい、未だ確認ができていない。残念ながら今後の課題として残さざるを得なかった。本稿をまとめるのに御協力いただいたコンサルタントの忍耐に心からの謝意を表したい。

## 略号

AGT	Agentive	AUX	Auxiliary	CLF	Classifier
DAT	Dative	DEC	Declarative	DIR	Directional prefix
GEN	Genitive	IRG	Interrogative	NEG	Negative
NMLZ	Nominalizer	PCL	Particle	PHB	Prohibitive
pl	plural	SFX	Suffix	sg	singular
[SWD] 澤田英夫 (2006) からの引用.					

## 参考文献

- 黄 布凡. 1985. 木雅語概況. 《民族語文》1985.3: pp. 62–77.
- 黄 布凡. 1991. 木雅語. 戴 庆厦, 黄 布凡, 傅 爱兰, 仁增旺姆, 刘 菊黄《藏緬語十五種》北京燕山出版社. pp. 98–131.
- 黄 布凡. 2007. 木雅語. 《中国的語言》商務印書館. pp. 903–923.
- 黄 布凡. 2009. 木雅語. 《川西藏區的語言》中國藏學出版社. pp. 18–58.
- IKEDA Takumi. 2015. Causative Constructions in the Mu-nya Language. Paper presented for the 48th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics. 8/20–23/2015 at University of California, Santa Barbara.
- 池田 巧. 2015. 木雅語作格特徴. (中文) 張 曦, 黃 成龍 (主編)《地域棱鏡 藏羌彝走廊研究新視角》北京: 學苑出版社. pp. 021–033.
- IKEDA Takumi. 2013. Verb predicate Structure in the Mu-nya language. Paper presented for the 3rd Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan. 9/2–4/2013 at Paris: Centre National de la Recherche Scientifique.
- 池田 巧. 2013. 「ムニャ語の述詞と文」澤田英夫 (編)『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2: 文の特徴付けと下位分類』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所. pp. 365–390.
- 池田 巧. 2010. 「ムニャ語の格助詞」澤田英夫 (編)『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所. pp. 15–28.
- IKEDA Takumi. 2008. 200 Example Sentences in the Mu-nya language. *ZINBUN*. No.40. Institute for Research in the Humanities, Kyoto University. pp. 71–140.
- IKEDA Takumi. 2007. Exploring the Mu-nya people and their language. *ZINBUN*. No.39. Institute for Research in the Humanities, Kyoto University. pp. 19–147.
- IKEDA Takumi. 2002. On pitch accent in the Mu-nya language. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*. 25.2. pp. 27–45.

池田 巧. 1998. 木雅語語音結構的幾個問題. (中文) 中央ユーラシア学研究会『内陸アジア言語の研究』第 XIII 号. pp. 83-91.

澤田英夫. 2006. 「名詞句構成要素の分類」東南アジア諸言語研究会 (編)『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』慶應義塾大学言語文化研究所. pp. 3-4. \*引用は [SWD] と略記。

**TBL:** 黄 布凡 (主编) 1992. 《藏缅语族语言词汇》[*A Tibeto-Burman Lexicon.*] 中央民族学院出版社.

**ZMC:** 编写组 1991. 《藏缅语语音和词汇》*Zang-Mian yu Yuyin he Cihui.* 中国社会科学出版社.

\* 本論考は、科学研究費補助金：基盤研究 (A) 23242019 「羌系諸語の歴史と西夏語の位置づけに関する実証的研究」(平成 23 ～ 27 年度，代表者：池田巧) の研究成果の一部である。





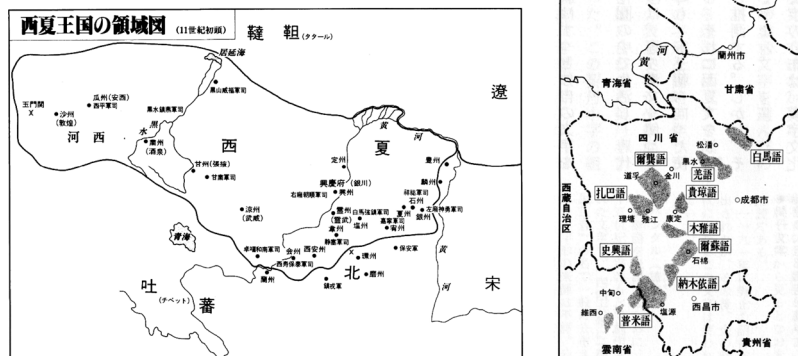
# 西夏語の名詞句構造について

荒川 慎太郎

## 0. 西夏語の概要<sup>1</sup>

## 0.1. 西夏語の概要

西夏語<sup>2</sup>は1038～1227年、中国西北部に存在した西夏国の言語であり、1036年に創製されたといわれる西夏文字資料によってのみ知られる。西夏が滅んだ後も西夏語・西夏文字は使用されていたが、現時点では1502年以降の西夏文字資料は見つかっておらず、その後死語・死文字と化したと考えられている。西夏語はチベット＝ビルマ語派に属し、ギャロン語や四川省西部のいわゆる川西走廊言語との関係も指摘されている。確認される限り、同語派の言語としては地域的に最北限といえる。



左：西夏の領域 右：西夏語と川西走廊言語との位置関係  
(図は共に西田 1989a: 15 より)

西夏語は死語であるため、全て文字資料が分析の対象となる。西夏文字資料は、仏典、漢語古典の翻訳、韻書、詩歌、法律集、各種契約文書、題記など多岐に及ぶ。現存する資料のうち9割以上を占めるのが仏典である。本報告では、筆者の

<sup>1</sup> 本節は荒川（2010a, 2013）冒頭の「西夏語の概要」の縮約修正版である。

<sup>2</sup> 簡便な概説は、西田 (1989b, 2012), Gong (2003) などを参照。

有するデータの都合により仏典から多くの例を引くことになる。

西夏文字は1文字がおよそ1語ないし1形態素であり、声調を持つ1音節を表す。全ての例文で西夏文字を示す。

## 0.2. 西夏語の音韻

西夏語の1音節は、CV(C)/T (T= Tone) の構造を持ち、西夏文字1文字で表される。西夏語の諸韻書は漢語音韻学に倣い、CV(C)/T を C-「声母」と -V(C)/T「韻母」に分けて記述する。声母を「反切上字」、韻母を「反切下字」に分析する。声調、声母、韻母の順に述べる。

まず、西夏語の声調は「平声」と「上声」と漢訳できる、2種類の声調が基本にあったことが確認されている。西夏時代の韻書『文海』では全ての西夏語音節が平声、上声ごとに大分類される。

西夏語韻書は、主に調音部位に基づき、声母を9種類に分類する。それらは、漢語訳すると「重唇音類・軽唇音類・舌頭音類・舌上音類・牙音類・齒頭音類・正齒音類・喉音類・流風音類」のように名称付けられる。西夏語音韻学ではこの分類と順序が厳密に守られる。

一方、西夏語韻母は平声「97 韻」・上声「86 韻」と細分化され、通し番号が付与されていた。声調の対立を除き韻母の形式が同じ韻類、すなわち「通韻」は「105 韻」に分類される。韻母番号と代表字が『文海』冒頭に記載されることから、こうした番号による整理が西夏語音韻学では通用していたことがうかがえる。漢語音韻学同様、「合口韻」（渡り音 -w- を持つ音節）は各韻類に含まれる。したがって、西夏語音節から初頭子音を除いた残りの部分は、105 種類よりもさらに多種であったということになる。

## 0.3. 本稿における表記

本稿における西夏語推定音は荒川（2014）による。声調は上付き小文字で示す（1 は平声、2 は上声）。声母・韻母表記の一覧は稿末に付す。『夏漢字典』（李編著 1997 他）の項目については適宜「李 3916」のようにコード番号も示す。語レベル以上の例文は通し番号・西夏文・推定音・グロス・訳注を基本とする。名詞・名詞句主要部、または派生接辞など、強調すべき要素には適宜下線を付した。（ ）内に出典文献と登場箇所も示す。この表記はおおむね出典の通りとする。

# 1. 西夏語名詞句の語順

## 1.0. 西夏語の語順と句構造

西夏語の基本語順は、SOV「主語・目的語・動詞」、Dem-N-Adj「指示詞・名詞・

形容詞」である。ただし「1, 2 人称代名詞, 複数人称」が主語・目的語となる場合, 人称代名詞独立形ではなく動詞に付加される人称接辞で表されることがある。この場合は一見 SVO, OVS のようにも見える。

名詞は状況に応じて格標識 (CM) をとる。動詞は, 接頭辞 (Pref) (否定・疑問的・完了態などを表わす), 動詞に後置する助動詞 (AV) (継続などの意味を持つ), 接尾辞 (Suf) (主に人称を表す) などが付加される場合がある。

### 1.1. 名詞句の語順

西夏語では 1 語あるいは 1 形態素が 1 音節である。しかし音形式から名詞・形容詞・動詞などの品詞を決定することはできないため, 従来は厳密な定義づけなく, 慣用的に「名詞・形容詞・動詞」などのカテゴリーが文法の説明に使用されてきた。例えば荒川 (2014: 130) で示したように, 「形容詞」というカテゴリーが必要かどうかは引き続き検討の余地がある。本稿では一般名詞など具体的な対象のあるもの, 抽象名詞, 動詞からの派生名詞, 代名詞, 数詞などを「名詞」として扱う。

名詞 (句) は, 形容詞が後置されるのを基本とする。ここで「基本」と断ったのは, 仏教語彙, 漢語借用語など, 「聖なる」「大きな」のような要素が名詞に前置される場合も多数あるためである。例は後述するが, これらは複合名詞的に扱うのが適当かもしれない。本来は, 𐽀𐽂𐽄<sup>2</sup>lhe? <sup>2</sup>lenq 国+大きな=大国 (金剛 06-5+1) のように, 他のチベット=ビルマ語派同様, N-Adj が基本語順であったと考えられる。なお, 指示代名詞 (Dem)・疑問代名詞 (Q), 数詞 (Num) は名詞に前置される。

名詞修飾節 (AC) は名詞に先行する。関係節を示す要素は特に無い。所有関係は「所有者・属格標識 (Gen)・所有物」のように表される。

名詞と名詞の関係, 名詞と動詞の関係を表す「格」は, 名詞に後置する格標識によって表される場合があるが, 明らかに格関係にありながら標識を欠く場合も多いため, 義務的な要素とは言えない。

以上の状況をスロット式に表記すると以下ようになる。もちろんこれらの全ての要素が表出するような例文は確認できないため, 一部推測によるものであることを断っておく。

AC	N.Gen	Dem	Num	N	Adj	CM
----	-------	-----	-----	---	-----	----

### 1.2. 本稿の構成

まず 2. で名詞を, 一般名詞, 動詞+派生接辞による名詞, 代名詞, 数詞の順で説明し, 次に 3. で名詞の修飾構造を, 形容詞の説明, 修飾節による表現, 所有表現の順に述べる。

## 2. 各種の名詞

### 2.1. 名詞類

#### 2.1.1. 一般名詞

初めに音形式から、名詞を概観する。名詞は1音節から複数の音節に及ぶものがある。西夏語では、仏教語彙以外で3音節以上の語彙<sup>3</sup>は一般的ではなかったと考えられる。

#### 1 音節語の例

𐰇𐰺 <sup>2</sup>lyuq 身 (金剛 42-3)

𐰇𐰺 <sup>1</sup>tsyer 法 (金剛 64-5)

#### 2 音節語の例

𐰇𐰺 <sup>2</sup>jyan <sup>1</sup>chyu 衆生 (金剛 05-2)

𐰇𐰺 <sup>2</sup>ldwIr <sup>2</sup>ryeqr 經典<sup>4</sup> (金剛 00-1)

#### 3 音節以上の語の例

𐰇𐰺 <sup>1</sup>a? <sup>1</sup>lo <sup>1</sup>han 阿羅漢 (金剛 24-4)

𐰇𐰺 <sup>2</sup>meu: <sup>1</sup>san <sup>1</sup>po <sup>1</sup>tyen 阿耨多羅三藐三菩提 (金剛 64-2)

#### 2.1.2. 複合名詞

2音節語と異なり、別々の語(名詞同士でない場合もある)が結合して生じるのが複合名詞<sup>5</sup>である。次の例のように、漢語と語順の異なる場合もある。

𐰇𐰺 <sup>2</sup>bi: <sup>2</sup>be: 低い+高い=高低, 高さ (金剛 64-1)

形容詞が名詞に前置される漢語的な語順の語彙で、ほぼ複合名詞として定着したものもある。

𐰇𐰺 <sup>6</sup>tha <sup>1</sup>ti:q 大いなる+願う=大願 (金剛 05-4)

<sup>3</sup>『番漢合時掌中珠』には𐰇𐰺 <sup>2</sup>rar <sup>2</sup>ki: <sup>1</sup>kyu 「吃兜芽(野菜の一。カブ?)」(李 1994: 405) など3音節語語彙があるが非常に少数である。党項族人名では3音節3文字も一般的だが、ここでは言及しない。

<sup>4</sup>仏典の「~経」はこの二語で訳される。

<sup>5</sup>Gong (2003: 614-615) では、「名詞+名詞」ばかりでなく「名詞+形容詞+名詞」など様々な複合語が紹介されている。ただし本節では全ては扱わない。

<sup>6</sup>𐰇𐰺 は西夏語でも数少ない「異音同字」で、韻書の別々の場所に存在し、異なる推定音を持つ。李 4456 <sup>2</sup>tha, 李 4457 <sup>2</sup>lenq。意味は共に「大きい」。前者は漢語の借用、後者は本来の西夏語の語彙であろう。

<sup>2</sup>si:    <sup>2</sup>ldeu    <sup>2</sup>zi:    <sup>1</sup>me:    <sup>1</sup>po    <sup>1</sup>tyen    <sup>2</sup>ngwu  
 具える    べき    皆    寂    菩提    である  
 具えるべき（こと）は皆寂菩提である（金剛科 176）

<sup>9</sup> 李 3207 には、皇帝の自尊「朕」として籒<sup>2</sup>be: が挙げられるが、ここでは一人称代名詞には含めない。

A 𐰽<sup>1</sup>tha: : 名詞, 「〜と」, 「〜に随い」, 「〜により」, 「〜を以て」, 「〜よりも」

B 𐰽<sup>2</sup>tha: : 「〜の, 〜を」, 「〜の上」, 「〜の間」, 「〜の所」, 「〜の中」

いくつか例文を示す。□は遠称代名詞, 下線      は後続する要素である。

#### A 𐰽<sup>1</sup>tha: と後続要素の用例

名詞 (名詞句)

- (03) 𐰽 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾  
<sup>1</sup>sha: <sup>2</sup>wi <sup>2</sup>tha <sup>2</sup>wi <sup>2</sup>u <sup>2</sup>o <sup>1</sup>ti:q <sup>1</sup>kyuq 𐰽<sup>1</sup>tha: <sup>2</sup>wi <sup>2</sup>u  
 舎衛 大城 CM 入る 食べ物 求める Dem 城 CM (金剛 07-4)  
 舎衛大城に入って食べ物を求め, 𐰽<sup>1</sup>tha:城内にて… (金剛 07-4)

- (04) 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾  
<sup>2</sup>cha: <sup>1</sup>wi <sup>1</sup>zi:q <sup>2</sup>li: <sup>2</sup>cha: <sup>2</sup>je: <sup>1</sup>zi:q <sup>1</sup>menq <sup>1</sup>nyl <sup>1</sup>e: <sup>2</sup>le: 𐰽<sup>1</sup>tha: <sup>1</sup>nyl <sup>2</sup>rer <sup>1</sup>e: <sup>2</sup>do <sup>1</sup>tshweu  
 徳 生む童子 徳 有する童女 二 CM 見る Dem 足 CM 礼拝する  
 徳を生む童子, 徳を有する童女二人を見て, 𐰽<sup>1</sup>tha:二つの足を礼拝し… (華嚴 77, 001-6)

例文 (04) は指示代名詞と数詞, 名詞の語順を考える上でも貴重な例文と言える。

𐰽<sup>1</sup>byu 「〜に随い」

- (05) 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾  
<sup>2</sup>to <sup>2</sup>ne: <sup>2</sup>lu <sup>1</sup>jyIr 𐰽<sup>1</sup>tha: <sup>1</sup>byu <sup>1</sup>ni: <sup>1</sup>phI:  
 悉く 王 座 捨てる Dem CM 家 捨てる  
 悉く王座を捨て 𐰽<sup>1</sup>tha:に随って (=そして) 家を捨てる (=出家する)。  
 (法華 1, 036-1~2)

#### B 𐰽<sup>2</sup>tha: と後続要素の用例

𐰽<sup>1</sup>e: 「〜の, 〜を (〜に)」 (𐰽<sup>1</sup>e: は出現環境により, 属格 (Gen), 対格 (Acc), 与格など複数の機能を持つ)

- (06) 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾 𐰽𐰾  
<sup>2</sup>no <sup>2</sup>ryeqr <sup>1</sup>ny'e: <sup>1</sup>ku 𐰽<sup>2</sup>tha: <sup>1</sup>e: <sup>2</sup>cha: <sup>1</sup>o"  
 安樂 住する 即ち Dem Gen 功德  
 安樂に住すれば即ち 𐰽<sup>2</sup>tha:功德 (は) (法華 5, 61-1)



- 動詞接頭辞と動詞語幹の間に挿入される場合は、疑問文・否定文で確認できる。

- (10) 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍  
<sup>1</sup>soq <sup>1</sup>tuq <sup>2</sup>lenq <sup>1</sup>tuq <sup>1</sup>ryur <sup>2</sup>kyeq <sup>2</sup>u <sup>2</sup>lhI: <sup>2</sup>mwi <sup>2</sup>ngo:r <sup>2</sup>ngo:r <sup>1</sup>a? <sup>1</sup>chI: <sup>2</sup>ryeqr <sup>1</sup>II:  
 三 千 大 千 世 界 CM 微塵 一切 QP Dem 多い なり  
 三千大千世界中の一切の微塵, (それは) 多いであろうか (金剛 32-4, 5)

### 2.3.3. 疑問代名詞

Gong (2003: 617) に整理された「最も一般的な」疑問詞に, 西田 (1989b: 413r) に挙がる疑問詞を追加して示せば, 以下のようになる。

- 人物「誰」𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>swI: 𐰽𐰺𐰍 <sup>2</sup>swI:  
 事物「何」𐰽𐰺𐰍 <sup>2</sup>wa  
 場所「どこ」𐰽𐰺𐰍 <sup>2</sup>ryonq  
 選択「どちら, どれ」𐰽𐰺𐰍 <sup>2</sup>the:  
 理由・方法「なぜ, どのように」𐰽𐰺𐰍 <sup>2</sup>the: <sup>2</sup>so:  
 分量「どのくらい」𐰽𐰺𐰍 <sup>2</sup>wa <sup>1</sup>zenq  
 種別「何種」𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>zenq <sup>2</sup>ml

- (11) 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍  
<sup>2</sup>thI: <sup>2</sup>ldwIr <sup>2</sup>ryeqr <sup>2</sup>wa <sup>2</sup>me:?  
 Dem 經典 何 名付ける  
 この經典は何と名付け… (金剛 31-2~3)

- (12) 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍  
<sup>1</sup>swI: <sup>1</sup>dyu <sup>1</sup>no” <sup>1</sup>swI: <sup>1</sup>me:  
 誰 有する また 誰 ない  
 誰が有して, また誰が有しないのか (金剛頌 063-3)

また「何+上に」で「どのような」を表している例も見られる。

𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 <sup>2</sup>wa <sup>2</sup>syu <sup>1</sup>genq <sup>2</sup>qyi どのような (何+上) 利益 (金剛纂 07-3)

### 2.4. 数詞

数詞は漢語同様, 十進法である。この内, 「十」には異なる文字・音による 3 種が確認されている。最も一般的な「十」を含めて基本数詞を記せば,

- 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>leu 「一」, 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>nyI' 「二」, 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>soq 「三」, 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>ldyIr 「四」, 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>ngwI 「五」,  
 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>cheu: 「六」, 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>sha:q 「七」, 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>a:r 「八」, 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>gwyI' 「九」, 𐰽𐰺𐰍 <sup>2</sup>aq 「十」

𪛗𪛗 <sup>1</sup>sha: <sup>2</sup>ryeqr' 十方の (金剛 05-4)

貝 飢 翁 聚 處 窺 彫 鐫<sup>1</sup>, a:r<sup>2</sup>, i:r<sup>1</sup> ldyIr<sup>1</sup> tuq<sup>2</sup> khI: <sup>2</sup>ri:r<sup>1</sup> no<sup>1</sup>, eu: <sup>1</sup>thon 八百四千萬億那  
 由他 (金剛 46-4)

(13) 襪 𧄞 𧄟 𧄠 𧄡 𧄢 𧄣

<sup>1</sup>tsyer    <sup>2</sup>lyu    <sup>1</sup>'eu:    <sup>1</sup>no''<sup>2</sup>phwya'    <sup>1</sup>leu    <sup>2</sup>tseu

法（を説く）集会の因縁（という）分 第一（金剛 06-6）

𪛗𪛗 <sup>1</sup>aʔ <sup>1</sup>she: 一順 (金剛科 183) 𪛗𪛗 <sup>1</sup>aʔ <sup>1</sup>jo:n 一遍 (金剛纂 05-5)

𐄢𐄣𐄤𐄥𐄦 <sup>1</sup>a? <sup>2</sup>khI: <sup>1</sup>gwyI' <sup>1</sup>tuq 一万九千… (金剛纂 40-2)

<sup>12</sup> 西田 (1989b: 413) 「一人, 一滴」, 李 5981 「一尺, 一卷」など。一方『金剛經』集では𑖀𑖄𑖡𑖅 <sup>1</sup>leu <sup>2</sup>dzwo: 一人(集 40-3) のように通常の数詞が使われることがある。

- (14) 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺  
 ¹lo: ¹ri:r ²ryeqr ¹ll:  
 福 得る 多い なり  
 福を得る（こと）は多い（金剛 59-1）

『金剛經』では「大きい」が頻出するが、前述のように、名詞に前置される場合も多い。

𐰽𐰺 𐰽𐰺 ²tha ²wi 大城（金剛 07-4） 𐰽𐰺 𐰽𐰺 ²lhe? ²lenq 大国（金剛 06-5+1）

一方、「諸～」は名詞に前置される修飾要素である。

𐰽𐰺 𐰽𐰺 ¹ryur ¹'e: 諸相（金剛 14-4）

複数の形容詞が名詞を修飾する場合など、形容詞は名詞に前置される。

𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 ¹se: ²miq ²cyir ²wa 細い，末の方便（金剛科 262）

仏典においてはこうした例もまれではなく、修飾構造として述べることもできよう。被修飾部を□で表す。

- (15) 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺  
 ²nIr ¹kyuq ¹byu ¹kyiq ²ja:  
 黄色い 求め 随う 金剛  
 黄色い，求めに随う金剛（金剛 03-3）

- (16) 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺  
 ²zi: ²phyu ²phyu ²tseu ¹zyIr ¹dyu ¹tsyer  
 最 上 上 第 稀 有 法  
 最上，第一の（上+第）稀有なる法（金剛 30-4）

最上級「最も」𐰽𐰺 ²zi: も頻出する。文の述部となる例で示せば次のようなものがある。

- (17) 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺 𐰽𐰺  
 ²tha ²syen ²mo ¹ny'i: ¹lo: ²zi: ¹na  
 大 聖 牟尼 福 最も 深い  
 大聖（釈迦）牟尼の福は最も深い（金剛纂 30-1）

仏典では2音節語「一切の～」という表現が頻出する。修飾する名詞に後置される。

𑖀𑖩𑖩𑖩 <sup>1</sup>tsyer <sup>2</sup>ngo:r <sup>2</sup>ngo:r 法一切 (金剛 52-5)

### 3.2. 名詞の修飾構造

次に修飾節について述べる。修飾節と名詞が格関係にあるものを「ウチの関係」、ないものを「ソトの関係」としてそれぞれの例を挙げる。被修飾部を□で表す。

ウチの関係

- (18) 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 □  
<sup>2</sup>nga <sup>2</sup>rI:r <sup>1</sup>tshe: <sup>1</sup>tsyer  
 私 Pref 説く 法  
 私が説いた法 (金剛 17-5)

- (19) 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 □  
<sup>2</sup>phyu <sup>2</sup>tseu <sup>2</sup>kyeq <sup>2</sup>ka <sup>1</sup>a? <sup>1</sup>lo <sup>1</sup>han  
 上 第 欲 離れる 阿羅漢  
 第一の、欲を離れた阿羅漢 (金剛 24-4)

ソトの関係

- (20) 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 □  
<sup>1</sup>a? <sup>1</sup>lo <sup>1</sup>han <sup>2</sup>I: <sup>2</sup>ldeu <sup>1</sup>zI:r <sup>1</sup>tsyer  
 阿羅漢 言う AV 実法  
 阿羅漢と言うべき実法 (金剛 23-6)

- (21) 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 𑖀𑖩𑖩𑖩 □  
<sup>2</sup>kha:n <sup>2</sup>kha: <sup>1</sup>miq <sup>2</sup>ngwer <sup>2</sup>syu <sup>2</sup>lyuq <sup>1</sup>kaq  
 恒河 沙 pl ような 身命  
 恒河の沙(々)のような身命 (金剛 33-6)

### 3.3. 所有表現

最後に所有表現について述べる。前述の格標識 𑖀𑖩𑖩𑖩 <sup>1</sup>e: が名詞と名詞の間に使われると所有関係を示す。

- (22) 𐰚𐰆𐰏𐰤 𐰚𐰆𐰏𐰤 𐰚𐰆𐰏𐰤 𐰚𐰆𐰏𐰤  
<sup>2</sup>nl: <sup>2</sup>mi' <sup>2</sup>jyan <sup>2</sup>tse: <sup>1</sup>'e: <sup>1</sup>wi:q <sup>1</sup>jl:  
 普賢 菩薩 Gen 眷属  
 普賢菩薩の眷属 (莫 020)

- (23) 𐰚𐰆𐰏𐰤 𐰚𐰆𐰏𐰤 𐰚𐰆𐰏𐰤 𐰚𐰆𐰏𐰤  
<sup>1</sup>ryur <sup>2</sup>jyan <sup>2</sup>tse: <sup>1</sup>'e: <sup>2</sup>gwi:  
 諸 菩薩 Gen 言葉  
 諸菩薩の言葉 (金剛 08-5)

明らかな所有関係でありながらこの格標識を用いない例も少なくない。

- (24) 𐰚𐰆𐰏𐰤 𐰚𐰆𐰏𐰤 𐰚𐰆𐰏𐰤  
<sup>2</sup>ja:n <sup>2</sup>tse: <sup>2</sup>ne: <sup>1</sup>wu:'  
 菩薩 慈悲  
 菩薩の慈悲 (金剛纂 24-3)

#### 4. おわりに

西夏語の名詞句構造や修飾関係は従来あまり記述されていたとはいえない。現在話者のいない言語という制約，現存する資料の内容的な制約はあるものの，今後も用例の収集と分析に努めたい。

#### 略号

AC: 名詞修飾節, Acc: 対格, Adj: 形容詞, AV: 助動詞, CM: 格標識,  
 Dem: 指示代名詞, Gem: 属格, N: 名詞, Num: 数詞, O: 目的語, pl: 複数標識,  
 Pref: 動詞接頭辞, QP: 疑問接頭辞, Q: 疑問代名詞, S: 主語, Suf: 人称接辞,  
 V: 動詞

#### 出典と略称

金剛經：金剛般若波羅密多經  
 金剛經頌：金剛般若波羅密多經頌  
 (以上，荒川 2014)  
 華嚴 77：大方広仏華嚴經卷第七十七 (荒川 2011)  
 法華：妙法蓮華經 (西田 2005)  
 金剛科：金剛般若波羅密多經頌科文  
 金剛經纂：金剛般若波羅密多經纂  
 莫：莫高窟西夏文題記 (荒川 2010b)

## 参考文献

- 荒川慎太郎. 2010a. 「西夏語の格標識について」. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』(澤田英夫編). 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp. 153–174.
- . 2010b. 「莫高窟・榆林窟・東千仏洞西夏文題記訳注」. 『平成 19～21 年度科学研究費補助金研究成果報告書「西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究」』(研究代表者: 荒川慎太郎). pp. 45–106.
- . 2010c. 「西夏語の遠称指示代名詞の使い分けについて」. 『日本言語学会第 141 回大会予稿集』(日本言語学会). pp. 218–223.
- . 2011. 「プリンストン大学所蔵西夏文華嚴經卷七十七訳注」. 『アジア・アフリカ言語文化研究』81. pp. 147–305.
- . 2013. 「西夏語の文について」. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2: 述語と発話行為からみた文の下位分類』(澤田英夫編). 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp. 151–173.
- . 2014. 『西夏文金剛經の研究』. 松香堂.
- Gong Hwang-Cherng (龔煌城). 2003. “Tangut.” In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*. London and New York: Routledge. pp. 602–620.
- 李範文. 1994. 『宋代西北方音』. 北京: 中国社会科学出版社.
- 李範文編著. 1997. 『夏漢字典』. 北京: 中国社会科学出版社. (増補修正本 2008, 簡明版 2013)
- 聶鴻音. 2013. 「西夏語の名物化後綴  $sji^2$  和  $lew^2$ 」. 『語言研究』第 33 卷 2 期. pp. 119–121.
- 西田龍雄. 1989a. 『西夏文字の話』. 大修館書店.
- . 1989b. 「西夏語」. 亀井孝ほか(編)『言語学大辞典 第 2 巻 世界言語編(中)』. 三省堂. pp. 408–429. {西田 2012 に修訂再録}
- . 2005. 『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華經」写真版(鳩摩羅什訳対照)』. 創価学会.
- . 2012. 『西夏語研究新論』. 松香堂.

## 付録: 本稿における西夏語音表記

### 1. 声調 (上付き小文字で示す)

平声 1      上声 2

(声調不明 ? 平声と思われるもの 1? 上声と思われるもの 2?)

### 2. 声母

重唇音類 p    ph    b    m

軽唇音類 f                    v                    w

舌頭音類 t    th    d    n

舌上音類 ty'    ty'h    dy'    ny'

牙音類 k    kh    g    ng

齒頭音類 ts    tsh    dz            s

正齒音類 c    ch    j    ny    sh

喉音類 '    h

流風音類 l    lh    ld            z    r

(声母不明 ? 推定に何らかの根拠を持つもの 子音表記+ ?)

## 3. 韻母（西夏語 105 韻の分類と表記を次のようにする。）

第 1 環				第 2 環				第 3 環			
1	R. 1	1.1=2.1	u	R. 61	1.58=2.51	uq		R. 80	1.75=2.69	ur	
2a	R. 2	1.2=2.2	yu	R. 62	1.59=2.52	yuq		R. 81	1.76=2.70	yar	
2b	R. 3	1.3=2.3	yu								
3	R. 4	1.4=2.4	u:								
1	R. 5	1.5=2.5	u'								
2	R. 6	1.6	yu'								
3	R. 7	1.7=2.6	u:'								
1	R. 8	1.8=2.7	i					R. 82	1.77=2.71	ir	
2	R. 9	1.9=2.8	yi	R. 63	1.60=2.53	yeq		R. 83	1.78	yir	
3a	R. 10	1.10=2.9	i:								
3b	R. 11	1.11=2.10	i:					R. 84	1.79=2.72	i:r	
1	R. 12	1.12=2.11	i'								
2	R. 13	1.13	yi'								
3	R. 14	1.14=2.12	i:'								
1	R. 15	1.15=2.13	in	R. 64	1.61=2.54	enq					
2	R. 16	1.16	yin	R. 65	1.62=2.55	yenq					
1	R. 17	1.17=2.14	a	R. 66	1.63=2.56	aq		R. 85	1.80=2.73	ar	
2	R. 18	1.18=2.15	ya					R. 86	1.81	yar	
3a	R. 19	1.19=2.16	a:	R. 67	1.64=2.57	a:q		R. 87	1.82=2.74	a:r	
3b	R. 20	1.20=2.17	a:								
4	R. 21	1.21=2.18	ya:								
1	R. 22	1.22=2.19	a'					R. 88	1.83	ar'	
2	R. 23	2.20	ya'					R. 89	2.75	yar'	
3	R. 24	1.23=2.21	a:'								
1	R. 25	1.24=2.22	an								
2	R. 26	1.25=2.23	yan								
3	R. 27	1.26=2.24	a:n								
1	R. 28	1.27=2.25	I	R. 68	1.65=2.58	iq		R. 90	1.84=2.76	Ir	
2	R. 29	1.28=2.26	yI	R. 69	1.66=2.59	yiq		R. 91	1.85	yIr	
3a	R. 30	1.29=2.27	I:	R. 70	1.67=2.60	i:q		R. 92	1.86=2.77	I:r	
3b	R. 31	1.30=2.28	I:								
1	R. 32	1.31	I'	R. 71	1.68	iq'					
2	R. 33	1.32=2.29	yI'								
3				R. 72	1.69=2.61	i:q'					



1	R. 34	1.33=2.30	e			R. 93	1.87=2.78	er
2	R. 35	1.34=2.31	ye			R. 94	1.88=2.79	yer
3a	R. 36	1.35=2.32	e:					
3b	R. 37	1.36=2.33	e:					
1	R. 38	1.37=2.34	e'					
2	R. 39	1.38	ye'					
3a	R. 40	1.39=2.35	e:'					
3b	R. 41	1.40	e:'					
1	R. 42	1.41=2.36	en					
2	R. 43	1.42=2.37	yen					
1	R. 44	1.43=2.38	eu					
2	R. 45	1.44=2.39	yeu					
3a	R. 46	1.45=2.40	eu:					
3b	R. 47	1.46	eu:					
1	R. 48	2.41	eu'					
2	R. 49	1.47	yeu'					
1a	R. 50	1.48	o	R. 73	1.70=2.62	oq	R. 95	1.89=2.80 or
1b	R. 51	1.49=2.42	o					
2	R. 52	1.50=2.43	yo				R. 96	1.90=2.81 yor
3	R. 53	1.51=2.44	o				R. 97	1.91=2.82 o:r
1	R. 54	1.52=2.45	o'					
2	R. 55	1.53=2.46	yo'					
1	R. 56	1.54=2.47	on	R. 74	1.71=2.63	onq		
2	R. 57	1.55=2.48	yon	R. 75	1.72=2.64	yonq		
3	R. 58	1.56=2.49	o:n					
1	R. 59	1.57	o''					
2	R. 60	2.50	yo''					
1							R. 98	2.83 wor
2							R. 99	2.84 ywor
1				R. 76	2.65	eqr		
2				R. 77	1.73=2.66	yeqr		
1				R. 78	2.67	eqr'		
2				R. 79	1.74=2.68	yeqr'		
							R.100	1.92=2.85 ylr
							R.101	1.93=2.86 yer'
				R.102	1.94	woqr		
	R.103	1.95	ya:n					
	R.104	1.96	un					
	R.105	1.97	ua					

# チノ語悠楽方言の名詞句構造とその周辺 \*

林 範彦

## 1. はじめに

チノ語（基諾語；Jino, Jinuo）は中国雲南省景洪市基諾郷および補遠山地区に居住するチノ族（基諾族）の話す言語である。系統的にはチベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支に属する。方言としては大きく悠楽方言と補遠方言に分かれる。チノ族の人口は 23,413 人（2010 年の人口統計）であるが、流暢な話者人口の詳細は不明である<sup>1</sup>。本稿では悠楽方言のデータを用いる<sup>2</sup>。以下、本稿では「チノ語」と略する。



図1 チノ族居住区 [悠楽方言] (加藤 2000 を筆者修正)

\* 本稿は 2013 年 7 月 7 日に京都大学人文科学研究所で行われた第 1 回 TB+ 会議で口頭発表した内容に基づいている。同会議を主催された池田巧教授をはじめ、ご参会の研究者から多くの貴重なご意見をいただいた。ここに記して謝意を表したい。なお、本稿におけるすべての誤りは当然筆者個人に帰する。

<sup>1</sup> Bradley (2007) および Endangered Language Project では悠楽方言の話者は 10,450 人未満、補遠方言の話者は 1,000 人未満であると推定している。悠楽方言について Endangered Language Project は 2014 年 12 月の時点で Severely endangered (深刻な危機に瀕した状態) の評価を与えている。

<sup>2</sup> 本稿では主として 2005 年から 2014 年までに現地調査により得られた悠楽方言バカ方言のデータを用いる。例示するデータは自然発話のものを中心とするが、記述の網羅性のために作例データもあわせて使用する。自然発話の例は NU、作例データについては EL の表示を日本語訳の末尾に付す。調査協力者は主に W 氏 (1980 年代生まれ; 女性), Y 氏 (1950 年代生まれ; 女性) である。本研究は日本学術振興会科学研究費補助金 (ないし補助事業) および三島海雲記念財団の援助を受けている。また現地調査については中国雲南民族博物館 (謝沫華館長・高翔氏)・西双版纳州民族宗教局 (楊紹華氏) ほかの協力も得た。ここに記して謝意を表したい。

類型論的にはチノ語は SV あるいは APV の語順をとる。また、名詞修飾表現については、形容詞は名詞に後置され、連体節（いわゆる関係節）はデフォルトでは名詞に前置される。チノ語は周辺諸言語に比して膠着性の高い言語である。

本稿ではチノ語の名詞句構造とその周辺について記述する。本稿は以下の手順で論じる。第 2 節ではチノ語の名詞句構造の概要を示す。また、内部に見られる Slot についても概説する。第 3 節と第 4 節では名詞句構造の外的関係を表す表現を取り扱う。第 3 節では所有表現を取り上げる。第 4 節では名詞句と連体節の関係を記述する。第 5 節で結論を述べる。

なお、チノ語の先行研究としては主として蓋（1986）、林（2009）、蔣（2010）などがある。本稿はチノ語の名詞句構造を類型論的な観点<sup>3</sup>から記述し、林（2009）を修正・補完する<sup>4</sup>。蓋（1986）と蔣（2010）は本稿とは悠楽方言の異なる変種を扱っているが、本稿の記述との重要な差異は注で言及する。

## 2. チノ語の名詞句の内部構造

### 2.1. 名詞の基準と特徴

まず、品詞としての名詞の基準を定める。チノ語の主要な内容語の品詞としては名詞・動詞・形容詞がある<sup>5</sup>。これらは (a) 語根に対して否定辞が前接しうるか、(b) 生産的な重複法が見られるか、の 2 点により峻別されうる。表 1 を見られたい。

	N	V	Adj
(a) 語根への否定辞の前接	—	+	+
(b) 生産的な重複法	—	—	+

表 1 チノ語の主要な内容語の品詞認定基準

表 1 に掲げたように、チノ語の名詞は (a), (b) の特徴を持ち合わせていない。これにより、名詞は動詞と形容詞から排他的に決定される。このようにして決定されたチノ語の名詞は天候や衣食住などに関する具象物、地名・人名、動物相・植物相、親族名称、一部の抽象概念などの意味範疇に集中的に分布する。

チノ語の名詞の形態的構造として特に注意すべきなのは、a- 接頭辞が語根に付

<sup>3</sup> 名詞句構造の類型論的な概説のうち、近年のものとして Dryer (2007) や Dixon (2010) が挙げられる。また所有表現の研究としては Aikhenvald and Dixon (eds.) (2013) が、アジア諸言語の名詞化研究としては Yap (et al. eds.) (2011) がある。東南アジア諸語の名詞句構造の問題を取り扱ったものに三上（編）(2006) がある。

<sup>4</sup> 基本的な分析は林（2009）のそれを保持しているが、i) 後置詞を 2 群に分類し（本稿 2.2.5 節参照）、ii) 後置詞 =e44 を「名詞句拡張子」とする分析（本稿 3.3 節参照）は林（2009）から修正を施した主な部分である。また (ii) については Hayashi (2010) から修正している点に注意されたい。

<sup>5</sup> このほかの内容語として副詞がある。表 1 に掲げた基準では、チノ語の副詞は (a), (b) ともにその特徴を持っていないため、名詞と形態法上区別されないこととなる。チノ語の名詞と副詞は、前者が項構造に含まれうるのに対し、後者は含まれないことや、後者は動詞を修飾しうるのに対し、前者はそれが不可能なことなどが区別の基準として用いられる。

加されているものが多いことである<sup>6</sup>。ただし、名詞は項構造に含まれるなどの統語的基準によっても決定される。そのため、a-接頭辞が付加されていないものも名詞となりうる。

(1) a. [a-接頭辞の付加されたもの]

a55pu44「父」, a55mɔ44「母」, a55mɛ55「ご飯」, a33la55「枝」, a55tu44「つぼみ」, a33no55「土」, a55khrɔ55「川」, a33ø55「熊」, a55mɯ55「毛」など。

b. [その他の名詞の例]

mjo55「草」, vɔ55「竹」, ja55tha55「岩石」, u33tha55「山」, ŋa33zɔ55「鳥」, pu55xɔ44「蟻」, to55mɪ55「しっぽ」, vu55khe55「頭」, khju55pe55「喉」など。

音節構造としては2音節名詞が一般的である。単音節名詞や3音節以上の名詞も存在するが、2音節名詞に比べて数は少ない。

また、チノ語の名詞の下位分類として代名詞が存在する。チノ語の代名詞は日本語の代名表現などと異なり、閉じた集合をなす。以下の表のように、1人称・2人称・3人称の各人称に対して、単数・双数・複数の区別がなされる。そして、人称・数に応じて、主格形・所有格形・斜格形の区別がある。表2にチノ語の人称代名詞の一覧を示す。

	単数			双数		複数		
	主格	斜格		主格	斜格	主格	斜格	
		所有格	対格				所有格	対格
1 人称	ŋɔ42	ŋɔ35		a33ni55/ ŋa55ni55	a33ni42	a33ŋu55 (INCL) ŋa55vu55 (EXCL)	a33ŋu42/ ŋu55 (INCL) ŋa55ve55 (EXCL)	
		ŋɔ33e55	ŋɔ35					
2 人称	nə42	nə35		ni55ŋ44	ni55ni42	ni55ju44	ni55ju35	
		nɛ35	nə35				ni55vɛ55	ni55ju35
3 人称	khɣ42/ thu42	khɣ35/a33nə35		khɣ33ni55	khɣ33ni42	khɣ33ma55/ jo33ma55	khɣ33ma42/ jo33ma42	

表2 チノ語の人称代名詞の一覧

<sup>6</sup> 傅 (1996) は中国のチベット・ビルマ諸語における A-接頭辞をもつ語彙について二次資料を用いて調査した。その結果、A-接頭辞が付加された語彙をチノ語が最も多く有していることが判明した。

## 2.2. 名詞句構造の概要

2.1 節で設定した名詞を包摂する名詞句構造を模式化すると、図 2 の通りになる。

Slot 1	Slot 2	Slot 3	Slot 4	Slot 5
指示詞	名詞 (- 接尾辞)	形容詞	数詞 - 類別詞 (- 接尾辞)	= 後置詞

図 2 チノ語の名詞句構造のモデル<sup>7</sup>

意味的には Slot 1 と Slot 3, Slot 4 は Slot 2 を修飾する関係にあると言えよう。しかし、統語的には Slot 1, 2, 3, 4 はそれぞれ並列関係にある<sup>8</sup>。すなわち、Slot 1, 2, 3, 4 のすべてが共起しうる場合もあれば、いずれか 1 つの Slot のみの生起も許される。そして Slot 1 ～ 4 の生起に対して Slot 5 の後置詞が後接しうる。なお、以下の説明で Slot 2 に入る名詞を「主名詞」と呼ぶことがある。(2) に 1 例を示す。

- (2)    *khɿ44 kɔ55tɔ44    a33ŋɿ55 thi55-khrɔɛ42*  
          あれ    服                    赤い            1-CLF  
          あの一枚の赤い服

(2) は Slot の 1, 2, 3, 4 が並列した例である。Slot 1, 3, 4 が Slot 2 を意味的には修飾していると思われるものの、各 Slot は統語的には並列構造をなしている。*khɿ44* 「あれ」も、*kɔ55tɔ44* 「服」も、*a33ŋɿ55* 「赤い」も、*thi55-khrɔɛ42* 「1 枚」もいずれも単独で名詞句を構成しうる。

それでは以下で各 Slot につき、概説を施す。

### 2.2.1. Slot 1：指示詞

チノ語の代表的な指示詞は以下の表 3 にまとめられる。

	近称	遠称 1 系	遠称 2 系
直格形	<i>ɕi44</i>	<i>khɿ44</i>	<i>lɔ55</i>
斜格形	<i>ɕi35</i>	<i>khɿ35</i>	<i>lɔ35</i>

表 3 チノ語の代表的な指示詞

近称の形式は発話者と受話者の双方が視認（知覚あるいはイメージ）でき、主として発話者側に距離的に（あるいは心理的に）近い事物に対して用いられる。一方、遠称の形式は 1 系・2 系ともに発話者と受話者の双方から距離的に（ある

<sup>7</sup> この名詞句構造のモデルについては蓋（1986）も蔣（2010）も示していない。

<sup>8</sup> 特に主名詞の後ろにおかれた要素が「統語的に並列関係」にある点は第 4 節で「同格関係」であると分析される点に注意されたい。

いは心理的に) 遠い事物に対して用いられる。このうち、遠称 1 系は発話者・受話者の双方が視認できる事物に用いられるのに対し、遠称 2 系は発話者・受話者から視認できない事物に対して用いられることが一般的である。

直格形は一種のデフォルトの形式と考えられる。すなわち、主語や目的語としても、また名詞句構造の Slot 1 にも生起しえる。一方、斜格形は直格形と声調が交替している。これは目的語として生起した際にそれを明示化するために用いられるほか、他の名詞を修飾する際や場所を標示する際にも現れる。

以下、指示詞の用いられた例をいくつか挙げておく。

- (3) **çi44** **khɔ55tɕu44-a44?**

これ 何-Q

これは何ですか。(EL)

- (4) **khɿ42** **m33-a55** **ŋu33-xɔ42**, **çi35** **tho55-nu55 + lɔ55 = ɛ44**

3SG.NOM 要る -PART COP-COND ここ PROH- 戻る + 来る = POSS

**ŋɔ42** **khɿ33-lo33<sup>9</sup>** **m33-me35.**

1SG.NOM あれ - ように 言う -PAST

もし彼が(今の女友達を嫁として) 要るというなら、ここ [家] に戻ってくるなど言ったんだ。(NU)

- (5) **khɿ44** **a33o55 + pɔ44 = lɔɛ44** **tʃa35-tɔ44-a44.**

あれ 下 + ほう = も ある -EXP-PART

(貨幣の単位は) その [一銭より] 下にもある (NU)

- (6) **ŋɔ42** **khɿ35** **m33-me42.**

1SG.NOM あれ .OBL 要る -FUT

私はあれがほしい。(EL)

- (7) **lɔ55 = lɔɛ44** **su55-a55**, **tʃaŋ55jin33 = lɔɛ44.**

あれ = も 知る -PART 張雲 (PSN) も

あれ [= 張雲] も (薬草のことを) 知っているよ、張雲も。(NU)

- (8) **khɔ33me44**, **lɔ35** **tshao33jɔ33** **tshɿ33-ŋ55 = a55** **pha55 + jɔ35-me55.**

そして あれ .OBL 草薬 10-CLF=LOC 貼る + よい -PAST

そしてあそこの草薬 [草を原料とした薬] を 10 日貼れば、良くなった。(NU)

<sup>9</sup> 接尾辞 -lo が後接する際、khɿ44 も 33 調に変調することが少なくない。

### 2.2.2. Slot 2 : 名詞 (- 接尾辞)

名詞自体の特徴についてはすでに 2.1 節で述べたので、ここでは繰り返さない。ここでは名詞に直接付加されうる接尾辞に焦点を当てる。その一覧としては以下の (9) のとおりまとめられる。

- (9) -**ma** ( 複数 ), -**pu** ( 程度 ), -**lo** ( 「～のように」 ), -**tʃhə** ( 「～ごと」 )

ここで注意が必要なのは、-**ma** とそれ以外では振る舞いが異なる点である。-**ma** は図 2 のスキームの中に置かれ、数量詞句や後置詞を生起させる。一方で、-**pu** や -**lo** などは名詞句に接辞化されると、全体では副詞化されられると考えられる。そのため、その後ろに数量詞句などを後置できない。以下で各接尾辞が用いられた例を挙げておく。

- (10) a. lɔ33si55-**ma**55      b. pa55kha42-**ma**55  
先生 -PL                      パカー (PLN)-PL  
先生たち                      パカー村の人たち

- (11) a55ʃɔ44lɔ44-**ma**55  
足の不自由な人 -PL  
足の不自由な人など

- (12) ŋɔ42      ji55ʃi55      a55tʃen44-**pu**55      pə55 + pə44-nœ44.  
1SG.NOM 昔              アチェン - ほど      太い + 太い .RDP-SFP  
私は昔アチェンくらい太っていた。(NU)

- (13) ɕi44-**lo**44  
これ - のように  
このように

- (14) lɔ55-tʃhə35 = ε55<sup>10</sup>      koŋ55tsi55      tʃa35 = ε55-nœ44.  
月 - ごと =POSS              給料              ある =POSS-SFP  
(彼らは) 月ごとに給料はあるけどね。(林 2009: 47) (NU)

-**ma** の振る舞いの特異性として、これを含む名詞句全体が目的語になるなど、斜格の支配を受けた時、42 調に変調することが挙げられる。

<sup>10</sup> 本例における =ε55 は副詞化の機能を持っていると考えられる (Hayashi 2010)。

- (15) nə33=la55      ma33mɔ55-**ma**42    kjao44=la55    thi55  
 2SG.NOM=すなわち    大きい-PL.OBL      教える=すなわち    少し  
 ɲɔ44-tɔ44=ɛ44.  
 聞く-EXP=POSS  
 あなたも（学年の）大きい（子）たちを教えたら、（彼らも）少しは（授業を）聞くよ。(NU)

さらに注意すべきは、-**ma** は形容詞引用形や後置詞 =ɛ44 にも接辞化されうる。このことから、-**ma** が Slot 2 に配置される接尾辞ではない可能性もある。今後詳細な分析を必要とする<sup>11</sup>。

- (16) khɤ35    a33xɤ55-**ma**55=ɛ55    tu33+lo33-mɤ44.  
 その      遠い-PL=POSS      読む+来る-PAST  
 それらの遠い（ところの学生）たちは勉強にしにきた。(NU)
- (17) ɕi44=ɛ44-**ma**55=ɤ44    si35fan35=a44    tu33-mɛ44.  
 これ=POSS-PL=EMPH    師範学校=LOC    読む-SFP  
 ここの（人）らは師範学校で（教師になるための）勉強をする。(NU)

### 2.2.3. Slot 3 : 形容詞

チノ語の形容詞に関する詳細は Hayashi (2014) を参照されたい。ここでは名詞句構造を記述する際に必要な概略を示すにとどめる。

チノ語の形容詞の引用形は〔接頭辞-語根〕の形式をとる。接頭辞は a-, la-, jo- のいずれかで、いずれも名詞化の機能を併せ持つ。語根は動詞的性格を有している。つまり、形容詞の引用形は形態統語的には出動名詞的な振る舞いを見せる。ただし、否定辞などその他の接頭辞が付加される場合は a-, la-, jo- の接頭辞の代わりに、語根に直接付加される。そのため、引用形以外の形式は動詞と同じ振る舞いを見せることとなる。

形容詞は名詞句構造において意味的に修飾の機能を有する。形容詞の引用形が名詞修飾を行う際、名詞に対して後置される。図 2 においては名詞句構造の Slot 3 に配置される。

- (18) a. kɔ55tɔ44    a33ɲɤ55    b. kɔ55tɔ44    a33ɲɤ55ɲɤ55  
 服      赤い      服      赤い.RDP  
 赤い服 (EL)      真っ赤な服 (EL)

<sup>11</sup> (18) の =ɛ55 は 3.3 節で述べるように、所有標識というよりも「名詞句拡張子」として考えることもできる。下線部全体を主名詞と再解釈すれば、-**ma** は拡張された名詞に後接しているだけであると見なせる。詳細は 3.3.3 節を参照。



形容詞が二重に名詞を意味的に修飾することも可能である。

- (19) **khɿ44**   **ko55tø44**   **la55xɿ44**   **a33ŋɿ55**   **thi55-khrœ42**  
 あれ   服   大きい   赤い   1-CLF  
 あの 1 枚の大きくて赤い服 (EL)

形容詞の否定形は 2 種類の語順を許す。1 つは引用形と同様、名詞の直後に置かれるパターンである。もう 1 つは名詞の直前に置かれるパターンである。

ここで注意すべきは、否定辞 **mə-** ~ **ma-** は動詞性をもつ語根に前接する。つまり、[否定辞 - 語根] は動詞性をもった要素である。そのため、名詞修飾を行う際には、関係節標識である **-mɿ** を生起させる。

- (20) **ko55tø44**   **mə33-ŋɿ55-mɿ55**  
 服   NEG- 赤い -REL  
 赤くない服 (EL)

- (21) **ma33-ŋjo55-mɿ55**   **a33tsu55**  
 NEG- 高い -REL   木  
 高くない木 (EL)

また漢語の語順の影響で、形容詞引用形でも意味的に修飾する際、名詞の直前に置かれる場合がある。その場合は関係節標識である **-mɿ** を生起させる。

- (22) **a33ŋɿ55-mɿ55**   **ko55tø44**  
 赤い -REL   服  
 赤い服 (EL)

以上から見ると、形容詞引用形は名詞修飾の際に Slot 3 に置かれるのが基本である。しかし、否定形を含めた場合や漢語からの影響を考えると、必ずしも Slot 3 に入りうると言えない。この点を含めれば、将来的に名詞句構造から独立させ、形容詞の Slot を外す必要があるかもしれない。

#### 2.2.4. Slot 4 : 数詞 - 類別詞 (- 接尾辞)

Slot 4 はチノ語の数量表現を担う。数詞は一般的に基数詞と序数詞（すべて漢語からの借用語）に分かれるが、この Slot には基数詞しか入らない。数詞は数え上げの（「いち、に、さん、し、…」のような）場合を除いて、一般に単独で数量表現を構成できない。必ず類別詞を伴う。

チノ語の数詞は十進法に従う。以下、例を示す。1～9までは55調で、10は42調で読まれる。一般的に11～999までの2音節数詞は/33-55/で、3音節数詞は/33-55-44/で読まれる。4音節以上は初頭2音節を単位とし、/33-55, 33-55/ (4音節)、/33-55, 33-55-44/ (5音節) のように読まれる。1,000と10,000（およびそれ以上の単位は）漢語からの借用語を用いる。

- (23) thi55 「1」, η55 「2」, sɔ55 「3」, li55 「4」, ηɔ55 「5」, khjo55 「6」, ʃi55 「7」, xe55 「8」, kju55 「9」, tshɤ42 「10」, tshɤ33thi55 「11」, tshɤ33η55 「12」, ..., η33tshɤ55 「20」, sɔ33tshɤ55 「30」, ..., kju33tshɤ55kju44 「99」, thi33çɔ55 「100」, thi33çɔ55thi44 「101」, ..., thi55tshen44 「1,000 (< Ch. 千)」, ..., thi55wan44 「10,000 (< Ch. 万)」

ここで言う類別詞は純粹に名詞のクラスを規定するもの（以下「プロパー類別詞」）と、量を指示するもの（以下「量詞」）を含む。プロパー類別詞の一部は名詞の最終音節からの派生により構成される（「出名類別詞」）。以下、表4および表5に例を示す。

類別詞	類別対象	類別詞	類別対象
-lœ	多くの名詞	-su	瓶
-ɛ	～軒（建物や家）	-ko	漢語由来の一般名詞 [< Ch. 个]
-kɤ	部屋	-tʃaŋ	車 [< Ch. 张]
-khɾœ	衣服・道具	-pen	本 [< Ch. 本]
-li/ -lai	人間	-pa	道具 [< Ch. 把]
-çɔ	人間	-pao	袋, パック [< Ch. 包]
-mə	動物	-xɔ	（薬や砂糖などの小型の）箱 [< Ch. 盒]

表4 プロパー類別詞の例 [Ch. は漢語由来を指す]

類別詞	類別対象	類別詞	類別対象
-pø	稲わら, 草 (< ku55pø44 「稲わら」)	-khui	髪の毛 (< tshɛ55khui55 「髪の毛」)
-po < I >	花 (< a55po44 「花」)	-tso < I >	薪 (< mi55tso55 「薪」)
-po < II >	せいろ (< mja55po44 「せいろ」)	-tso < II >	家 (< tso33 「家」)
-puw	布団や紙類 (< pɔ33puw55 「布団」)	-suu	果物, 球形のもの (< a44su44 「球」)

-pu	手 (< la55pu44 「手」)	-tɕhø	矢 (< a55tɕhø44 「矢」)
-pja	ほうき (< ja44pja44 「ほうき」)	-vu	卵 (< a33vu55 「卵」)
-phi	ひも (< a55phi44 「ひも」)	-tsu	粒 (< a33tsu55 「種」)
-phu <I>	椀 (< lo33phu55 「椀」)	-phiŋ [Ch.]	瓶 [< Ch. 瓶]
-phu <II>	村 (< phu44 「村」)	-thoŋ [Ch.]	桶 [< Ch. 桶]
-phrø	板 (< a44phrø44 「板」)	-kaŋ [Ch.]	かめ [< Ch. 口缸]
-kɣ	椅子 (< thɣ33kɣ55 「椅子」)	-tsao [Ch.]	かまど [< Ch. 灶]
-kho <I>	道 (< ɔ55kho55 「道」)	-tɕhao [Ch.]	橋 [< Ch. 桥]
-kho <II>	歌 (< krø33kho55 「歌」)	-xu [Ch.]	つぼ [< Ch. 茶壺]

表 5 出名類別詞の例 [Ch. は漢語由来を指す]

上記のほかに, 表 6 に示す回数を表す単位 (以下「回数詞」) や度量衡の単位 (量詞) が類別詞と同じ位置に生じうる。注意すべきは, 回数詞の場合, 主名詞を一般に持たない。また, [数詞 - 回数詞] の構造は全体として項構造に組み込まれず, 一般に述語を修飾する。

回数詞	カウントの対象	量詞	類別対象
-la	「～回」, 多くの動作・行為	-lo	「～両」(約 50g)
-tø	「～回」, 車を動かす回数	-pi	「～100 斤」(約 50kg)
-tsə	「～回」, 薬を飲む回数など	-pə	列, 並び
-kho <I>	「～口」, ことばを発する回数, 飲み物を飲む回数	-tʃu	グループ
-kho <II>	「～すくい」, 手ですくう回数	-ki [Ch.]	「～斤」(約 500g, < 斤)
-lo	「～か月」, (< pu55lo44 「月」)	-koŋ33tɕin33 [Ch.]	～kg (< 「公斤」)

表 6 回数詞および量詞の例 [Ch. は漢語由来を指す]

以下は類別詞が用いられた例である。

- (24)  $\eta\alpha 55\text{-lai}35$ ,  $khjo 55\text{-lai}35$ ,  $\jmath i 55\text{-lai}35$   $l\alpha 33 = \epsilon 55\text{-m}55$ .  
 5-CLF          6-CLF          7-CLF          来る =POSS-PAST  
 (この前ここチノ郷にもアメリカ人が) 5人, 6人, 7人と (ぞろぞろと)  
 来たよ。(NU)

- (25)  $\eta\alpha 33su 55$   $thi 55\text{-su}55$   
 バナナ          1-CLF  
 一本のバナナ (林 2009: 53) (EL)

回数詞が用いられた例も挙げておく。

- (26)  $thi 55\text{-}\jmath\alpha 44$   $nu 35 + lu 33\text{-}\jmath\alpha 33\text{-je}42$ .  
 1-CLF          戻る + 来る -OBLIG-HS  
 (彼は軍隊に入ったけれど) ひと月で戻ってくるらしいよ。(NU)

Slot 1 と Slot 4 のみが共起し、名詞句構造をなす例も多い。

- (27)  $\eta i 44$   $thi 55\text{-kh}\alpha 55$   $t\epsilon\epsilon 42\text{-pja}33 + \jmath\alpha 42$ .  
 これ          1-CLF          すごく -言う + 難しい  
 この一言は舌がもつれる (NU)

数量詞句においてやや注意しておかなければならないのは、接尾辞  $-t\epsilon\epsilon$  「～くらい」の存在である。これは数量詞句全体の後にも (28), 数詞の直後にも現れ (29), 概数を表す。

- (28)  $s\alpha 33\text{-ki} 55\text{-t}\epsilon\epsilon 35$   $t\epsilon\epsilon 33\text{-}\alpha 55\text{-n}\alpha\epsilon 44$ .  
 3-CLF- くらい          余る -PART-SFP  
 3 斤くらい余った。(林 2009: 55)

- (29)  $\eta i 33\eta\alpha 55\text{-t}\epsilon\epsilon 44$   
 200- くらい  
 200 くらい (林 2009: 55)

### 2.2.5. Slot 5：後置詞

チノ語の後置詞の一覧を整理すると、以下のようになる。各後置詞の機能的な差異については林（2010）を参照されたい。ここでは要点を整理する。なお、表 7 では各後置詞に代表的な声調を付している。しかし、実際には文内の環境により声調は交替しうる。

表 7 に整理するように、チノ語の後置詞は大きく「第 1 群」と「第 2 群」の 2 グループに分類できる。第 1 群は名詞句の直後に置かれ、名詞句の格標示を主に担う。ただし、=ε44 は他と振る舞いが異なるので、注意が必要である（これについては第 3 節で述べる）。他方、第 2 群は第 1 群よりもさらに後ろに置かれ、名詞句の情報構造上の位置づけを行う。以下、第 1 群・第 2 群の代表的な例を主として自然発話の例から引用しておく。

グループ	形式	機能等
第 1 群	=va55 <sup>12</sup> ~ =a55	対格，与格，位置格
	=jə44	起点格，比格 [優等 / 劣等比較]，共格
	=la55 <I>	道具格
	=jo44	比格 [同等比較]
	=the44	随伴格
	=ε44 <sup>13</sup>	所有格
第 2 群	=ɣ44 <sup>14</sup>	強調
	=la55 <II>	要約・言い換え
	=lœ44	列举

表 7 チノ語の後置詞

#### [第 1 群後置詞]

(30) a. a33ŋu55 nə35 = va55 kjo55-kə44-mɣ35.

1PL.NOM 2SG.OBL=ACC 思う-PROG-PAST

私たちはあなたのことを思っていたよ。(EL)

b. a55khrə55 = a55 u35 + ja55-xə42, lə33 jin33tʃhə44-a44.

穴=LOC 入る + 行く-COND いつも 車酔いする-PART

トンネル (= 穴) に入って行ったら, (私は) いつも車に酔ってしまう。

(NU)

<sup>12</sup> =va55 には林（2009）でも指摘しているが、いくつかの制約がある。1 つは有性名詞にのみ付加されうる。また例えば、与格名詞句と位置格名詞句が共起した場合に、両方に同時に =va55 を吹かせることはできない（二重 =va55 制約）。

<sup>13</sup> =ε44 は名詞句においては所有格を標示しうるほか、節末にも置かれうる。節末ではモダリティや引用節境界を標示しうる。その詳細については林（2010）を参照されたい。

<sup>14</sup> 蔣（2010: 241）では「話題標識」として kɣ33 を挙げ、これが ɣ33 と同発音される、と述べている。筆者の調査した下位方言データでは kɣ33 の形式は見つかっていない。また蓋（1986: 71-72）では主語と述語をつなぐ機能をもつ「关联助詞」として ɣ33 と lœ33（本稿の =lœ44 に相当）を同等に取り扱っている。

- c.  $\text{çi55u44}=\text{ɣ44}$   $\text{tjen35xua35}$   $\text{khɔ33su55}=\text{a44}$   $\text{puw33tshə55-nœ44}$ ,  $\text{çi44-ku44}$   
 今 =EMPH 電話 誰 =DAT 話す -SFP これ -CLF  
 $\text{a33ni55}$ .  
 小さい  
 今は電話で誰と話して（いて）も、こんなに（携帯電話ほど）小さい。  
 (NU)

- (31) a.  $\text{si55mao44}=\text{jə55}$   $\text{a33tha55}+\text{pɔ44}$   $\text{mɔ33-mjə55-tɔ55}$ .  
 思茅 =ABL 上 + 方 NEG- 見える -EXP  
 思茅から北には行ったことがない。[=lit. 思茅から上は見たことがない]  
 (NU)

- b.  $\text{ŋɔ33}=\text{jə44}$   $\text{nɯ33zɔ55}$   $\text{ŋw33}=\text{ɛ44}$ .  
 1SG.OBL=ABL 年下 COP=POSS  
 （あなたのお母さんは）私より年下だろう。(NU)

- c.  $\text{ji55mjɔ55}$   $\text{ren33sen55}=\text{jə44}$   $\text{san55tchi33}$   $\text{ja35}$   $\text{lə44}$   
 去年 （高麗）人参 =COM 三七 鶏 .OBL ずっと  
 $\text{tun35}+\text{tsɔ33-me35}$ .  
 煮る + 食べる -PAST  
 去年（高麗）人参と三七を鶏と一緒ににて食べた。(NU)

- (32)  $\text{khɣ42}$   $\text{mjə55khɔ55}=\text{la44}$   $\text{phiŋ33kɔ55}$   $\text{tshœ33-mɣ55}$ .  
 3SG.NOM ナイフ =INST リンゴ 刺す -PAST  
 彼 / 彼女はナイフでリンゴを刺した。(EL)

- (33)  $\text{khɣ33}=\text{la55}$   $\text{ta35fuo33}=\text{jə44}$   $\text{thi33tʃhɔ35}$   $\text{mɔ33-ŋw44-mɣ44}$   $\text{ŋw33}=\text{ɛ44}$   
 あれ =すなわち 大学 = ように 同じ NEG-COP-NML COP=POSS  
 $\text{tɣ55-ɔ44-po42?}$   
 きっと -PART-RCF  
 あれ（大専 [中国の教育制度上の短期大学のようなもの]）はきっと大学  
 と同じではないだろうか？(NU)

- (34)  $\text{khɣ42}=\text{the44}$   $\text{je35}+\text{ja55}$   $\text{ŋw33-nœ44}$ .  
 3SG.NOM=COM 行く + しまう COP-SFP  
 （彼は）彼女と一緒に引っ行ったようだ。(NU)

## [第 2 群後置詞]

- (35) ɕi35 jɔ33lɔ33ʃan55 = ɣ55 mɔ33-tʃə55-a44.  
 ここ 悠楽山 =EMPH NEG- いる -PART  
 ここ悠楽山には（大学院生は）いない。(NU)
- (36) a33tsu55, ʃɔ55tʃha55la55 = la55 mɔ55-tʃa35-po42, khun55miŋ33 = a44?  
 木 草むら = すなわち NEG- ある -RCF 昆明 =LOC  
 木とか草むらというのは、つまりないわけでしょ、昆明には？(NU)
- (37) ŋɔ33 = lae44 ŋɔ33tshɣ55ʃi44.  
 1SG.OBL = も 57  
 私も 57（歳）だ。(NU)

第 2 群後置詞が第 1 群後置詞に対して後置される例も散見される。以下に例示する。

- (38) a55tɣ44 + ŋ55 = a44 = lae44 tʃə55-phu55-a55.  
 アタ +2=LOC- も より - 高い -PART  
 アタたち 2 人のところ（の薬局）でも（薬の値段がほかの店より）高い。  
 (NU)

### 3. 所有表現

所有表現は名詞句間の外的関係を表すものである。一般に、所有表現では所有側（possessor）と被所有側（possessee）の名詞句が関与する。統語的には所有側名詞句が従属部となり、被所有側名詞句が主要部となる。語順は所有側名詞句が被所有側名詞句に対して先行する。

#### 3.1. 所有側が一般の名詞の場合

所有側が一般の名詞である場合、「所有側 =ε44<sup>15</sup> + 被所有側」の構造をとる。すなわち、所有側の名詞句に対して、従属部標識としての所有後置詞が後接する。なお、=ε44 は声調を交替させ、名詞句構造においては =ε55 となることが多い。

- (39) a. a55xua33-ma55 = ε55 tso33 = a44 mɔ44-je44-tɔ44-a44.  
 アホア -PL=POSS 家 =LOC NEG- 行く -EXP-SFP  
 アホアたちの家には行ったことがない。(NU)

<sup>15</sup> 蔣（2010: 53, 57）では所有関係を標示するのに ja54 を用いるとしている。この形式は筆者の調査した下位方言データでは見つかっていない。蓋（1986: 70）では所有関係を表す助詞として ε55 を挙げている。

- b. tao35pan44    a33tha55 + pɔ44    ʃi33kuan44    ji55pre55-ma55 = ε55  
 道班 (PLN)    上 + ほう    レストラン    イブレ (PSN)-PL-POSS  
 ʃi33kuan44.  
 レストラン  
 道班の上の方のレストランはイブレたちのレストランだ。(NU)

しばしば、主要部名詞句としての被所有側が省略され、明示されない場合がある<sup>16</sup>。

- (40) a. jo33ma55 = ε55    tʃa35?  
 3PL=POSS    ある  
 彼らの（洗濯する場所）はあるの？ (NU)
- b. ʃɔ33tʃha55 = ε55    ʃɔ55-nœ44.  
 草むら =POSS    探す -SFP  
 （薬草は）草むらの（もの）を探す。(NU)

=ε44 が生起すると同時に、所有側名詞句の最終音節が 35 調に変調することがある。この変調も所有を標示していると考えられる。

- (41) ji55ŋ44 = ɣ44    lo55mu35 = ε55    a55ŋ44    ŋu33-nœ44.  
 昨日 =EMPH    虎 .POSS=POSS    日    COP-SFP  
 昨日は寅の日（暦の一種）であった。(NU)

### 3.2. 所有側が代名詞の場合

所有側が代名詞の場合は、一般の名詞と異なる状況を有する。代名詞は上述の表 2 のように主格形以外に、所有格形・斜格形を有する。形式上の差異の細分の程度は各人称・数によって異なる。所有標識の =ε44 を所有格形として内在させているものもある。所有格形および斜格形に対して新たに =ε44 を置く必要はない。代表的な例を以下に掲げる。

- (42) ŋɔ35    ʃi44    ki55ŋo55 + kɔ55tɔ44    a33ʃi55    ni55-khrœ42    tɕiŋ33xoŋ35  
 1SG.POSS    これ    チノ + 服    新しい    2-CLF    景洪 (PLN)  
 ju33-mɣ35.  
 買う -PAST  
 私のこの新しいチノ族の 2 枚の衣装は景洪で買いました。(EL)

<sup>16</sup> 日本語の「の」や漢語普通話の「的 de」にも類似の現象が存在する。例)「これは僕のだ」「这是我的。」[これ COP 1SG de]



- (43) **ŋi55vɛ55** tso33mɪ33=a44=lœ44 khao42+khao42 khœ33-nœ44,  
 2PL.POSS 村=LOC=も 何+何.RDP する-SFP  
**tai35-a44-po42?**  
 借金する -PART-RCF  
 あなたたちのところ [=lit. 村] でも何をするにしても借金するんでしょ?  
 (NU)

特に被所有者側が親族名詞のときはその語根と人称代名詞が直接に合成されることも多い。

- (44) **ŋɔ35 a33pu55 ~ ŋɔ33pu55**  
 1SG.OBL 父  
 私の父 (林 2009: 138)
- (45) **nə35 a55mɔ44 ~ nə33mɔ55**  
 2SG.OBL 母  
 あなたの母 (林 2009: 138)

### 3.3. 「名詞句拡張子」としての =ɛ44

ここで少し補足的な分析を行いたい。これまで =ɛ44 の基本的な機能としては所有標識であると考えてきた。しかし、実際には =ɛ44 が少なくとも表面的には所有を表現していない例も数多く存在する。

- (46) **li55-phiŋ33 li55-phiŋ33=ɛ55** ʃɔ33+tɕhi55-mɔ55.  
 4-CLF 4-CLF=POSS 探す+持ち上げる -BEN  
 それぞれの家族は4本ずつ(飲み物を)持たせた。(Hayashi 2010: 158)(NU)
- (47) **ʃi33ji33tjen33=a55 lə55-ji55=ɛ55-la42, mi33khju55=ɛ55?**  
 11 時=LOC ずっと-寝る=POSS-Q 夜=POSS  
 (あなたは) いつも 11 時に寝るのかな、夜は? (Hayashi 2010: 157) (NU)

上記のいずれの例の =ɛ44 も意味的に所有を表していない。(46) は数量詞句の直後に =ɛ44 が付加されている。しかし、所有側名詞句ではなく、飲み物を持つて行くときの様態を表す副詞句的な機能を担っている。(47) の太字で示された =ɛ55 は名詞である「夜」に付加されている。所有表現としても解釈されないほか、項構造にも組み込まれない。やはり時間副詞の機能を (47) では担っている。

ここで新たに  $=\epsilon 44$  が「名詞句拡張子」(noun phrase extensifier) であるという分析を導入してみたい。名詞句拡張子というのは名詞句の形態統語的特性を変更することなく、名詞句構造を形式的に拡張する機能辞であると考ええる。上に掲げた (46) と (47) の  $=\epsilon 44$  に先行する要素はいずれもそれ自体で名詞句の統語的特性を有している。 $=\epsilon 44$  が後接した後も名詞句性をそのまま維持していると考えられる。ただ、(46) と (47) ではそれぞれ主名詞となりうるような名詞句が後続しない。また項構造に組み込まれない。そのため、機能的には副詞的な機能となると考えられる。

この分析は 2.2.2 節で見た例にも適用でき、有利である。以下に再掲しよう。

(48)  $\text{çi}44 = \epsilon 44\text{-}\text{ma}55 = \text{x}44 \text{ si}35\text{fan}35 = \text{a}44 \text{ tu}33\text{-}\text{m}\epsilon 44$ .

これ=POSS-PL=EMPH 師範学校=LOC 読む-SFP

ここの(人)らは師範学校で(教師になるための)勉強をする。(=17) (NU)

(48) では  $=\epsilon 44$  が指示詞  $\text{çi}44$  「これ」に後接している。そして、その直後に接尾辞の  $-\text{ma}$  が後続している。2.2 節の図 2 のモデルで言えば、 $=\epsilon 44$  は Slot 5 に、 $-\text{ma}$  は Slot 2 に配置される。ここで (48) に見える名詞句  $\text{çi}44 = \epsilon 44\text{-}\text{ma}55 = \text{x}44$  を単線の構造としてとらえてしまうと、矛盾を来す。もちろん、この解釈の矛盾を解消するにはいくつかの方法があろう<sup>17</sup>。しかし、本稿では「 $=\epsilon 44$  が名詞句拡張子である」とする考え方が現時点で最適解であると思なす。 $=\epsilon 44$  は  $\text{çi}44$  の名詞性を保持したまま、新たな名詞句  $\text{çi}44 = \epsilon 44$  を構成する。その新たな名詞句を「主名詞」として、接尾辞  $-\text{ma}$  が後接すると考える。つまり、この  $\text{çi}44 = \epsilon 44\text{-}\text{ma}55 = \text{x}44$  は  $[[\text{çi}44 = \epsilon 44]\text{-}\text{ma}55 = \text{x}44]$  のような階層構造を内包すると解釈できる。

以上の  $=\epsilon 44$  の分析を整理する。 $=\epsilon 44$  を名詞句拡張子とし、先行する名詞句の統語的特性を保持する。すなわち、 $=\epsilon 44$  を含む形式もそれ自体では名詞句と見なせる。そして、連合関係として現れる  $[\text{名詞句}_1 = \epsilon 44]$   $[\text{名詞句}_2]$  の 2 つの名詞句における意味的關係は所有関係であると考えられる。つまり、 $=\epsilon 44$  の意味機能的なプロトタイプは「所有」であると言えよう。(40) のように被所有側名詞句である  $[\text{名詞句}_2]$  は音声的に実現しないこともある。しかし、この場合は文脈により解釈が補足されうる。他方、本節であつかった項構造に組み込まれない  $[\text{名詞句} = \epsilon 44]$  (46, 47) は所有表現のときの  $[\text{名詞句}_2]$  が解釈上でも補足されない<sup>18</sup>。よって、単独では名詞的特性を持ちつつも、文内では副詞的に位置づけられる。

<sup>17</sup> 他の解決法としては i) 「 $=\epsilon 44$  が Slot 5 に入らない」、ii) 「 $-\text{ma}$  が Slot 2 に入らない」などがあろう。しかし、このいずれも機能辞の全体的体系を再編する問題につながり、本稿でとる手法より不利であると思なされる。

<sup>18</sup> 日本語の「の」は少なくとも (41) のように  $[\text{名詞句}_2]$  を生起させずとも容認される点でチノ語の  $=\epsilon 44$  と共通している一方で、チノ語の (47, 48) のような例は存在しない。そのため、日本語の「の」は「名詞句拡張子」的性格をチノ語と部分的にのみ共有しているとしか言えないだろう。

## 4. 連体節との関係

### 4.1. 連体節の概要

いわゆる連体節<sup>19</sup>と主名詞の順序は他の多くのチベット・ビルマ系諸語と同様、「連体節-主名詞」となる。連体節の標識としては節末に **-mɣ** が一般に用いられる。形式的に **-mɣ** は **-mɛ** と自由に交替する。以下の例では連体節を [ ] で、主名詞を太字で示す。

- (49) a. [tʃə33 + lu44-**mɣ**44] a55ŋ44 mɔ55-su55jə44-nœ44.

生まれる + 来る -REL 日 NEG- 知る -SFP

(私は自分の) 生まれた日を知らない。(NU)

- b. [nə42 a33pjo55 kjao44-**mɣ**44] ʃue33sɿŋ55-ma55

2SG.NOM 本 教える -REL 学生 -PL

ʃue33ʃao42 ɕa55 = e55-la42?

学校 住む =POSS-Q

あなたが教えている学生たちは学校に住んでいるの？(NU)

ただし、実際には大意を変えずに、連体節を主名詞に後置させることも可能である。

- (50) a. [ŋə42 tɕi35-mɣ55] **a33pjo55** a33tɕi55.

1SG.NOM 送る -REL 手紙 少ない

- b. **a33pjo55** [ŋə42 tɕi35-mɣ55] a33tɕi55.

手紙 1SG.NOM 送る -REL 少ない

私が送った手紙は少ない。(EL)

(50a) は一般的な連体節の語順である。一方で、(50b) は連体節が主名詞に対して後置されている。(50b) については話者によれば、「手紙は私が送ったのは少ない」の意味に近いようである。

### 4.2. 後置連体節の統語的特性に関する分析

以上、連体節の概要を見てきた。ここで重要なのは連体節標識である **-mɣ** に名詞化の機能が存在することである<sup>20</sup>。以下の例を見られたい。

<sup>19</sup> ここでいう「連体節」は節内に述語要素を有し、主名詞と意味的な連関を有する節のことを指す。それゆえ、狭義の「関係節」(適格性のある文から主名詞を取り除いた節)だけでなく、主名詞の特性を表現する節全体を含む。

<sup>20</sup> **-mɣ** の名詞化の機能に関してはすでに林 (2006) で論じている。

## (51) a. piŋ35thui35-mɿ55 tʃa35-jɔ42?

病気退職する -NML ある -Q

(退職というのは) 病気退職するのもあるのか? (NU)

## b. a55pru44 [mɔ55-xɔ55-khju35-mɿ55],

知恵おくれ NEG- しゃべる -AUX-NML

[mɔ55-lao33toŋ55 + le44-khju35-mɿ55] = a44 pi44-nœ44.

NEG- 働く + 行く -AUX-NML=DAT

与える -SFP

知恵おくれでしゃべれない者や働きに行けない者に (国が補助金を)  
与える。(NU)

(51) のいずれの例 (51b は 2 つ目の -mɿ) の -mɿ (斜字) も主要部が欠落した関係節の境界を表示しているとも見ることが可能である。しかし、特に (51a) に見るように、欠落したはずの主要部を補充しにくい例も多い。したがって、-mɿ の名詞化の機能を認めておくほうが有利である。

この点をふまえると、(51b) の [ ] で標示された節も名詞化節の一種であると思なせる。つまり、後置連体節は「主名詞」と同格的な関係に位置づけられると解釈することもできる。

以上の点は修飾構造全体に対する説明にも重要な示唆を与える。2.2 節の図 2 および 2.2.3 節で示したように、形容詞は名詞の直後に配置される。そして形容詞の引用形は統語的には名詞と同様の振る舞いをする。「修飾」構造の位置関係から再考すると、後置された「連体節」(実際には名詞化節) と形容詞の引用形の Slot 3 との間の共通性を見ることができる。形容詞引用形による名詞修飾も統語的には主名詞と同格であると思なしうる (つまり、主名詞と従属関係にない)。以下にこのモデルを図式化しておく。

i) 後置された連体節	主名詞 同格関係 連体節 (=名詞化節)
ii) 形容詞引用形	主名詞 同格関係 形容詞引用形

図 3 後置された連体節と形容詞引用形による主名詞との同格関係

図 3 で表示したように後置された連体節ならびに形容詞引用形については主名詞と統語的には同格関係にあるとし、意味機能的には「修飾」であるとも解釈することができると思えられる。

そして一方で、前置された連体節および形容詞の否定形についてはともに主名詞に対して統語的にも意味機能的にも真正の修飾関係にあると思なす (つまり、修飾句が主名詞に対して統語的な従属句となる)。これについては 3 節で見た所

有表現にも当てはまる。すなわち、所有側と非所有側の名詞句間には修飾関係があると解釈できる。これを図示したものが以下の図 4 となる。

i) 前置された連体節	連体節 └──────────┘ 修飾関係	主名詞
ii) 形容詞否定形	形容詞否定形 └──────────┘ 修飾関係	主名詞
iii) 所有表現	所有側 └──────────┘ 修飾関係	非所有側

図 4 前置された連体節と形容詞否定形による主名詞との修飾関係  
および所有表現の修飾関係

このように統語的な修飾関係を図 4 に示したグループに限定すれば、チノ語が類型論的に主要部後置型 (head-final) 言語として一般的なタイプに入りうる。チベット・ビルマ諸語は APV 語順でありながら、関係節が主名詞に対して先行する一方、形容詞が主名詞に後続する語順をとる言語が多い<sup>21</sup>。この修飾構造の複雑さ<sup>22</sup>は類型論的な位置づけをしばしば困難にする。しかし、本稿で取り扱ったように、形容詞の引用形が統語的に名詞と同様に振る舞い、主名詞と同格関係であると見なせるチノ語のような言語の場合、狭義の修飾関係を統語的なものに限定すれば、「修飾句 - 被修飾句」の順序は一般的な APV 言語の含意的普遍性の傾向に合致するものであると言える<sup>23/24</sup>。チノ語について言えば、漢語との接触<sup>25</sup>が日々増しているなかで、形容詞の語順も漢語と同様、主名詞に対して先行する発話<sup>26</sup>が増加する傾向にある。これは形容詞引用形と主名詞の統語的關係を「同格

<sup>21</sup> チベット・ビルマ諸語の語順に関する整理は Dryer (2008) に詳しい。これによると、地理的にはタイ・カダイ諸語やモン・クメール諸語などが周辺で話される東南アジア地域のチベット・ビルマ諸語で形容詞が名詞に後置される言語が多いのに対し、インド・ヨーロッパ諸語が周辺で話されるインド以東の言語では形容詞が名詞に対して前置される傾向がある。

<sup>22</sup> チノ語を含め、チベット・ビルマ諸語は一般に副詞句が動詞に先行して修飾する。副詞句による動詞の修飾は統語的な修飾関係である。

<sup>23</sup> チノ語の〔指示詞 名詞〕の関係も統語的に「修飾関係」とであると見なせば、図 4 のグループに入れられる。しかし、実際には大きな問題がある。2.2 節で述べたように、指示詞と主名詞の間には並列関係がある。それゆえに統語的には「修飾関係」というよりも「同格関係」と考えた方が良いかもしれないからである。一方で、図 4 に関わる分析は名詞同士の複合にも応用できるかもしれない。例えば、ki55ŋo55「チノ族」+tsha33zo55「人」→ki55ŋo55tsha33zo55「チノ人」、kha55pha55「男」+zo55ku55「子供」→kha55pha55zo55ku55「男の子/息子」、kha55mo44「女」+zo55ku55「子供」→kha55mo44zo55ku55「女の子/娘」などはいずれも前部要素が修飾要素で、後部要素が被修飾要素であると分析できる。いずれにせよ、指示詞と複合名詞の問題は今後のさらなる分析が必要である。

<sup>24</sup> 本稿で扱ったチノ語と方言関係にある補遺チノ語〔中国雲南省〕では形容詞や数量詞句の語順は主名詞に対して前後どちらに現れてもよい。よって本稿の分析は例えばロロ・ビルマ諸語といった関連言語群内の他の言語の現象にそのまま拡張できない。

<sup>25</sup> 中国の少数民族言語において漢語との接触による文法現象への影響は非常に大きなものとなっている。李 (2005 [2012]) は中国領内のミャオ・ヤオ諸語の類別詞の類型論的特徴を扱っている。この中でミャオ・ヤオ諸語においても本来主名詞に対して後置される指示詞や関係節などが漢語の影響を受け、前置される語順も許す傾向にあることを指摘している。

<sup>26</sup> チノ語の具体例は 2.2.3 節の例 (23) を参照のこと。

関係」から「修飾関係」に将来移行させる（すなわち、統語的關係を意味機能的な解釈にあわせて変更する）動因となると見なせるかもしれない。

## 5. おわりに

本稿ではチノ語悠楽方言の名詞句構造とその周辺の問題について概観した。その特徴を以下に簡潔に要約しておく。

- (52) a. 名詞句は〔指示詞〕〔名詞 - (接尾辞)〕〔形容詞〕〔数詞 - 類別詞 (- 接尾辞)〕〔後置詞〕の構造をとる。後置詞よりも前の構造はいずれか1つの要素が生起していればよい。すべてが共起する必要はない。
- b. 形容詞引用形は統語的には名詞と同様に振る舞う。主名詞に後置される形容詞引用形は、主名詞と統語的には同格的な関係を結ぶと考えられる。
- c. 所有表現においては、所有側名詞句が被所有側名詞句に対して先行する。所有側が代名詞の場合は所有格形あるいは斜格形を用いる。
- d. 連体節（関係節）は一般に主名詞に対して先行する。後置された連体節は主名詞と同格的な関係を結ぶ。

今後特に更に深い考察と分析が求められるのは =ε44 の「名詞句拡張子」としての機能である。いかなる名詞も拡張しうるのか、あるいは制限があるのか、=ε44 の他の機能<sup>27</sup>といかなる関係があるのかなど、チノ語の名詞句の周辺に伏在する課題はいまだ無尽のようである<sup>28</sup>。

## 略号

A: 他動詞主語, ABL: 奪格, ACC: 対格, Adj: 形容詞, AUX: 助動詞, BEN: 受益, Ch.: 漢語由来, CLF: 類別詞, COM: 共同格, COND: 条件節標識, COP: コピュラ, DAT: 与格, EL: 作例, EMPH: 強調, EXP: 経験, FUT: 未来, HS: 伝聞, INST: 具格, lit: 直訳, LOC: 位格, N: 名詞, NEG: 否定辞, NML: 名詞化, NOM: 主格, NU: 自然発話のデータ, OBL: 斜格, OBLIG: 義務, P: 他動詞目的語, PART: 助詞, PAST: 過去, PL: 複数, PLN: 地名, POSS: 所有 (格), PROH: 禁止, PSN: 人名, Q: 疑問, RCF: 確認, RDP: 重複, REL: 関係節標識, S: 自動詞主語, SFP: 文終止助詞, SG: 単数, V: 動詞

<sup>27</sup> Hayashi (2010) でも指摘しているが、=ε44 は文末に生起し、疑問などのモダリティを表しうる。

<sup>28</sup> このほかにも本稿では名詞の意味上の分類が形態統語上の問題とつながるのか否かについては触れられなかった。名詞の有生性や譲渡不可能性、また西山 (2003) の言う飽和名詞 / 非飽和名詞の区別が所有表現の振る舞いなどと関与する可能性も考えられる。今後発展的な分析を進めたい。

## 参考文献

## 〈日本語文献〉

- 加藤久美子. 2000. 『盆地世界の国家論』京都: 京都大学学術出版会.  
 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論』東京: ひつじ書房.  
 林範彦. 2006. 「チノ語 -mx の「多機能性」—漢蔵語と対照しながら—」『京都大学言語学研究』第 25 号. pp. 67-104.  
 ———. 2009. 『チノ語文法(悠楽方言)の記述研究』神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.  
 ———. 2010. 「チノ語悠楽方言の格体系」澤田英夫(編)『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』pp. 269-286. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.  
 三上直光(編). 2006. 『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』東京: 慶応義塾大学言語文化研究所.

## 〈漢語文献/汉语文献〉

- 傅爱兰. 1996. 《藏缅语 a 音节》《民族语文》1996 年第 3 期: 13-21.  
 盖兴之. 1986. 《基诺语简志》北京: 民族出版社.  
 蒋光友. 2010. 《基诺语参考语法》北京: 中国社会科学出版社.  
 李云兵. 2005. 《苗瑶语量词的类型学特征》李锦芳主编《汉藏语系量词研究》北京: 中央民族大学出版社. (转载于: 刘丹青主编. 2012. 《名词性短语的类型学研究》pp. 286-305. 北京: 商务印书馆.)

## 〈英語文献/Written in English〉

- Aikhenvald, Alexandra Y. and R.M.W. Dixon. 2013. *Possession and Ownership: A Cross-Linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press.  
 Bradley, David. 2007. "Language Endangerment in China and Mainland Southeast Asia". In Matthias Brenzinger (ed.), *Language Diversity Endangered*. pp. 278-302. Berlin: Mouton de Gruyter.  
 Dixon, R.M.W. 2010. *Basic Linguistic Theory. Vol.2: Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press.  
 Dryer, Matthew S. 2007. "Noun Phrase Structure". Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description Vol. 2: Complex Constructions. (Second Edition)* pp. 151-205. Cambridge: Cambridge University Press.  
 ———. 2008. "Word Order in Tibeto-Burman Languages". *Linguistics of Tibeto-Burman Area*. Vol. 31: 1-88.  
 Hayashi, Norihiko. 2010. "The so-called possessive marker in Youle Jino". In Dai Zhaoming and James A. Matisoff (eds.), *Forty Years of Sino-Tibetan Language Studies* 《汉藏语研究四十年》. pp. 153-167. Harbin: Heilongjiang University Press.  
 ———. 2014. "Youle Jino Adjectives and Their Semantic Mapping". *Journal of Foreign Studies*. Vol. 64.3: 9-22. Kobe: Kobe City University of Foreign Studies.  
 Yap, Foong Ha (et al. eds.) 2011. *Nominalization in Asian Languages*. John Benjamins.

## 〈インターネット情報〉

- Endangered Languages Project on Youle Jino  
<http://www.endangeredlanguages.com/lang/4328> [2014 年 12 月 22 日アクセス]

# ポー・カレン語の名詞句 \*

加藤 昌彦

## 1. 言語の概要と目的

ポー・カレン語はチベット・ビルマ語派カレン語群に属する言語である。Kato (2009) で私見を示したように、ポー・カレン語には表 1 に示すような方言群がある。本稿で扱う方言は、Eastern Pwo Karen に属するパアン方言である。

方言群	分布地域
Western Pwo Karen	Irrawaddy Delta, Myanmar
Htoklibang Pwo Karen	Bilin Township, Mon State, Myanmar
Eastern Pwo Karen	Karen State, Myanmar; Mon State, Myanmar; Tennasserim Division, Myanmar; West-Central Thailand
Northern Pwo Karen	Northwestern Thailand

表 1 ポー・カレン語諸方言

パアン方言は、ミャンマーのカレン州 (Karen State) の州都パアン (Hpa-an) の周辺で話される。パアンの位置は図 1 に示したとおりである。パアンの北東約 30 km に位置するフラインボエ (Hlaingbwe) や、パアンの東南東約 70 km に位置するコーカレイ (Kawkaireik) の方言も、言語上の差異は微少であるため、パアン方言に含めて考えることができる。

カレン語群に属する言語はすべて SVO 型の語順を持つことで知られている。これは、SOV 型の言語が一般的なチベット・ビルマ諸語の中で特異である<sup>1</sup>。この語順の特異性に対する説明としては、カレン祖語の段階でモン語 (Mon) との接触によって語順が OV から VO に変化したと考えるのが最も自然である (Matisoff 1991a: 481–482, 同 2000: 346–347 を参照のこと)。

\* 本稿は、2013 年 11 月 30 日に京都大学人文科学研究所で開催された「TB+ 研究会」(池田巧教授主宰)での発表原稿に加筆したものである。当日いただいた質問やコメントに基づいてミャンマーでの追加調査を行い、修正した。貴重なご意見をいただいた参加者の方々に深くお礼を申し上げる。

<sup>1</sup> SVO 型の語順を示すチベット・ビルマ系言語には他にも Bai や Mru、死語である Pyu などがあるが、語群単位で数十の言語が SVO 型語順を持つのはカレン語群のみである。なお、Bai は Sinitic に属する可能性がある。



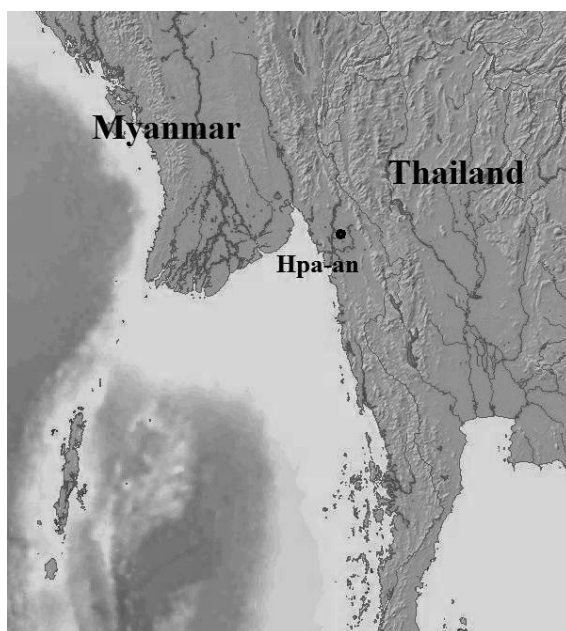


図 1 パアンの位置

ポー・カレン語の単語は、名詞、動詞、副詞、助詞、感嘆詞の 5 つに分類することができる。語類認定のためのテストについては、加藤（2008）に示してあるので、そちらを参照していただきたい。名詞の認定についてのみ述べておくと、ポー・カレン語の名詞は一般的に、単独で発話を構成することができ、また、動詞の項になることができるが、動詞助詞と共起しない、という特徴を持つ。

ポー・カレン語は分析的（analytic）な特徴を持つ言語であり、屈折は存在しないと言ってもよく、接辞による派生も数が限られている<sup>2</sup>。一個の節は図 2 に示すような要素で構成される。括弧でくくった要素は任意の要素である。動詞のみ括弧でくくっていない。これは、加藤（2013）で述べたとおり、動詞がポー・カレン語の節における必須要素だからである。

( 名詞<sub>1</sub> ) ( Vptc(s) ) 動詞 ( Vptc(s) ) ( 名詞<sub>2</sub> ) ( 名詞<sub>3</sub> ) ( 副詞的要素 )

図 2 ポー・カレン語の節の基本構造

「名詞<sub>1</sub>」は主語であり、「名詞<sub>2</sub>」と「名詞<sub>3</sub>」は目的語である。二つの目的語が現れるのは /phílân/ 「与える」などの ditransitive verb のときのみである。

<sup>2</sup> 加藤（2004）は、10 個の派生接辞を挙げている。

/philân/ のように授受にかかわる ditransitive verb の場合、「名詞<sub>2</sub>」が受領者 (recipient), 「名詞<sub>3</sub>」が対象 (theme) を表す。「副詞的要素」には、副詞, 側置助詞句, 副助詞<sup>3</sup>を含む。「Vptc」は動詞助詞 (verb particle) で、動詞の前に現れるものと後に現れるものとがあり、それぞれ複数個現れることができるので、「Vptc(s)」と表示してある。図 2 に示した要素間の順序は固定している。下の (1) に例を示す。

- (1) θàʔwà mə ʔán bá mì ʔáʔá ló yéin phən̄n cī  
 (人名) IRR 食べる (機会) ご飯 沢山 LOC 家 中 も  
 名詞<sub>1</sub> Vptc 動詞 Vptc 名詞<sub>2</sub> 副詞 側置助詞句 副助詞  
 副詞的語句  
 ターワーは家でたくさんご飯を食べられることにもなるう

本稿の目的は、ポー・カレン語の名詞句の構造を、スロットに分解して記述することである。同様の解釈は既に加藤（2004）の第8章において行ったが、それはまだ試験的な、一般性に欠けるものであった。本稿の試みにより、ポー・カレン語の名詞句の構造は、より明瞭に見えてくるであろう。

## 2. 名詞句を構成する要素と順序

本稿では、ポー・カレン語の名詞句を構成する要素と出現位置（スロット）は図3に図示するように一般化できると考える。主要部名詞（head noun）は必須要素であり、括弧でくくったのはそれを修飾する任意の要素である。

(RC) (NM) (PRON) HEAD NOUN (RC) (ADP) (NUM + CLF) (PL) (DEM)

SLOT1 SLOT2 SLOT3 SLOT4 SLOT5 SLOT6 SLOT7 SLOT8 SLOT9

図3 ポー・カレン語の名詞句の構成要素

SLOT1 には関係節 (relative clause) が現れる。SLOT2 には主要部名詞を修飾する名詞 (修飾名詞 noun modifier) が現れる。SLOT3 には代名詞 (pronoun) が現れる。SLOT4 は主要部名詞の位置である。SLOT5 には SLOT1 と同じく、関係節が現れる。SLOT6 には側置助詞句 (adpositional phrase) が現れる。SLOT7 に

<sup>3</sup> 助詞には、側置助詞 (adpositional particle), 従属節助詞 (subordinate clause particle), 一般助詞 (general particle), 名詞修飾助詞 (noun modifying particle), 動詞助詞 (verb particle), 副助詞 (adverbial particle), 文助詞 (sentence particle) の7つがある。

は「数詞＋助数詞」が現れる。SLOT8 には複数性 (plurality) を表す助詞<sup>4</sup> が現れる。右端の SLOT9 には指示機能 (demonstrative function) を持つ助詞が現れる。

下の (2) から (5) に 2 個以上の要素からなる名詞句の例を示す。‘|’ はスロット境界, ‘[ ]’ は関係節である。筆者のデータにすべてのスロットが埋まった名詞句は見当たらない。そのような名詞句を作成することは理論的には可能と思われるが, おそらく非常に困難である。

- (2) phlòuN | chəxíchəlà  
カレン 文化  
{SLOT2}{ SLOT4 }  
カレン人の文化

- (3) já | [phàdú] | θāN béiN | jò  
魚 大きい 三 枚 this  
{SLOT4}{ SLOT5 }{ SLOT7 }{ SLOT9 }  
この三匹の大きな魚

- (4) jə | θə | dē khúláu | θè | nó  
1SG 友人 with 帽子 (複数) that  
{SLOT3}{ SLOT4 }{ SLOT6 }{ SLOT8 }{SLOT9}  
あの、帽子をかぶった私の友人たち

- (5) [ʔəwē xwè] | já | [phàdú] | lá cəpwē phānkhú ʔə | lə béiN | nó  
3SG 買う 魚 大きい LOC 机 上 向こうの 一枚 that  
{ SLOT1 }{SLOT4}{SLOT5}{ SLOT6 }{ SLOT7 }{SLOT9}  
あの一匹の、向こうの机の上にある、彼が買った大きい魚

なお, (5) の SLOT6 で場所を表す側置助詞 lá によって導かれた名詞句は, これ自体が, 次に示すように複数のスロットからなる名詞句である。

- (6) cəpwē | phānkhú | ʔə  
机 上 向こうの  
{SLOT2}{ SLOT4 }{ SLOT9 }  
向こうにある机の上

<sup>4</sup> SLOT8 の「複数性を表す助詞」および SLOT9 の「指示機能を持つ助詞」は, 加藤 (2004) では「名詞修飾助詞」に分類したものである。定義上, 名詞修飾助詞は名詞句に前置または後置される助詞である。よって, 名詞句の外側に現れる要素である。しかしその後, 筆者は, 複数性を表す助詞と指示機能を持つ助詞は名詞句の内側に現れると考えるようになった。したがって, これらを名詞修飾助詞から除外するか, 名詞修飾助詞の定義を変更する必要がある。

次の 3. では、主要部名詞を修飾する様々な要素を観察する。

### 3. 名詞を修飾する要素

先に図 3 に基づいて述べたとおり、名詞を修飾する要素には、関係節、修飾名詞、代名詞、側置助詞句、数詞＋助数詞、複数性を表す助詞、指示機能を持つ助詞、がある。以下の 3.1. から 3.7. では、この順序で、これらの要素がどのように主要部名詞を修飾するかを見る。さらに、3.8. では状態動詞由来の形式が名詞を修飾するように見える現象について解釈を示し、3.9. では名詞句内の再帰性について論じる。

#### 3.1. 関係節

ポー・カレン語の関係節の種類や振舞いについて、筆者は加藤（2001）において詳細に論じた。ここではそこで示した考察に基づいて簡略に述べる。ポー・カレン語の関係節には、関係節標識が介在しない「前置型」と「後置型」、および、関係節標識が介在する「標識介在型」がある。これらの関係節はすべて主要部外在型の関係節である。ポー・カレン語には、主要部内在型の関係節は存在しない。

日常会話では前置型と後置型が主に使われる。そこでまず、前置型と後置型について述べる。前置型の関係節は、(7) のように主要部名詞の前に置かれる。この位置は SLOT1 である。他方、後置型の関係節は、(8) のように主要部名詞の後に置かれる。この位置は SLOT5 である。どちらの関係節においても、関係節化された名詞は空所 (gap) になる。

- (7) [jə      dú]      phlòun      nó      mwē      ʔəwê  
       1SG    殴る    人            TOP        COP       3SG

私が殴った人は彼だ

- (8) phlòun      [dú      jə]      nó      ɣê      ʔé  
       人            殴る    1SG        TOP        来る       NEG

私を殴った人は来なかった

前置型と後置型の違いは、後置型は主要部名詞が関係節の主語に相当する場合に用いられ、前置型はそれ以外の場合に用いられる、ということである。

ポー・カレン語に動詞と形容詞の区別はなく、状態を表す単語も動詞である（加藤 2008 参照）。したがって、(3) や (5) の例における状態動詞 phàdú 「大きい」は、主要部名詞を修飾する後置型関係節である。

一方、(9) と (10) に示す関係節が標識介在型である。これらはそれぞれ (7) お

よび (8) と同一の意味を表している。標識介在型の特徴は、関係節を導く助詞（関係節標識）*lă* が用いられるということである。そして、*lă* とそれによって導かれた節が全体として SLO5 に現れる。標識介在型は、民話の語りや演説など、比較的かしこまった場面で使われる。通常の日常会話ではめったに使われることがない。それが前置型や後置型との違いである。

- (9)    *phlòun*   *lă*        [*jə*    *dú*    (*ʔə*)]   *nó*        *mwē*    *ʔəwê*  
          人            REL        1SG        殴る        3SG        TOP        COP        3SG  
          私が殴った人は彼だ

- (10)   *phlòun*   *lă*        [*ʔə*    *dú*    *jə*]        *nó*        *γê*        *ʔé*  
          人            REL        3SG        殴る        1SG        TOP        来る        NEG  
          私が殴った人は来なかった

標識介在型では、空所を用いる前置型および後置型と違って、*resumptive pronoun* (Comrie 1989: 147) が生じる。すなわち、主要部名詞を指示する代名詞が関係節内に現れる。この代名詞は、関係節内における統語役割が主語の場合 ((10) 参照) は、主要部が生物であれ非生物であれ、必須である。非主語の場合 ((9) 参照) は主要部が生物の場合にのみ現れることがある。(9) の関係節内の三人称代名詞を括弧でくくってあるのは、これが必須ではないことを表している。

先ほど、後置型は主要部名詞が関係節の主語に相当する場合に用いられ、前置型はそれ以外の場合に用いられると言った。しかし、この原則に反する場合がある。主要部名詞が主語であっても、その主要部名詞の定性 (*definiteness*) が高い場合、前置型が用いられることがある。次に挙げる例がそうである。

- (11)   [*ʔóthō*    *thàin*]    *jə*        *lə*        *γà*  
          残る        再び        1SG        一        CLF (人間)  
          再び取り残された私

- (12)   [*xilà*        *chêinpràn*    *tè*]        *ʔə*        *mé*        *nó*  
          美しい        清らかな        非常に        3SG        顔        that  
          その非常に美しく清らかな彼女の顔

典型的には、主要部名詞が代名詞や固有名詞であったり、代名詞で修飾された名詞である場合、これらの例のように、主要部名詞が主語であっても前置型が使われることがよくある。また、代名詞、固有名詞、「代名詞で修飾された名詞」でなくても、談話において既出の名詞であれば、主語の役割を持つ主要部名詞が前置型関係節で修飾される場合がある。

ここまで見た例は、主語あるいは目的語が関係節化されたものだった。しかし、ポー・カレン語では、次のように、主語や目的語以外の周辺的な名詞句も関係節化が可能である。この例では、道具を表す名詞句が関係節化されている。

- (13) [jə      dú      ʔə]      lé      nɔ      mwē      phjā      jò  
          1SG    殴る    3SG    棒    TOP    COP    物    this  
          私が彼を殴った棒はこれだ

さらに、次の例の ʔənâN 「におい」のように、節内要素ではない名詞句を関係節で修飾することも可能である。これは日本語学で寺村秀夫が「外の関係」と呼ぶ連体修飾節に相当するものである（寺村 1993 など参照）。

- (14) [ʔánká      já]      ʔənâN  
          焼く      魚      におい  
          魚を焼くにおい

### 3.2. 修飾名詞

主要部名詞を修飾する名詞は、(2) の例における phlòun 「カレン」のように、SLOT2 に現れる。このスロットに現れた名詞を修飾名詞と呼んでおく。下に他の例を挙げる。いずれの例においても、左側の名詞が修飾名詞で、右側の名詞が主要部名詞である。

- (15) təkò      phô  
          ハス      花  
          ハスの花

- (16) néinθân      kəwə  
          新年      朝  
          新年になった朝

- (17) phjāθā      chəmə  
          宗教      仕事  
          宗教にまつわる行為

所有者と所有物の関係も同じように表される。すなわち、(18) のように、所有者名詞が SLOT2 に現れて、SLOT4 に現れた所有物名詞を修飾する。

- (18) ʔəmũ      phjâ  
       母        店  
       母の店

### 3.3. 代名詞

代名詞には、第一形、第二形、強勢形の 3 つの形がある。表 2 に示すとおりである。第一形は主に、動詞や名詞の前に置かれる。動詞の前に置かれた場合には主語を表す。名詞の前に置かれた場合には下で述べるように所有者を表す。第二形は主に、動詞や側置助詞の目的語位置で使われる形である。強勢形は、代名詞を強調するときに使われる形で、あらゆる環境に現れることができる。パアン方言では、三人称単数代名詞が主語位置に現れた場合、ʔə ではなく強勢形の ʔəwê が使われることが多い。一人称複数代名詞には /h/ で始まるものと /p/ で始まるものがあるが、これは自由変異である。三人称複数の第一形には 2 つの形があり、ʔəθí は動詞の前でも名詞の前でも使われるが、ʔəθíʔə は名詞の前でしか使われない。

	第一形	第二形	強勢形
1SG	jə	jə	jəwê
2SG	nə	nə	nəwê
3SG	ʔə	ʔə	ʔəwê
1PL	hə ~ pə	hə ~ pə	həwê ~ pəwê
2PL	nəθí	nəθí	nəθíwê
3PL	ʔəθí, ʔəθíʔə	ʔəθí	ʔəθíwê

表 2 代名詞の 3 つの形

これらの形のうち第一形は、SLOT3 に現れて所有者を表す。(4) の一人称単数代名詞 jə がその例である。下に二人称単数と三人称単数の例を挙げておこう。

- (19) nə      châin  
       2SG      シャツ  
       あなたのシャツ

- (20) ʔə      yéin  
       3SG      家  
       { 彼 / 彼女 } の家

前節 3.2. で、所有者名詞と所有物名詞の表し方について述べた。(18) に示したように、「所有者名詞＋所有物名詞」という形を取る。このような名詞句において、

三人称代名詞の第一形が所有物名詞の前に置かれ、(21) のような形を取ることがある。所有を表す代名詞のスロットを、修飾名詞と同じ SLOT2 ではなく SLOT3 と考えるのはこのためである。(21) のような言い方がある以上、修飾名詞の後にもう一つスロットを設定しておかなければならない。

- (21) ʔəmū ʔə phjâ  
           母           3SG       店  
           母の店

なお、(18) と (21) にどのような意味的あるいは用法上の差異があるのかは現段階では分かっていない。

### 3.4. 側置助詞句

側置助詞は、一般的に言うところの *adposition* である。側置助詞には、(22) の *lă* や (23) の *dě* のように、名詞句を副詞的語句として節中に導入する機能がある。側置助詞が名詞句と共に形成する句を側置助詞句と呼ぶ。

- (22) jə ʔə lă thəʔàn  
       1SG   いる   LOC   (地名)  
       私はパアンに住んでいる
- (23) jə ʔán θân dē núthòun  
       1SG   いる   おかず   with   さじ  
       私はおかずをさじで食べた

側置助詞について筆者は加藤（2004）および加藤（2010）において詳細な記述を行った。これら拙論において述べたとおり、ポー・カレン語には次の 9 個の側置助詞がある。

- |                  |                                    |
|------------------|------------------------------------|
| <i>lă</i>        | 「～において [位置]」「～から [起点]」「～へ [着点]」    |
| <i>thôn</i>      | 「～のあたりに」                           |
| <i>dě</i>        | 「～で [道具]」「～と [随伴者]」「～を持って [付帯物]」など |
| <i>bê ... θò</i> | 「～のように」                            |
| <i>ní</i>        | 「～くらい (の大きさ) で」                    |
| <i>xwē</i>       | 「～くらい (の量) で」                      |
| <i>báchâin</i>   | 「～に関して」                            |
| <i>təkhôlô</i>   | 「～以来」                              |
| <i>phô</i>       | 「～のうちに」                            |



これら 9 個のうち、上から 7 番目までの *lá*, *thōN*, *dē*, *bē* ... *θò*, *ní*, *xwē*, *báchâin* によって作られた側置助詞句には名詞を修飾する機能もあり、それは SLOT6 に現れる。例 (4) と (5) の SLOT6 を参照されたい。下に、名詞修飾機能を持つ 7 個の側置助詞の各々につき、例を一つずつ挙げる。

- (24) *phlòuN*   *lá*   *pəjànkhāN*  
           人           LOC       ミャンマー  
           ミャンマーの人

- (25) *phlòuN*   *thōN*       *jò*  
           人           ~あたり   ここ  
           この近辺の人

- (26) *phlòuN*   *dē*       *lái?àu*  
           人           with   本  
           本を持った人

- (27) *chəθúichəθá*       *bē*   *khòθá*    *θò*  
           果物               *bē*   マンゴー    *θò*  
           マンゴーに似た果物

- (28) *lé*   *ní*           *cúikhú*  
           棒    ~くらい   腕  
           腕くらいの大きさの棒

- (29) *páichāN*   *xwē*       *jò*  
           金           ~くらい   これ  
           これくらいの額のお金

- (30) *lái?àu*   *báchâin*    *pəjànkhāN*  
           本           ~について   ミャンマー  
           ミャンマーに関する本

位置・起点・着点を表す *lá* について注意すべきことは、名詞修飾に使われたとき、この側置助詞は位置しか表すことができないということである。したがって、(24) は「ミャンマーに住む人」あるいは「ミャンマーにいる人」という意味であり、「ミャンマーから来た人」あるいは「ミャンマーへ行く人」という意味には取れない。これと同様に、*dē* には「~で [道具]」「~と [随伴者]」「~を持っ

て「付帯物」を始めとする様々な意味があるが、名詞修飾に使われたときに表すことのできる意味は付帯物のみである。

なお、名詞修飾に使われた *lă* は省略されることがある。すなわち、(24) は次のようにも言う。

- (31) *phlòuN pəjànkhāN*  
           人                  ミャンマー  
           ミャンマーの人

### 3.5. 数詞＋助数詞

SLOT7 には数詞と助数詞を用いた数量表現が現れる。数詞も助数詞も名詞の下位範疇である。

1 から 9 までの数詞は次のとおり。*lāN* 「1」、*nī* 「2」、*θāN* 「3」、*lī* 「4」、*jē* 「5」、*xū* 「6」、*nwē* 「7」、*xó* 「8」、*khwī* 「9」。ポー・カレン語は 10 倍ごとに位を取る方式を用いており、10 の位は *chī*、100 の位は *jà*、1000 の位は *thōN*、10000 の位は *lă* で、それぞれ表される。これら位取りを表す形態素に 1 から 9 の数詞が前置されて、10, 100, 1000, 10000 の倍数が表されるが、その際、*lāN* 「1」は *lă* に、*nī* 「2」は *nī* に、*θāN* 「3」は *θāN* に、*xū* 「6」は *xū* に、*nwē* 「7」は *nwē* に、それぞれ交替する。10 の位を例にとると、*lăchī* 「10」、*nīchī* 「20」、*θāNchī* 「30」、*līchī* 「40」、*jēchī* 「50」、*xūchī* 「60」、*nwēchī* 「70」、*xóchī* 「80」、*khwīchī* 「90」となる。あとは位取りの大きい順に並べるだけで数を数えることができる。例えば、2158 は、2000, 100, 50, 8 の順で並べる。2000 は *nīthōN*、100 は *lăjà*、50 は *jēchī*、8 は *xó* であるから、これを順に並べた *nīthōNlăjàjēchīxó* が 2158 である。

量化表現として名詞を修飾するときには、数詞のみの使用は不可能であり、数詞の後に助数詞 (numeral classifier) を置いて「数詞＋助数詞」とする。これが SLOT7 に現れる。数詞が助数詞と共に起るとき、1 の位の 1 から 9 は、位取りを表す形態素に前置されるのと同じ形が現れる。人間を数える助数詞 *yà* を例にとると、次のとおりである。*lă yà* 「1 人」、*nī yà* 「2 人」、*θāN yà* 「3 人」、*lī yà* 「4 人」、*jē yà* 「5 人」、*xū yà* 「6 人」、*nwē yà* 「7 人」、*xó yà* 「8 人」、*khwī yà* 「9 人」。これは 10 の位以上の形態素が現れても同じである。例えば、31 人は *θāNchīlă yà* となり、476 人は *lījānwēchīxū yà* となる。ただし、1 の位がゼロの場合、「数詞＋助数詞」という原則的順序を取ることができず、助数詞の前に接頭辞 *ʔə-* を付した上で、数詞と助数詞の順序を逆にした「*ʔə-* 助数詞＋数詞」という形が用いられる。例えば、10 人は *ʔəyà lăchī*、90 人は *ʔəyà khwīchī*、700 人は *ʔəyà nwējà* となる。1 の位がゼロの場合に数詞と助数詞の順が原則と逆になるのは隣接する TB 系言語のビルマ語と同じであるが、ビルマ語では 10 の場合に原則順と逆順の両方が使えるのに対し、ポー・カレン語では例えば 10 人を *\*chī yà* と言うことはできない。

代表的な助数詞には次のようなものがある。

dùu は人間以外の哺乳類に用いる。「～匹」。また, general classifier としても用いられる。

yà は人間に用いる。「～人」。

béin は平らな物に用いる。「～枚」。鳥類, 魚類, 昆虫にも用いる。

bòN は細長い物に用いる。「～本」。蛇やトカゲを数えるときにも用いる。

phlóun は丸い (円い) 物に用いる。「～個」。

本節の最初に述べたとおり, 「数詞+助数詞」(1 の位がゼロのとき助数詞+数詞) は SLOT7 に現れる。(3) の例を参照していただきたい。下に他の例を挙げる。

- (32) pənā jē dùu jò  
水牛 5 匹 this  
この 5 頭の水牛

- (33) pəjàn ʔəyà θənjà nɔ́  
ビルマ人 ~人 300 that  
あの 300 人のビルマ人

東南アジアの様々な言語では, 類別詞が数詞を伴わずに現れることがある。しかし, ポー・カレン語の助数詞は数詞を伴わずに現れることはできない。したがって, \*pənā dùu jò (水牛/匹/この) や \*dùu jò (匹/この) のような言い方はできない。

最後に重要なこととして, 「数詞+助数詞」が主要部名詞としても機能することを指摘しておかなければならない。次の文における lə dùu はそのような例である。なお, ここで「数詞+助数詞」は照応的に使われている。

- (34) ʔəwêjò mwē jə thwí. lə dùu jò ʔé jə chà mā  
これ COP 1SG 犬 一 匹 この 愛する 1SG much very  
これは私の犬だ。この一匹 (= この犬) は私を非常に愛している

### 3.6. 複数性を表す助詞

複数性を表す助詞には θè, ləphá, θèləphá などがある。これらは SLOT8 に現れる。θè を用いた (4) の例を参照されたい。これら形式の違いについては不明な点が多いが, 日常会話ではもっぱら θè が使われることは明らかである。他は格式張った文体でよく用いられ, 日常会話ではほとんど聞くことがない。したがってここでは θè のみについて述べる。

θè には二つの用法がある。一つは、(35) に示したような、主要部名詞の表す事物そのものの複数性を表す用法で、もう一つは、(36) に示したような、主要部名詞が表す事物以外の存在を含意する用法である。後者の用法における意味解釈は、主要部名詞が固有名詞である場合にのみ可能である。

- (35) yéiN      θè  
家            (複数)  
家々

- (36) còʔéphlòuN      θè  
(人名)            (複数)  
チョーエープロンたち

「数詞＋助数詞」が現れるスロットを SLOT7 とし、複数性を表す助詞が現れるスロットを SLOT8 としたのは、これらが常にこの順序で並ぶからである。(37) における複数助詞を「数詞＋助数詞」の前に移動して (38) のようにすることはできない。

- (37) láiʔàu      θɔ̃N      béiN      θè      nó  
本            3            枚            (複数)      that  
あの 3 冊の本

- (38) \*lá iʔàu      θè            θɔ̃N      béiN      nó  
本            (複数)      3            枚            that

参考までに述べておくと、隣接する TB 系言語であるビルマ語では、(37) のように数詞を伴う量化表現と複数を表す形式が共起することはない。

### 3.7. 指示機能を持つ助詞

名詞句構造の右端に位置する SLOT9 には、指示機能を持つ助詞が現れる。一般的に言うところの指示詞である。本稿でもこれ以降は指示詞と呼ぶことにする。

日常会話でよく使われる指示詞には次の 3 つがある。

- jò      自分の領域にあるものを指す。  
nó      自分の領域にないものを指す。  
ʔò      自分の領域にないもので、非常に遠くにあるものを指す。

日本語では、jò は「この」、nó は「その」または「あの」、ʔò は「あの」ある

いは「向こうの」などと訳せる場合が多い。jò の例としては (3), n5 の例としては (4) と (5), ?ò の例としては (6) を見られたい。指示詞はこれまで挙げてきた他の例にも何度も現れているので、ここであらためて例を示す必要もないだろう。

加藤 (2010) に示したように、ポー・カレン語において指示詞は文の意味解釈に大きな貢献をすることがある。側置助詞 l5 を用いた文 (39) と (40) を比較してみよう。

- (39) ?əwê      mə      γê      l5      θítàu      jò  
          3SG        IRR      来る    LOC      病院       この  
          彼は病院へ来るだろう

- (40) ?əwê      mə      γê      l5      θítàu      ?ò  
          3SG        IRR      来る    LOC      病院       あの  
          彼は病院から来るだろう

ポー・カレン語の側置助詞 l5 は、3.4. で示したように、「位置」「起点」「着点」の 3 つの意味を表しうる。したがって、様々な語用論的情報を参照しなければ、l5 がどの意味を表しているのかが分からないことがある。γê「来る」は、移動を表す動詞なので、l5 を伴う名詞句は起点である可能性と着点である可能性がある。(39) では、jò が使われているので、「病院」は発話者の近くにあるはずである。かつ、γê は発話地点への移動を表す動詞である。したがってこの場合、「病院」は着点でしかあり得ない。逆に、(40) では ?ò が使われているので、「病院」は発話者から離れた場所にあるはずである。そのため、「病院」は起点であるとしか解釈できない。指示詞の重要な働きの一つは、限定であると思われる。しかしポー・カレン語においては、限定という観点から見たときに名詞に後置された指示詞が不要であるように見えることがある。その理由の一つはおそらく、場所の意味解釈を一つに絞ることである。

### 3.8. 名詞を修飾する状態動詞由来の形式の問題

ここでは、状態動詞由来の単語のスロットをいずれと解釈するかの問題について論じたい。3.1. で述べたように、名詞を修飾する状態動詞は関係節の一種と考えられる。例えば、(41) における dú「大きい」は後置型の関係節であり、SLOT5 に現れていると考えられる。

- (41) phjâ      dú  
          店        大きい  
          大きな店

これとほとんど同じ意味を表す言い方として、(42) がある。ʔədú は、動詞 dú に名詞化接頭辞 ʔa- が付加されたものであり、「大きなもの」という意味を表す。この語がどのスロットに現れた要素なのかを考える必要がある。

- (42) phjâ ʔədú  
店 大きなもの  
大きな店

ʔədú は dú と違って名詞であり、これ単独でも名詞句を形成することができる。おそらく、そのことから考えて、この ʔədú は (41) の dú と同様の SLOT5 に現れた要素ではなく、SLOT4 に現れた要素である。すなわち主要部名詞である。そして、その前の phjâ は、SLOT2 に現れた修飾名詞であろう。(42) を日本語で「大きな店」と訳したが、構造的には「店の大きい」に似ているかもしれない。

実はもう一つ、(41) と同じ意味を次のような言い方で表す場合があるという問題がある。

- (43) phjâ dúdú  
店 大きく  
大きな店

例 (43) の dúdú は繰り返し (reduplication) によって dú から派生した畳語である。ポー・カレン語において、繰り返しは、状態動詞に適用されて副詞を形成する (加藤 2004, 第 7 章参照)。副詞は一般的に、(1) における ʔáʔá 「たくさん」のように、動詞の後に現れて動詞を修飾するのであり、動詞起源のものであっても動詞そのものではない。だとすれば、(43) の dúdú を関係節と見なすことはできない。また、副詞は単独で名詞句を形成しないので、名詞主要部と見なすこともできない。コンサルタントによれば、このように副詞によって名詞を修飾することは「俗っぽい」と感じるそうである。そのため、この用法はビルマ語から借用した、まだ定着していない形態法である可能性<sup>5</sup>がある。本稿では、さしあたり、SLOT5 には状態動詞由来の畳語が現れて名詞を修飾する場合もあると考えることにする。

### 3.9. SLOT2 における名詞句の再帰性 (recursion)

ポー・カレン語の名詞句における 9 つのスロットのうち、3.2. で述べた SLOT2 には、名詞句がそのまま再帰的に現れることができる。

例えば (44) の名詞句では、phlòunthìkhān həθàbān 「カレン州の若者」という名詞句がまず形成されたと考えられる。(a) に示したように、この名詞句において、主要部名詞は həθàbān 「若者」であり、それを SLOT2 に現れた phlòunthìkhān 「カ

<sup>5</sup> 口語ビルマ語では、動詞の畳語形が名詞を修飾することができる。

レン州」が修飾している。このようにして作られた名詞句がさらに、(b)に示したような形で、kòunlwē「組織」を主要部名詞とする名詞句の SLOT2 に埋め込まれているのである。'|' は埋め込まれた名詞句内のスロット境界、'||' は埋め込み先名詞句内のスロット境界である。

- (44) phlòunthíkhān | həθàbán || kòunlwē  
           カレン州               若者               組織
- (a) {    SLOT2    }{    SLOT4    }  
 (b) {               SLOT2               }{    SLOT4    }  
           カレン州の若者による組織

もう一つ例を挙げておく。(45) では、phlòun lə yà jò「この一人の人間」という名詞句が、より大きな名詞句の SLOT2 に埋め込まれている。それぞれの名詞句のスロットを (a) と (b) に示した。

- (45) phlòun | lə yà | jò || ʔə || yéin  
           人           一    ～人           この           3sg           家
- (a) {SLOT4}{    SLOT7    }{    SLOT9    }  
 (b) {               SLOT2               }{SLOT3}{    SLOT4    }  
           この人の家

このように、一度できあがった名詞句を修飾名詞として SLOT2 に再帰的に埋め込んでいくことによって、ポー・カレン語の名詞句を、より大きな構造体へと拡張させることが可能なのである。

#### 4. まとめ

本稿で主張したいことは、ポー・カレン語の名詞句内部にはスロットを設定することができ、そこにどのような種類の形式が現れるかという観点に基づいて名詞句の構造を記述することができるということである。本稿では、9つのスロットを設定し、SLOT4 が必須要素としての主要部名詞の位置だと述べた。この主要部名詞を中心とし、それを修飾する様々な要素が前後の決められたスロットに現れるのである。さらに、SLOT2 には名詞句を再帰的に埋め込むことができ、それによって名詞句を拡張することができると指摘した。

それぞれのスロットに現れる形式には、上で述べた形式以外のものもあるかもしれない（おそらくあるであろう）。また、スロットの数を今後さらに増やす必要があるかもしれない。しかし、ポー・カレン語の名詞句は、適切な数のスロッ

トを設定し、そこにどのような形式が現れ得るかを適切にリストアップすることによって、正しく記述できることは明らかである。すなわち、ポー・カレン語の名詞句にとって、その内部の要素間順序は非常に重要である。

最後に、要素間順序に関連して、ポー・カレン語の主要部名詞と関係節の順序について述べておきたい。チベット・ビルマ系諸言語の語順の研究である Dryer (2008) は、チベット・ビルマ系諸言語において、名詞と関係節の順序は RelN すなわち「関係節＋名詞」であることが一般的であると述べている。これについては OV 型言語だからという理由付けをすることができないという。なぜなら、チベット・ビルマ系以外の OV 型諸言語においては NRel すなわち「名詞＋関係節」という語順が頻繁に観察されるからである。Dryer は、この議論の中で、VO 型言語における RelN 語順は通言語的に極めて稀であり、その例外として、シナ・チベット系の Bai と Chinese およびアウストロネシア系の Amis を挙げている。そして、カレン系諸言語については、チベット・ビルマ系でありながら、VO 型言語の傾向にたがわず、NRel 語順を示すとしている。しかしながら、本稿の 3.1. において述べたとおり、ポー・カレン語には RelN 語順が存在するのである。Dryer (2008) はポー・カレン語の資料として Kato (2003) を参照しているが、Kato (2003) で私は本稿と同じく、ポー・カレン語では非主語の場合に RelN 語順が現れることを指摘しているから、なぜポー・カレン語についての言及がなかったのか不思議である。非主語の関係節化にのみ現れる語順なので、特殊なケースと見なしたのかもしれない。実際には、ポー・カレン語には RelN 語順が存在することを強調して、本稿の結びとしたい。

## 略号

ADP	側置助詞句	PRON	代名詞
CLF	助数詞	RC	関係節
COP	コピュラ動詞	REL	関係節を導く助詞
DEM	指示詞	SG	単数
IRR	非現実法	TOP	主題
LOC	場所を表す助詞	Vptc	動詞助詞
NEG	否定	1	一人称
NM	修飾名詞	2	二人称
NUM	数詞	3	三人称
PL	複数		



## 転写に用いる記号

子音音素には /p, θ [θ~t], t, c [tɕ], k, ʔ, ph, th, ch, kh, b, d, ɕ, x, h, ɣ, ɸ, m, n, (ɲ), (ŋ), ɳ, w, j, l, (r)/ がある。括弧でくくったものは主に借用語に現れる。韻母には /i [ɿ], i, u, ɪ [ɪ], ʊ, e, ə, o, ɛ, a, ɔ, ai, au, əŋ, aŋ [ǎŋ], ɔŋ, eɪŋ [eɪŋ~ei], əwɪŋ [əwɪŋ~əw], ɔwɪŋ [ɔwɪŋ~ou], aiŋ/ がある。また、声調には、/á/ [55], /ǎ/ [33~334], /ǎ/ [11], /ǎ/ [51] がある。絶対語末以外の環境には軽声音節 (atonic syllable) も現れる。軽声音節に現れる韻母は /ə/ のみであり、声調符号を付さないことでこれを表す。

## 本研究のデータ

本稿で扱ったデータはすべて筆者自身が 1994 年から続けている実地調査で収集したものである。本稿のテーマに関しては、特に Saw Hla Chit 氏の協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

## 参考文献

- Comrie, Bernard. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Dryer, Matthew S. 2008. "Word Order in Tibeto-Burman Languages". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.1. pp. 1–84.
- 加藤昌彦. 2001. 「ポー・カレン語 (東部方言) の関係節」『東京大学言語学論集』20. pp. 275–300.
- Kato, Atsuhiko. 2003. "Pwo Karen". In Graham Thurgood & Randy LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*. pp. 632–648. London and New York: Routledge.
- 加藤昌彦. 2004. 「ポー・カレン語文法」東京大学博士論文.
- 加藤昌彦. 2008. 「ポー・カレン語に形容詞という範疇は必要か?」『アジア・アフリカの言語と言語学』3. pp. 77–95.
- Kato, Atsuhiko. 2009. "A basic vocabulary of Htoklibang Pwo Karen with Hpa-an, Kyonbyaw, and Proto-Pwo Karen forms". *Asian and African Languages and Linguistics* 4. pp. 169–218.
- 加藤昌彦. 2010. 「ポー・カレン語の「格」」澤田英夫 (編)『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』. pp. 311–330.
- 加藤昌彦. 2013. 「ポー・カレン語の文の分類」澤田英夫 (編)『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2: 述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』. pp. 81–114.
- Matisoff, James A. 1991. "Sino-Tibetan linguistics: present state and future prospects". *Annual Review of Anthropology* 20. pp. 469–504.
- Matisoff, James A. 2000. "On the uselessness of glottochronology for the subgrouping of Tibeto-Burman". In Colin Renfrew, April McMahon, & Larry Trask (eds.) *Time Depth in Historical Linguistics*. pp. 333–371. Cambridge: The McDonald Institute for Archaeological Research.
- 寺村秀夫. 1993. 『寺村秀夫論文集 I—日本文法編—』東京: くろしお出版.

# メチエ語の名詞句構造の概要

桐生 和幸

## 1. はじめに

本稿で取り上げるメチェ語は、図1で黒で示したように、ネパール東部ジャパ群で主に話されている言語である。メチェ語は、チベット＝ビルマ語族のボド・ガロ語支に属し、ボド語群と呼ばれる言語群のボド語の一方言である。ボド語群には、ボド語以外に、コックボロック語、ティワ語、ディマサ語などが属する。ボド族は、インド・アッサム州東部から西ベンガル州にかけて居住する民族であり、ネパールのメチェもボド族である。

## A map of Nepal



図1 ネパールの地図とメチェ語の言語地域 (Meche & Kiryu 2012)

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのころには、アッサム州のカムルuppから東にかけて居住していたボド族は **Kachari** (カチャリ,あるいは,コサリ) と、アッサム州ゴアルパラから西, および, スンコシ川を渡って西ベンガルからネパールに至る地域のボド族は, **Mech** (メチュ, メス) と外部から呼ばれていた (Endle 1901 の地図)。しかし, 現在では, インド側はすべて英語表記では **Bodo** と呼ばれる。実際の発音は, 西ベンガル州では [bodo] であり, アッサム州では, [boro]

である。そのため、アッサムでは、英語表記は **Boro** (以下ボロ語) とされる場合がふつうである。**Meche** (メチェ) という呼称は、ネパールにおけるボドの外的呼称であり、自称はやはり [boɖo] である。**-e** は、ネパール語の形容詞や民族名を作る時の語尾である。現状、ネパールでボドというと、インドのボドを指すものと解釈されるので、本稿でも、ボドとは呼ばずに、メチェと呼ぶことにする。

メチェ語は、西ベンガル州のボド語とは、かなり近い方言関係にあり、お互いに問題なく通じる。また、民族的にも婚姻関係での交流が国境を超えて見られる。それに対してアッサム州のボロ語とは、全く通じないわけではないが、発音、語彙、文法の点で少なからずの違いが見られ、相互理解率も人によって異なるものの、50 パーセントから 60 パーセント程度である。Kiryu (2012) では、西ベンガル州のボド語とネパールのメチェ語をボド語西部方言とし、アッサム州のボロ語をボド語の東部方言として区分することを提案した。

メチェ語は、2011 年の国勢調査によると、人口 4867 人、話者数 4375 人と報告されている。メチェ族の若者の多くが、中東の湾岸諸国やマレーシアへ出稼に出ており、この統計に含まれていないとすると、実際の人口と話者数は大幅に増えることが見込まれる。

メチェ語は、言語類型的には多くのチベット=ビルマ系言語と同様、基本語順が主要部後置型の SV, AOV, GN, RelN, AN/NA となる。また、格体系は主格対格型で、人称変化が動詞には存在しない。メチェ語は、高低の声調の区別が見られる。母音は、/a, i, u, e, o, ə/ の単母音と /ai, au, ui, eu, əi, əu/ の 2 重母音がある。また、子音は /p [p/ɸ], b, t, d, k, g, m, n, ŋ, c [ts/ʈ], j [ɕ/z/ɕʒ], r [ɾ], l, w, h, s [s/ʃ]/ である。基本的に、無声破裂音は氣息を伴う。

## 2. メチェ語名詞句の内部構造

### 2.1. 名詞の特徴

ある種の名詞は、語構成的に規則的に形成される。親族名詞、動物、植物を表す名詞の一部は、共通する接頭辞を備えており、ある種の意味クラスを形成している。

親族名詞の一部は、その中核となる形態素は、**bəu** 「祖父」、**bəi** 「祖母」、**pa** 「父」、**ma** 「母」、**da** 「兄」、**bo** 「姉」のように 1 音節語であるが、単独では語として成り立たず、人称代名詞に由来する接頭辞が付くことで、人称ごとの区別のある親族名詞になる。話者の親族については、接頭辞 **a-** が付属し、聞き手の親族については、**nəŋ-** が付属し、それ以外の親族については、**bi-** が付属する。よって、例えば、自分の父親は **apa** となり、聞き手の父親は **nəŋpa** となり、それ以外の父親は **bipa** となる。**bi-** の付く形は、誰の親族という意味なく、一般的な親族を表

す場合に、いわゆる無標の接頭辞のように機能することもできる。

この *bi-* は、後でも出てくるが、名詞を形成する場合に、無標の接頭辞として付属するパターンが多くある。親族名称に限って言えば、子どもは *sa* であるが、単独では単語として成り立たないので、*bi-* をつけることで *bisa* という単語が成立する。*sa* は、家禽の子どもや指小辞的にも働き、*oma-sa* 「豚の子ども」、*dau-sa* 「ひよこ」、*dəi-sa* 「川+子=小川」のような単語を形成する。

3種類の接頭辞が付く親族名称は、現状把握できている範囲では、上にあげた話者自身より年長の親族を指す場合に限られるようである。弟は *pongbai* であり、妹は *binanau* と *bi-* が付くが、その他の接頭辞は付かず、派生的な名詞ではない。

動植物を表す名詞の一部は、そのクラスを表す形態素が共通して語の先頭につくという特徴が見られる。鳥の一部は、*dau* という形態素で始まる。*dau* 自体は、単独で語となり、「鶏」という意味である。しかし、鳥一般をさす語やそのほかの鳥をさす名詞は、表1のように *dau* で始まるものが多い。

<i>daucen</i>	鳥一般	<i>daukatak</i>	ヤツガシラ
<i>dauka</i>	ハシブトガラス	<i>daukadan</i>	インドブッポウソウ
<i>daunatud</i>	カワセミ	<i>daubo</i>	コサギ
<i>dauto</i>	ハト	<i>dauwaŋ</i>	オオサイチョウ

表1 *dau* で始まる鳥類

また、動物の多くは、表2のように、*mə-* という接頭辞を取る。

<i>məca</i>	トラ	<i>mətam</i>	マングース
<i>məpur</i>	熊	<i>məteka</i>	ムササビ
<i>məkra</i>	猿	<i>mədəi</i>	ヤマアラシ
<i>məsəu</i>	雄牛	<i>məpəu</i>	イグアナ
<i>məcəi</i>	キョン、四つ目鹿		

表2 *mə-* で始まる動物

*mə-* で始まる語には、*məcram* 「蟻」、*mədəi* 「神」のように動物でないものもある。また、*məisə* 「水牛」、*məided* 「象」のように *məi-* で始まるものもあるが、*məi* 自体は「鹿」という意味である。

また、根菜類は、*taguna* 「甘芋」、*tasumbli* 「タピオカ芋」のように、つる性の芋のなるものには、*ta-* という形態素で始まる。

このように、メチェ語における名詞は、共通する形態素を含むものがあり、それが一つの意味的なまとまりをなしている。その他の名詞は、形態的に共通性は見られない。

## 2.2. 名詞句の内部構造

メチェ語の名詞句は、(1) に示すような内部構造を持つ。

- (1) [指示詞] [数詞＋類別詞] [形容詞] 名詞 [形容詞] [数詞＋類別詞]  
[格標示]

指示詞は名詞句の先頭に、格標示は名詞句の一番最後に来る。類別詞句と形容詞は、名詞の前にも後ろにも来ることができる。

## 2.3. 指示詞

メチェ語の指示詞は、be「この・これ」と bi「その・それ、あの・あれ」とがある。この二つは、単独で項として機能することもできるし、名詞を修飾することもできる。

- (2) a. be bima-bisa mæca nə gumbai-bai-yə, ma.  
この 母-子 虎 EMPH 放牧する-回る-HAB 何  
なんと、この虎の親子が[牛を]放牧して回らせたのです。

- b. mæca=ya bi gai=ya=kəu wat=nə.  
虎=NOM その 牛=DF=ACC 噛む=DAT  
虎はその牛に噛みつくために[行った]。

## 2.4. 形容詞による修飾

### 2.4.1. 形容詞と名詞の位置関係

メチェ語の形容詞は、名詞を前から、または、後ろから修飾できる<sup>1</sup>。しかし、限定的修飾の場合は、通常前から修飾するのが自然である。インフォーマントに aŋ=kəu \_\_\_\_ labə.「僕に\_\_\_\_を持ってきて。」という文にそれぞれのボタンを当てはめ提示し、判断をしてもらおうと、以下のようになった（✓✓: もっと自然, ✓: 自然, ??: 不自然, とする）。

- (3) a. ✓✓ məjaŋ bitai b. ✓ bitai məjaŋ (質)  
良い 果実 果実 良い  
良い果実 良い果実

<sup>1</sup> Burling (1983) が Sal languages と呼ぶボド・ガロ語支の他の言語でも、形容詞の名詞句内での位置は、自由である可能性が高い。Sal languages の一つであるラバ (Rabha) 語については、Joseph (2007:307) が形容詞と類別詞句の名詞句内での語順はかなり自由であると報告している。

- (4) a. ✓✓ geded bitai                      b. ✓ bitai geded (大きさ)  
           大きい    果実                      果実    大きい  
           大きな果実                      大きな果実
- (5) a. ✓✓ gəcəm bitai                      b. ✓ bitai gəcəm (色)  
           黒い    果実                      果実    黒い  
           黒い果実                      黒い果実
- (6) a. ✓✓ golgol bitai                      b. ?? bitai golgol (形状)  
           丸い    果実                      果実    丸い  
           丸い果実                      丸い果実

インフォーマントがはっきりと不自然だと答えたのは、(6b) の場合だけであった。なぜこの場合だけ、不自然と言う反応となったかは現時点では不明である。

以下では、実例およびチェック済みの作例からそれぞれの語順パターンをあげてみる<sup>2</sup>。まずは、geded (大きい) と gopot (白い) の語が AN/NA 両パターンで現れている実例のペアである。

- (7) a. [AN]  
       dudun    geded    geded    la-nanəi    hagra=u    ka-nan    dən-əi-kha.  
       縄        大きい    大きい    取る -CP    森=LOC    結ぶ -CP    置く -DST- 必ず  
       大きな大きな縄を持って行って、必ず森に [牛を] つないでおいといで。  
       (『ドゥッドビール・ドゥドゥビールの話』)
- b. [NA]  
       həit,    pəi-naiŋŋa<sup>3</sup>.                      geded    dudun=jəŋ    ka-ka-dəŋ    aŋ.  
       おい    来る -NEG.FUT.EMPH    大きい    縄=COM    結ぶ -必ず -CONT 1SG  
       ふん、[牛が戻って] 来るわけない。大きな縄で確かに結わったって  
       んだ。(『ドゥッドビール・ドゥドゥビールの話』)
- (8) a. [AN]  
       be        gopot        gorai=ya=kəu    hot=cai.  
       この    白い        馬=DF=ACC    やる=促し  
       この白い馬を頂戴な。(『ドゥッドビール・ドゥドゥビールの話』)

<sup>2</sup> 採録した物語からのものは、その物語名を日本語訳の後に付す。何もない場合は、チェック済みの作例である。

<sup>3</sup> -naiŋŋa は、本来は =nai əŋ-a [=NMLZ COP-NEG.NONPST] と形態素分析できるが、全体として強意的な非過去否定接辞に文法化していると言える。また、名詞化辞自体が、未来を表す時制接辞としても文法化している。例えば、taŋ-nai で「行く - 未来」という意味になる。

## b. [N A]

əu, kəla kona=jəŋ hai, daubo gopot=na bir-dəŋ.  
 うん 南 方角=COM FOC 白鷺 白い=NOM 飛ぶ-CONT  
 おお、南の方へな、白い鷺が飛んでいた。(『アイバリクングリ』)

以下には、AN/NA の語順のペアでは見つからなかったが、それぞれの例を挙げる。

## ・ AN の例

- (9) jəŋ gərib mansi, hənəi!  
 IPL 貧しい 人間 見ろ

ご覧のとおり、私たちは貧しい身。(『ドウッドビール・ドウドゥビールの話』)

- (10) muke slok, gəlau slok=ŋa judi kənaçəŋ-nai həŋ-bla, mane,  
 大きな 物語 長い 物語=DF もし 聴く-FUT 言う-なら FIL  
 məkra bir=ni cələŋ-nagəu.  
 猿 勇敢な=GEN 習う-義務

偉大な物語、長い物語をもし聞くと言うならば、さて、「勇敢な猿」のを習わなければならんな。(『勇敢な猿の話』)

- (11) ayəi, ma ece gusu dəi!  
 INTJ 何 少し 冷たい 水

ああ、なんて冷たい水なんだ。

- (12) bi gəjam bucula gaŋ-dəŋ.  
 3SG 古い 服 着る-CONT

彼は、古い服を着ている。

## ・ NA の例

- (13) e, məjaŋ-əi susa-nanəi hai dəi gətar dəikor=niprai  
 おい きれいに-EMPH 拭く-CP 方 水 清い 井戸=から

labə-nanəi, hə-pəi.  
 持って来る-CP やる-くる .IMP

おい、きれいに拭いてから、きれいな水を井戸から汲んで来ておやり。  
 (『ドウッドビール・ドウドゥビールの話』)

- (14) bi      mai      bidan      gəlau      labə-nai.  
 3SG   稲      束      長い      持ってくる -FUT  
 彼は長い稲の束を持って来る。

上述のように、基本的に名詞句内での形容詞の語順は主要部名詞の前でも後ろでも問題ないが、ある程度語彙化されている以下のような表現は、主要部名詞より後に来る NA の語順を取るのが自然である。

- (15)    a. hinjau gədan      b. hinjau gibi      c. hinjau goto  
          新婦                      一番目の妻              一番下の妻

#### 2.4.2. 複数の形容詞の語順

前節では、単一の形容詞が名詞を修飾する場合の名詞句内での語順を考察した。名詞句内に複数の形容詞が存在する場合、その語順について一定の法則性があることが知られている。Sproat & Shih (1991) は、以下のような形容詞の意味クラスに応じた語順を提案している。

#### (16) Adjective Ordering Restrictions (AOR)

Quality > size > shape > color > provenance      (Sproat & Shih 1991)

収録データからは、2 つ以上の形容詞が連続している例を 1 例だけ見つけることができた。

- (17) be,      həəə      hən-nan      bir-bai-yə      na      bir-bai-ya?  
          これ      ONOM      言う -CP      飛ぶ - 回る -HAB      か      飛ぶ - 回る -NEG.HAB  
 geded,      geded      ja-yə,      geded      gəcam.  
          大きい      大きい      COP-HAB      大きい      黒い  
 こいつは、ブーンと言って飛ぶんだったかな？ 大きいやつ。大きくて黒いやつ。

この例では、AOR の語順に従っている。

これに加えて、作例による 2 語形容詞による語順パタンの容認性をインフォーマントに確認した。基本となる形容詞の語順は、以下のものである。

- (18)    1              2              3              4  
          məjan      geded      golgol      gəcam      entai      labə.  
          良い      大きい      丸い      黒い      石      持ってくる .IMP  
 良い大きい丸い黒い石を持ってこい。



メチェ語では、Provenance に当たる形容詞がない<sup>4</sup>ため、それ以外の 4 つの形容詞について、2 つずつ相対的な語順について調べた。その結果、 $1 > 2 > 3 > 4$  の語順の階層性が認められ、AOR に従う語順がもっとも自然であった。つまり、相対的な語順は、 $A_1$  を階層の上の形容詞（小さい数字）、 $A_2$  を階層の下形容詞（大きい数字）とすると、必ず、 $A_1 A_2 N$  の順で並ばなければ容認されないということである。

興味深いことに、主要部名詞の左右に 2 つの形容詞を配置した場合、階層性にかかわらず ANA という語順は許容されなかった。また、NAA という語順で確認した場合、 $NA_2 A_1$  とミラーイメージとなるもののみが、許容された<sup>5</sup>。

## 2.5. 数量類別詞による修飾

メチェ語には、数量類別詞が豊富に存在する。少なくとも Meche & Kiryu (2012) には、約 100 の類別詞が挙げられている<sup>6</sup>。メチェ語の数量詞は拘束形態素で、1 ～ 5 までの数字がつく。6 以上は、インド＝アリア語由来（ベンガル語・ネパール語）の数詞と類別詞の組み合わせで表される。この場合の類別詞は、人の *jən* とそれ以外の *ta* のみである。表 3 に類別詞の例を挙げる。

また、表からも明らかな様に、メチェ語の類別詞句内の語順は、数詞が 1 から 5 までは Clf-Num の語順となるが、6 以上の場合、Num-Clf の語順となる。メチェ語固有の順は、Clf-Num だと思われる。後者の語順は、借用しているベンガル語・ネパール語での語順が Num-Clf であることから、語彙だけでなく、形態統語的な特徴も合わせて借用している状況がうかがえる。

類別詞句は、名詞句内で形容詞同様名詞の前 (19) にでも後ろ (20) にでも置くことができる。

### (19) [Clf N]

gələɪɡlam = ma = kəu buŋ-naini mən-ce kəta doŋ na ɡəiɪa?  
 子供 -DF-ACC 言う -NMLZ CLF-I 話 ある か ない .NONPST  
 直訳：子供たちに語ってきた 1 つの話がありますか、ありませんか。  
 意訳：子供たちに語り継がれてきたお話が何か一つありませんか。（「Gala Meche interview」）

### (20) [N Clf]

oho, bəhai hinjau sa-ce doŋ-ŋə lai.  
 あれま ここに 女 CLF-I いる -HAB よ  
 あれま、ここに女が一人いるよ。

<sup>4</sup> nepal=ni のように場所名詞 + =ni（属格）で表される。

<sup>5</sup> ただし、enthai golgol geded ( $A_2 A_1$ ) は、許容されなかった。

<sup>6</sup> ネパールの言語の中で、豊富な数量類別詞を持つのはネワール語とメチェ語のみ（Kiryu 2009）。

数	数詞	例（人）	例（動物）	例（物）	例（キロ）
1	-ce	sa-ce	ma-ce	mən-ce	ser-ce
2	-nəi	sa-nəi	ma-nəi	mən-nəi	ser-nəi
3	-tam	sa-tam	ma-tam	mən-tam	ser-tam
4	-brəi	sa-brəi	ma-brəi	mən-brəi	ser-brəi
5	-ba	sa-ba	ma-ba	mən-ba	ser-ba
6	cəi-	cəi-jən	cəi-ta	cəi-ta	cəi-kilo
7	sat-	sat-jən	sat-ta	sat-ta	sat-kilo

表3 メチェ語の数量詞と類別詞

形容詞の場合もそうであるが、修飾要素が主要部名詞より後ろについた場合、格標識やディスコースマーカー<sup>7</sup>は(21)や(22)のように名詞句全体の最後尾に現れる。

## (21) [N Clf]=CASE

bi        udəi    tai-ce = kəu    lai        cər        tə        pəsi-nai?  
 その      腹      CLF-I=ACC      FOC      誰      一体      養う -FUT

直訳：その腹を1つ、誰が一体養うってんだ。

意訳：そいつを一体誰が養うってんだ。（『ドゥッドビール・ドドゥビール』）

## (22) [N Clf]=DF（ディスコースマーカー）

daucen    ma-ce-yan    gautat-nə    ha-ya = bla,    ma  
 鳥            CLF-I-DF.EMPH    打ち殺す -SUB    できる -NEG.NONPST=時    何  
  
 tə        sikar        gele-nə        pəi-dəŋ?  
 一体      狩り        遊ぶ -SUB      来る -CONT

鶏を1羽でさえもしとめることができないなら、何の狩りに来ているんだい？（『勇敢な猿の話』）

## 2.6. 修飾要素どうしの順番

以上、名詞を修飾する指示詞、形容詞、類別詞の名詞句内での位置を見てきた。指示詞は必ず初めに表れるが、それ以外の要素は、順番が必ずしも定まっていない。以下に、それぞれの要素が現れている例を示す。

以下の(23)から(26)までは、指示詞（Dem）と形容詞（A）・類別詞（Clf）が組み合わさった場合の実例である。

<sup>7</sup> ディスコースマーカー（DF）は、=a という形態素で表され、基本的に主格標識と同形態である。二項動詞の動作主項 A に現れる場合は、主格とみなし、被動者項 O に現れる場合は、DF とみなしている。DF は、その後ろに対格標識 =kəu も取ることができる。DF の基本的な機能は、ディスコース中で被動者項が一貫して焦点となっているような場合に現れる。(22) の例では、鳥を仕留めることができるかというのが、話の焦点となっているので、DF が付いている。

(23) [Dem A  $\overline{N}$ ]

əmpəne, be gopot gorai = ya = kəu hot-cai.  
 それから この 白い 馬 =DF=ACC やる - 促し

それから, この白い馬を頂戴な。(『ドゥッドビール・ドゥドビール』)

(24) [Dem  $\overline{N}$  A]

bi mai bidan̩ gəlau labə-nai.  
 3SG 稲 穂 長い 持って来る -FUT

彼は稲穂の長いのを持って来る。(DIC: labə の例文)

(25) [Clf  $\overline{N}$ ]

bi ban-ce bon labə-aʔ.  
 その 束 -I 薪 持って来る -PST

その一束の薪を持ってきた。(DIC: ban の例文)

(26) [ $\overline{N}$  Clf]

bi udəi tai-ce = kəu lai cəɾ-tə pəsi-nai?  
 その 腹 CLF-I=ACC EMPH 誰 -Q.EMPH 養う -FUT

直訳: 誰がその腹を一つ養うっていうんだい。

意識: 「誰がその [新しい] 食い扶持を養うっていうんだい。(『アイバリクングリ』)

指示詞・類別詞, 形容詞がすべて組み合わさった場合はどうなるであろうか。Greenberg は, これらの要素の配列について, 以下のように Universal 20 を挙げている。

- (27) *Universal 20*: When any or all of the items (demonstrative, numeral, and descriptive adjective) precede the noun, they are always found in that order. If they follow, the order is either the same or its exact opposite. (Greenberg 1963: 87)

しかし, Hawkins (1983:119) は, 名詞の後ろに修飾要素が来る場合, もっとも多いのは, Dem Num A N のミラーイメージに当たる語順ではあるが, Universal 20 に従わない例もあるとして反論している。Cinque (2005) は, 生成文法の枠組みで分析を行い, 移動が伴わない場合のマージ後の構造は Dem Num A N であるが, NP が上に位置する Agr の Spec を移動して行くことで異なった語順が得られ, この移動および pied-piping によって, 可能な語順と不可能な語順とを予測するとしている。詳しい分析については立ち入らないが, Cinque の分析では, 4 つの要素の自由配列による組み合わせは 24 通りあり, その内可能なものは 14 通

りであるとしている。

本稿では、これまでの調査において、この 24 のパターンについて調査票による聞き取りを通じてメチェ語の名詞句内での要素の語順を探った。その結果、(28)に挙げるような 6 つのパターンが容認可能なものとして認められた。以下、Num にあたるものは、Clf として示している。

(28) a. パタン 1 [Dem Clf A  $\overline{N}$ ]

be	tai-tam	məjaŋ	taijəu = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	CLF-3	良い	マンゴー=ACC	1SG	持って行く -FUT

僕はこの 3 つの良いマンゴーを持って行く。

b. パタン 2 [Dem A Clf  $\overline{N}$ ]

be	məjaŋ	tai-tam	taijəu = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	良い	CLF-3	マンゴー=ACC	1SG	持って行く -FUT

? 僕はこの良い 3 つのマンゴーを持って行く。

c. パタン 3 [Dem A  $\overline{N}$  Clf]

be	məjaŋ	taijəu	tai-tam = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	良い	マンゴー	CLF-3=ACC	1SG	持って行く -FUT

僕はこの良いマンゴー 3 つを持って行く。

d. パタン 4 [Dem Clf  $\overline{N}$  A]

be	tai-tam	taijəu	məjaŋ = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	CLF-3	マンゴー	良い=ACC	1SG	持って行く -FUT

\* 僕はこの 3 つのマンゴー良いを持って行く。

e. パタン 5 [Dem  $\overline{N}$  A Clf]

?be	taijəu	məjaŋ	tai-tam = kəu	aŋ	laŋ-nai. (cf. e.g. (30))
この	マンゴー	良い	CLF-3=ACC	1SG	持って行く -FUT

\* 僕はこのマンゴ良い 3 つを持って行く。

f. パタン 6 [Dem  $\overline{N}$  Clf A]

be	taijəu	tai-tam	məjaŋ = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	マンゴー	CLF-3	良い=ACC	1SG	持って行く -FUT

\* 僕はこの 3 つのマンゴー良いを持って行く。

パタン 1 は、Greenberg の Universal 20 で必ず現れるパターンとして挙げられているもので、かなり多くの言語がこのパターンを示すことが分かっている (Cinque 2005)。

興味深いことに、Greenberg でも Cinque でも unattested とされている Dem A Clf(=Num) N が、パターン 2 (28b) のように可能であることが分かった。Cinque (2005:fn2) は、この語順について Alamlak (Croft & Deligianni 2001) や Mongolian (Whitman 1981) でも認められることに言及している。しかし、この語順は merge error として排除されるとしている。表面的にこの語順を取るのは、A が attributive ではなく reduced relative clause (RCC) type の場合であり、また、この語順を許す言語でも、パターン 1 の Det Num A N の語順も同時に許すことから、Cinque の仮説に対する純粋な反例になるのは、パターン 2 の Det A Num N の語順しか許さない言語が見つかった場合に限ると主張している。この点からすると、メチェ語自体は、Cinque の枠組みに対する反例とはならない。しかし、メチェ語の形容詞が attributive なのか、RRC なのかについては、一考の余地がある。

メチェ語の名詞を修飾する形容詞が reduced relative clause なのかについては、現時点では十分な検証ができないが、その可能性は否定できない。もともと、形容詞のうち初頭子音が g で始まるものの多くは、動詞に gV- (V は任意の母音) という接頭辞をつけて形成される。この gV- は、他の TB 言語では名詞化辞として考えられている。また、TB 諸語の多くは、ネワール語のように名詞化辞がそのまま relative clause 的に連体修飾する機能を持つ。しかし、メチェ語の gV- は、節を名詞化することはできず、動詞を形容詞化するに過ぎない。生産的な名詞化辞は、後述のように接尾辞である。

また、メチェ語の形容詞を reduced relative clause (RRC) とするには、問題となる点が一つある。RRC は、他の RRC に対する語順は固定されておらず、上述の Cinque の反論は、この事実に依拠したものだと言える。語順が固定されているのは、attributive adjective の特徴だからである。2.4.2 節で形容詞の語順を見たように、形容詞自体の語順は定まっており、RRC というよりは attributive adjective の特徴を備えている。もし、メチェ語の形容詞が attributive adjective であり、かつ、Greenberg や Cinque の排除する語順が問題なのだとすれば、典型的に大変興味深いと言える。しかし、現時点では、このパターンについては、聞き取り調査からしか得られておらず、自然発話の例が存在しない。また、聞き取りパターンも時間の関係からここで取り上げたパターンしか調査していない。今後、異なる形容詞や類別詞の例を複数作成し、再調査を行ったうえで結論を導き出す必要がある。

さて、パターン 3 からパターン 6 は、すべて Cinque (2005) の枠組みでも派生される語順である。パターン 5 には、疑問符を 1 つつけているが、これは、インフォーマントがやや不自然かもしれないという反応を示したものである。しかし、(30) で示した採録データには、Dem はないもののこの語順が許容されるものが存在する。

自然発話からの実例では、指示詞付きの例はほとんどなかったが、メチェ語では、指示詞は必ず先頭につくので、それを除外した例では、パターン 1, 2, 3 以外が見つかった。以下に示す。

(29) パタン 4 [Clf  $\overline{\text{N}}$  A]

mən-ce cəuri gedet doŋ nə.  
CLF-I 草原 大きい ある HEARSAY

ひとつ大きな草原があったそうな。

(30) パタン 5 [ $\overline{\text{N}}$  A Clf]

gənəi taŋ-nanəi para=u hai nagri-bai-nanəi hai gorai  
それから 行く -CP 村=LOC 方 探す - 回る -CP 方 馬  
gopot ma-ce bai-nan la-i-bai, bicər.  
白い CLF-I 買う -CP 取る -DIST-PFT 3PL

で、行って、村の方で探して、白い馬一頭買って持って行ったんだ、二人は。

(31) パタン 6 [ $\overline{\text{N}}$  Clf A]

waʔ mən-ce gəlau dan-nanəi, hicri katot-nanəi waʔ  
竹 CLF-I 長い 断つ -CP ボロ布 巻く -CP 竹  
bijəu hai laŋ-də.  
先端 方 持って行く -IMP.HON

竹の長いのを一本切って、ぼろきれを巻いて、竹の先端にね、それで持ってって。

### 3. 連体節による修飾

次に、連体節による修飾パターンを考察する。メチェ語では、動詞を主要部とする節が名詞を修飾する場合、節全体が名詞化される。名詞化辞は、テンス・アスペクト (TA)、否定によって動詞の後につく形式が異なり、表 4 で示すように 4 つに分かれる (Kiryu 2008)。肯定の場合はアスペクト・時制の対立が見られるが、否定ではその区別が中和される。

また、連体修飾節の位置は、形容詞や類別詞の場合と異なり、名詞の前からのみ可能である。

T A \ 肯否	肯定	否定
習慣	-gra	-yi
未来	-nai	
完了・過去	-nai(ni)	

表 4 メチェ語の名詞化辞の体系

### 3.1. -gra による連体修飾

-gra は、述語が関係する必須項あるいは非必須項を指し、generic/habitual に対応する意味を述語に持たせる機能がある。非修飾名詞の連体修飾節内の意味役割に特に制限はない。

- (32) cin-gra      mansi      nangri-nagəu      ja-bai.  
 切る -NMLZ    人                  探す - 必要だ      なる -PFT  
 [木を] 切る人を探さなければならなかった。(『雀のおじさん』)

- (33) a. ja-gra                  məŋŋa  
 食べる -NMLZ      もの  
 食べ物 (被動者)・食べるための物 (道具)

- b. india      taŋ-gra      lama  
 インド      行く -NMLZ      道  
 インドへ行く道 (経路)

### 3.2. -nai による連体修飾

-nai は、命題をコトに変換する名詞化辞である。

- (34) gəra      geded      nə.      ja-nai      ləŋ-nai      gan-nai,  
 旦那      大きい      HEARSAY      食べる -NMLZ      飲む -NMLZ      着る -NMLZ  
 jum-nai,      pura      doŋ.  
 羽織る -NMLZ      全部      ある  
 [かれは] 大金持ちだったとさ。飲食するものも、身にまとうものも、なんでもそろっていた。

-nai によって名詞化された述語動詞が非埋め込みで定動詞の位置に立つ場合、未来の動作を表す。この用法は、西ベンガル州のボド語とネパールのメチェ語に見られ、アッサム州の東ボド方言には基本的にない用法である。

- (35) gabən      taŋ-nai,      nəŋ?  
 明日      行く -FUT      2SG  
 あんた明日行くかい？

しかし、連体修飾節では、基本的に未来の意味にはならず、過去に起こったこと、パーフェクト的な事態を表す連体修飾節になる。

- (36) lum ja-nai somai = au nai-nanəi nəŋ geded gun kəcam-bai.  
 熱 なる -NMLZ 時 = LOC 見る -CP 2SG 大きい 好意 する -PFT  
 病気になった時に世話してくれて、君は非常に良くしてくれた。

しかし、文脈で解釈が強制されれば、未来の動作を表すこともありうる。

- (37) gabən taŋ-nai lama = ya honai be.  
 明日 行く -FUT 道 = NOM あっち これ  
 明日行く道はそいつだ。

### 3.3. -naini による連体修飾

-naini という形式も存在する。これは、名詞化辞 -nai と属格 -ni とが結合した形式で、連体修飾辞としては、完了したこと、過去に起きたことのみを表す。-nai だけの場合と異なり、未来は表さない。

- (38) aŋ bai-naini leka mahai doŋ?  
 1SG 買う -NONFUT.NMLZ 本 どこ ある  
 僕が買った本はどこにあるの？
- (39) ojai ta-naini cingri = ya aŋ = ni bisajə.  
 そこ いる -NONFUT.NMLZ 少女 = NOM 1SG = GEN 娘  
 あそこにいる女の子は、俺の娘だ。
- (40) bi aŋ = ni noʔ = au pəi-naini mansi.  
 3SG 1SG = GEN 家 = LOC 来る -NONFUT 人  
 あいつは俺の家に来ている人だ。

### 3.4. -yi による連体修飾

-yi は、時制やアスペクトに関係なく、否定の意味を含む連体修飾の時に使われる。

- (41) mənbə gəi-yi mansi  
 何も ない -NEG.NMLZ 人  
 何にもない人



- (42) gəsə=au      san-yi      kəta      kənacəŋ-nanəi      aŋ=kəu      bi=yə  
          心=LOC      考える -NEG.NMLZ      話      聴く -CP      1SG=ACC      3SG=NOM  
          cək      kəcəm-bai.  
          驚き      する -PFT

思いもしなかったことを聴いて、私は彼にびっくりさせられた。

-yi は、過去否定形を表す時制接辞と同形である。

- (43) jəŋ      haba      gəi-yi      mən.  
          1PL      仕事      ない -NEG.PST      PST  
          私たちは仕事がなかった。

しかし、過去否定を表す -yi と連体修飾節に表れる名詞化辞の -yi とは別物として考えても良いかもしれない。例文 (44) では、gəi-ya の動詞句と gəi-yi の動詞句は、パラタクシス的な構造を持ち、全体が名詞化されていると言えるが、最後の動詞のみが、名詞化辞を伴っていると考えられる。つまり、gəi-ya+NMLZ が具現化したものが gəi-yi だと考えることができる。

- (44) aca,      nəcər=ne      ja=nə      gəi-ya      ləŋ=nə  
          OK      2PL=GEN      食べる =DAT      ない -NEG.NONPST      飲む =DAT  
          gəi-yi=kəu      aŋ      pura      bənai-nai.  
          ない -NEG.NMLZ=ACC      1SG      完全      作る -FUT  
          わかった。お前たちには食べるものもない、飲むものもないことを、私が何とかしてやろう。(『アイ・バリクングリ』)

#### 4. まとめ

本稿では、メチェ語の名詞句内の構造について考察を行った。メチェ語では、指示詞と連体修飾節は主要部名詞よりも前にしか現れないが、形容詞や類別詞は主要部名詞の前後に表れることができる。形容詞は、その種類によって語順が固定されており、所謂 *reduced relative clause* というよりは、純粋に *attributive adjective* の特徴を備えている。また、形容詞、類別詞、主要部名詞の配列は自由ではなく、6 パタンしか許容されることが分かった。また、このパタンの 1 つには、Greenberg の Universal 20 に反する Dem A Num (=Clf) N という配列が許容されることが分かり、典型的に興味深いデータと言える。しかし、現時点では、さらに分析が必要で、今後の課題としたい。最後に、連体修飾節についてそのマーカの種類の肯定と否定とでわかれており、テンス・アスペクトの区別が見られるのが肯定の場合だけで、否定の連体修飾節マーカは 1 つしかないことを示した。

## 略号

ACC：対格，COM：随格，CONT：継続相，CLF：類別詞，COP：コピュラ，CP：連接辞，CS：状況の変化，DAT：与格，DF：ディスコースマーカ，DST：離接辞，EMPH：強調，FIL：フィラー，FOC：フォーカス，FUT：未来，GEN：属格，HAB：習慣相，HEARSAY：伝聞，HON：敬体，IMP：命令，LOC：所格，NEG：否定，NMLZ：名詞化辞，NOM：主格，NONPST：非過去，ONOM：オノマトペ，PFT：パーフェクト，PST：過去，SG：単数，SUB：従属節辞

## 参考文献

- Burling, Robbins. 1983. "The sal languages". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 7. 1–32.
- Cinque, Guglielmo. 2005. "Deriving greenberg's universal 20 and its exceptions". *Linguistic Inquiry* 36. 315–332.
- Croft, William, and Efrosini Deligianni. 2001. "Asymmetries in NP word order". *International symposium on deictic systems and quantification in languages spoken in Europe and Northern and Central Asia, Udmurt State University, Izhevsk, Russia*.
- Greenberg, Joseph H. 1963. "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements". *Universals of language*, ed. by Joseph Greenberg, 73–113. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hawkins, John. 1983. *Word order universals*. New York: Academic Press.
- Joseph, U. V. 2007. *Rabha*. Leiden: Brill.
- Kiryu, Kazuyuki. 2008. An outline of the Meche language: Grammar, text and glossary. Mimasaka University.
- Kiryu, Kazuyuki. 2009. "On the rise of the classifier system in Newar". *Senri Ethnological Studies* 75. 51–69.
- Meche, Santa Lal, and Kazuyuki Kiryu. 2012. *Meche–Nepali–English Dictionary*. Jhapa: The Council of Meche Literature and Language.
- Sproat, Richard, and Chilin Shih. 1991. "The cross-linguistic distribution of adjective ordering restrictions". *Interdisciplinary approaches to language*, 565–593. Springer.
- Whitman, John. 1981. "The internal structure of NP in verb final languages". *Papers from the Seventeenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, ed. by Roberta A. Hendrick, Carrie S. Masek, and Mary Frances Miller, 17, Chicago: Chicago Linguistics Society, Chicago, 411–418.



# セケ語の名詞句構造と名詞化

本田 伊早夫

## 0. はじめに

本稿では、チベット＝ビルマ語派 (Tibeto-Burman)、タマン語群 (Tamangic) に属するセケ語 (Seke) タンベ方言 (Tangbe) (以降タンベとのみ表記する) における名詞句構造と名詞化について記述する<sup>1</sup>。まず、1. でセケ語の概要について述べた後、2. でタンベにおける名詞句構造について概観する。そして 3. においてタンベにおける名詞化 (nominalization) について、他のタマン諸言語・方言と比較しながら記述することにする。

## 1. 言語の概要

本論文において、また著者のこれまでの論文において、「セケ語」と呼んでいるのは、ネパール・ムスタン郡の5つの村、タンベ (Tangbe)、チュクサン (Chuksam), テタン (Tetang), チャイレ (Chaile), ギャカール (Gyakar) において、およびその出身者によって話されている言語のことである。セケ語はチベット＝ビルマ語派のタマン語群に属する言語であるが、この言語群に属する言語にはセケ語の他に、東タマン語 (Eastern Tamang), 西タマン語 (Western Tamang), グルン語 (Gurung), マナン語 (Manangba), ナル・プー語 (Nar-Phu), タカリ語 (Thakali), チャンテル語 (Chantyal) がある。

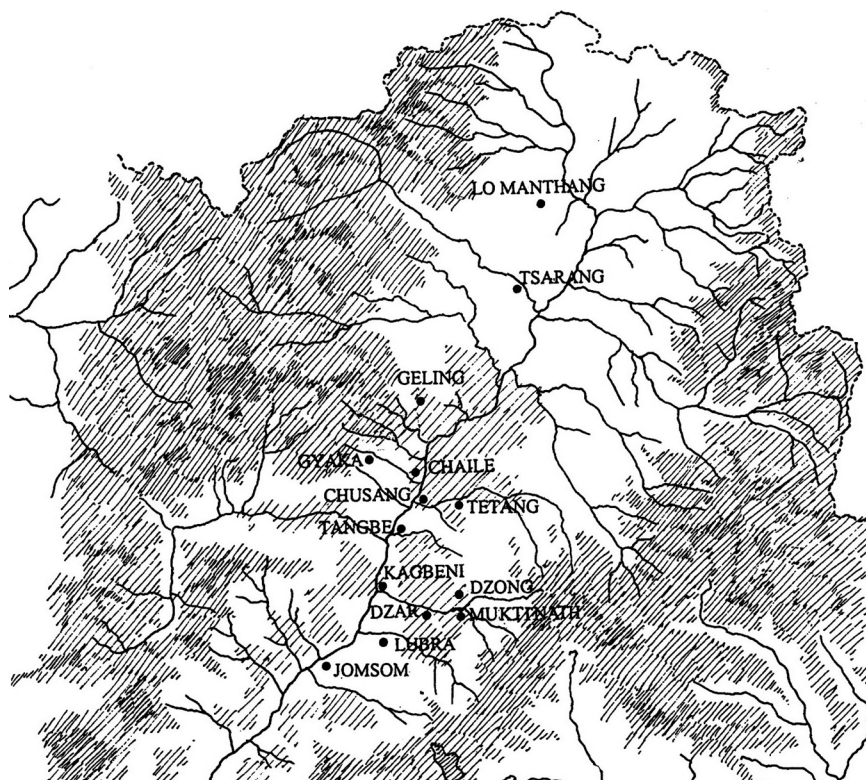
セケ語が話されている5つの村は、ムスタン郡の District Headquarters であるジョムソム (Jomsom) の北に位置するバラガオン (Baragaon) と呼ばれる地域にあり、バラガオンの北半分ほどを占めている。バラガオンの南半分ほどを占めるその他の村々では、チベット語の方言であるバラガオンレ (Baragaonle) が、また、バラガオンの北に位置するローマンタン (Lo Manthang), あるいは Upper Mustang と呼ばれる地域では、バラガオンレとは若干異なるが同じくチベット語の方言であるロパ (Lopa) が使われており、セケ語の言語域はこの2つのチベット語方言の言語域に挟まれている。一方、バラガオンの南、カリ・ガンダキ川 (Kali Gandaki) 沿いには、同じタマン語群に属するタカリ語が、またバラガオンの東、マルシャンディ川 (Marsyangdi) 沿いとその周辺にはマナン語とナル・プー語が話されている。

---

<sup>1</sup> セケ語及びタマン語群についての詳細は、Honda (2002), Honda (2003), 本田 (2010) を参照されたい。

セケ語の正確な話者数は不明であるが、おそらく1千人程度であろうと推測される。しかし近年、ムスタン郡の多くの村々では、南の平野部、特にポカラや、首都カトマンズなどへの移住がますます進んでおり、ネパールの他の少数民族同様、特に村を離れた家庭で育った若い世代は満足にセケ語を習得しておらず、ネパール語への移行が急速に進んでいる。

著者はセケ語を話す集団として、1) タンベ、2) テタン、3) チュクサン=チャイレ=ギャカールの3つを認め、それぞれが話しているものをセケ語の「方言」と便宜的に呼んでいるが、実際にセケ祖語 (Proto-Seke) が再構できるかどうか定かではない。これは程度の差こそあれ、東西タマン語、グルン語、タカリ語にも言えることであるのだが、特にセケ語の場合、上記5つの村の住人およびその出身者が共通の民族的アイデンティティーを共有しているわけではなく、彼らの話している言語が彼らを一つの集団として結びつけているかという点、そういうわけでもない。上記3つの集団が話している言語は、相互にかなりよく似ている点も多い反面、かなり違う面も見受けられる。特に、タンベの言語は、テタンや、チュクサンなどで話されている言語とは、テンス・アスペクト等を表す動詞接辞



地図 1 ネパール・ムスタン郡 (Vinding 1998 より)

などの点でかなり違う面があり、両者の相互理解度はそれ程高くない。テタンや、チュクサンなどで話されているものはこういった点においてむしろタカリ語に似ている部分があり、タンベ、テタン、チュクサン=チャイレ=ギャカール、そして一般に‘Thakali’と呼ばれることが多い(著者自身も便宜的にそう呼んでいるが) Yhulkasom Thakali (バラガオンのすぐ南に位置する Syang や Thini など話されているもの)、Mawatan Thakali (その南の Marpha で話されているもの)、Tamang Thakali (そのさらに南の Tukche など話されているもの) は、方言連続体 (dialect continuum)、あるいは方言連鎖 (dialect chain) を成していると言えよう。

## 2. 名詞句構造

本章では、名詞句を構成する各要素と、名詞句内における各要素間の連辞的 (syntagmatic) 位置について述べながら、名詞句の構造を記述していくこととする。

名詞句の主要素は言うまでもなく名詞 (noun) (あるいは名詞群 (nominal)) であるが、その主要素に対し前置される要素としては、指示詞 (demonstrative; DEM) ((1), (3) 参照) と属格標識 (genitive marker) がついた属格名詞 (noun-GEN) ((2), (3) 参照) がある。

- (1) DEM + Noun-ca + all

<sup>L</sup>ta, <sup>L</sup>tosō <sup>H</sup>ucyu <sup>H</sup>la-ca <sup>4</sup>kāŋmo <sup>L</sup>nya-se <sup>L</sup>tosō <sup>L</sup>kom-pin  
then now that god-ART all 1pl.incl-ERG now pray-HBT  
‘Then, we pray (to) all those gods.’

- (2) Noun-GEN + Noun

<sup>2</sup>the-i <sup>L</sup>tīm <sup>L</sup>hin  
3sg-GEN house be  
‘(This) is his/her house.’

- (3) [[DEM + Noun]-GEN Noun-ca]

“<sup>H</sup>cu <sup>H</sup>kolā-i <sup>H</sup>sya-ca <sup>L</sup>tak <sup>H</sup>ca-li, <sup>L</sup>kate <sup>H</sup>lim-ka-i”  
this girl-GEN flesh-ART PTCL eat-COND how.much tasty-DIR-GEN  
<sup>L</sup>pi-se, <sup>H</sup>kolā-ca-ra <sup>L</sup>tak <sup>H</sup>ca-cyu-wa  
say-SEQ girl-ART-DAT PTCL eat-PAST-NMLZ  
“‘If (I) eat this girl’s meat, how tasty is it?’”, said (the monkey, and the monkey) ate the girl.’

一方、名詞に対し後置される要素としては、名詞化接辞 (nominalizer) -pa/-wa

によって名詞化された形容詞 (adjective; Adj) や数詞 (numeral; Num), 例 (1) に見られる <sup>4</sup>kāŋmo ‘all’ などがあり, 名詞化された形容詞と数詞 (あるいは <sup>4</sup>kāŋmo) の両方が共起した場合には Noun + Adj-NMLZ + Num/all の語順となる。

(4) Noun + Adj-NMLZ

<sup>1</sup>tim      <sup>1</sup>the-wa      <sup>3</sup>so-ci  
house      big-NMLZ      make-PAST  
‘(He) made (a) big house.’

(5) Noun + Adj-NMLZ + Num

<sup>1</sup>ko<sup>1</sup>thā    <sup>2</sup>the-wa    <sup>2</sup>som      <sup>1</sup>then      <sup>1</sup>cyāŋ-pa      <sup>2</sup>som      <sup>1</sup>mu  
room      big-NMLZ      three      and      small-NMLZ      three      be  
‘There are three big rooms and three small ones.’

タンベにおける形容詞は, 動詞というカテゴリーの中の 1 つの特殊なタイプとして位置づけることができるものである。つまり, 形容詞の活用は動詞の活用と共通する点があるものの, 動詞に付く接辞の多くは形容詞には使用されない為, その活用は限定されたものである。形容詞, 動詞に共通して付くことができる接辞の一つが (4), (5) で見られる名詞化接辞 -pa/-wa であるが, 形容詞が, 先行する名詞の属性を表す場合は, 常にこの -pa/-wa が付く (-pa は子音の後, -wa は母音の後で起こる)。このように名詞化された形容詞は基本的には名詞であり, それ自体が名詞句の主要部 (head) となることができる (例えば, <sup>2</sup>the-wa は ‘(a/the) big one’) という事実から, 先行する名詞を修飾している (つまり [N [Adj-NMLZ]<sub>ADJ</sub>]<sub>NP</sub>) というよりはむしろ, その名詞と同格的 (appositive) 構造になっている (つまり [N [Adj-NMLZ]<sub>N</sub>]<sub>NP</sub>) と分析することもできよう。また, 数詞や <sup>4</sup>kāŋmo ‘all’, 次の例 (6) の <sup>1</sup>kate ‘how many, how much’ など名詞化された形容詞と同じくそれ自身が名詞句の主要部となることができるので, 同様の分析が可能である。つまり (4) の <sup>1</sup>tim <sup>1</sup>the-wa は ‘(a) big house’ というよりは ‘(a) house, big one’, (5) の <sup>1</sup>ko<sup>1</sup>thā <sup>2</sup>the-wa <sup>2</sup>som は ‘three big rooms’ というよりはむしろ ‘room(s), big one(s), three ones’, (6) は ‘In this house, room(s), how many are (there)?’ と訳した方が適当かも知れない。

(6) Noun + <sup>1</sup>kate

<sup>1</sup>cu    <sup>1</sup>tema    <sup>1</sup>ko<sup>1</sup>thā    <sup>1</sup>kate    <sup>1</sup>mu-wa  
this    at.house    room    how.many    be-NMLZ  
‘How many rooms are there in this house?’

例 (7) の <sup>ʰ</sup>lap ‘hot’ や (8) の <sup>ʰ</sup>kālo ‘black’ などいくつかの語も、名詞化された形容詞と同じく、名詞の後に置かれる。こうした語は、先行する名詞の属性を表すと考えられるので、意味・機能としては形容詞的であるが、形容詞に付くことができる接辞等が付くことは一切ないので、形容詞とは別のカテゴリーに分類されるものである。当然、名詞化接辞 -pa/-wa が付くこともなく、よってそれにより名詞化されることもない。また、それ自体が名詞句の主要部になることはないで、名詞とも違うカテゴリーの語群である。それ故、こうした語をとりあえず modifier (Mod) と呼ぶこととするが、modifier が名詞化された形容詞と共起する場合は、(8) が示す通り、名詞化された形容詞の方が先行するのが一般的であるようだ。しかし、こうした例はすべて elicitation で収集したものであり、これまでのところ、テキストでは見つかっておらず、そもそもこうした構文が自然発話の中でどれくらい使われるのかは不明である。

(7) Noun + Mod

<sup>ʰ</sup>kyu      <sup>ʰ</sup>lap      <sup>ʰ</sup>pin-o  
water      hot      give-IMP  
‘Give (me) hot water.’

(8) Noun + Adj-NMLZ + Mod

<sup>ʰ</sup>kolā      <sup>ʰ</sup>pep-pa/<sup>ʰ</sup>khe-wa      <sup>ʰ</sup>kālo      <sup>ʰ</sup>kyu-ci  
clothes      expensive/cheap-NMLZ      black      buy-PAST  
‘(She) bought (a) black expensive/cheap garment.’

このような語群は他のいくつかのタマン諸語にも見られ、そうした言語の一つであるマナン語において、Hildebrandt (2004) も著者と同様に、そうした語群（例えば例 (9a) における tārkyā ‘white’）は（名詞句の主要部にはなれないという点で）名詞でもなく、また、名詞化接辞が付くことができる形容詞（例えば例 (9b) における <sup>ʰ</sup>thyΛ- ‘big’）とも異なると述べている。ただし、前者を ‘simple adjective’、後者を ‘verb-like adjective’ と呼び、区別しつつも、どちらも ‘adjective’ と呼んでいる。ちなみに、Genetti et al. (2008: 115) は後者を ‘deverbal adjective’ と呼んでいる。

(9) Manangba

a.      <sup>ʰ</sup>khye      tārkyā=ri  
road      white=LOC  
‘on the white road’

(Hildebrandt 2004: 54)



- b. <sup>2</sup>kyu <sup>1</sup>thyΛ-pΛ=ri  
 water big-NMLZ=LOC  
 ‘in big water (like a river)’ (Hildebrandt 2004: 60)

先に述べた通り、著者自身はタンベにおいて、名詞化されている形容詞は、それが意味的に修飾していると考えられなくもない名詞と同格的である可能性があると考えているが、Genetti et al. (2008: 115) は、名詞化接辞が付いた *deverbal adjective* は名詞ではなく、*simple adjective* と同じように、修飾される名詞に対して従属的な関係になっている、つまり [N [Adj-NMLZ]<sub>ADJ</sub>]<sub>NP</sub> という構造になっていると主張している。この点に関しては、後に述べる関係節の構造にも関係している為、3.2. において更に詳しく述べることにする。

名詞句内において名詞の後に置かれる要素としては、他にも例 (10) に見られる <sup>1</sup>ri がある。

- (10) Noun + <sup>1</sup>ri  
<sup>2</sup>kheppa <sup>1</sup>khuyuk-ca-ra <sup>1</sup>kome <sup>1</sup>ri <sup>1</sup>mu-cyu-wa  
 old.man old.woman-ART-DAT GD one be-PAST-NMLZ  
 ‘To the old man (and) old woman, there was one/a granddaughter.’

著者のインフォーマントはこの <sup>1</sup>ri を常に ‘one’ と訳し、数詞 ‘one’ の本来の形 <sup>1</sup>ki(:) と意味の上で何の違いもないと説明していることから、著者はこれを注釈する際、やはり ‘one’ としてはいるが、これは数詞 <sup>1</sup>ki(:) の音韻的に条件づけられた異形ではない為、<sup>1</sup>ki(:) が歴史的に文法化 (grammaticalized) されたもので、*indefinite article* として分析も可能な形式であると考えている。<sup>1</sup>ri が名詞化された形容詞と共に起する場合、数詞が形容詞と共に起する場合と同様、形容詞が先行するという事実もそうした分析を支持するものである<sup>2</sup>。

- (11) Noun + Adj-NMLZ + <sup>1</sup>ri  
<sup>2</sup>the-ra <sup>1</sup>tim <sup>1</sup>te <sup>1</sup>cyāŋ-pa <sup>1</sup>ri <sup>1</sup>mu /<sup>1</sup>hon  
 3sg-DAT house a.bit small-NMLZ one be /be  
 ‘S/he has a bit small house.’

似たような形式と文法化は、同じタマン語群に属し、地理的にも近いマナン語 (=ri ‘indefinite marker’ Hildebrandt 2004: 77) やナル・プー語 (-ri ‘indefinite singular article’ Noonan 2003: 344) にも見られ、どちらも拘束形式 (bound) の clitic として分析されている。ただし、Hoshi (1986) ではマナン語の ‘indefinite marker’ に

<sup>2</sup> 例 (11) はまた、<sup>1</sup>te ‘a bit’ という語が名詞化された形容詞に先行していることを示しているが、このように形容詞を修飾する語は常に形容詞に先行する。

ついて、拘束形式の *-ri* と共に非拘束形式 (non-bound) の *ʔri* も併記されており、後者については、それ自身が名詞として ‘somebody’ といった意味で使用されている例も掲載されており、音調 (tone) を保ったままの独立した語から拘束形式の *-ri* へと文法化される過程にあるように思われる。タンベにおいても *ʔri* は音調を (少なくとも完全には) 失っておらず、また前述した通り、著者のインフォーマントがこれを *ʔki(:)* と同じく常に ‘one’ として訳し、両者の違いを単に発音上の異形としてしか認識していないことから、マナン語と同じく、この *ʔri* はまだ文法化過程の半ばであると考えられる。

これまで見てきたのはすべて、名詞句内に起こり得る独立語であったが、名詞句内に起こり得る要素には、名詞やその他の独立語に付く拘束形式の形態素がいくつもある。その一つが例 (1), (3), (10) に見られる *-ca* である。これは隣接するタカリ語 Marpha 方言などに見られる ‘plural marker’ *-ca* (Georg 1996; Georg の表記では *-cā*) と同源と考えられること、また著者のインフォーマントがこれをやはり plural marker として説明していたことから、著者ははじめこれを plural marker であると誤って理解していたが、その後、明らかに単数の人物・対象物を指している名詞に使われている例が数多く見つかった。例えば例 (3) で *-ca* が付いている名詞 *ʔsya* ‘meat, flesh’ が表しているのは数えられるようなものではないし、以下の例 (12) の *ʔucyu ʔmi ʔpo-wa* が指しているのは複数の人物ではなく、この物語の中で既出の人物、死んだ息子の父親個人を指している。

- (12) *ʔtakce, ʔucyu ʔmi ʔpo-wa-ca-se, ʔʔa-i ʔca-ten ʔcāŋ ʔhin-ka;*  
 then that person rich-NMLZ-ART-ERG 1sg-GEN S-with SW be-DIR  
*ʔta ʔcu ʔnimyā ʔni-pa-ra ʔʔa-se ʔpā-tok-ka ʔpi-se,*  
 then this bird two-NMLZ-DAT 1sg-ERG bring-have.to-DIR say-SEQ  
*ʔpā-cyu-wa*  
 bring-PAST-NMLZ  
 ‘Then, that rich person (i.e., the father of the son) said, “(They, i.e., two birds) (must) be my son and son’s wife; I have to bring those two birds back”, (and) brought (them) back (to his house).’

*-ca* はむしろ definite article のような機能を果たしており、著者はこれを ART (article) と注釈している。ただし、会話・談話の中で既出の指示対象だけでなく、新出のもの、つまり new information である名詞にも付くことなど、topic marker と呼ぶ方が妥当と思われる点もある。なお、著者はこれがタマン諸語の多くで見られる、名詞の前に置かれる指示詞 *ca* ‘that’ (例えばタカリ語の *ca* ‘that’) や東タマン語の ‘topic marker’ *ʔca* などと歴史的に関係していると考えている<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> ただし、タンベでは指示詞 ‘that’ は例 (12) に見られる *ʔucyu* であり、*-ca* の同源形は指示詞としては使われていない。なお、この *-ca* について更に詳細な議論は Honda (2007) を参照されたい。

### 3. 名詞化

タマン語群, およびタマン語群と系統的に最も近いと考えられているチベット語や, 両者が属するとされる Bodic において, これまで最も活発に議論されてきた言語現象の一つが名詞化である。タマン諸語の名詞化について触れた論文としては, DeLancey (2005), Genetti (2011), Genetti et al. (2008), Noonan (1997), Noonan (2007), Noonan (2008), Noonan (2011), Varenkamp (2003) などが, また, チベット語, Bodic 諸語の名詞化については DeLancey (1999), DeLancey (2005), Genetti (2011), Genetti et al. (2008), Watters (2008) 等の先行研究がある。

本章では, タンベにおける二つの名詞化接辞 *-pa/-wa* と *-la(ŋ)*, そしてそれらによる名詞化について取り上げ紹介する。まず 3.1. にて名詞化接辞 *-pa/-wa* とその機能について概観した後, 3.2. にてその機能の一つである関係節化 (relativization) と関係節の構造について述べる。更に, 関係節化の際, タマン諸語において属格標識が使われている言語と使われていない言語があるという, Michael Noonan が Noonan (1997) 他で議論している点を詳しく吟味していく。3.3. ではもう一つの名詞化接辞 *-la(ŋ)* について, これと同源形である可能性のある他のタマン諸語における接辞と比較しながら記述する。

#### 3.1. 名詞化接辞 *-pa/-wa*

上記の論文で詳しく論じられているように, セケ語を含めすべてのタマン諸語・方言において, *-pa* や *-wa* といった形の名詞化接辞による名詞化が広く見られ, それぞれの文法において極めて重要な位置を占めている。タンベの名詞化接辞 *-pa/-wa* は, 言うまでもなく古チベット語 (Classical Tibetan) の *-pa* や, 他のチベット＝ビルマ諸語に広く分布する, 同様の, あるいは類似した形と機能を持つ形態素と同源であり, それらの形式はチベット＝ビルマ祖語 (PTB: Proto-Tibeto-Burman) にまで遡ると考えられている。Benedict (1972: 96) はこれを ‘verbal noun (infinitive) suffix’ *\*-pa* ~ *\*ba* として再構築しているが, 同じく PTB で再構築している ‘gender suffix (masc.)’ *\*-pa* と関係しているとしている。また, DeLancey (2005) はこの *\*-pa* による名詞化 / 関係節化が Proto-Bodic レベルにまで遡り得ると推測している。

Noonan (1997) は, セケ語と同じくタマン語群に属するチャンテル語の名詞化接辞 *-wa* による名詞化の機能として以下のものをあげているが, タンベ (や他の多くのタマン語群諸語) における *-pa/-wa* による名詞化の機能もだいたい同じようなものである<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> ただし, Noonan (1997) がチャンテル語の名詞化 (接辞) について記述しているすべての事柄がタンベにも当てはまるというわけではない。

1. nominalization [i.e. naming activities and states]
2. verb complementation
3. noun complementation
4. purpose clause
5. relative clause
6. non-relative attributive
7. agent and patient nominal
8. attributive nominal
9. expression of the semantic predicate in verbal periphrasis
10. main verb

次節ではこの内、5 の relative clause，関係節化に絞って見ていくこととする。

### 3.2. 関係節化

#### 3.2.1. 関係節の構造

タマン語群諸語では、節が名詞を修飾する際、節の最後尾要素である動詞に名詞化接辞が付き、節全体が名詞化され、修飾する名詞の前に置かれる。その際、名詞化接辞の後に属格標識が付く言語・方言と付かない言語・方言の両方がある。前者の例としてグルン語（Ghachok 方言）の例を、後者の例としてチャンテル語の例を示す。いずれも Noonan (1997) からの引用である。

#### (13) Gurung

cá	pra-bá-e	mxi	jaga
that	walk-NMLZ-GEN	person	PL

‘those walking people’ (=sentries) (originally from Glover 1974: 97)

#### (14) Chantyal

gay-ye	sya	ca-wa	mənchi
cow-GEN	meat	eat-NMLZ	person

‘the person who is eating beef.’ (Noonan 1997: 376)

これに対してタンベでは、修飾される名詞の前に関係節が置かれるという点は他のタマン諸語と同様であり、また属格標識が使用されるという点はグルン語などと共通しているものの、多くの場合、節の最後尾要素である動詞の語幹に名詞化接辞が現れることはなく、動詞語幹に属格標識が直接付く形となっている。このように関係節に名詞化接辞が現れない形はタマン語群言語・方言では唯一の例である。ちなみに、この構造は例 (2) で見た Noun-GEN + Noun の構造と基本的に同じものである。また、タンベでは他の多くの言語（特にアジア地域の言語）

と同様、節において主語、目的語などの動詞の項は必ず現れなければならないというわけではないので、関係節も動詞だけで構成されているケースも多い（例えば例(16)参照）。

- (15) <sup>L</sup>kolā   <sup>H</sup>khu-i   <sup>H</sup>sapun   <sup>L</sup>hin  
clothes   wash-GEN   soap   be  
'(This) is (a) soap to wash clothes.'

- (16) <sup>H</sup>ŋa   <sup>H</sup>kha-i   <sup>H</sup>hapta-ra   <sup>L</sup>palpu-ri   <sup>L</sup>ni-sin  
1sg   come-GEN   week-DAT   Kathmandu-LOC   go-FUT  
'I will go to Kathmandu (this) coming week.'

- (17) <sup>L</sup>takce   <sup>2</sup>ke-ri   <sup>H</sup>kyu   <sup>4</sup>pa-i   <sup>L</sup>kyor-ca   <sup>4</sup>kāŋmo   <sup>L</sup>ti:-ca  
then   field-LOC   water   bring-GEN   irrigation.canal-ART   all   flood-ART  
<sup>2</sup>kyā   <sup>L</sup>por-cyu-wa  
PTCL   take.away-PAST-NMLZ  
'Then, the flood took the irrigation canal(s) (that) bring water to field(s), all away.'

- (18) <sup>L</sup>syu:-ra   <sup>H</sup>ucyu   <sup>H</sup>ra   <sup>L</sup>cha-wa-ra   <sup>L</sup>ne-i   <sup>L</sup>mi-ca-se  
later-DAT   that   goat   graze-NMLZ-DAT   go-GEN   person-ART-ERG  
“<sup>H</sup>tā:   <sup>L</sup>hin-pi-la   <sup>L</sup>ote-wa   <sup>L</sup>ri”   <sup>L</sup>pi-se   <sup>L</sup>se-na   <sup>L</sup>la-se  
what   be-CONF-Q   this.much-NMLZ   one   say-SEQ   good-ADVLZ   do-SEQ  
<sup>H</sup>cyā-laŋ-ten   <sup>2</sup>thi-ma   <sup>L</sup>ni-pa   <sup>L</sup>lyāŋmo   <sup>L</sup>sye:-wa  
look-NMLZ-when   3pl   two-NMLZ   talking   speak-NMLZ  
'Later, that person, (who) went to graze goat(s) said, “What is this (lit. What is this much one)?” (and) when (he) looked carefully, they two (i.e., the birds) were talking (lit. talk) (to each other).’

ただし、これは動詞語幹が母音で終わるケースでのことであり、動詞語幹が子音で終わる場合は、語幹の後に <sup>-pi</sup> をいう接辞が現れる。これは以下に述べる西タマン語やタカリ語 Tukeche 方言などの例から推測するに、名詞化接辞 <sup>-pa</sup> と属格標識 <sup>-i</sup> が融合した形 (< <sup>-pa-i</sup> ) と思われる<sup>5</sup>。

- (19) <sup>L</sup>che   <sup>H</sup>lop-pi   <sup>L</sup>kyā  
book   learn-NMLZ.GEN   place  
'place to study (i.e., school)'

<sup>5</sup> 属格標識が名詞に付く場合、<sup>r</sup>を除くすべての環境で属格標識は <sup>-i</sup> という形態で現れ (<sup>r</sup>の後では <sup>-ki</sup> となる)、<sup>-pi</sup> という形が現れることはなく、例(19)や(20)のように <sup>-pi</sup> という形が現れるのは子音で終わる動詞・形容詞語幹の後のみである。

- (20) <sup>H</sup>minj      <sup>H</sup>kon-pi      <sup>L</sup>kolā  
 female      wear-NMLZ.GEN      clothes  
 ‘dress for female to wear’

しかし、インフォーマントはこの -pi を名詞化接辞 + 属格標識として認識しているわけではなく、また、例 (15)–(18) のように動詞語幹が母音で終わるケースでの動詞語幹 -i の形を、名詞化接辞 -pa が省略されたものと認識しているようなこともない為、動詞語幹が子音で終わるケースで見られる -pi はすでに -i の異形態として再分析されており、タンベにおける関係節化においてはもはや名詞化接辞が使われていないと分析することも可能であろう。

タンベではまた、チャンテル語と同様 (例 (22) 参照)、関係節において「過去」を表す接辞が使われる別の構文も可能である<sup>6</sup>。このようにテンスによって構造が異なるケースは、タマン語群内で他にもナル・プー語とタマン語 Dhankute 方言において見られる (Noonan 2011 を参照)<sup>7</sup>。

- (21) <sup>H</sup>cu      <sup>H</sup>asyāŋ-ce      <sup>H</sup>pin-ci-i      <sup>L</sup>che      <sup>L</sup>hin  
 this      uncle-ERG      give-PAST-GEN      book      be  
 ‘This is (a) book (that my) mother’s brother gave (to me).’

- (22) Chantyal  
 gay-ye      sya      ca-si-wa      mənchi  
 cow-GEN      meat      eat-ANT-NMLZ      person  
 ‘the person who ate beef.’ (Noonan 1997: 376)

また以下の例 (23) のように、形容詞語幹に属格標識が付き、修飾される名詞の前に置かれる構文も存在するが、この構造は動詞が節の最後部要素である関係節の構造と全く同じであり、同様に関係節として分析すべき構文であろう<sup>8</sup>。

- (23) <sup>H</sup>ti-rā      <sup>H</sup>no,      <sup>L</sup>mince,      <sup>H</sup>ha:<sup>L</sup>lena      <sup>2</sup>the-i      <sup>L</sup>ʈi:      <sup>H</sup>yu-cyu-wa  
 one-day      TOP      night      very      big-GEN      flood      come.down-PAST-NMLZ  
 ‘One day, (at) night, (a) very big flood came.’

このようにタンベでは (4) などのように、形容詞が名詞の後に置かれる構文と

<sup>6</sup> ただしこうした構文は、(8) で示した構文同様、すべて elicitation で収集したものであり、これまでのところテキストでは見つかっておらず、更なる調査・確認が必要であることを付記しておく。

<sup>7</sup> Poudel (2006) が記述している ‘Dhankute Tamang’ は、Poudel 自身が東タマン語でも西タマン語でもない、第三のタマン語の方言であるとしているが、著者自身未だその見解の妥当性について検討・確認しておらず、ここではとりあえず「タマン語 Dhankute 方言」と記しておく。

<sup>8</sup> このようなケースはまだ一つしか見つかっておらず、名詞化された形容詞が名詞に後置する構文とはどのように (意味・語用論的に) 違うのか、どのくらいの頻度で使用するのか等、更なる調査が必要である。

(23) のように前に置かれる構文とがあり、この点で古チベット語と共通している。更に、前者では属格標識が使用されるのに対して後者では使用されないという点も同じである。ただし、動詞・形容詞語幹が母音で終わる場合、名詞化接辞が現れないという点と、動詞を含む関係節が名詞の後に置かれることはないという 2 点において古チベット語と異なっている。

(24) Classical Tibetan

- a.    mgyogs-po-i      rta  
      fast-NMLZ-GEN   horse  
      ‘fast horse’

- b.    rta      mgyogs-po  
      horse   fast-NMLZ  
      ‘fast horse’

(Noonan 2008; originally from Beyer 1992)

古チベット語におけるこれらの構文は、(25) のような、動詞を含む関係節の構造と基本的には同じであり、特に区別して扱う必要があるものではなく、(24ab) も (25ab) と同様に関係節として分析されている (例えば Noonan (2008: 229) 参照)。それを考えると、タンベにおける (4) のような構文、つまり名詞化された形容詞が名詞の後に置かれる構文も関係節として分析できるのかも知れない。

(25) Classical Tibetan

- a.    bla-ma-s      btul-ba-i                      bgegs  
      lama-ERG    tame-NMLZ-GEN           demon  
      ‘the demon which the lama tamed.’

- b.    bgegs      bla-ma-s      btul-ba  
      demon    lama-ERG    tame-NMLZ

‘the demon which the lama tamed.’ (Noonan 2008; originally from Beyer 1992)

DeLancey (2005: 57) は、古チベットにおける (25a) のような構文、つまり関係節に属格標識が現れ名詞の前に置かれる構文と、(25b) のように関係節が属格標識無しで名詞の後に置かれる構文とを対比し、前者はその属格標識の存在から主節に対し従属的 (subordinate) であるとする一方、後者は名詞化された動詞が属格標識無しで先行する名詞に並置していることから、修飾される名詞と同格的であるという見方を示している (DeLancey (1999: 244) も参照)。Noonan (2008) はこの DeLancey の見解に同意の意を示し、チャンデル語における例 (14) や以下

の (26) のような構文，つまり関係節が属格標識無しで名詞に先行する関係節も古チベットの (25b) などと同様，基本的には **nominal** (名詞類) であり，後続する名詞を修飾しながらもそれと同格であると分析し，例えば (26) のケースでは，修飾する名詞の前に置かれている **reysi thũ-wa** は **agent nominal** であり，その基本的な意味は ‘**drinker of raksi**’ であると述べている。

(26) Chantyal

reysi	thũ-wa	mənchi
raksi	drink-NMLZ	person

‘the person who drinks raksi’

(Noonan 2008: 226)

更に Noonan (1997) は，以下の例 (27) のように，チャンテル語本来の形容詞 **thya- ‘big’** とネパール語からの借用語である **kalce ‘black’** が共に修飾される名詞の前に置かれている構文を，動詞が最後尾要素である関係節が名詞の前に置かれる構文と同様，関係節として分析できるとしている。

(27) Chantyal

thya-wa	kalce	naku
big-NMLZ	black	dog

‘big, black dog’

(Noonan 1997: 377)

このような分析に対し，Genetti et al. (2008: 115) はマナン語の例を使いながら，例 (9b) の **thyΛ-pΛ** のような，名詞化接辞 **-pΛ** によって名詞化された形容詞は ‘**lexical noun**’ ではなく，また，先行する名詞に対して同格的ではなく，従属的な関係にあると主張していることは 2. で述べた通りである。以下，例 (9) を再録する。

(9) Manangba

- a. <sup>4</sup>khye tΛrkya=ri (simple adjective)  
road white=LOC

‘on the white road’

(Hildebrandt 2004: 54)

- b. <sup>2</sup>kyu <sup>1</sup>thyΛ-pΛ=ri (deverbal adjective)  
water big-NMLZ=LOC

‘in big water (like a river)’

(Hildebrandt 2004: 60)

このように分析する理由・根拠を Genetti et al. (2008: 115, note 21) は二つ上げている。一つは，名詞化接辞が付いた ‘**deverbal adjective**’ は (9a) **tΛrkya ‘white’** のような ‘**simple adjective**’ と統語的に同様の振る舞いをしており，名詞のそれとは



異なる（名詞が名詞を修飾する際、このように修飾される名詞に対して後置されることはない）という点であり、もう一つは、‘enclitic’である格標識が名詞句の主要素である名詞ではなく、‘deverbal adjective’に付いていることが何より、‘simple adjective’同様、先行する名詞と一つの名詞句を構成していることを示している、というものである。しかしながら、どちらの理由付けも‘deverbal adjective’が同格的ではないという根拠にはなっていない。まず、一つ目の理由であるが、これは‘deverbal adjective’が名詞とは異なる振る舞いをしているということを示しているのみで、それが先行する名詞と同格的でないという根拠にはなっていない。そして二つ目の理由についてだが、確かに格標識は名詞句全体に係りうるし、その際は名詞句の最後尾要素に bound していると考えられ、著者もそのように考えているが、‘deverbal adjective’に bound しているという事実だけでは、Genetti らが主張しているように格標識が名詞句全体に係っている ([N [Adj-NMLZ]<sub>ADJ</sub>]<sub>NP</sub>-clitic) という証明にはなっておらず、名詞化された形容詞にのみ係っている ([N], [Adj-NMLZ]<sub>N</sub>-clitic) という可能性を否定できるものではない。

とは言え、例えば名詞化された形容詞（や数詞など）が先行する名詞と同格的な構造を構成しているとしても、現代の（特にネパール語や英語などを学習した若い世代の）母語話者がそのような認識をしているというわけでは必ずしも無く、その同格性はかなり緩いものとなっている、あるいは、Genetti らが考えるような、名詞を修飾しそれに従属する構造として理解されるように変化しつつあると考えるのが妥当かも知れない。

### 3.2.2. 他のタマン諸語における関係節構造：属格標識の使用について

以上、タンベにおける関係節の構造について述べてきたが、タマン語群内全体で見た場合、その構造がどれ程一般的、あるいは特異であるかを明らかにするという趣旨で、以下、Michael Noonan が Noonan (1997), Noonan (2007), Noonan (2008), Noonan (2011) においてタマン諸語における名詞化、関係節化の構造についてまとめている記述について検証し、そこでの誤り、あるいは読者に誤解を与える・与えかねない箇所を指摘し、訂正しておきたい。

まず第一に、Noonan (2007), Noonan (2008: 230), Noonan (2011: 203) は、セケ語について ‘Isao Honda (personal communication) reports that the genitive is optional with nominalizations’ と述べているのであるが、これは明らかに間違った記述である。これまで見てきたように、タンベでは関係節化において常に属格標識が使用され、その使用は決して ‘optional’ ではない。むしろ ‘optional’ と言えなくもないのは、属格標識ではなく、名詞化接辞の方である。Noonan の記述は、私とのメールでのやり取りの中で私がタンベの関係節構造について彼に例文付きで伝えた内容が基になっているのだが、彼がそれを誤って解釈したのであろう。また、彼に伝えた内容はタンベについてのものであり、それがセケ語すべてに当てはまるような記述をしていることも適当でない。

第二に、タカリ語 Tukche 方言（1 章において ‘Tamang Thakali’ として紹介した方言・variation に含まれる）について、Noonan (2007), Noonan (2008: 230), Noonan (2011: 203) は ‘Hari and Maibaum (1970) assert that the genitive is optional’ と述べているが、これは Hari and Maibaum (1970) が述べていることを十分正確に表現したものとは言い難い。Hari and Maibaum (1970: 303) は以下のように述べている。

‘To the simple indefinite non-past form (=verb stem + “wa ~ -pa [sic]) and the past perfect form (=verb stem + “ci-wa”) the genitive suffix “-e” is added to form adjectives. In fluent speech, however, the “-e” suffix often fuses with the “a” and the affixes become “-we/-pe” and “-we”. Sometimes the “-e” is omitted, that is, the verbal forms are used as adjective.’

つまり、属格標識が使用されるのが本来の形であるが、省略されることもある、ということであり、‘optional’ とはちょっとニュアンスが違う。

第三に、西タマン語についての記述、‘The examples in Taylor’s (1973) article suggest that the genitive may be used with relative clauses in Western Tamang’ (Noonan 2008: 230) も正確ではない。Taylor (1970) や Taylor (1973) は関係節に属格標識が付くか否かという点について何ら言及していないので、はっきりしたことはわからないが、Taylor (1970) と Taylor (1973) における例文を見る限り（と言っても Taylor (1970) は ‘Tamang Texts’ であり、例文が多く、すべてのケースをチェックできているかどうかかわからないが）、動詞語幹に名詞化接辞の -pa、そしてその後に属格標識 -i が付く形、V-pa-i か、動詞語幹に直接 -pi という接辞が付く形、V-pi のいずれかであるようだ。後者はタカリ語 Tukche 方言の -we/-pe、あるいは後述するマナン語のケースなどと同様、名詞化接辞 -pa と属格標識が融合した形であると考えられる。

第四に、マナン語について Noonan は Hildebrandt (2004) の記述のみを頼りにしているが、Hoshi (1986) には関係節の構造についてかなり違う記述が見られ、それに言及していないのは残念である。まず Hildebrandt (2004) の記述であるが、それによるとマナン語における関係節では属格標識が使用されておらず、名詞化接辞 -pa によって名詞化された関係節が修飾される名詞の前に置かれる。ただし、Noonan が触れているように、Hildebrandt (2004: 113) は ‘At times in relativised contexts the vowel quality of /a/ fronts and sounds like: [pe] or [pœ] ... This phonetic alternation does not appear to correlate with any particular functional difference, however’ と述べており、この phonetic alternation の由来・起源をどう解釈するかで見解が分かれるところである。Delancey (2005) はこれを、グルン語などに見られる V-NMLZ-GEN の形と対応している、つまり西タマン語やタカリ語 Tukche 方言と同じく、名詞化接辞と属格標識が融合した形であると解釈しているが、これに対し Noonan はその可能性を認めつつも、二つの点からこれに疑問を投げか

けている。まず第一の点であるが、マナン語と系統的、地域的にかなり近いナル・プー語における関係節化においては、‘present’の意では名詞化接辞 *-pɛ* が使われるのに対し、‘past’の意では *-pi* という形が使われるが、この後者の *-pi* の母音 *i* は、copula *mu* などの後に付き、同じく ‘past’の意を表す接辞 *-i* が起源である可能性が高く、ナル・プー語の属格標識 *-ye/-i* (Noonan 2003) が起源である可能性を ‘isn’t likely’ であると述べ、Hildebrandt が記述している phonetic alternation もナル・プー語と同じようなシナリオである可能性を指摘している。第二の点は、Noonan が指摘しているように、Hildebrandt の grammar ではマナン語の属格標識は *-la* であり、Hildebrandt が報告している phonetic alternation *[pe] ~ [pœ]* を説明するには、*[pe] ~ [pœ]* は *-la* とは別の（おそらくそれより古い）属格標識 *\*-i*（あるいは *\*-e*）が名詞化接辞についたものであると想定する必要があるということである。とは言え、Noonan も述べているように、属格標識 *-i* あるいは *-e* といった形はタマン諸語・方言の多くで見られるものであり、こう想定することにそう大きな問題はなく、現在のところ、マナン語の phonetic alternation *[pe] ~ [pœ]* の起源は明らかでないと言うしかない。

次に Hoshi (1986) の記述であるが、こちらでは、節の最後尾に位置する動詞に名詞化接辞と思われる *-pə* が付き名詞化された後に接辞 *-ʔa* が付き関係節化されるとされている。Hoshi (1986) には明記されていないのだが、この接辞 *-ʔa* はその形、分布（母音 *ə* の後で欠落する）とも属格標識 *-ʔa* と同じであり、同一の形態素であると推測される（Hildebrandt の記述での属格標識 *-la* と同じものと思われる）。つまり関係節化にあたって属格標識が使用されているわけであり、Hildebrandt の記述とは大きな違いである。Hoshi (1986: 287) によれば、この *-ʔa* は母音 *ə* の後でしばしば欠落するとのことであるのだが、名詞化接辞 *-pə* と *-ʔa* が融合することがあるというような記述や例はない。そして、*a* という母音の音質を考えても、*V-pə-ʔa* が Hildebrandt が報告している *[pe] ~ [pœ]* に変化したとは考えにくい<sup>9</sup>。

第五に、グルン語についての記述についても問題がある。Noonan (2008: 230), Noonan (2011: 204) は ‘Glover’s 1974 grammar states that the genitive is always used with relative clauses, making Gurung then the only Tamangic language to use the genitive consistently’ とタマン諸語全体についてまとめているのであるが、実は Noonan 自身が Noonan (1997: 384–5) で、‘the genitive is omitted in “fast speech”’ と言及しているように、Glover (1974: 89) にそのような記述と例があり、状況はタカリ語 *Tukche* 方言や西タマン語と同様、決して ‘to use the genitive consistently’ とは言えないのであるが、どうして Noonan が Noonan (1997) ですでに把握して

<sup>9</sup> Hildebrandt と Hoshi 間のこの記述の違いが彼らのインフォーマントにあることは疑いないが、Hildebrandt の第一インフォーマントと Hoshi の第一インフォーマントはどちらも *Praka* 村の出身である（前者は父親が *Praka* 村の出身）ことを考えると、方言差によるものとは考え難い。ただし、両者の間には 50 歳程の年齢差があり、これが上記の違いの理由かも知れない。ちなみに、Mazaudon (1988) は ‘To me, the whole of Manang valley is one dialect’ と述べており、また著者自身のマナン語の調査経験、インフォーマント数人とその家族からの情報から、著者自身もマナン語にはそう大きな方言差はないと判断している。

いたこの内容に後の論文では言及していないのかは謎である<sup>10</sup>。Noonan(2008: 230)はまた、‘In sum, within the Tamangic group, the genitive seems firmly established only in Gurung; elsewhere it is either optional or is not used’とも述べているが、これまで見てきたように、関係節化の際、属格標識が使われるのは、タマン語群においてグルン語の他、タカリ語 Tukche 方言、西タマン語、マナン語、そしてセケ語タンベ方言にも見られ、かなり広く分布している言語現象であると言えよう。確かに属格標識が fast speech など脱落したり、名詞化接辞と融合したりするケースが多いようであるが、それらを ‘optional’ と表現するのは正確性を欠いており、読者に誤解を与えかねない。

### 3.3. 名詞化接辞 -la(ŋ)

タンベには -pa/-wa の他にもう一つの名詞化接辞、-la(ŋ) がある（著者の第一インフォーマントはこれを常に -laŋ と発音するが、もう一人の第二インフォーマントはこれを常に -la と発音しており、バリエーションが見られる）。この -la(ŋ) は以下の例 (28), (29) のように、属格標識が付いた人称代名詞や疑問代名詞 ‘who’ の後に付き「私のもの」、「誰のもの」といった意味を表すのに使用される。

- (28) <sup>H</sup>su-i-laŋ            <sup>L</sup>hin-pa  
          who-GEN-NMLZ   be-NMLZ  
          ‘Whose is this?’

- (29) <sup>H</sup>ŋa-i-laŋ            <sup>L</sup>hin  
          1sg-GEN-NMLZ   be  
          ‘(It) is mine.’

-la(ŋ) はまた、人称代名詞や疑問代名詞などの名詞だけでなく、属格標識が付いた動詞語幹にも使用されることがある。

- (30) <sup>H</sup>cu            <sup>H</sup>ca-i-laŋ-ca            <sup>H</sup>ucyu            <sup>L</sup>pisi-ca-ra            <sup>H</sup>pin-o  
          this            eat-GEN-NML-ART   that            baby-ART-DAT            give-IMP  
          ‘This one to eat, give (it) to that baby.’

動詞語幹に使用される例としては他にも、例 (18) ですで見たとおり、-te(n) を伴って副詞節 ‘when ...’ を形成するケースがある (<sup>H</sup>cyā-laŋ-ten ‘when (he) looked’) が、このケースでは属格標識は使用されず、-laŋ は動詞語幹に直接付く。

<sup>10</sup> Glover & Landon (1980: 48) によれば、グルン語には少なくとも大きく分けて3つの方言・ヴァリエーション、East, Central, West があり、Warren Glover 他が Glover (1974) 他で記述している Ghachok 方言はそのうち West に属する。グルン語の他の方言については未だ未調査・未記述のままであり、これらの方言では事情が異なる（つまり、属格標識が使われていない）可能性もある。

- (31) <sup>H</sup>ŋa <sup>H</sup>ken <sup>H</sup>ca-se <sup>1</sup>mu-laŋ-te(n) <sup>2</sup>the <sup>H</sup>kha-ci  
 1sg meal eat-SEQ be-NMLZ-when 3sg come-PAST  
 ‘When I was eating a meal, s/he came.’

この -laŋ-te(n) の -laŋ は、先に述べた別の名詞化接辞 -pa/-wa に置き換え可能であり、この点で、この構文において -laŋ は -pa/-wa と同じ機能を果たしていると言える。

- (32) “<sup>H</sup>he: <sup>H</sup>ŋa-i-laŋ <sup>H</sup>no <sup>H</sup>ā <sup>H</sup>kha-cin <sup>L</sup>pi-se <sup>H</sup>nari <sup>H</sup>nari <sup>H</sup>ra  
 IJ 1sg-GEN-NMLZ TOP NEG come-RES say-SEQ before before goat  
<sup>L</sup>taŋ-ce <sup>1</sup>ne-wa-ten <sup>H</sup>nana-se <sup>H</sup>nya-cyu-wa  
 drive-SEQ go-NMLZ-when eZ-ERG call-PAST-NMLZ  
 ‘(He) said, “Oh, mine (i.e., my lover) has not come”, and when, a long time ago, (he) drove goat(s) (and) went (i.e., left there), (the) elder sister(s) called out (to him).’

実は、タンベの -la(ŋ) と同源と思われる形態素はタマン諸語に広く分布しているのであるが、それぞれの言語・方言の記述が十分でなかったこともあり、これまであまり注目されて来なかった。他のタマン諸語・方言について詳細に記述することは本論の目的の範囲を超えているので、それは別の機会に譲ることとするが、以下、主なポイントについてのみ概説する。

まず指摘しておかなければならないのは、タマン語群において属格標識は、タンベの -i と同源の形式と、3.2.2. でも触れたマナン語の -la と同源の形式の二系統があり、タンベの名詞化接辞 -la(ŋ) はこの後者の系統と同源であると考えられる、という点である。前者の系統である属格標識は、東タマン語 (Risiangku 方言など)、タマン語 Dhankute 方言、マナン語以外の、現在までに報告されているすべてのタマン諸語・方言に、また後者の系統である属格標識は、東タマン語、西タマン語、タマン語 Dhankute 方言、グルン語 Ghachok 方言とマナン語に存在している。前者の系統は Benedict (1972: 89, note 260; 96) が “a genitival (subordinating) suffix” として再構築している PTB \*-ki に繋がるものであるが、Noonan (2011) はタマン祖語のレベルで属格標識 \*-kyi を再構築し、この系統の属格標識が後者の系統の属格標識より古いものであると述べている。

タマン語群の言語の内、最も東に位置する東タマン語とタマン語 Dhankute 方言では、後者の系統の形態素は純然たる属格標識として機能しており (Risiangku 方言, Dhankute 方言では属格標識はいずれも -la; Mazaudon 2003; Poudel 2006), Noonan の指摘が正しければ、古い系統の属格標識が新しい系統である後者の形式に完全に置き換えられている。これに対し、タマン語群言語域の西側に位置するセケ語タンベ方言、タカリ語 Syang 方言、タカリ語 Tukche 方言では、後者の

系統の形式は存在するが属格標識としては使用されておらず、タンベの **-la(ŋ)** のようにいずれも「誰々の (もの)」という意味を表すなどの機能で使用されている<sup>11</sup>。以下にタカリ語 Syang 方言における **-laŋ** の使用例を示す。タンベとは異なり、**-laŋ** の前に属格標識が使用されていないが、これはタカリ語 Tukche 方言でも同様である。

(33) Yhulkasom Thakali (Syang)

- a. <sup>1</sup>cu    <sup>2</sup>su-laŋ    <sup>1</sup>hi-me  
this    who-NMLZ    be-MIR.Q  
'Whose is this?'

- b. <sup>1</sup>ŋa-laŋ    <sup>1</sup>hi-mo  
1sg-NMLZ    be-MIR  
'(This) is mine.'

この両者の間に挟まれた西タマン語、グルン語、マナン語では、タンベの **-la(ŋ)** などの名詞化接辞と、東タマン語などの属格標識 **-la** が歴史的に関係しており同源であることを示す興味深い言語現象が見られる。まず、セケ語、タカリ語と地理的に最も近いマナン語にはこの系統に繋がる形態素として、先に 3.2.2. で述べた属格標識 **-ʔa** (Hoshi 1986; Hildebrandt 2004 の記述では **-la**) と名詞化接辞 **-lə** の二つが併存している (Hildebrandt 2004 ではこれについての記述、例文は無い)。以下は Hoshi (1986) があげている名詞化接辞 **-lə** を使った例文である。

(34) Manangba<sup>12</sup>

- a. <sup>2</sup>konpə    <sup>3</sup>ta:sə-ʔa    <sup>3</sup>kye:-ko    <sup>3</sup>ŋə-lə  
monastery    far.there-GEN    field-DEF    1sg-NMLZ  
'The farm beyond the temple is mine.'

- b. <sup>2</sup>sə-sho-ko    <sup>4</sup>su-lə  
good-SP-DEF    who-NMLZ  
'Whose is the best?'

(Hoshi 1986: 297)

グルン語については、Glover (1974: 70) が 'genitive' として **-e** と **-l(a)** (Glover et al. 1974 では **-la** ~ **-la:**) の二つをあげているのであるが、Glover (1974) や

<sup>11</sup> タカリ語 Tukche 方言については、著者が知る限りこのような記述が明確にされている文献は存在しないが、Hari and Maibaum (1970) にこのように分析できる例文が散見される。

<sup>12</sup> ここでは Hoshi (1986) の原著のまま音調番号 1 ~ 4 を引用するが、Hoshi の音調番号 1 ~ 4 の使用、それらが示す音調は、Mazaudon (1973) や Hildebrandt (2004) のそれとは異なっていることを注記しておく。

Glover (1970), Glover et al. (1977) を詳細に吟味していくと、後者の方は属格標識としての機能もあるようだが、大多数の例（例えば例 (35)）では、上述のタンベ、タカリ語やマナン語の名詞化接辞と同じような機能を果たしていることがわかる（よって (35) では *-la* を NMLZ と注解している）<sup>13</sup>。

(35) Gurung (Ghachok)

cu'      ŋa-la:  
this      1sg-NMLZ  
'This is mine.'

(Glover et al. 1977: 57)

西タマン語 (Sahu 方言) については、Taylor (1973) が属格標識として *-i*, *-ki* と *-la* の三つの形を載せているのであるが、音韻的に条件づけられた異形態ではないようで、それぞれの機能や使用法についての記述が全く無い為、甚だ読者を混乱させるものになっている。しかし、グルン語と同様、Taylor (1970) や Taylor (1973) の例文を良く精査していくと、*-la* は、その後に head noun が無く、*-la* が付いた名詞自身が head noun として機能している例がかなり多いことがわかる。また、*-ki* と *-la* が併用されている形 (*-ki-la*) もあり、その後に head noun がある例（つまり純然たる属格標識）と無い例（つまり名詞化接辞）のどちらのケースにも使われている。

これに対して、近年発表された Owen-Smith (2013) によると、同じ西タマン語の Indrawati Khola 方言 (Sindhupalchok District) では、*-la* は属格標識としては使用されておらず、この方言での唯一の属格標識である *-ki* の後か ((36a-b) 参照)、あるいは *-la* 単独で現れ (例 (36c)), 名詞化接辞として機能している。

(36) Indrawati Khola (Western Tamang)

a. **ram-ki-la**

Ram-GEN-NMLZ

'Ram's [one]'

b. <sup>2</sup>a-ki-la      <sup>2</sup>cyun      <sup>1</sup>mu-la

2sg-GEN-NOM      little.brother      COPA-FUT

'Do you have (any) younger brothers or sisters?'

[More literally: are there any younger brothers/sisters of yours?]

<sup>13</sup> Glover (1974: 89, note 26) は 'In predicate position the possessive is *-l(a)*.' と述べ、この形態素がこうした機能を持っていることを、非常に分かり難い表現ではあるが、記述している。

- c.     <sup>2</sup>ocu     <sup>1</sup>ŋi-la     <sup>3</sup>hin-la  
          DEM   1sg.GEN-NOM   COPE-FUT  
          ‘That’s mine.’

Owen-Smith (2013) は西タマン語の他の諸方言での -la の分布にも言及しており，そこから推測するに，西タマン語の諸方言においては，属格標識の機能が，元々の属格標識の \*-k(y)i の反映形 (reflex) から，元々名詞化接辞であった -la に移行している歴史的変化の過程上にあり，東タマン語やタマン語 Dhankute 方言ではこの置き換えが完了していると考えられる。

先にも述べたように，この名詞化接辞については，多くのタマン言語・方言において記述がまだ十分でなく，今後，それぞれの言語・方言におけるより詳細な調査，記述・報告が待たれるところである。

## 略号

文法用語		NEG	negative
1	1st person	NMLZ	nominalizer
2	2nd person	NPT	non-past
3	3rd person	O	‘O’ argument
ABL	ablative	OBL	oblique
ADVLZ	adverbializer	OPT	optative
ANT	anterior	PAST	past
ART	article	pl	plural (used for pronouns)
COND	conditional	PL	plural
CONF	confirmation	PTCL	particle
CONT	continuous	Q	interrogative/question
DAT	dative	RES	resultative
DEF	definite	S	‘S’ argument
DEM	demonstrative	SEQ	sequential
DIR	directional	sg	singular (used for pronouns)
ERG	ergative	SP	superlative
FUT	future	TOP	topic
GEN	genitive		
HBT	habitual	親族名称	
IMP	imperative	eZ	elder sister
incl	inclusive (used for pronouns)	GD	granddaughter
IJ	interjection	S	son
LOC	locative	SW	son’s wife
MIR	mirative		



## 参考文献

- Benedict, Paul K. 1972. *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Beyer, Stephan V. 1992. *The Classical Tibetan Language*. Albany: SUNY Press.
- DeLancey, Scott. 1999. "Relativization in Tibetan". In: Yogendra Yadava and Warren Glover (eds.), *Studies in Nepalese Linguistics*, 231–249. Kathmandu: Royal Nepal Academy.
- . 2005. "Relativization and nominalization in Bodic". *BLS* 28S: 55–72.
- Genetti, Carol. 2011. "Nominalization in Tibeto-Burman languages of the Himalayan area: A typological perspective". In: Foong Ha Yap, Karen Grunow-Härsta, and Janick Wrona (eds.), *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspective*, 163–193. Amsterdam: John Benjamins.
- Genetti, Carol, A.R. Coupe, Ellen Bartee, Kristine Hildebrandt, and You-Jing Lin. 2008. "Syntactic aspects of nominalization in five Tibeto-Burman languages of the Himalayan area". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.2: 97–144.
- Georg, Stefan. 1996. *Marphatan Thakali*. München/Newcastle: Lincom Europa.
- Glover, Warren W. 1970. "Gurung Texts". In: F.K. Lehman (ed.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal, Part III: Texts I (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics, Volume III)*, 1–131. Urbana: Department of Linguistics, The University of Illinois.
- Glover, Warren W. 1974. *Sememic and Grammatical Structures in Gurung (Nepal)*. Norman, Oklahoma: Summer Institute of Linguistics.
- Glover, Warren W., J.R. Glover, and Deu Bahadur Gurung. 1977. *Gurung-Nepali-English Dictionary with English-Gurung and Nepali-Gurung Indexes* (Pacific Linguistics C-51). Canberra: The Australian National University.
- Glover, Warren W., and John K. Landon. 1980. "Gurung dialects". In: Ronald L. Trail et al. (eds.), *Papers in South-East Asian Linguistics No.7 (Pacific Linguistics Series A-53)*, 29–77. Canberra: Australian National University.
- Hari Annemarie, and Anita Maibaum. 1970. "Takhali Texts". In: F.K. Lehman (ed.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal, Part III: Texts I (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics, Volume III)*, 165–306. Urbana: Department of Linguistics, The University of Illinois.
- Hildebrandt, Kristine A. 2004. "A grammar and glossary of the Manange language". In: Carol Genetti (ed.), *Tibeto-Burman Languages of Nepal: Manange and Sherpa (Pacific Linguistics 557)*, 1–189. Canberra: The Australian National University.
- Honda, Isao. 2002. "Seke phonology: A comparative study of three Seke dialects". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 25.1: 191–210.
- . 2003. "A sketch of Tangbe". In: Tej Ratna Kansakar and Mark Turin (eds.), *Themes in Himalayan Languages and Linguistics*, 49–64. Kirtipur, Nepal: Tribhuvan University and South Asia Institute at Heidelberg, Germany.
- . 2007. "A comparative and historical study of demonstratives and plural markers in Tamangic languages". In: Roland Bielmeier and Felix Haller (eds.), *Linguistics of the Himalayas and Beyond*, 97–118. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 本田伊早夫. 2010. 「セケ語の格標識について」. In: 澤田英夫 (編), 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1 : 格とその周辺』, 109–125. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Hoshi, Michiyo. 1986. "An outline of the Prakaa grammar—a dialect of the Manang language". *Monumenta Serindica* 15: 187–317. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Mazaudon, Martine. 1973. *Phonologie Tamang*. Paris: Société d'Études Linguistiques et Anthropologiques de France.
- . 1988. "The influence of tone and affrication on manner: Some irregular manner correspondences in the Tamang group". Paper presented at the 21st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics held in Lund.
- . 2003. "Tamang". In: Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan languages*, 291–314. London/New York: Routledge.
- Noonan, Michael. 1997. "Versatile nominalizations". In: Joan Bybee, John Haiman, and Sandra Thompson

- (eds.), *Essays on Language Function and Language Type, in Honor of T. Givon*, 373–394. Amsterdam: John Benjamins.
- . 2003. “Nar-Phu”. In: Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*, 336–352. London/New York: Routledge.
- . 2007. “Nominalizers in Tamangic languages”. invited paper presented at *the International Workshop on Nominalizers and Copulas in East Asian and Neighboring Languages*, January 9, 2007.
- . 2008. “Nominalization in Bodic languages”. In: María José López-Couso and Elena Seoane (eds.), *Rethinking Grammaticalization: New Perspectives for the Twenty-first Century*, 219–238. Amsterdam: John Benjamins.
- . 2011. “Aspects of the historical development of nominalizers in the Tamangic languages”. In: Foong Ha Yap, Karen Grunow-Härsta, and Janick Wrona (eds.), *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspective*, 195–214. Amsterdam: John Benjamins.
- Owen-Smith, Thomas. 2013. “Genitive and aspect in a northern dialect of Tamang”. Paper presented at the 45th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics held in Singapore.
- Poudel, Kedar Prasad. 2006. *Dhankute Tamang Grammar*. München/Newcastle: Lincom Europa.
- Taylor, Doreen. 1970. “Tamang Texts”. In: F.K. Lehman (ed.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal, Part III: Texts I (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics, Volume III)*, 132–164. Urbana: Department of Linguistics, The University of Illinois.
- . 1973. “Clause patterns in Tamang”. In: Austin Hale, and David Watters (eds.), *Clause, Sentence, and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal, Part II: Clause*, 81–174. Norman, Oklahoma: Summer Institute of Linguistics.
- Varenkamp, Bryan. 2003. “A Look at -ba in Central Eastern Tamang”. In: Tej Ratna Kansakar and Mark Turin (eds.), *Themes in Himalayan Languages and Linguistics*, 219–232. Kirtipur, Nepal: Tribhuvan University and South Asia Institute at Heidelberg, Germany.
- Vinding, Michael. 1998. *The Thakali: A Himalayan Ethnography*. London: Serindia.
- Watters, David E. 2008. “Nominalization in the Kiranti and Central Himalayish languages of Nepal”. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.2: 1–43.



# キナウル語の名詞句構造と修飾構造 \*

高橋 慶治

## 1. はじめに

本稿の目的は、キナウル語の名詞句構造と修飾構造について記述し、とくに連体修飾の特徴からキナウル語の形容詞の性質を探るものである。

### 1.1. キナウル語の概要

キナウル語は、チベット・ビルマ語派西ヒマラヤ諸語に属する言語の一つである。西ヒマラヤ諸語は、インド西北部のヒマーチャル・プラデシュ州およびウッタラカンド州に分布する言語群であり、キナウル語はその西部グループであるキナウル語群に属し、ヒマーチャル・プラデシュ州キナウル地区で話されている。人口は5万人程度であるが、他のインドの少数民族と同様、若い世代で主としてヒンディー語を使うようになってきており、今後、母語話者が激減する可能性がある。

方言的には、大きく上キナウル方言と下キナウル方言に分けることができる。上キナウル方言はチベット語からの借用が、下キナウル方言はヒンディー語からの借用が多いと言える。方言間の差は比較的小さいようであるが、詳細は今後の調査に待たなければならない。

キナウル語の基本語順は、SOV/AN である。また、格標識が名詞に後置されるか、または名詞の末尾に接辞として付加される<sup>1</sup>。動詞は、代名詞由来とされる主語人称接辞のほか目的語人称接辞を取る。ただし、目的語人称接辞は1, 2人称同形である。

---

\* 本稿は、第17回ヒマラヤ諸語シンポジウム（2011年9月、神戸市外国語大学）と、京都大学人文科学研究所で行われた研究会（2013年12月1日）で発表した内容に加筆、また大幅に修正を加えたものである。発表において有益なコメントをくださった方々に感謝したい。また、筆者に根気よくキナウル語を教え続けてくれる Ravinder Singh Negi 氏と、つねに筆者を暖かく迎えてくれる彼の家族に心からの感謝をしたい。この研究は、文部科学省から給付された科学研究費補助金（C）（2011–13年度、キナウル語の連体修飾についての研究—とくに修飾語の形態的側面からの分析、#23520514）の援助を受けたものである。ここに記して感謝の意を表する。

<sup>1</sup> 格標識を接辞と見るか接語と見るかは、意見がわかれるところである。最近では接語と見る傾向にあるように思われるが、本稿では基本的に接辞としている。一般に接語と見る理由の一つとして、名詞句の末尾に付くことがあげられる。名詞が名詞句の末尾ではない位置にある場合、格助詞はさまざまな品詞に付く可能性があり、接語と見ることが適切であると考えられているようである。しかし、‘the queen of England’s hat’ という例が示すように、接尾辞が句に付加される例がある。また、語と言えないような形式が名詞句末尾に付いている例を見ると、それを「接語」と呼ぶことには抵抗を覚える。語が統語論的単位、接辞が形態論的単位とすっきり区別できるのであれば事は単純であるが、言語はつねに変化の中にあり、中間的なものがありうるのだらう。接語が、独立した語から接辞への文法化の過程の一段階と考えるなら、接語に幅があると考えられると同時に、接辞らしい接辞から接辞らしくない接辞まで幅があるとも考えることもできるのではないだろうか。

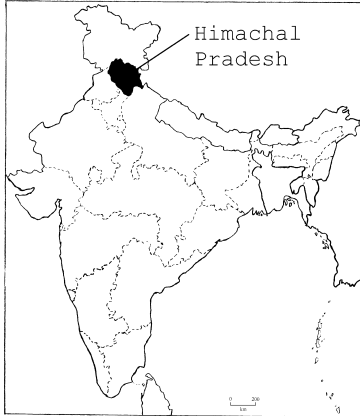


図 1 インド

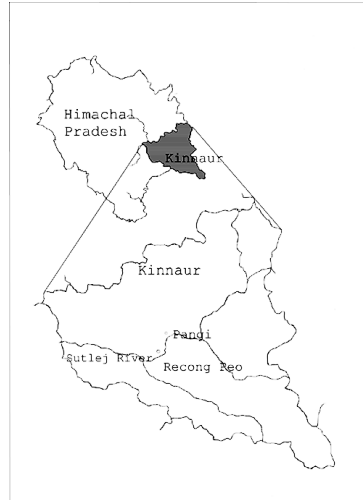


図 2 ヒマチャル・プラデシュ州とキナウル地区

## 1.2. キナウル語の名詞句と修飾構造

名詞は、文の主語や目的語になる。キナウル語の名詞句は、基本的に次の語順を取る。

### (1) (Dem +) (Modifier +) Noun

ここで、‘Dem’は指示詞や所有代名詞である。基本的には、名詞句の最初に置かれる。‘Modifier’は、数詞と形容詞などの修飾要素である。また、形容詞句のような長い修飾要素であることもある。‘Noun’は、名詞句の末尾に置かれる。また、名詞句は指示詞や修飾要素なしの名詞だけで構成されることもある。上記のように、格標識は名詞句に後続する。

キナウル語では、形容詞は名詞に前置され、形容詞にも修飾される名詞にもとくに接辞を伴わずに修飾される。ただし、動詞や名詞が後続の名詞を修飾する場合は、何らかの接尾辞を伴う。

その接辞の内、*-tseyā* と *-seyā* は、基本的に前者が動詞に、後者が名詞に付加される。これらの接尾辞の使用は動詞、形容詞、名詞の連続性を示唆していると思われる。本稿の目的は、その連続性を明らかにすることである。

キナウル語では動詞自体が修飾のための形式を取る場合と、動詞が時制や主語人称接辞を取った上で構成する場合があります。筆者は、後者の構造を関係節と呼んでいる。後者は名詞句に含まれていないと考えられるため、本稿は、関係節を扱わない。キナウル語の関係節については、いずれ別稿を用意する。

## 2. 名詞句構造

キナウル語の名詞句は前節で示したとおりである。以下にその例を示す。

(2) は、名詞のみで名詞句が構成され、目的語として機能している。

- (2) *gi.s kinū kitāb red.a.k*  
 1PRN:SG.INS 2PRN:DAT book:ABS sell.PT.1s  
 ‘I sold the book to you.’

この例では、*kitāb* が、指示詞や形容詞だけではなく、格標識も伴っていない。むしろ、指示詞や形容詞を伴っていない名詞が格標識を伴うことはある<sup>2</sup>。

(3) は、名詞に数詞が先行する例である。名詞が複数形になっているが、複数であることが明らかである場合は（この例では、2 以上の数を表わす数詞が付いている）、複数形にする必要はない<sup>3</sup>。

- (3) *rīnkū diñ niš kim.ā tod.ts*  
 PRN place two house.PL exist.GRD  
 ‘Rinku has two houses.’

次の例では、形容詞が名詞を修飾している。形容詞は名詞に先行する。

- (4) a. *nugō tsoik diñ dam zōlā dū*  
 3PRN:PL all place good bag exist  
 ‘They have a good bag with each of them.’

- b. *gi.s tēg bōḡaṇ.u paš.ō runiñ p<sup>h</sup>ikyā.k*  
 1PRN:SG.INS big tree.GEN side.LOC stone throw:PT.1s  
 ‘I threw a stone toward the big tree.’

この例からわかるように形容詞は、連体修飾を示す特別な形を持っているわけではなく、その語幹が直接名詞に先行して名詞を修飾する。

なお、(4b) では、当該の名詞句が属格を伴って、後続の名詞 *paš* を修飾する形になっている。

次例は指示詞と名詞の例である。指示詞は名詞に先行する。

<sup>2</sup> キナウル語は、他動詞文で能格的な格標示を行う。高橋（2010）を参照。したがって、他動詞の目的語と自動詞の主語は同じ形式、すなわち絶対格であるが、本稿では、これ以降の逐語訳で絶対格であることは示さない。

<sup>3</sup> ちなみに、キナウル語に双数という概念はあるが、少なくともバンギ方言では、代名詞が双数形を持っているだけで、名詞にも動詞にも双数を表わす形式はない。

- (5) *ki ju pitañ.ū kin tsoī zōr šešē stug.m.ā.lī*  
 2PRN:SG this door.DAT 2PRN:SG:GEN all strength send:PF push.INF.COND.even  
*ju tērañ.ī ma.dwañ.ts*  
 this when.EMPH NEG.open.GRD

‘If you push this door with all your efforts, it never opens.’

指示詞も連体修飾のための形式を持っているわけではない。同じ形のまま、名詞的に使われることもある<sup>4</sup>。

次の例は、名詞に所有代名詞が先行している例である。所有代名詞は、上のパラダイムでは、指示詞と同じスロットに入っていると考えられる。

- (6) *gi.s kin bal.ū ʔis.č.e.k*  
 1PRN:SG.INS 2PRN:GEN head.DAT hit.1-2o.PT.1s

‘I hit your head.’

ここでは、名詞に格標識が付加されている。キナウル語では、名詞句末に名詞が現れるので、格標識は基本的に名詞に付加される。

(7) は、指示詞と数詞が名詞を修飾する例である。

- (7) a. *ju niš kor<sup>h</sup>a.gā rug.ši.d.tseyā dū, irwañ.seyā ma.dū*  
 this two story.PL resemble.MDL.GRD.ATTR COP same.ATTR NEG.COP

‘These two stories resemble each other, but not same.’

- b. *ju niš pen.ā airwañ.seyā (dū)*  
 this two pen.PL different.ATTR COP

‘These two pens are different.’

- c. *ju niš.u komō had’seyā bergā lamas dū*  
 this two.GEN inside which stick long COP

‘Which is longer, this stick or that?’

数詞も名詞に前置されれば、その名詞が表わすものがその数だけあることを表す。(7c) は、名詞句内に名詞がない例である。*niš* が名詞的に「2 つのもの」という意味となり、属格標識を取っている。

次例は、指示詞と形容詞が名詞に先行する例である。

<sup>4</sup> *ju* が単体で用いられた場合は、「これ」の意味である。ただし、「これの」のように属格の意味の場合は、*jū* と母音が長くなる。

- (8) *gi.s*      *añ*      *zwani.ō*      *ju*      *tēg*      *rim*      *piš.šid*  
 1PRN:SG.INS      1PRN:SG:GEN      young\_day.LOC      this      big      field      cultivate.DPT  
 ‘I cultivated this big field in my young days.’

次の例では、数詞と形容詞が名詞に先行している。

- (9) *niš* *tēg* *runiñ.ā* *solok.ō* *jabjab*      *du.ē*  
 two      big      rock.PL      road.LOC      fall\_down:PF      COP.PT  
 ‘Two big stones fell on the road.’

次の例では、指示詞と数詞、形容詞が名詞句内に生起している。また、形容詞は複数現われている。

- (10) *orč<sup>h</sup>ē*      *ju*      *nā*      *tēg*      *šāgī*      *botol.e.nū*      *p<sup>h</sup>ikyā.ñ*  
 please      this      five      big      empty      bottle.PL.DAT      throw\_away.2S:SG  
 ‘Please throw away these five big empty bottles.’

複数の修飾語が一つの名詞句内に生起する場合、修飾語の語順には制限がある。*nā*, *tēg*, *šāgī* の語順は 6 種のパターンがありうるが、上の語順の他に許されるのは、形容詞の語順を入れ換えた *nā šāgī tēg* だけである<sup>5</sup>。

- (11) *id*      *lamas*      *yañzē*      *añgrēz*      *ts<sup>h</sup>etsas*      *bid.tū*  
 one      tall      old\_lady      English      lady      come.PR  
 ‘Here comes a tall old English lady.’

上の *lamas*, *yañzē*, *añgrēz* の 3 語で構成される語順は、上の例の他に *lamas añgrēz yañzē*, *yañzē lamas añgrēz* の 2 種のみであり、*yañzē* と *añgrēz* が上の原則に従っていない。ここで言えることは、*lamas* が *añgrēz* に先行することが条件になっているということである<sup>6</sup>。

英語などで形容詞句内部で形容詞に配列順序があることが知られているが<sup>7</sup>, キナウル語でも、およそ同じような語順で形容詞が配列されるようである。ただし、キナウル語の名詞句内での形容詞の配列順序については、さらに調査が必要である。

<sup>5</sup> 数詞は修飾語の中でもっとも前に置かれるのが普通である。しかし、数詞がこの位置に固定されているわけではなく、形容詞より後ろに現れることもある。ただし、その条件は今のところ不明である。

<sup>6</sup> ただし、*añgrēz* は ‘foreign’ という意味でもありうるので、固有形容詞と見るべきではないかもしれない。

<sup>7</sup> 安井・秋山・中村 (1976: 138) では、「限定詞<同定の形容詞<強意の形容詞<特性記述形容詞<分類形容詞<名詞」などの順番が示されている。ただし、安井他 (1976: 137) で、「配列順序を決定する一定の明確な原則というものはないように思われる」としている。



### 3. 名詞修飾: *-seyā* と *-tseyā* の分布

前節では、名詞句内の要素の語順を見た。本節では、名詞を修飾する要素として、形容詞、名詞、動詞の分布を見る。

前節で見たように、キナウル語では、修飾語は名詞に前置される。それが修飾要素であるかどうかは形態的には判別できない。しかし、修飾要素であることを明らかにする2種の接尾辞がある。以下では、この接尾辞を含め、キナウル語の修飾構造についてさらに観察する。

#### 3.1. 形容詞による名詞修飾

キナウル語の形容詞の特徴として、次の点が考えられる。

1. 第2節で見たように、形容詞は被修飾語に前置される。
2. とくに連体修飾用の形式があるわけではない。
3. 比較級、最上級などの変化はない。比較の基準を示せば、比較の意味を表す。
4. いくつかの点で、名詞的であると言える。

Dixon (2004) は、あらゆる言語に形容詞という品詞クラスがあると主張しているが<sup>8</sup>、キナウル語の形容詞の場合は、名詞的であるとはいえ、名詞そのものとは分布が異なるため、形容詞という品詞クラスがあると考えてよい<sup>9</sup>。

第2節で見たように、形容詞は、そのままの形で名詞を修飾する。つまり、連体修飾用の特別な形式があるわけではない。第2節ですでにその点を確認しているので、本節では接尾辞 *-seyā*<sup>10</sup> が付加されている例を見る。

(12) では、「冷たい」を意味する形容詞 *lis/lisk* に接尾辞 *-seyā* が付いている。

- (12) *lis.seyā/lisk.seyā*     *tī*  
          cold.ATTR/cold.ATTR     water  
          ‘cold water’

*lis* と *lisk* は、末尾の *-k* の有無にかかわらず同じ意味で用いられる。*-k* の意味は今のところ明らかではないが、名詞化接辞である可能性があると思われる<sup>11</sup>。次

<sup>8</sup> ‘I suggest that there are always some grammatical criteria—sometimes rather subtle—for distinguishing the adjective class from other word classes.’ (Dixon 2004: 1) また、‘... all languages have a distinguishable adjective class.’ (Dixon 2004: 9)

<sup>9</sup> ただし、そのことによって筆者が、Dixon と同様、あらゆる言語に形容詞という品詞クラスがありうると考えているわけではない。

<sup>10</sup> *-seyā* と、後述する *-tseyā* は形式がよく似ているので、語源を同じくする可能性がある。動名詞を作る接尾辞 *-ts* または *-d* が付いた上に *-seyā* が付加されれば、発音が *-tseyā* に変化することは容易に想像できる。しかし、今のところインフォーマントは *V-ts/d-seyā* というように発音することを容認しないため、母語話者の意識としてはこのような接辞の組み合わせで成立するものではない。ただ、もしこの組み合わせで成立しているなら、*-ts/d* という接尾辞で名詞化された動詞に *-seyā* が付くという説明が可能である。なお、この接辞とチベット語の *seyaa* の機能と形式が似ているが、キナウル語では *-sē* が女性形として用いられることがある。cf. 例 (19)

<sup>11</sup> この語末 *-k* がある場合とない場合について、筆者は、かつて、たんに音節末の子音連続が単純化したかどうか

例も、形容詞 *ušk* に *-seyā* が付加されている。

- (13) *gi*            *ušk.seyā*    *kim.ō*        *tōši.d*  
 1PRN:SG        old.ATTR       house.LOC       live.GRD  
 ‘I live in an old house.’

実際には、*-seyā* が付いている例と付いていない例では意味に違いがある。(14) では、*em* はたんに「美味しい」と言っているだけだが、*emseyā* と言った場合には、「美味しい方の」という意味になる。

- (14) *ki*            *hōtol.ō*        *wāl*        *em/em.seyā/\*em.tseyā*        *k'aū*  
 2PRN:SG        restaurant.LOC       very        delicious/delicious.ATTR/delicious.ATTR       food  
  
*zā.m*        *han.ts*  
 eat.INF        be\_able.GRD  
 ‘You can eat very delicious meal at the restaurant.’

なお、形容詞には、上で *emtseyā* が容認されないように、*-tseyā* は付加できない<sup>12</sup>。次の例でも、*damseyā* は「よい方」という意味である。

- (15) *gi.s*            *jū*    *kā*        *dam/dam.seyā*        *gasā*    *zog.i.m*        *gyā.to.k*  
 1PRN:SG.INS        this    than        good/good.ATTR        clothe    buy.LV.INF        want.FUT.1s  
 ‘I want to buy clothes better than this.’

結果として、形容詞に *-seyā* が付加された場合は、比較級の意味になりうる。ただし、構文自体が比較を表している場合は、あえて *-seyā* を使わなくてもよい。例 (15) では、比較の基準が示されているので、*-seyā* を取っていない *dam* も比較の意味を表す。

### 3.2. *-seyā* を伴う名詞の名詞修飾

本節では、キナウル語の形容詞が、名詞と似た性質をもつことを確認するため、名詞による名詞修飾を確認しておく。

(16) は、名詞が名詞を修飾する際のもっとも基本的なやり方と考えられる、属格による修飾である。(6) の所有代名詞と同様、名詞に先行して所有格名詞が置かれる<sup>13</sup>。

の違いであると考えたが、その後の分析の結果、何らかの（文法的な）意味を持つ形態素であると考えようになっている。ただし、その機能はじゅうぶんに明らかであるとは言えない。いくつかの用例から、名詞化接辞の可能性を考えている。

<sup>12</sup> ただし、ごく一部の形容詞に *-tseyā* が付加される場合がある。少なくとも、さらにその一部の形容詞は動詞的に使われうるものである。このような説明のできない形容詞はさらに限られている。

<sup>13</sup> 属格が、所有以外のさまざまな意味を持ちうることは他の言語と同じであるが、ここではそのような意味の分析は行わない。

- (16) *rabindar.u*    *kim.ō*    *mē*    *ʈunī*    *zormyamyā*  
 PSN.GEN    house.LOC    yesterday    girl\_baby    be born:PF  
 ‘A girl was born in Ravinder’s house yesterday.’

ただし、このことは修飾語が被修飾語の前に置かれることを確認するだけである。

-*seyā* は名詞に付加され、付加された名詞と同じ特徴をもつものであるという意味を表わす。例 (17) で、(17a) は「髭をたくわえた人」、(17b) は、話者がいくつかのロウソクを比べながら、「これにしておく」と言っている。

- (17) a. *gi.s*    *darī.seyā*    *mī*    *tʰaŋ.a.k*  
 1PRN:SG.INS    beard.ATTR    person    see.PT.1s  
 ‘I saw a bearded man.’  
 b. *añū*    *huyū.seyā*    *mumbatī*    *ke.ñ*  
 mēDAT    this.ATTR    candle    givē1-2o.2s  
 ‘Give me this candle.’

なお、対比のニュアンスなくたんに「このロウソク」と言いたければ *ju mumbatī* と言えばよい。

(18) では、*boāseyā* は限定的ではない。これは、「シャールーの父という性質をもつ人」という意味で、名詞化された用法である。

- (18) *šālū*    *boā.seyā*    *rabindar.ī*    *dū*  
 PSN    father.ATTR    PSN.EMPH    COP  
 ‘It is Ravinder who is the Shalu’s father.’

いずれにせよ、-*seyā* は名詞に付加される。

次の例は、-*seyā* ではなく -*sē* が用いられている。これは、被修飾名詞が女性である場合、用いられることがある。

- (19) *ramēš*    *rok.krā.sē*    *tsʰetsas*    *dam*    *tsal.ts*  
 PSN    black.hair.ATTR:FEM    lady    good    think.GRD  
 ‘Ramesh likes a dark-haired girl.’

前節で見たように、形容詞が -*seyā* を伴うことがある。形容詞は、普通 -*tseyā* を取ることはできない。-*seyā* を伴う形容詞は、比較級のような意味をもつが、キナウル語では、形容詞は、そのままの形で比較級の意味を示すことができる。形容詞が -*seyā* を取る場合、形容詞が表わす性質をもついくつかのものの中からいずれかを選ぶというある種の選択を意味している。この意味は、名詞が -*seyā*

を取る場合の意味と類似することを確認しておきたい。

### 3.3. 動詞による名詞修飾：-tseyā

動詞は形容詞と異なり，通常名詞に直接前置してもその名詞を修飾しているとは言えない。動詞が名詞を修飾するためには，何らかの形式を取る必要がある。本節では，接尾辞 -tseyā の分布を調べる。

上で述べたように，-tseyā は，動詞が名詞を修飾する場合，英語の分詞のように動詞に付加される。(20) では，-tseyā が動詞 *lañ-* ‘wait’ に付加されて，名詞 *mī* ‘person’ を修飾する。したがって，この構造は「待っている人」‘the waiting person’，「(誰かを) 待つ人」‘the person who waits for (somebody)’を表わす。この例は，また，動詞は名詞を修飾する場合，-seyā を取ることができないことを示す。

- (20) *tašī.piñ* ***lañ.tseyā***/\**lañ.seyā* *mī* *rabindar* *dū*  
 PSN.DAT wait.ATTR/wait.ATTR person PSN COP  
 ‘The person who is waiting for Tashi is Ravinder.’

例 (21) では，-tseyā が動詞 *krab-* ‘cry’ に付加されている。この動詞は否定辞 *ma-* を伴って名詞 *č<sup>h</sup>an* ‘child’ を修飾する。

- (21) *hunak.stañ* ***ma.krab.tseyā***/\**ma.krab.ši.d.tseyā* *č<sup>h</sup>an* *hunā* *krab.udū*  
 now.till NEG.CRY.ATTR/NEG.CRY.MDL.GRD.ATTR boy now cry.PR  
 ‘The boy who didn’t cry till now is crying now.’

なお，*makrabšidtseyā* が容認されないのは，中動態接辞 -šī<sup>14</sup> が付加されているからである。(22a) は -tseyā が動詞 *sad-* ‘kill’ に付加されて，名詞 *mī* を修飾する。*sašidtseyā* はこの文では許容されない。しかし，(22b) では，*sašidtseyā* が適格であり，*sadtseyā* は不適格である。つまり，中動態接辞 *ši-* は，被修飾名詞が，動詞の意味的目的語の時，挿入される。この点の詳細は，Takahashi (2012) を参照のこと。

- (22) a. *guruḷi.piñ* ***sad.tseyā***/\**sa.ši.d.tseyā* *mī* *čōras* *du.ē*  
 teacher.DAT kill.ATTR/kill.MDL.GRD.ATTR person thief COP.PT  
 ‘The person who killed the teacher was the thief.’  
 b. *čōras.is* ***sa.ši.d.tseyā***/\**sad.tseyā* *mī* *guruḷi* *du.ē*  
 thief.INS kill.MDL.GRD.ATTR/kill.ATTR person teacher COP.PT  
 ‘The person who the thief killed was the teacher.’

<sup>14</sup> この接尾辞については，Takahashi (2012) を参照のこと。

なお, (22a) で, *sad mī* のような *-tseyā* をもたない動詞形式は許されない。もし動詞語幹が接尾辞なしで現れた場合, それは命令形であることを意味する。

また, 修飾語としての動詞が中動態接辞 *-ši* を取っている場合, 動詞の意味上の目的語である例を挙げたが, 修飾語としての動詞が自動詞である場合は, その動詞の複数主語であったりする。

- (23) *čā.ši.d.tseyā*      *čaṅ.a.nū*      *ju*      *ran.i.ñ*  
 dance.MDL.GRD.ATTR      child.PL.DAT      this      give.IV.2S  
 ‘Please give this to the children who are dancing.’

筆者のインフォーマントは, 時に接尾辞 *-ši*<sup>15</sup> がこの文脈で過去を表していると言うが, それはつねに正しいわけではない<sup>16</sup>。(24) では, 主動詞 *legts* がこの状況が習慣的に行われていることを表しており, *ṭigšidtseyā* は *hunā* ‘now’ と共起することができる。したがって, この形式は過去を意味していない。

- (24) *gi.s*      *ṭig.ši.d.tseyā/\*ṭig.tseyā*      *sunduk*      *boā.s*      *leg.ts*  
 I.INS      break.MDL.GRD.ATTR/break.ATTR      box      father.INS      burn.GRD  
 ‘Father burns the box which I break.’

しかし, もし ‘(somebody) burned (something)’ を意味する *legas* が主動詞として使われるなら, *ṭigšidtseyā* は過去であると解釈される。このことは, 動詞の修飾形式がそれ自体は時制を持たないことを意味し, それは, 主動詞の時制によっている<sup>17</sup>。

次は叙述的に使われている例であるが, 否定辞が付いても同じく *-tseyā* が用いられる。

- (25) *gi*      *torō*      *k<sup>h</sup>aū*      *ma.zād.tseyā*      *to.k*,      *ṭ<sup>h</sup>ūlonnā*      *torō*      *aṅ*      *upasrī*      *to*  
 I      today      food      NEG.eat.ATTR      COP.1S      because      today      my      fasting      COP  
 ‘I cannot eat food today, because I am fasting.’

以上見たように, *-tseyā* は動詞に付加されて名詞を修飾する形式を作る。ただし, 名詞を修飾せずに叙述的に用いられることもある。

<sup>15</sup> 実際には, 本稿は, 接尾辞 *-ši* の機能を明かにしようとするものではない。しかし, これらの例が示しているのは, *-ši* が, 被修飾名詞が, 修飾する動詞の目的語である場合か, または, 動詞の主語名詞が複数である場合に用いられているということである。Takahashi (2012) を参照されたい。

<sup>16</sup> 実は, 過去を表わす接尾辞として *-sid* という形式が考えられる。これは, 主語人称接辞を伴わない形式であるため, 非定形動詞を作る。中動態接辞 *-ši* と動名詞接辞の異形態 *-d* が結びついた形と同じであるため紛らわしい。高橋 (準備中) を参照。

<sup>17</sup> *legudū* は, 現在進行を意味しているので, この文には不適切である。

### 3.4. *-tseyā* を伴わない名詞修飾

動詞の修飾形式は、3.3 節で見たように、動詞に *-tseyā* を付加することによって形成される。しかし、実際には、他の動詞形式、完了分詞や動名詞が名詞を修飾することがある。本節では、そのような形式を観察する。

本稿は、キナウル語の動詞形態論を詳細に説明するものではないが、本稿の話題に関わる動詞形式についてやや説明が必要である。キナウル語の動詞は、定形または非定形として生起する。動詞が定形の場合、時制接辞と主語人称接辞を取り、非定形の場合は取らない。非定形は、完了分詞、現在分詞、動名詞、または不定詞を含む<sup>18</sup>。動詞の完了分詞と動名詞は *-tseyā* なしで名詞を修飾することができる。しかし、現在分詞は *-tseyā* や *-seyā* を付加することができず、また名詞を修飾することはできない<sup>19</sup>。

(26) は、動名詞による修飾の例を示す。接尾辞 *-ts* によって修飾する動詞は、*-ts* が付加された動詞の元の主語である名詞を修飾する。

- (26) a. *šī.ts mī*  
           die.GRD person  
           ‘dead person’
- b. *sad.ts mī*  
           kill.GRD person  
           ‘the person who kills (somebody)’

通常、*-ts* も *-tseyā* も名詞を修飾できるが、次に見るように、できない場合もある。その違いについては明らかではない。

- (27) a. *nu ts<sup>h</sup>ar.ts/?ts<sup>h</sup>ar.tseyā gasā ka.ñ*  
           that make\_dry.GRD/make\_dry.ATTR clothes bring:1-2o.2s  
           ‘Bring those dried clothes.’
- b. *nu ts<sup>h</sup>ar.ši.d/ts<sup>h</sup>ar.šid.tseyā gasā ka.ñ*  
           that make\_dry.MDL.GRD/make\_dry.MDL.ATTR clothes bring:1-2o.2s  
           ‘Bring those dried clothes.’

(28a) は完了分詞（重複形）が名詞を修飾できない例である。また、(28b) は、被修飾名詞が単数の場合に容認度が下がっている。その理由は明らかではない。

<sup>18</sup> これらの形式については詳述しない。完了分詞は動詞語幹の重複または動詞語幹が接尾辞 *-s* を取る。現在分詞は *-ō*、動名詞は *-ts* または *-d*、不定詞は *-m* を取る。定形については、高橋（2012）を参照のこと。また、非定形については、高橋（準備中）を参照されたい。

<sup>19</sup> Sharma（1988: 107）は、現在分詞が名詞を修飾することができ、例として *šio mī* ‘dying man’ を挙げている。この Sharma と筆者のデータの違いは、そのインフォーマントの方言の違いによるのかもしれない。

- (28) a. \*zāzā      mī/k<sup>h</sup>aū  
eat:PF      person/food
- b. k<sup>h</sup>aū      zā.ts      mī.gā/?mī  
food      eat.GRD      person.PL/person
- ‘the people who eat food’

次に, (29) と (30) は, 完了分詞による修飾の例である。(29a) では「死んだ人」, (29b) では「殺された人」という意味になるが, いずれも被修飾名詞の表す人が死んでいる。また, (30) は「沸かされた水」であり, (29)(30) はいずれも, 重複形動詞が修飾構造で使われて, 被修飾名詞は重複された他動詞の目的語であるか, 重複された自動詞の主語である。

- (29) a. šīšī      mī  
die:PF      person
- ‘dead person’
- b. sasā      mī  
kill:PF      person
- ‘killed person’
- (30) skwa.ši.s<sup>20</sup>      tī  
boil.MDL.PF      water
- ‘boiled water’

ただし, 完了分詞による名詞修飾は, かならずしもすべての動詞で同じように行われるわけではない。今のところ少数の動詞に限られていることがわかっている。たとえば, (28a) は容認されない。したがって, これを一般化できるかどうかは不明である。むしろ, 形式的には完了分詞にしる現在分詞にしる, 分詞は一般的に名詞修飾に使われないと見るほうが明快である<sup>21</sup>。

### 3.5. 名詞化接辞に付加される -seyā

(31a) では, mahannigseyā が「(運ぶことが) できない」つまり「重い」を意味している。動詞は, 上で見たように動詞語幹に関しては通常 -tseyā をとる。し

<sup>20</sup> skwašis の末尾の接尾辞 -s は, 重複の異形態である。

<sup>21</sup> 実のところ, 2011 ~ 2012 年の調査では, 完了分詞による名詞修飾が適格であるとされていたが, 2014 年 3 月の調査では, 上に見られるような例のみが適格であり, 他はことごとく不適格となった。筆者は, 容認度が高いと判断された時, 状態性という観点から説明しようとし, 第 17 回ヒマラヤ諸語シンポジウムでの発表の際, そのように述べた。しかし, 本文で述べたように, 分詞による名詞修飾は, 基本的にはないと考えるのが明快であると言える。では, なぜ一部の動詞で適格になるのかという点については今後の課題である。

かし、接尾辞 *-m* と *-g* をもつ動詞は、名詞を修飾する際、*-seyā* を取る。例 (20) を参照のこと。上で述べたように、*-seyā* は名詞に付加されるので、*mahannig* は名詞化された形式と考えることができる。例 (31b) では、動詞 *huši-* が接尾辞 *-m* と *-g* を取り、それに接尾辞 *-tseyā* ではなく *-seyā* が後続する。

- (31) a. *nu* (\**wāl*) *šakčēn.seyā* *dū*, *nu.s* *ma.han.n.i.g.seyā*  
           that very strong.ATTR COP that.INS NEG.be\_able.INF.LV.OBLG.ATTR  
           *runiñ.ā* *t<sup>h</sup>ū.d*<sup>22</sup>  
           rock.PL carry.PT  
           ‘He is strong, because he carried heavy rocks.’

- b. *šālū.piñ* *bārī* *huši.m.i.g.seyā* (*dū*)  
           PSN.DAT very study.INF.LV.OBLG.ATTR COP  
           ‘Shalu has to study much more.’

Sharma (1988: 106) は、*šya* (本稿の *-seyā* と同じものと思われる) を提示し、‘derived adjective’ の形式要素としている。また、Sharma (1988: 171) の */-zea ~ -cea/* (および、*/cya/* という形もあると考えているようである) が *-tseyā* と同じ接尾辞と考えられる。しかし、機能が同じであるようには見えない。さらに分析が必要である。

#### 4. 形容詞の性質

本節では、形容詞の性質として、複数形を持っていること、同定文で繫辞を伴うことを示す。また、上で見たように、接尾辞 *-seyā* を取ることから名詞と同じ性質をもっていることを確認する。

キナウル語の形容詞は、修飾する名詞の複数性と一致して屈折するという点で名詞的な性質をもっている。たとえば、(32) は、同定文の補語として形容詞が現れている例である。この場合、名詞が補語になる場合と同様、繫辞が必要である。さらに (32a) は、主語が複数であることと一致して、形容詞も複数形を取っている。ただし、形容詞が単数形でも複数であることは分かる<sup>23</sup>。(33) は修飾語としても複数形になることを示す。

<sup>22</sup> この接辞 *-d* はいくつかの母音語幹動詞が 3 人称過去の時に現れるが、その機能は明らかではない。ここでは、過去の接辞としておくが、キナウル語では、定形動詞に過去を表す接辞はない。

<sup>23</sup> キナウル語で、このように形容詞がかならずしも複数形を取らなくてもよいことは、形容詞が複数形を取ることが文法的であるわけではないことを示していると言える。



- (32) a. *bergā.gā*    *zigits.ā/zigits*    *dū*  
 stick.PL            small.PL/small            COP

‘The stick are short.’

- b. *ju*    *kim*    *tēg*    *dū*  
 this    house    big    COP

‘This house is big.’

- (33) a. *lamas*    *bergā*  
 long            stick

‘a long stick’

- b. *lamā*    *berga.gā*  
 long.PL            stick.PL

‘long sticks’

さらに、3.2 節で見たように、形容詞は名詞を修飾する際、名詞に付加することのできる接尾辞 *-seyā* を取ることができる。

ただし、(34) の *listseyā* は、実際には [littseja:] と発音されるが、*lis-* が、*-tseyā* を取っている。

- (34) *lis.tseyā/\*lisk.tseyā*            *tī*  
 become\_cold.ATTR/cold.ATTR            water

‘the water which became cold’

しかし、同時に *lisktseyā* は不適格である。このことは、*lis-* が ‘to become cold’ を意味する動詞であり、*lisk* の末尾の *-k* が名詞を作る接辞であることを示唆する。そのため、(34) にあるように、*liskseyā* は適格であるが、*lisktseyā* は適格ではないと考えられる。

ただし、(34) を p. 6 の (12) と比べてみると、後者は *-seyā* が *lis-* にも *lisk* にも付加されうることがわかる。つまり、*lis-* は曖昧であり、さらなる研究が必要である<sup>24</sup>。

<sup>24</sup> また、形容詞 *spin* ‘damp’ は、*spinseyā*, *spintseyā*, *spinkseyā*, *spinktseyā* のすべての形式が可能である。*spintseyā* については、歯茎鼻音に歯茎摩擦音が続くため、歯茎閉鎖音が挿入されるという理由が考えられるが、*spin* と *-tseyā* の間に休止があっても許容されるようである。いずれにしても、筆者は、*spin* のこれらの形式について適切な理由を得ていない。

## 5. おわりに

以上の観察を次のようにまとめることができる。名詞と形容詞は名詞修飾で *-seyā* を取る。3.2 節で例を見た。動詞といくつかの形容詞は名詞修飾で *-tseyā* を取る。例は、3.3 節で見た。もちろん、形容詞は、名詞修飾で、接尾辞を取らずに名詞に直接前置することもできる。例は、4 節でみた。最後に、動詞の一部が形容詞と同様、重複形などの形式を取っていれば、*-tseyā* なしで名詞を修飾することができる。3.4 節で例を見た。これらの観察から下の図 3 を書ける。

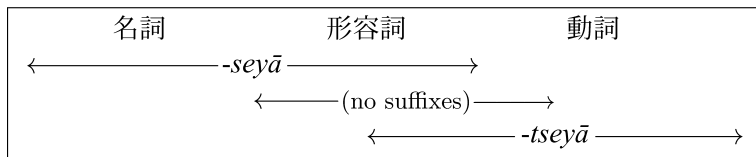


図 3 動詞，形容詞，名詞の連続性

すべての動詞が *-tseyā* を取ることができる。高状態性の動詞の中には、完了分詞の形式になって名詞修飾ができる場合があるが、下の図では示していない (cf. 註 21)。

形容詞は、チベット・ビルマ系言語で名詞的であることも、動詞的であることもある。現代キナウル語では、1 節で述べたように、ほとんどすべての形容詞が名詞的であるが、少なくともいくつかの形容詞は動詞的である。残っている問題の一つは、キナウル語の形容詞が動詞的なものから名詞的なものへ、またはその逆の変化の途上にあるのかどうかということである。しかし、キナウル語について根拠のある議論ができるわけではない。

なお、本稿では、名詞句内の修飾要素としての「関係節」を扱っていない。第 3 節で見たように、動詞による修飾構造を「関係節」と見ていない。これらの修飾構造は動詞を形容詞化して使っていると言ってもよい（実際には名詞化接辞を使うのだから、名詞化していると言うべきだが）。キナウル語では、むしろ相關関係節があるので、本稿で扱った動詞による修飾を「関係節」と呼ぶべきではないと筆者は考える。しかし、この点については今後の研究に俟たねばならない。

## 略号

1	1st person	GEN	genitive	O	object
1-2	1st and/or 2nd person	GT	general tense	OBLG	obligation
2	2nd person	INF	infinitive	PF	perfect
ATTR	attributive	INS	instrumental	PL	plural
COP	copular verb	LOC	locative	PR	present
DAT	Dative	LV	linking vowel	PSN	personal name
EMPH	Emphatic	MDL	middle voice	PT	past
FUT	future	NEG	negative	S	subject

## 参考文献

- Dixon, R. M. W. (2004). "Adjective Classes in Typological Perspective." In Dixon and Aikhenvald 2004, chap. 1, pp. 1–49.
- Dixon, R. M. W. and Aikhenvald, A. Y. (eds.) (2004). *Adjective Classes: A Cross-linguistic Typology*. Explorations in Linguistic Typology 1. Oxford: Oxford University Press.
- Hajek, J. (2004). "Adjective Classes: What can we Conclude?" In Dixon and Aikhenvald 2004, chap. 15, pp. 348–61.
- LaPolla, R. J. and Huang, C. (2004). "Adjective in Qiang." In Dixon and Aikhenvald 2004, chap. 13, pp. 306–22.
- Sharma, D. D. (1988). *A Descriptive Grammar of Kinnauri*. Studies in Tibeto-Himalayan Languages 1. Delhi: Mittal Publications.
- 高橋慶治 (2010). 「キナウル語 (パンギ方言) の格形式と複合後置詞」澤田英夫 (編), 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1 : 格とその周辺』, pp. 127–152. 東京 : 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Takahashi, Y. (2012). "On a suffix of middle voice in Kinnauri (Pangi dialect)." In Nakamura, W. and Kikusawa, R. (eds.), *Objectivization and Subjectivization: A Typological of Voice Systems*, Senri Ethnological Studies 77: 157–75. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 高橋慶治 (2012). 「キナウル語 (パンギ方言) の時制接辞について」『地球研言語記述論集』4: 1–12.
- 高橋慶治 (準備中). 「キナウル語動詞の非定形について」
- 安井稔・秋山怜・中村捷 (1976). 『形容詞』現代の英文法第 7 巻. 東京 : 研究社出版. 1989<sup>5</sup>.

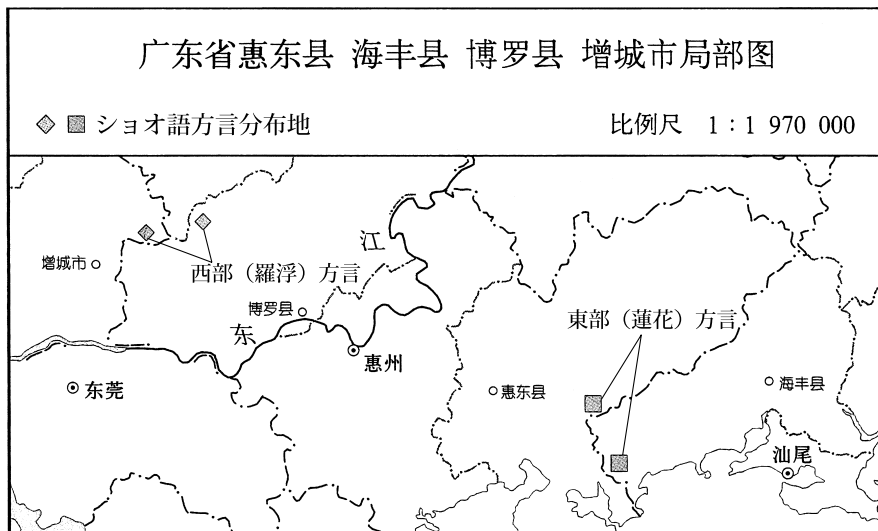
# ショオ語の所有者表現\*

## —中国南部における地域特徴の残存—

中西 裕樹

### 1. はじめに

ショオ語（畬語）は、中国広東省東部の海丰县・惠东县・博罗县・增城市に居住するショオ族に使用されているミャオ・ヤオ系の言語である。筆者の調査によれば、その話者人口は約 1,000–1,500 人で、ショオ族総人口<sup>1</sup>に占める割合は 0.1–0.2% 程度に過ぎない。残りの大多數のショオ族の使用言語は漢語化し、現在では客家語の下位方言である畬話ないしは居住地域に通用している漢語方言（閩語等）を話している<sup>2</sup>。



《中国語言地図集》第2版 少数民族語言卷（商務印書館）による

\* 本稿の内容の一部は、京都市大学人文科学研究所「漢語と周辺諸語の類型構造論」研究班（班長：池田巧教授）の2013年6月24日例会において「ショオ語の所有者表現—初歩的報告—」と題して発表した。席上、多くのご意見を賜ったことに感謝申し上げます。本稿はその報告を元に、後の現地調査による資料を補い全面的に改稿したものである。

<sup>1</sup> 2010年の統計によると 708,651 人（中華人民共和国国家統計局編 2013:31）。

<sup>2</sup> ショオ語と畬話については、前者は「ヤオ族の言語」で後者こそがショオ族固有の言語と考える研究者もいる。詳しくは中西（2010a）を参照。

ショオ語は周囲を漢語方言に囲まれ、漢語諸方言、特に客家語の大きな影響を受けてきた<sup>3</sup>。本稿では、所有者表現についてはショオ語が近隣の客家語よりも、むしろ粵語と共通点を持つことを示し、同時にその由来を考察する。なお、ここでいう「所有者表現」は澤田（2006）の用語だが、本稿で扱う内容は Matthews & Yip（1994）の 6.3 Possessive constructions および 6.4 Relative clauses と同等のものである。これを澤田（2006）の分類に則していうと、「グループ 3：所有者表現」、「グループ 5：名詞的修飾表現」、「グループ 6：動詞的修飾表現」をおおむね含んでいる<sup>4</sup>。

## 2. ショオ語<sup>5</sup>の所有者表現<sup>6</sup>

### 2.1. 所有者を示す構造

海豊ショオ語では、「遠称指示詞  $\text{ɣ}^3$  + 類別詞（量詞）」を所有者の後ろ、指示対象の前に置くことによって所有関係を表す。

- (1)     $\text{pak}^{7a} \text{ kɿŋ}^6$      $\text{ɣ}^3$      $\text{t}^h\text{aŋ}^4$      $\text{me}^4$   
          伯父                    DIST-DEM    CLF    馬  
          伯父の馬

「遠称指示詞  $\text{ɣ}^3$  + 単数類別詞」の代わりに「 $\text{a}^3$ 」を使うこともできる。

- (2)     $\text{pak}^{7a} \text{ kɿŋ}^6$      $\text{a}^3$                      $\text{me}^4$   
          伯父                    DIST-DEM+CLF    馬  
          伯父の馬

このことから、「 $\text{a}^3$ 」は「遠称指示詞  $\text{ɣ}^3$  + 単数類別詞」と同義だと考えられる。「 $\text{a}^3$ 」は所有者と指示対象との関係を示すだけでなく、文の別の位置でも「遠称指示詞  $\text{ɣ}^3$  + 単数類別詞」の意味を表すことができる。

<sup>3</sup> Nakanishi & Kwok（2009）を参照。

<sup>4</sup> 「所有 possession」が表す意味概念については、Aikhenvald（2013）および勝川（2013）で詳細な検討がおこなわれている。

<sup>5</sup> 本稿で扱うショオ語はすべて筆者の現地調査による海豊ショオ語である。表記は IPA によるが、いわゆる「寛式記音」で純粋な音韻表記ではない。海豊ショオ語の音声・音韻の詳細については中西（2003b:1-3）を参照されたい。本稿の表記も基本的に中西（2003b）に従うが、同書で  $-\text{iŋ}$  と記しているものは本稿では  $-\text{ixŋ}$  とし、 $\text{ŋŋ}$  は  $\text{hŋ}$  と表した。なお、声調は調類を分節音の右肩に記す。各調類の調値は以下の通り。

第1調	第3調	第5調	第7a調	第7b調
22	44	11	22	11
第2調	第4調	第6調	第8a調	第8b調
31	54	35	44	35

<sup>6</sup> 本稿では possessor を「所有者」、possessed entity を「指示対象」と呼ぶ。

- (3)  $\underline{a^3}$                        $t^h\alpha\eta^4$     $san^1$     $\gamma^3$                        $ti^1$                        $pia^4$   
 DIST-DEM+CLF   池                      内部                      DIST-DEM                      PL-CLF                      魚  
 あの池の魚（複数）

以下の例のように、指示対象が譲渡不可能なものであっても、所有関係を表す構造は同様の形式をとる。

- (4a)  $pak^{7a}$   $k\gamma\eta^6$                        $\gamma^3$  \_\_\_\_\_  $phui^5$                        $khua^4$   
 伯父                      DIST-DEM                      CLF                      手

- (4b)  $pak^{7a}$   $k\gamma\eta^6$                        $\underline{a^3}$                        $khua^4$   
 伯父                      DIST-DEM+CLF                      手  
 伯父の手（片手）

指示対象が複数である場合（ないしは複数であると考えられるとき）は、「遠称指示詞  $\gamma^3$  + 類別詞」の類別詞の部分に複数を表す「 $ti^1$ 」を使わなければならない。

- (5)  $le^3$     $t^h\alpha\eta^4$     $pia^4$     $\gamma^3$  \_\_\_\_\_  $ti^1$                        $lin^2$   
 DEM   CLF   魚                      DIST-DEM                      PL-CLF                      鱗  
 この魚の鱗（複数）

魚の鱗がひとつであるはずはないので、複数類別詞が使われる。上掲の例 (3) の「魚」に複数類別詞が使われているのも、通常池にいる魚は一匹ではないからで、もし単数類別詞を使うと、却って一匹であることを強調しているように聞こえてしまう。

なお、「 $\gamma^3 ti^1$ 」の代わりに「 $a^3$ 」を用いることはできない。「 $a^3$ 」が表すものは単数だからである。ショオ語は、単数・複数など数の概念によって語形を変化させたり、文中の諸要素の形式を一致させたりすることはないが、所有者表現においては単数・複数の区別は厳密に行われる。

以上の例はすべて指示対象の名詞が明示されているが、指示対象が省略されるときには構造助詞の「 $\eta i\gamma\eta^1$ 」が用いられる。

- (6)  $le^3$     $t^h\alpha\eta^4$     $me^4$     $ts^hi^4$     $van^4$     $\underline{\eta i\gamma\eta^1}$   
 DEM   CLF   馬                      です   私                      PRT  
 この馬は私のものです

- (7)     $le^3$      $t^h a \eta^4$      $ts^h i^4$      $va \eta^4$      $a^3$      $me^4$   
          DEM    CLF            です   私       DIST-DEM+CLF    馬  
          これは私の馬です

例 (6) の「 $\eta i x \eta^1$ 」を「 $\chi^3$  + 類別詞」にすることができないのは、後者は「 $\chi^3$ 」(あれ) によって前方照応しつつ後ろの名詞を修飾するというのがその役割であり、後にも触れるが指示機能が多少なりとも残存しているからだと考えられる。逆に (7) のように後ろに指示対象名詞が存在する場合には通常「 $\eta i x \eta^1$ 」は使わない。また、(7) では「 $\chi^3$  + 類別詞」よりも「 $a^3$ 」が好まれるが、これは同じ馬を指すのに「 $\chi^3$ 」を使うと「 $a^3$ 」よりも「あの」という指示的意味がクローズアップされ、指示対象までの距離において主語の「 $le^3$ 」(これ) と矛盾を来すからであろう。なお、「ここに馬がいて、それは自分のものである」という意味内容を表現する文としては、(7) よりも (6) が好まれる。たとえ「 $a^3$ 」を使っている (7) は無理がある文なのかも知れない。

所有者や指示対象が有生物でも無生物でも、所有者表現の構造には変化がない。ただ、所有者が人称代名詞で指示対象が親族名称の場合には、漢語同様に所有者と指示対象をそのまま並べることで所有関係を表すことができる。

- (8)     $va \eta^4$      $a^1 me^6$   
          私       母  
          私の母

## 2.2. 関係節

所有者の部分に動詞を含むとき (関係節) には、「 $\chi^3$  + 類別詞」の前にさらに構造助詞の「 $\eta i x \eta^1$ 」が出てくることが多い。

- (9)     $lx \eta^4$      $m\sigma^4$      $\eta i x \eta^1$      $\chi^3$      $ti^1$      $ka^3 h\chi^5$   
          3SG    買う    PRT       DIST-DEM    PL-CLF    もの  
          彼 (女) が買ったもの

これはショオ語には形態変化がなく、また「 $\chi^3 ti^1$ 」はそれだけでは「あれらの」という意味であるため、「 $\eta i x \eta^1$ 」がないと「彼 (女) はあれらのものを買う」と同義になってしまうからであろう。

- (10)  $lx \eta^4$      $m\sigma^4$      $\chi^3$      $ti^1$      $ka^3 h\chi^5$   
          3SG    買う    DIST-DEM    PL-CLF    もの  
          彼 (女) はあれらのものを買う  
          ? 彼 (女) が買ったもの

「買ったもの」を主語として後ろに述部が続く場合には「 $\eta i\chi\eta^1$ 」はなくても成立する。「 $\eta i\chi\eta^1$ 」が出てくることもあるが、出てこないことの方が多い。

- (11)  $m\chi\eta^2$   $tsa^5$   $l\phi^1$      $m\phi^4$   $\chi^3$  \_\_\_\_\_  $ti^1$      $ka^3$   $h\chi^5$      $ts\chi\eta^5$      $pa^4$      $h\eta^4$   $\phi^3$  ?  
 2SG    昨日    買う DIST-DEM    PL-CLF    もの    置く    どこ    行く PFV  
 君が昨日買ったものはどこに置いたの？

コンサルタントによると以下 (12) の形式も可能とのことだが、そうすると (9) 中の「 $\chi^3$   $ti^1$ 」は所有者と指示対象の関係を表しているというよりも、本来の指示機能が表面化しているのとらえた方が良いのかも知れない。

- (12)  $l\chi\eta^4$      $m\phi^4$      $\eta i\chi\eta^1$      $ka^3$   $h\chi^5$   
 3SG    買う    PRT    もの  
 彼（女）が買ったもの

ただ、ショオ語話者にとって、指示対象の前に「 $\eta i\chi\eta^1$ 」を用いるのはそれほど好ましいことではないらしく、(11) のように後ろに述部が伴われる場合には (12) に見られる「 $\eta i\chi\eta^1$ 」のみの形式は決して選択されない。同時に「彼（女）が買ったもの」の場合でも何度も質問されているうちに (10) のような「 $\chi^3$  + 類別詞」だけの形式を認めてしまうこともある。ちなみに、物語は比較的自然的な発話といえるが、中西 (2003a) 所収の三篇の物語には所有者表現の指示対象の前に「 $\eta i\chi\eta^1$ 」を使う例は見られない。「 $\eta i\chi\eta^1$ 」を使うのは文体的にかたい表現なのだろう。

2.1. でも触れたが、「 $\chi^3$ 」が元来遠称指示詞であるため、「 $\chi^3$  + 類別詞」は近称指示詞と相性が悪い。「あの」と「この」が同一物を指し示すことになると指示対象までの距離に矛盾が生じるので、関係節でも近称指示詞が含まれる場合は「 $\chi^3$  + 類別詞」ではなく「 $\eta i\chi\eta^1$ 」が使われる。

- (13)  $sin^3$   $sian^6$      $sia^3$      $\eta i\chi\eta^1$      $le^3$      $ti^1$      $t\phi^3$   
 先生    書く    PRT    DEM    PL-CLF    本  
 先生が書いたこれらの本

例 (13) では「 $\eta i\chi\eta^1$ 」がなければ、文意が「先生はこれらの本を書く」に変わってしまうため、当然省略することができない。また「 $le^3$  + 類別詞」は「 $\chi^3$  + 類別詞」と違い所有者と指示対象との関係を示す機能を備えていないため、以下の (14) のようにこの名詞句を主語として後ろに述部が伴われる場合であっても、「 $\eta i\chi\eta^1$ 」は省略できない。



- (14) sin<sup>3</sup>sian<sup>6</sup>    sia<sup>3</sup>    ŋiɣŋ<sup>1</sup>    le<sup>3</sup>    ti<sup>1</sup>    tɔ<sup>3</sup>    khe<sup>4</sup>    ŋɔŋ<sup>5</sup>    mɔ<sup>6</sup>  
 先生      書く    PRT    DEM    PL-CLF    本      とても    良い    見る  
 先生が書いたこれらの本はとてもおもしろい

しかしながら、上述のように「ŋiɣŋ<sup>1</sup>」を使った文は文体的にかたいせいか、あまり使われず、例(13)や(14)も通常の発話の中では現れない可能性が高い。例えば(14)は、「これらの本は先生が書いた。とてもおもしろい」のような表現がより好まれる。

所有者が人称代名詞で後ろに動詞を伴わない場合は「le<sup>3</sup> + 類別詞」も可能であるが、これは標準漢語で「我這本書」「我這些書」が許容されるのと同様の現象であろう。

- (15) van<sup>4</sup>    le<sup>3</sup>    ti<sup>1</sup>    tɔ<sup>3</sup>  
 私      DEM    PL-CLF    本  
 私のこれらの本

### 3. ミャオ・ヤオ諸語の所有者表現

前章では、ショオ語の所有者表現の概略を共時的に記述した。その由来を探るために、本章ではまず同系統に属するミャオ・ヤオ諸語における所有者表現を概観する。

#### 3.1. 類別詞を使うミャオ・ヤオ諸語

筆者が参照することのできた資料によると、所有者表現に類別詞を使うミャオ・ヤオ諸語としてミエン語標敏方言とミャオ語川黔滇方言とが挙げられる。ミエン語標敏方言では、所有関係を表すのに通常は類別詞を用い、指示対象が特定の類別詞を持たない名詞の場合には構造助詞の「nin<sup>2</sup>」が使われる（毛 2004:263–264）。

- (16) nin<sup>2</sup>    nɔ<sup>1</sup>    mɿn<sup>1</sup>    hɔŋ<sup>2</sup>    kwən<sup>7</sup>  
 3SG    CLF    顔      赤い    PFV  
 彼（女）の顔が赤くなった

- (17) ta<sup>3</sup>    nin<sup>2</sup>    kɔŋ<sup>3</sup> pəu<sup>1</sup>    a<sup>7</sup>    njen<sup>3</sup>  
 1PL    PRT    仕事      とても    多い  
 私たちの仕事はとても多い

以下のように、一部の文では類別詞と構造助詞の双方を使うことができる。

- (18a)  $nin^2$     $phin^3$     $lwai^1$     $lje^{4/6/8}$   $the^3$     $kwon^7$   
          3SG   CLF   服   汚い   PFV

- (18b)  $nin^2$     $nin^2$     $lwai^1$     $lje^{4/6/8}$   $the^3$     $kwon^7$   
          3SG   PRT   服   汚い   PFV  
       彼の服は汚れた

この言語では、類別詞を使う場合でも遠称指示詞が伴わない点がショオ語とは異なる。指示対象が特定の類別詞を持たない名詞のときに、標準漢語の「個」のような汎用性の高い類別詞は使われないのか、また、構造助詞が使われるのは類別詞的に使われているのかどうか、類別詞と構造助詞を共に使えるのはどのような場合かなど、毛（2004）の記述からは不明なことも多い。

李（2008:187）の記述によると<sup>7</sup>、同じミエン語標敏方言の関係節では、以下のように類別詞ではなく構造助詞の「 $nin^{31}$ 」が使われる。

- (19)  $wə^{35}$     $tau^{31}$     $sa^{53}$     $tu^{53}$     $nin^{31}$     $wə^{35}$     $phin^{35}$     $lwai^{33}$   
       DIST-DEM   CLF   女の子   着る   PRT   DIST-DEM   CLF   服  
       あの女の子が着ているあの服

ミャオ語川黔滇方言では、以下のように所有者表現に類別詞を使う（李 2008:172）。

- (20)  $ni^{21}$     $to^{21}$     $to^{43}$     $to^{21}$     $no^{31}$     $i^{55}$   
       3SG   CLF   息子   CLF   牛   DIST-DEM  
       彼（女）の息子のあの牛

- (21)  $o^{55}$     $to^{43}$     $la^{31}$     $i^{31}$   
       1SG   CLF   田   DIST-DEM  
       私のあの田んぼ

上の例にはともに遠称指示詞が含まれているが、(20)の「彼（女）の」という部分には指示詞はないので、このミャオ語方言では、指示対象が人の場合には類別詞のみで所有関係を表すことができるのかも知れない。また、(21)は標準漢語で「我那塊田」が許容されるのと同様で、(20)とは性質が違うようにも

<sup>7</sup> 李（2008）からの引用では、声調表記は原書にしたがい調値による。遠称指示詞「 $i$ 」には例文によって異なる調値が付されていることがあるが、原書のままである。例文の日本語訳の「あの」は原書の漢語グロス「那」を反映させたものである。

見える。

この言語もミエン語標敏方言と同じように、関係節では助詞<sup>8</sup>を使う（李 2008:186）。

- (22) to<sup>21</sup>    nɔ<sup>31</sup>    kə<sup>33</sup>    qhau<sup>55</sup>    mua<sup>21</sup>    lo<sup>21</sup>    i<sup>44</sup>  
          CLF    牛        PRT    ばかり    買う    来る    DIST-DEM  
          買ってきたばかりのあの牛

以上の二言語のほか、プヌ語では、通常構造助詞を使うが一部類別詞を用いる所有者表現（関係節を含む）も存在する（蒙 2001:123–124, 136, 139）。また、李（2008:187）によると、キョンナイ語やパフン語の関係節では、一部「遠称指示詞＋類別詞」を使うことも可能なようである。このように所有者表現に類別詞を使うミャオ・ヤオ諸語は中国南部に広がっているが、その用法には言語・方言ごとに異なる部分があり、それぞれの言語・方言で独自の発展を遂げたことがわかる。

### 3.2. 構造助詞を使うミャオ・ヤオ諸語

現在のミャオ・ヤオ諸語では、多くの言語・方言において所有関係を示すのに構造助詞を使う。その概要は表 1 のとおりである。

各言語・方言における用法の詳細は紙幅の関係で依拠資料に譲るが、これらの言語・方言では本稿の例 (7) のように所有者と指示対象が明示される場合も、(6) のように指示対象が省略される場合も同じ構造助詞を使用するという点で海豊ショオ語とは異なる。これは大部分の漢語方言（標準漢語を含む）と同様であり、漢語の構造が拡散したことによる可能性が高い。

表 1 に示された構造助詞には、語頭子音が鼻音のものと、声調が第一声調（A 調を含む）ないしは第三声調であるものが多いことが注目される。ショオ語の「ŋiɿŋ<sup>1</sup>」もこの条件に当てはまる。現在の音声形式からはすべての言語・方言の間で厳密な音韻対応を見いだすことは困難だが、祖語の段階から存在したものである可能性はある。ショオ語は多くの研究者からキョンナイ語と最も近い関係にあるとされているので<sup>9</sup>、ショオ語の「ŋiɿŋ<sup>1</sup>」とキョンナイ語の「ðjɔŋ<sup>1</sup>」とが音韻対応するかどうか、以下で検討する。

声母の対応は、表 2 に示した。構造助詞のほかは、キョンナイ語の ð- がショオ語の t- にきれいに対応している。Ratliff (2010:52) は、表 2 に見られる語のうち「深い」と「翼」について、ミエン系言語において有声閉鎖音で現れながらも、ミャオ系言語において通常の前鼻化音ではなく口音の閉鎖音で出てくることから、音節の前に鼻音が “loosely-adjoined” された再構形を提案した。例えば、「翼」には \*N-tat という形式を再建している。キョンナイ語の声母が t- ではなく ð- で

<sup>8</sup> 田口 (2008) 所収のミャオ語川黔漢方言の構造助詞「mo^」とは異なる。

<sup>9</sup> たとえば毛・李 (2002:253), Ratliff (2010:3) など。

言語・方言		構造助詞	依拠資料
ミャオ語	湘西 <sup>10</sup>	naŋ <sup>3</sup>	金 (2011)
	黔東	paŋ <sup>8</sup>	王主編 (1985)
	川黔滇	mo <sup>A</sup>	田口 (2008)
プヌ語 <sup>11</sup>		ti <sup>1'</sup> (的) ven <sup>6</sup> (份)	蒙 (2001)
パフン語		ŋ <sup>3/4/8</sup> ti <sup>3/4/8</sup> (的)	毛・李 (1997)
ジョウノ語		kə <sup>6/8</sup>	毛・李 (2007)
キョンナイ語		ðjɔŋ <sup>1</sup>	毛・李 (2002)
ミエン語	勉	nei <sup>1</sup>	毛等編著 (1982)

表 1 ミャオ・ヤオ諸語の構造助詞

意味	ショオ語	キョンナイ語
[構造助詞]	ŋixŋ <sup>1</sup>	ðjɔŋ <sup>1</sup>
深い	ka <sup>1</sup> tx <sup>1</sup>	ðu <sup>1</sup>
尻尾	ka <sup>1</sup> to <sup>3</sup>	ðau <sup>3</sup>
翼	ka <sup>1</sup> te <sup>6</sup>	ðe <sup>7</sup>
長い	ka <sup>1</sup> ta <sup>3</sup>	ða <sup>3</sup>

表 2 ショオ語とキョンナイ語の声母の対応

あるのもこの鼻音が作用して有声化したものと解釈できる。この再構形を採用するならば、ショオ語についても、構造助詞では何らかの理由で鼻音が残ったと考えることも可能だろう。構造助詞以外の語がすべて ŋ- と同じ調音位置の k- を語頭子音とする接頭辞を伴った形で出てくるのも示唆的である。

韻母の対応は、以下の表 3 に示す。キョンナイ語の -ɔŋ 韻母に対応するショオ語の同源語は二例しか見つからなかったが、声母・声調と共に整然とした対応を見せている。構造助詞の韻母についていうと、海豊ショオ語の -xŋ 韻母は \*-uŋ から来ているから<sup>12</sup>、恐らく元々は \*ŋiɔŋ のような形だったものが、主母音の前 (\*ŋi-) と後ろ (\*-ŋ) が共に開口度の小さい音であるため、発音の便宜上、主母音もそれに同化して \*ŋiɔŋ > \*ŋiuŋ というような変化が起こったのだろう<sup>13</sup>。

<sup>10</sup> ミャオ語湘西方言では、構造助詞の「naŋ<sup>3</sup>」のほかに、nominalizer (“名物化助詞”) の「ma<sup>2</sup>」が存在する (金 2011:168–169, 239–241)。これは川黔滇方言の「mo<sup>A</sup>」と同源かも知れない。

<sup>11</sup> ven<sup>6</sup> は類別詞と考えるべきかも知れない。

<sup>12</sup> 中西 (2010b) 参照。

<sup>13</sup> 平行例として「ŋixŋ<sup>1</sup>」(欲しい, 必要である, ~しなければならない) がある。中西 (2010b) 参照。

意味	ショオ語	キョンナイ語
[構造助詞]	ŋiɣŋ <sup>1</sup>	ðjɔŋ <sup>1</sup>
細い	sɔŋ <sup>1</sup>	θjɔŋ <sup>1</sup>
葉	piɔŋ <sup>2</sup>	mplɔŋ <sup>2</sup>

表 3 ショオ語とキョンナイ語の韻母の対応

以上のように、ショオ語とキョンナイ語の構造助詞は、声母・韻母・声調すべてが音韻対応している。つまり、ショオ語の「ŋiɣŋ<sup>1</sup>」は少なくとも「ショオ・キョンナイ祖語」にまで遡ることができることになる。声母に Ratliff 氏の再構形を適用するならば、ショオ・キョンナイ祖語の構造助詞は \*N-tjɔŋ<sup>1</sup> という形式であったと推定される。「ŋiɣŋ<sup>1</sup>」が所有者表現に使用されていたかはともかく、比較的古い歴史を持っていることは間違いない。

#### 4. 粵語の所有者表現と中国南部における地域特徴の残存

ショオ語分布地域の近隣で、所有者表現に「遠称指示詞＋類別詞」という構造を用いる言語としてすぐに思い浮かぶのは粵語である。Matthews and Yip (1994) によると香港粵語では、所有を表す表現や関係節に「遠称指示詞＋類別詞」と構造助詞とを共に使うことができる。両者の違いは文体の違いに起因し、前者がより口語的で使用範囲も広い。例えば「私の本」は次の三通りの言い方が可能である<sup>14</sup>。

(23) 我 啲 \_\_\_\_\_ 本 書  
私 DIST-DEM CLF 本

(24) 我 本 書  
私 CLF 本

(25) 我 嘅 書  
私 PRT 本

このうち (25) がよりフォーマルな言い方で、他の二つは口語的である。ショオ語と異なるのは、構造助詞を使うことができることと類別詞を用いる際に (24) のように遠称指示詞を伴わなくても良い点である（ショオ語では (24)(25) のような言い方は不可）。

粵語とショオ語の所有者表現の共通点として興味深いのは、2.2. で述べたよう

<sup>14</sup> 粵語の所有者表現については、香港教育学院の片岡新氏に多くのご教示を受けた。記して感謝申し上げます。

に、ショオ語の関係節においても構造助詞の「ɲɪŋ」を使うと文体的にかたい表現になるということである。これは、ショオ語でも粵語でも構造助詞を使う表現は外部からの借用であることを示唆していると言えまいか。Bauer & Matthews (2003:153) には、以下のような指摘がある。

In the syntax of classifiers, as in some other respects, Cantonese resembles the neighbouring Tai and Hmong-Mien languages: for example, the classifier possessive construction illustrated above is shared with Hmong.

所有者と指示対象を「遠称指示詞＋類別詞」（語順は異なる場合もありうる）でつなぐという構造は、中国南部のミャオ・ヤオ諸語の多くに共有されていた旧い特徴の残存であり、これが古粵語にも伝播したのではないだろうか。粵語の基層にタイ系言語の存在が認められている<sup>15</sup> ことと Bauer & Matthews (2003) の指摘を考え合わせると遠称指示詞と類別詞の組み合わせによる所有者表現は、タイ・カダイ諸語とも共有していた可能性もある<sup>16</sup>。この場合には、古粵語に「伝播」ではなく、「残存」したということになる。

他の多くの点で漢語化（特に客家語化）が進んでいるショオ語が所有者表現においてのみ保守的であるとはやや考えにくいのだが、元々構造助詞を使っていたところに、粵語から「遠称指示詞＋類別詞」構造を借用し、さらにそこに構造助詞を使う構造が外部から侵入しつつあるというシナリオはより想定しづらい。漢語からショオ語への借用は大部分が客家語を通して行われており<sup>17</sup>、また、この仮説では他の漢語諸方言にあまり見られない形式がなぜ粵語および少数の南方漢語にのみ存在する<sup>18</sup> かを説明することもできないからである。3.1. で述べたようにミャオ・ヤオ諸語の一部には現在でも「遠称指示詞＋類別詞」構造が存在しており、同時にミエン語標敏方言と香港粵語では遠称指示詞を省略できる。これらのことから、構造助詞を使う表現による外部からの浸食が起こるとともに、それまで広く分布していた「遠称指示詞＋類別詞」構造がそれぞれの言語で変容していった結果、現在のような形になったと推測されるのである。言語によっては、「遠

<sup>15</sup> 例えば、橋本（2000:151–155）、Bauer & Matthews（2003）など。ただし、橋本は「基層」という用語は使っていない。

<sup>16</sup> 初歩的な調査として、『中国少数民族語言簡誌叢書 修訂本・卷参』所収のタイ・カダイ系 10 言語の記述を確認してみた。所有者表現に関連して以下の例が注目に値する。一、ブイ語（布依）の関係節では、類別詞と指示詞（遠近ともに可）の組み合わせによって所有関係を表す（132 頁）。二、ラッキヤ語（拉珈）では、所有者が人称代名詞や人を表す名詞の時には、指示対象との間に類別詞を置いて所有関係を表す。ただし、類別詞は省略も可能（254, 257 頁）。三、ムーラム語（仫佬）では、類別詞と遠称指示詞の組み合わせで所有関係を表すことがある（592–593 頁）。これらが上述のミャオ・ヤオ諸語に見られる「遠称指示詞＋類別詞」と同様の性質をもつものかどうかは、更なる調査および検討が必要である。

<sup>17</sup> 海豊ショオ語の最も近くに位置する海豊県鵞埠鎮の客家語では、所有者表現には構造助詞を使い、「遠称指示詞＋類別詞」は用いない（コンサルタントは 60 歳代の男性）。しかし、同じ広東省の揭西客家語および海豊閩南語では、所有者表現に用いられる構造助詞と、最も常用される類別詞とがともに「個」であり（李、張 1992、羅 2000）、所有者表現に類別詞が使われているようにも見える。ただし、依拠資料の記述からは用法等の詳細はわからない。

<sup>18</sup> たとえば、蘇州語でも関係節に類別詞が用いられる。蘇州語では指示詞は伴わず、また「動詞＋類別詞」の後で指示対象を省略できる（劉 2005）。

称指示詞＋類別詞」構造は完全に消滅し、構造助詞に取って代わられることになった。構造助詞を使う構造が拡散していく際に、構造助詞の形式そのものは元々各言語に存在したものが使われたため<sup>19</sup>、ショオ語ではショオ・キョンナイ祖語の段階から持っていた「 $\eta i\eta\eta^1$ 」を使用するようになったのである。

中国の少数民族言語は多くの言語・方言に『簡誌』シリーズが刊行されており、音韻・語彙・文法について概観できるようになっている。近年は「中国新発見語言研究叢書」シリーズや「参考語法」(レファレンス・グラマー)も陸続と出版されている。漢語諸方言も今世紀に入ってから、調査・報告される地点が飛躍的に増えてきている。しかしながら、記述が不十分な点は少なからず存在し、所有者表現もそのひとつであると言えよう。本稿の仮説を検証するためにも、今後は、漢語諸方言、ミャオ・ヤオ諸語、タイ・カダイ諸語の多くの言語・方言にわたって、より詳細な文法記述が求められる。

## 5. 余論

ここまで、海豊ショオ語の所有者表現の概略を記述し、その由来について考察してきた。最後に、関連する問題として「遠称指示詞＋単数類別詞」の文法化について指摘しておきたい。

本稿第二章では、この構造中の遠称指示詞の指示性の表面化について触れたが、ここに単数類別詞が関わってくることがある。調査時に「私の本」という表現を尋ねたところ、「遠称指示詞＋単数類別詞」を使った言い方としては以下の回答があった。

- (26)  $van^4$   $\chi^3$  lan<sup>1</sup>  $to^3$   
 私 DIST-DEM CLF 本  
 私の本 (単数)

類別詞に「lan<sup>1</sup>」という最も常用されるもの(標準漢語の「個」に相当)が出てきたので、書籍専用の類別詞「 $ph\eta\eta^6$ 」に替えることができるか尋ねると、それでは「私のあの本」になってしまうということであった。これとは逆に「私の言語学の本」は「遠称指示詞＋単数類別詞」を使うと、以下(27)の表現が可能であり、「lan<sup>1</sup>」という類別詞はあまり好ましくないという。

<sup>19</sup> 通言語的に、grammatical form そのもの(ここでは例えば標準漢語の「的」)よりも grammatical category や construction type (ここでは構造助詞を使う構造)の方が拡散しやすい(Dixon 1997:20-22)。もっとも、優勢言語との接触が進むにつれ、本稿表1中のプヌ語やバファン語のように、優勢言語の grammatical form そのものを借用する例も出てくる。

- (27) van<sup>4</sup>    ɣ<sup>3</sup>    phɣŋ<sup>6</sup>    ŋi<sup>3</sup> ŋin<sup>6</sup> hək<sup>8a</sup>    tɔ<sup>3</sup>  
          私       DIST-DEM   CLF       言語学       本  
          私の言語学の本（単数）

例 (26) では、所有者が「私」であり、自分の持ち物については良く知っているため、「phɣŋ<sup>6</sup>」という量詞を使うと指示性が強くなりすぎてしまうのかも知れない。逆に (27) では「私の」「言語学の」というようにすでに二つの修飾語によって指定されているために、「laŋ<sup>1</sup>」という一般的な類別詞だと却って指示性を薄めることになり奇妙な感じがするのだろう。どのような場合に指示機能がより強く表面化するのかについては更なる調査が必要だが、いずれにしても、この構造が完全に文法化していないことを示すものである。これは指示詞の指示範囲や機能とも関わってくる問題であり、今後の課題としたい。

## 略号

1SG	一人称単数代名詞	DIST-DEM	遠称指示詞
1PL	一人称複数代名詞	NEG	否定辞
2SG	二人称単数代名詞	PFV	完了
3SG	三人称単数代名詞	PL-CLF	複数類別詞
CLF	類別詞	PRT	助詞
DEM	近称指示詞		

## 参考文献

- 陈其光. 2001.《巴那语概況》民族语文 2001 年第 2 期：69-81 页。  
 姬安龙. 2012.《苗语台江话参考语法》昆明：云南民族出版社。  
 李如龙, 张双庆主编. 1992.《客赣方言调查报告》厦门：厦门大学出版社。  
 李云兵. 2008.《中国南方民族语言语序类型研究》北京：北京大学出版社。  
 刘丹青. 2005.《汉语关系从句标记类型初探》中国语文 2005 年第 1 期：3-15 页。  
 罗志海. 2000.《海丰方言词典》乌鲁木齐：新疆人民出版社。  
 毛宗武. 2004.《瑶族勉语方言研究》北京：民族出版社。  
 毛宗武, 李云兵. 1997.《巴哼语研究》上海：上海远东出版社。  
 毛宗武, 李云兵. 2002.《炯奈语研究》北京：中央民族大学出版社。  
 毛宗武, 李云兵. 2007.《优诺语研究》北京：民族出版社。  
 毛宗武, 蒙朝吉. 1982.《博罗畲语概述》民族语文 1982 年第 1 期：64-80 页。  
 毛宗武, 蒙朝吉. 1986.《畲语简志》北京：民族出版社。  
 毛宗武, 蒙朝吉, 郑宗泽编著. 1982.《瑶族语言简志》北京：民族出版社。  
 蒙朝吉. 2001.《瑶族布努语方言研究》北京：民族出版社。  
 田口善久. 2008.《罗泊河苗语词汇集》东京：东京外国语大学。  
 王辅世主编. 1985.《苗语简志》北京：民族出版社。



- 闻 静. 2013.《壮侗语族“的”字结构的类型学特征》语言研究第 33 卷第 1 期: 121-127 页。
- 向 日 征. 1991.《吉卫苗语研究》成都: 四川人民出版社。
- 余 金 枝. 2011.《湘西矮寨苗语参考语法》北京: 中国社会科学出版社。
- 郑 宗 泽. 2011.《江华勉语研究》北京: 民族出版社。
- 《中国少数民族语言简志》编委会,《中国少数民族语言简志丛书》修订本编委会. 2009.《中国少数民族语言简志丛书 修订本·卷参》北京: 民族出版社。
- 中华人民共和国国家统计局编. 2013.《中国统计年鉴—2013》北京: 中国统计出版社。
- 中西 裕树. 2003a.《畲语海丰方言故事四则》北野浩章編『論集: 東・東南アジアの少数民族言語の現地調査 3』ELPR Publications Series A3-016: 119-154 頁。
- 中西 裕树. 2003b.《畲语海丰方言基本词汇集》京都: 京都大学人文科学研究所。
- 中西 裕树. 2010a.《論畬話の歸屬》張洪年, 張雙慶主編《歷時演變與語言接觸—中國東南方言》*Journal of Chinese Linguistics Monograph Series Number 24*: 247-267 頁。
- 中西 裕树. 2010b.《从原始畬语到现代畬语的一些音变》同志社大学言語文化学会『言語文化』第 13 卷第 1 号: 19-53 頁。
- 橋本萬太郎. 2000.「言語類型地理論」『橋本萬太郎著作集第一卷』東京: 内山書店。29-190 頁。(もと単行本, 1978 年弘文堂刊)
- 勝川裕子. 2013.『現代中国語における「領属」の諸相』東京: 白帝社。
- 澤田英夫. 2006.「名詞句構成要素の分類」東南アジア諸言語研究会編『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』3-4 頁。東京: 慶應義塾大学言語文化研究所。
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2013. Possession and ownership: a cross-linguistic perspective. In Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.), *Possession and Ownership A Cross-Linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press. 1-64.
- Bauer, Robert S. and Stephen Matthews. 2003. Cantonese. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*. London and New York: Routledge. 146-155.
- Dixon, R. M. W. 1997. *The rise and fall of languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Luo, Yongxian. 2013. Possessive constructions in Mandarin Chinese. In Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.), *Possession and Ownership A Cross-Linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press. 186-207.
- Matthews, Stephen and Virginia Yip. 1994. *Cantonese: A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Nakanishi, Hiroki and Bit-chee Kwok. 2009. Evolution of the initial consonants in the She language induced by contact with Hakka. *Journal of Chinese Linguistics* 37-2: 207-226.
- Ratliff, Martha. 2010. *Hmong-Mien Language History*. Canberra: Australian National University.

[附記] 本稿は『東方學研究論集』164-180 頁に掲載した論考を再録したものである。再録にあたり誤植の修正を行い、言語分布図を付した。

## 執筆者一覧（五十音順）

荒川慎太郎（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）  
池田 巧（京都大学人文科学研究所）  
海老原志穂（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員）  
加藤 昌彦（大阪大学大学院言語文化研究科）  
桐生 和幸（美作大学生活科学部）  
澤田 英夫（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）  
白井 聡子（麗沢大学言語研究センター客員研究員）  
鈴木 博之（オスロ大学ポスドク研究員／国立民族学博物館外来研究員）  
高橋 慶治（愛知県立大学外国語学部）  
中西 裕樹（同志社大学グローバルコミュニケーション学部）  
林 範彦（神戸市外国語大学外国語学部）  
本田伊早夫（名古屋短期大学英語コミュニケーション学科）

# シナ＝チベット系諸言語の文法現象 1 名詞句の構造

---

2016(平成 28)年 3 月 15 日発行

編 者 池田 巧

発 行 京都大学人文科学研究所  
京都市左京区吉田本町

印 刷 中西印刷株式会社  
京都市上京区下立売通小川東入ル

---